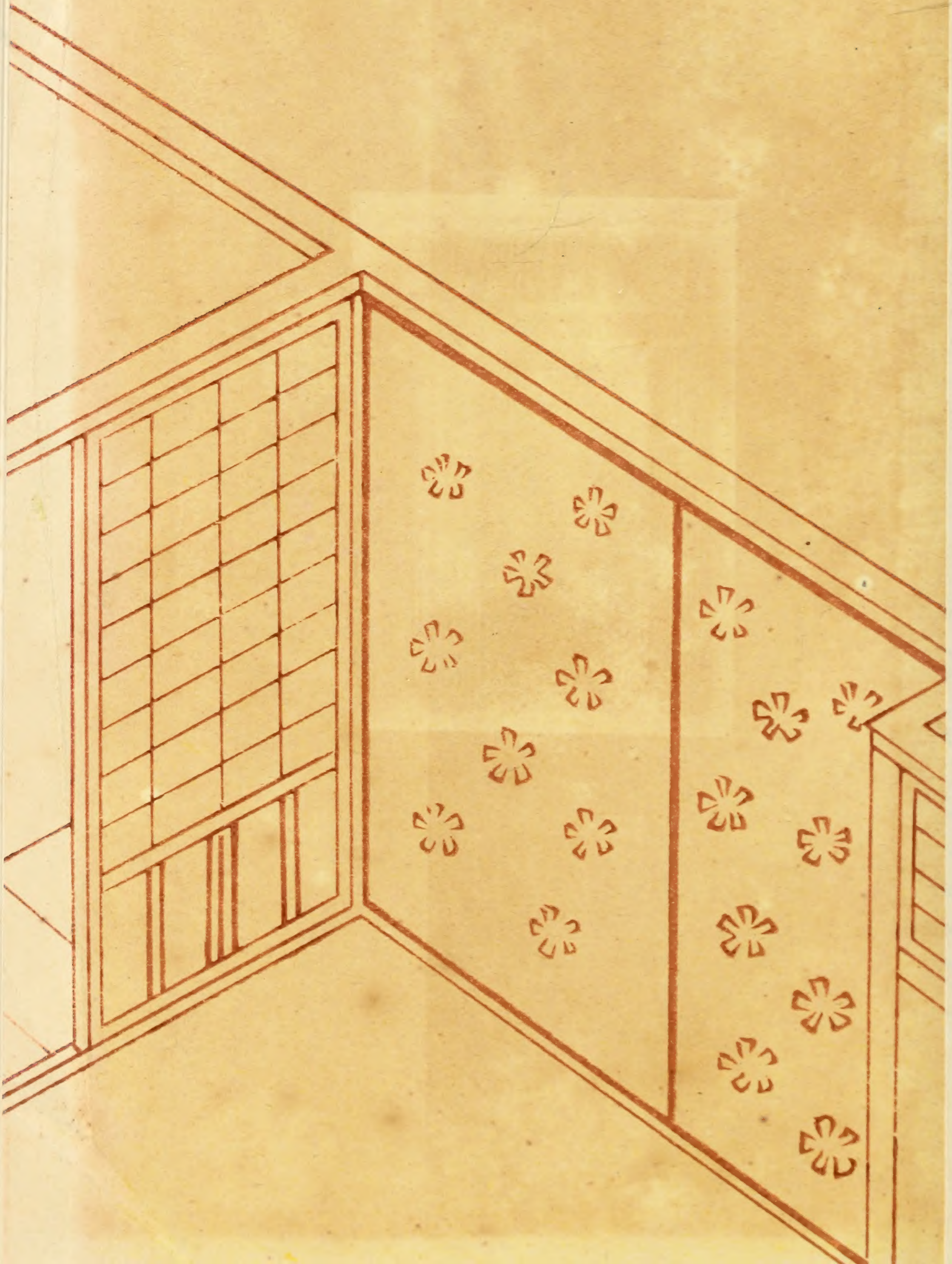




大東小言集

第十三卷

大南北全集

第十三巻

文學博士 坪內逍遙
渥美清太郎 共編

大南北全集 第十三卷

東京 春陽堂刊行

大南北全集 第十三巻目次

挿繪目次

挿繪解説

■口繪に挿入した木版刷り三枚續きの錦繪は、「浮世柄比翼稻妻」鞘當の場の錦繪である。但し初演のではない、二度目の、文政十年の折に發行されたものである。それと、二七三頁の前へ挿入した、大門口の場の錦繪も、矢張り二度目の折のである。筆者はいづれも五渡亭國貞である。

■「鈴ヶ森の場」の二枚續きと「八百善の場」の一枚物とは、共に初演當時の錦繪である。

■「山三宅の場」と「長谷寺の場」のとは、共にズッと後の、文久元年一月市村座所演の折ので、三代目豐國の筆である。古い錦繪に適當なものが見當たらなかつたので、場面の面影を見せる栞に、稍新らしいながら挿入して置いた。この時の山三は河原崎權十郎、岩橋とお國とは澤村田之助、伴左衞門は中村芝翫である。

■「幔雜石尊贐」に入れた錦繪は、二種とも初演のもので、初代豐國と國貞が描いたものだ。

■兩狂言とも、初演の折の繪本番附があつたので、凸版にして本文中へ挿入して置いた。


市川團十郎
尾上菊五郎
豊国画



市川團十郎
岩井半四郎
名古屋山三
尾上菊五郎
豊國画



解說及年表

浮世柄比翼稻妻

この狂言は、南北が六十九歳の春、文政六年三月の市村座へ書き卸したもので、南北が作中では、興行度數も第一に位し、作そのものも非常に優れてゐる。南北が得意な手法、二つの世界を一つに纏めて、複雜な筋を立てる事が、この脚本では非常に成功してゐるのである。即ちこれは、不破名古屋の「稻妻表紙」と、權八小紫の「比翼塚」とを打つて一丸としたものである。初演の際は勿論、興行する毎に、いつも大入をしめた狂言である。

有名な不破名古屋の「鞘當」――それは團十郎の希望によつて、古劇を改作したものではあるが、この脚本がその初演なのである。爭ひの隱語を「鞘當」といふのは、この狂言から來てゐるのだ。

南北としては比較的後期の作ではあるが、狂言に絡はる因緣は深い。先づその事實から說いてゆかねばならぬ。

名古屋山三郎は、蒲生氏鄉の小姓であつた。非常な美少年で、その容貌が氏鄉の目にとまつて、抱へ

られたのである。氏鄕が死んでからは、京へ上つて出雲のお國と馴れ染め、下男の猿若を使つて今樣狂言を仕組み、お國の念佛踊と共に公衆に見せたのである。山三郎は歌舞伎劇にとつては非常な功勞者である。が終りはよくなかつたらしい。その美貌が仇をして、身持ち惡さに京にもゐられず、後に姉の緣故から津山の森家へ使つて三左衞門と改名し、家老職まで上つたが、井戸理兵衞といふ者を、主命によつて討たうとして、反つて山三が討たれたといふ。兎に角、お國と共に歌舞伎を興行してゐた間の名古屋山三郎は、一世に喧傳された京での風流名物男であつた。

不破伴左衞門は、不破萬作の事である。萬作は、關白秀次のお側に仕へた小姓で、これも美男の聞えはあつたが、山三郎と何も直接交涉があつた譯ではなく、單に同じ時代にゐたといふだけの事である。また、葛城といふのは、山三郎が京都にゐたとき、深く云ひ交した傾城の名で、これも萬作と何も緣もない。

名古屋山三、不破伴左衞門――萬作を作りかへて――、葛城。この三人の名を使つて、淨瑠璃と、歌舞伎と、兩方とも、殆んど同時に脚色された。淨瑠璃は、山本土佐掾の正本で、「名古屋山三」といふ外題である。何人が作つたものか、いつ出來たのか、詳細は不明であるが、延寶年間である事は想像される。また歌舞伎の方は、延寶八年に市村座で興行されたので、名題を「遊女論」といふ。どちらにも、

名古屋山三、不破伴左衛門、傾城葛城、の三人が出る。どちらが先に出來たのか、いまは解らない。恐らく土佐淨瑠璃の方が先であらう。この淨瑠璃は六段續きで、正本は現存してゐる。山三と伴左衛門は朋輩であるが、一緒に島原へ傾城買ひに行つて、山三は上林の葛城と深く云ひ交し、伴左衛門が葛城に横戀慕するところから、仲のよい友同士が爭ふやうになり、伴左衛門は山三と間違へて、山三の父、三郎右衛門を暗討ちにし、のち島原の廓の中で、山三は伴左衛門を仕留めるといふのが終りである。女の爲に伴左衛門が、敵役に變るあたりは中々面白い。

「遊女論」は、どんな狂言であつたか解らないが、敵役の伴左衛門を元祖市川團十郎、山三を村山四郎次、葛城を伊藤小太夫が勤めて、大當りを取つた。不破伴左衛門といふ役は、初代團十郎が當つたところから、市川家と由緒が深くなり、七代目團十郎が歌舞伎十八番を選定する折にも、脚本は不明でありながら、その中へ「不破」を加へて置いたのである。

初代團十郎の不破が大當りであつたといふ事は、殆んど續けざまに、團十郎が伴左衛門の役を演じてゐたのでも解る。「遊女論」以後、天和三年の森田座では「女君二河白道」といふ名題で、山三が市川新九郎、梅津掃部が宮崎傳吉に、團十郎は伴左衛門である。この梅津掃部といふ役名は、前の土佐淨瑠璃「名古屋山三」にも出て、斯種の狂言には非常に關係が深い。貞享三年の中村座では「不破即身雷」で

同じく伴左衛門、元祿二年中村座「名護屋大全」では、村山四郎次の山三で同じ役。元祿四年中村座の「不破伴左衛門島原通」で同じ役。元祿七年森田座「葛城弘徽殿」では、中村七三郎の山三、澤村小傳次の葛城に同じ役。元祿八年中村座「不破名古屋初冠」では、中村七三郎の山三、岡田左馬之助の都の葛城、澤村小傳次の東の葛城に同じ役。これ等の脚本は何れも多少は違つた筋ではあつたらうが、役柄は大同小異の伴左衛門を、初代團十郎はいつも好評の下に勤めてゐたのである。

元祿十年一月、團十郎が上方から戻つて來て、「參會名古屋」を演じたが、この狂言は「不破」に取つても重要なものである。不破は矢張り團十郎、名古屋は矢張り村山四郎次、葛城は荻野澤之丞であつた。この狂言の伴左衛門は、最初は立役で、敵役の太宰之丞を北野天滿宮で取挫ぐ所などがある位である。この場は歌舞伎十八番「暫」の初演であるのから見ても、「參會名古屋」が戲曲史上、重要な脚本である事が認められる。さうして、三番目にはいはゆる「鞘當」の場があり、後に揚屋の場で、葛城の容色に迷ひ、敵役に變つて、最後に切腹して果てるのである。伴左衛門の性格は、近代的とでもいひたいやうに、面白く書かれてゐる。

その外、團十郎は、元祿十二年の中村座の「葛城小夜嵐」、同年森田座の「當世阿國歌舞伎」、元祿十四年の中村座「葛城吳越戰」でも同じく伴左衛門を勤めて、いつも當りを取つてゐた。それが二世團十

郎にも傳はり、享保十一年七月の中村座「末廣名古屋」を初演に、二世團十郎も度々伴左衛門の役を演じ、大阪へ登つた時までも出し物にしてゐた。市川家以外の役者でも、大谷廣次、中島勘左衛門、其東又太郎等が伴左衛門の役をやつてゐる。江戸の芝居には、不破名古屋の世界が非常に流行つたのである。淨瑠璃の方にも、有名な作が二つある。一つは、寶永二年八月、竹本座に興行した「傾城反魂香」で、作者は近松門左衛門、例の吃又の淨瑠璃であるが、これには高島の館のお家騒動が搦んで、伴左衛門と山三は敵役と立役の代表となり、狂言廻しの役をつとめた揚句が、伴左衛門は山三に殺される事になつてゐる。今一つは、寬延二年十一月、豐竹座の操りにかゝつた「十帖源氏もの草太郎」で、淺田一鳥、安田蛙桂の合作である。この淨瑠璃の伴左衛門は國崩しの實惡で、明智光秀の一子といふやうな筋になつて居り、結局お國御前が身を捨てゝの策略に、伴左衛門は裏をかゝれて滅亡し、山三が佐々木の家を再興するといふ趣向である。これには大序に朱雀野の大門口があつて、不破名古屋が傾城買論の達引からそれが夢であるといふのを發端にしてゐる。「鞘當」から來た趣向である。この二淨瑠璃とも、歌舞伎に移入されて、可成り度々興行されてゐるが、前者が吃又一幕のみを多く上場されたのに引かへ、後者は千の利休を中心に、多くは通し狂言で演じたところから、不破名古屋の筋からしては後者の方が人に知られてゐる。

山東京傳は、この歌舞伎に由緒ある不破名古屋の世界から趣向を構へて「昔語稲妻表紙」といふ五冊物の讀本小說を作り、文化四年に發行した。これが非常に好評で、續編の「本朝醉菩提」まで出した程であつたから、程なく歌舞伎で、これを脚色、上演した。それは大阪であつた。その頃の江戸は、戯曲と小說とは互ひに相犯し合はぬといふ暗默の契約があつたので、小說の脚色は多く大阪で行はれた。文化の初年は、殊に大阪では小說を劇化する事が流行したので、この流行小說は、翌文化五年の春に、角座と中座と兩方で、同時に競爭的興行をする事になつた。角座の方は、一月二十五日初日で、きのふは不破の闘㨾まゐる、けふは名古屋の山㨾まゐる、と角書をして「けいせい輝草紙」、脚色者は近松德三で、不破を四世市川團藏、名古屋を二世嵐吉三郎、葛城を中山富三郎が勤めた。鞘當の場は無いが、小說にも出る梅津嘉門の筋を、挿話的に添へてある。中座の方は、一月二十九日の初日で、稲妻表紙は姿の彩色、十帖源氏は意の寫繪、と角書をして「けいせい品評林」脚色者は奈河篤助であつた。この方には梅津嘉門の筋は無いが、代りに佐々良三八の件に力を入れてある。不破は三世中山新九郎、名古屋は三世中村歌右衞門、葛城は中山よしを、であつた。この兩脚色を比較して見ると、不破名古屋の件は大して違はない。大體原作に從つて、草履打から山左衞門殺し、名古屋の詫住居、上林での愛想づかしといふ順になつてゐる。兩者とも評判はよかつたが、後世多く興行されたのは「品評林」の方であつた。江戸

でも度々上演してゐる。

以上が、文政六年三月に「浮世柄比翼稲妻」が出る以前の不破名古屋である。南北は、流石に「稲妻表紙」に拘泥せず、權八小紫を交へて即かず離れずに脚色し、しかも原作の眼目の個所は委く取入れてある。殊に「鞘當」といふ古劇復活の一幕が非常に利いたので、この狂言は長く殘つたのである。「鞘當」は、團十郎菊五郎が、その最近まで不和であつたのを、前年の顔見世、半四郎の仲裁で和解したのだが爰にも又ぞろ持ち出して、舞臺で和解を見せたので、半四郎が留め女に入るのも、その故から來てゐるのである。

初演の役割は左の通りであつた。

名古屋山三元春。三浦屋小紫實ハ本庄娘八重梅(ニヤク三世尾上菊五郎)茶屋廻り、鷲の長吉(尾上三朝)六角左京之進(中山錦車)本庄助八(大谷馬十)本庄助太夫(市川男女藏)佐々木桂之助(市川鯉三郎)白井權八後ニ紫扇蝶。長兵衛女房、お近(ニヤク五世岩井半四郎)笹野才藏(松本錦吾)佐々木額五郎(市川小團次)遣り手、お爪。石塚玄蕃(ニヤク大谷門藏)奥女中、柵。八百善女房、お吉(ニヤク吾妻藤藏)下部、段八。唐犬權兵衛(ニヤク尾上榮十郎)三浦屋女房、お高(市川おの江)所化、願哲(尾上仙藏)家主、杢郎兵衛(惣領甚六)飛脚、とゞ平(關歌十)判人、善六(大谷曾呂平)見世物師、又平(澤村四郎五郎)山三下部、八內。庵崎蘭蝶實ハ白井彌市郎(ニヤク關三十郎)腰元、

岩橋後ニ上林の葛城。蛇使ひの娘、お國（ニャク五世瀬川菊之丞）幡隨長兵衞。不破伴左衞門重勝後ニ寺西閑心（ニャク七世市川團十郎）長兵衞一子、長松（市村羽左衞門）

脚本にも記してある通り、大詰の「人形屋」から「長兵衞の內」は、脚本が出來てゐたばかりで上演はされなかつた。昔は、芝居が大入だと、千秋樂まで終に出さずじまひの幕が、よくあつたものである。尤もこの幕は、「敵討天下茶屋聚」の人形屋幸右衞門の件を、俎板の長兵衞へ結びつけたものであるからこの一幕を預かられたとて、南北もさほど殘念では無かつたであらう。脚本にはこの場の役名を、お傳（市川門之助）蝮の次兵衞（市川男女藏）等にあてゝある。この門之助は、病氣で出勤が出來なくなつたので、最初、門之助に當てゝあつた小紫の役を、菊五郎が兼ねた次第であつたが、中日過ぎには門之助も全快したので出勤し、小紫の役を勤めたのである。

二回目の上演は、文政十年一月の河原崎座「一群曾我島臺」で、初春だけに曾我の世界に直し、役名も、痣娘のお國を十六夜のおしげ、又平を鬼王庄助、お近を出雲屋の女房月小夜お國、などと改めた。演じたのも全部ではなく、草履打から山三の浪宅、鞘當から上林まで、次へ曾我の對面を附けたのである。役割は

山三（三世尾上菊五郎）おしげ（岩井紫若）長吉（尾上松助）左京之進（市川鶴藏）鬼王庄助（松本幸四郎）お國（五世岩

井半四郎)善六(片岡松助)葛城(岩井粂三郎)伴左衞門(七世市川團十郎)

天保二年十一月の市村座では、「江戸好菊伊達染」といふ先代萩の狂言の中へ、鞘當の場だけ一幕加へて演じた。この時も、團十郎菊五郎が何か喧嘩したのを、坂東蓑助が和解させた事があつたので、それを舞臺へ持ち出したのである。本筋に交つて「廓花對編笠」といふ請元を使ひ、不破名古屋は前通り蓑助は竹町の竹松といふ鳶の者で留め男に入つた。これが留め男の初めである。

天保四年三月中村座の「櫻時花吉原」は、前記の大阪脚本「輝草紙」と「品評林」とを混じたものであるが、この中へ「比翼稻妻」から、鞘當の場だけを借りて來て、山三浪宅の前へ入れ、この鞘當が夢になるといふ趣向にした。山三は中村芝翫(後の四世中村歌右衞門)、伴左衞門は二世關三十郎、留め女は出雲屋のお國で、岩井杜若(前の半四郎)が勤めてゐた。

天保六年三月、森田座の「花舞臺丹前俠客」は、「比翼稻妻」と「隅田川花御所染」を混じたもので、「比翼稻妻」からは山三浪宅と鞘當の場とが借りられてある。尤もお國の件は無かつた。役割は

不破(四世坂東三津五郎)山三(澤村訥升)葛城(中山美よし)留め女、出雲屋のお國(六世岩井半四郎)

天保七年九月の森田座「名護屋帶雲稻妻」は、團菊が四度目の顔合せで、草履打から山三浪宅、鞘當と上林の四幕を演じた。役割は

山三（三世尾上菊五郎）八内（尾上松助）お國（尾上菊次郎）又平（尾上菊四郎）願哲、お爪（ニヤク大谷曾呂平）杢郎兵衞（成田屋銀兵衞）葛城（尾上榮三郎）長兵衞（五世松本幸四郎）伴左衞門（七世市川海老藏）

留め女は幡隨長兵衞にして、革羽織にぱつちの拵へ、この長兵衞が大當りだつたさうである。

天保十四年二月の市村座「廓燕姿稻妻（さとつばめすがたのいなづま）」では、お國抜きの山三浪宅と、鞘當の二幕を演じた。留め女は、上林の仲居お宮といふ名で市川九藏が勤め、山三は十二世市村羽左衞門、不破は四世中村歌右衞門、葛城は坂東しうか、であつた。

弘化三年一月の河原崎座では、「廓模様比翼稻妻（さともやうひよくのいなづま）」といふ名題で、原作全部を演じた。尤も大切の幕として、白井權八が石塚玄蕃を討つ「辻番の場」が加へられ、また鈴ケ森は女房お時で女長兵衞の趣向であつた。役割は

八内。彌市（ニヤク坂東彦三郎）お高（小佐川常世）玄蕃。杢郎兵衞（ニヤク大谷廣右衞門）善六。お爪（ニヤク市川團八）お時。留め女お辰（ニヤク岩井杜若）山三（澤村宗十郎）小紫（市川新車）助太夫。又平（ニヤク大谷友右衞門）葛城。お國（ニヤク尾上菊次郎）權八。伴左衞門（ニヤク八世市川團十郎）

この時は、二番目序幕、八百善別莊の場へ、「逢見愛井字（あひたきみたきいとしいのじ）」といふ清元を加へた。初演には長唄の獨吟で濟ましてゐた所へ、淨瑠璃を使つたもので、後にはこれが型になり、曲も「鷄の權八」といつて現

存してゐる。「鷄の權八」といふのは、語り出しが「鷄がなく」といふ文句だからである。

嘉永元年三月の市村座「昔語稻妻帖」は、「品評林」へ「比翼稻妻」から鞘當の一幕を取つて添へたものである。不破は八世市川團十郎、名古屋は十二世市村羽左衞門、留め女お秀を坂東しうか、等であつた。

嘉永四年一月の河原崎座「伊達競高評鞘當」は、「比翼稻妻」の草履打、山三浪宅、鞘當、上林の四幕の間へ、先代萩を加へたものである。役割は

山三（澤村長十郎）八內。又平（二ャク關三十郎）杢郎兵衞（澤村宇十郎）玄蕃（淺尾奥山）葛城。お國。留め女お梅（三ャク尾上梅幸）伴左衞門（七世市川海老藏）

安政二年三月の河原崎座「鏡山比翼容姿視」は、「比翼稻妻」から白井權八の件だけを拔いて、鏡山の間へ挾んだものである。長兵衞は出さずに、弟長吉といふ名にして、河原崎權十郎が勤めた。本來は坂東しうかが、女長兵衞をやる筈であつたが、開場前に死んだので、長吉にして追善の口上を云つたのである。彌市を嵐璃寛、權八を坂東竹三郎、小紫を市川團之助、が勤めた。

文久元年二月の市村座「鶴春土佐絵鞘當」は、「品評林」を土臺にして、「比翼稻妻」の浪宅と鞘當を入れたものである。留め男は舞鶴屋傳三といふ役名であつた。

山三（河原崎權十郎）伴左衞門（中村芝翫）又平（淺尾與六）杢郎兵衞（片岡十藏）葛城。お國（ニヤク澤村田之助）傳三（坂東鶴藏）

元治元年七月の中村座「花街燕比須稻時」は、同じく「品評林」が土臺で、鞘當を添へたものである。山三は坂東彥三郎、不破は河原崎權十郎、留め女龜金のお汐は岩井紫若、等であつた。

慶應三年十月の守田座「喜九字當機成臺」も前と同じく鞘當だけで、山三を澤村訥升、不破を坂東彥三郎、留め女明石屋のお雪を大谷友右衞門が勤めた。

明治元年十月の市村座では、「其俤花鞘當」として、淸元を使つて鞘當だけ一幕見せた。山三は五世尾上菊五郎、伴左衞門は河原崎權十郎（後の九世團十郎）、留め女のお瀧は尾上菊次郎で、大谷友右衞門と市村羽左衞門が茶屋廻りに出た。これが五世菊五郎と九世團十郎が鞘當の第一回である。

明治四年一月の市村座「名古屋帶雲稻妻」は、例によつて「品評林」へ、「比翼稻妻」の浪宅と、鞘當とを附けたものであつた。

伴左衞門（中村芝翫）杢郎兵衞（中村鷺助）又平（坂東簑助）葛城。お國（ニヤク坂東三津五郎）山三（澤村訥升）

明治六年九月の村山座では「尾花比翼碑」といふ名題で、八百善別莊と汐入堤とだけを演じた。雪駄直しの件を拔萃した譯である。權八の坂東家橘、彌市の五世尾上菊五郎、小紫の二世河原崎國太郎、

お高の嵐榮三郎、玄蕃の中村相藏、等であつた。

明治十二年五月の新富座「昔繡廓鞘當」は鞘當だけで、山三を助高屋高助、伴左衞門を九世市川團十郎、留め男は彫り物連次といふ役名で、五世尾上菊五郎が勤めた。

明治十九年五月の市村座「梅雨燕比翼稻妻」は、珍らしく原作通りを全部演じたものである。鈴ヶ森は幡隨長兵衞を法華長兵衞と直し、鞘當の場にも、この長兵衞が留め男に出た。

山三。彌市（ニヤク片岡我童）玄蕃。杢郎兵衞（ニヤク中村鶴藏）左京之進。段八（ニヤク中村鶴五郎）飛脚（市川丸童）伴左衞門（市川權十郎）葛城。小紫（ニヤク岩井松之助）額五郎（片岡仁三郎）柵。お高（ニヤク中村壽）又平。助太夫（ニヤク關三十郎）權八。お國（ニヤク中村福助）八内。長兵衞（ニヤク中村芝翫）

明治三十一年十月の歌舞伎座「比翼塚尾花寺西」は、大師河原と、八百善から汐入堤を出し、大切へ鞘當を附けたものである。

彌市。山三（ニヤク尾上菊五郎）段八（尾上松助）小紫（尾上榮三郎）權八。留め女お福（ニヤク中村福助）お國（片岡龜藏）お高（坂東秀調）助八（三桝稻丸）又平（片岡市藏）伴左衞門（市川團十郎）

この以後も、折々大劇場で鞘當の一幕だけは出るが、その外の幕は殆んど上場された事は無いから、年表はこれまでゝ止めて置く。

幭雜石尊贐

文政六年七月、市村座へ書き卸した仇討ち物で、「伊賀越」の書替へに、「二島英勇記」と「白石噺」を衣にかけたところは、いかにも南北らしい趣向である。

伊賀越仇討の實說は、玆に記すまでもない。因州池田の家中渡邊靱負が、同家中の河合又五郎に殺害されたのは寬永九年一月の事で、靱負の一子數馬は、姉聟の荒木又右衛門といふ劍道の達人の助太刀で伊賀の上野に首尾よく本望をとげたのが、寬永十一年十一月の事である。この事件が初めて戱曲に脚色されたのは義太夫で、安永五年八月、江戸の外記座で操りにかけられた「志賀の敵討」がそれである。伊賀の仇討へ芭蕉翁の由來を書込んだもので、蘭又右衛門、瓦井政五郎、などの假名を用ひ、割合ひに巧く出來てゐるのだが、どうした事か一向世間では知らない。作者は紀上太郎である。

次は歌舞伎で、安永六年一月、大阪の中座に書き卸された「伊賀越乘掛合羽」作者は奈河龜助、これが非常な大當りで、つい最近まで始終上演されてゐたものである。この大當りに刺戟されて、同じ年の三月には、「伊賀越乘掛合羽」を近松東南が院本に改作し、堀江座の操りへかけた程であつた。のち、天明三年四月の竹本座には、近松半二の「伊賀越道中双六」が出た。これも半二が戱曲の中では有數の傑

作で、歌舞伎の「乘掛合羽」と並んで、伊賀越仇討はこの二作と、相場がきまつてゐたものである。

「㥄雜石尊贐」には、この「伊賀越乘掛合羽」を土臺にして、南北式の奇想を構へたもので、「乘掛合羽」の眼目の個所は、いろ〳〵形式は變へながらも、大抵取込んである。たとへは、大内記が鐵砲をうちかけられる筋は、「乘掛合羽」の上杉右内そのまゝであるし、政右衛門の妹鳴見が、股五郎助けたさに一時股五郎を僞はるところは、原作が母の鳴見なのを、若い女に變へたものであるし、武助の不死身が正宗の名刀で切れたり、股五郎の癩病が奇藥で癒えたり、いづれも「乘掛合羽」の重要な筋であるのを、巧みに書き替へ、入れたものだ。さうして、股五郎を徹頭徹尾立役で通させたり、富ケ岡の場でその頃の岡場所をスケッチし、團七といふ當時としては珍らしい役を點出したり、仇討の場を大山にして、當時ひどく流行した石尊詣りを當込んだりしたところに、南北の奇智と權識とを見せてゐる。

二幕目序幕返し、三圍堤の場で、菊之丞のお濱と、門之助のお谷とが、石段を使つて烈しい立廻りをする。この場が大受けであつた。前年の顔見世狂言「御贔屓竹馬友達」で、門之助の小式部と、菊之丞の七綾とで、石段の立廻りを見せたところ、これが非常に當つたので、翌春の「八重霞曾我組絲」では、門之助の藝者はね吉と、菊之丞の藝者小絲とが、千住の女郎屋の場で、顔見世の石段の立廻りをソックりやつて見せる筋にしたが、これも同じく當つたので、今度は七月狂言の「石尊贐」に、又ぞろ二人の

石段の立廻りを持ちこんだ次第である。

役割は左の通りであつた。

澤井股五郎。富ケ岡の惣六實ハ呉服屋重兵衞（二ヤク三世尾上菊五郎）政右衞門女房、お谷。武助妹、お園（二ヤク市川門之助）仁木息女、彌生姬。羽根澤屋幸吉（二ヤク尾上三朝）和田志津摩。船宿、辰巳屋與五郎（二ヤク中山錦車）醫者、奈良林十官（大谷馬十）乳人、濱町。髪結ひ、おせん（二ヤク市川おの江）佐々木園右衞門。子分、長右衞門（二ヤク惣領甚六）澤井又左衞門後ニ佐々木巖柳（市川男女藏）箱根宮城野の信夫後ニ仲町藝者お信（五世岩井半四郎）富岡屋廻し、九助。荒巻伴作（二ヤク大谷門藏）和田靱負。櫻井林左衞門（二ヤク尾上蟹十郎）澤井城五郎。池添孫八（二ヤク澤村四郎五郎）仁木春太郎後ニ大内記。若黨、柘榴武助（二ヤク關三十郎）股五郎云ひ號け、鳴見。惣六女房お濱實ハ奥女中瀨川。お濱妹、お袖（三ヤク五世瀨川菊之丞）志賀の土民、宿無し團七。荒木政右衞門後ニ月本武藏（二ヤク 七世市川團十郎）細川多門之助（市村羽左衞門）

この狂言は再演されなかつた。

渥美清太郎識

浮世柄比翼稲妻

うきよがらひよくのいなづま

浮世柄比翼稲妻

東海道境木の場
鎌倉初瀬寺の場
助太夫屋敷の場

序幕

役名 ━━ 名古屋山三元春。不破伴左衛門重勝。腰元、岩橋。名古屋下部、八内。白井權八。本庄助太夫。浮世又平。本庄助八。六角左京之進。石塚玄蕃。佐々木桂之助。佐々木額五郎。住職、轟坊。所化、願哲。足輕、笹野才藏。中間、さゝら三平。夜廻り、彥左衛門。

本舞臺、正面黑幕、眞中に、武藏相模國境の榜示杙。幕の內より不破伴左衛門、雲に稲妻の紋附いたる衣裳、大小、浪人の拵へ、深編笠にて、名古屋山左衛門の死骸へ止めを刺して居る見得。見世物師、浮世又平、中間の形。本庄助八、さんぴん侍ひにて、兩人、竹槍を持つて、白井兵左衛門の死骸へ立ちかゝり居る。すべて東海道、境木村の體。時の鐘、禪のツトメにて幕明く。

ト三人こなしあつて

又平　伴左衞門さま。

ト伴左衞門、「コレ」と思ひ入れ。

助八　助八さまは侍ひだけあつて、お手際格別なものでござります。

又平　イヤ〳〵、又平も昔取つた杵柄とやら、中々味をやりました。

助八　白井權八が親の兵左衞門、山三が親の山左衞門、佐々木の家に仕官なれども

又平　彼奴らがあつては、伴左衞門どのゝ大望の妨げゆゑ、此ところに待伏せして、兩人が預るところの、神妙劍は親仁めが

ト兵左衞門の死骸の懷より、一卷を出す。此うち、伴左衞門、山左衞門が死骸にある刀を取る。助八見て

助八　山左衞門が帶せしは、名古屋の家に二振り揃ふ來國俊。

又平　毒を喰はゞ皿の譬へ。伴左衞門さまは、ちつとも早う

助八　骨折代に身共は一卷。

ト又平の持つたる一卷を引ツ湊ひ、一散に向うへ入る。伴左衞門、あと追ツかけてといふ思ひ入れ。

又平呑みこみ

又平　心得ました。

ト時の鐘になり、向うへ入る。件左衛門、件の刀を持ち、上の方へ入る。知らせにつき、正面の黒幕切つて落す。

本舞臺。正面一面の朱塗りの大山門。上の方、一面の櫻にて見切り、山門の正面に四つ目の紋附いたる紫の幕を張り、所々に櫻の立ち樹。すべて鎌倉初瀬寺の體。この道具誂への鳴り物にて、納まる。

ト大拍子入りたる出の鳴り物になり、佐々木桂之助、若殿の拵へ、長谷部雲六、十助、麻上下の侍ひ、桂之助の刀を持ち、柵、奥女中の拵へ、早枝、楓、紅葉、腰元の拵へ、各自筒に生けたる花を持ち、石塚玄蕃、上下、衣裳、大小、あとより笹野才藏、足輕にて、竹刀の附きたる繪馬を持つて出て來る。山門の中より轟坊、緋の衣、住職。所化、願哲、附いて出迎ふ。皆々宜しくこなし。

轟坊　これは〳〵、若殿樣には、先君の御追福として、當寺への御參詣。

願哲　路次を警固の何れも樣、遠路の御入來

兩人　御苦勞に存じまする。

桂之　住職には出迎ひ大儀。大家の式は先例に任せ、この度の大赦。寂光淨土も及びなき、經讀み鳥

の羽風に連れ

雲六　虚空に花の法の庭、樂の詞もさながらに

十助　迦陵頻迦、諸天人、下界にありと疑はれ

しが　かをりゆかしき一焚きの、銘は伏せ屋ものぞかるゝ、花の詠めも彌生の空。

早枝　今日のお供の嬉しさに、春とはいへど曉の、覺めて粧ふ朝日紅。

かへ　鏡に向ひ嗜みは、夜も白々と別れ霜。

もみ　殿御欲しさのわたしらには、別れといふは氣にかゝる。

玄蕃　イカサマ。外珍らしい女中達、寄るも觸るも男の噂、縁結びやら、三世相、互ひの合ひ性見るならば、身共は黑木の味好い生れ。

才藏　それは都の八瀬大原、下郎は東の訛りぶし。ぶッこつねえ、色氣もねえ。御殿の女中はお庭の櫻。

轟坊　花の下なる設けの席へ。

桂之　皆も一緒に。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト鳴り物になり、この人數、皆々舞臺へ來り、よろしく仕ふ。

轟坊　憚りながら、柵どのへ伺ひまする。大殿様御逝去の後は、佐々木の御家督は、如何相成りしや。

しが　これは〳〵、御深切なるお尋ね。先殿定綱公御逝去の後、全く今に御跡目の、御評議もござりませぬ。

才藏　ハテナ、佐々木のお家には、御惣領たる額五郎さま、これにござる桂之助さま、お二方ありながら、何ゆゑ御家督定まりませぬ。

玄蕃　其方どもは下樣、お上の樣子は知らぬ筈。家に二人主ある時は、騒動の元。折角納まる佐々木のお家、世繼は差詰め額五郎さま。伴左衞門どのは後見の役。桂之助さまは御次男の事ゆゑ、お附き人の山三もろとも、お座敷の片隅へ、すつこんでござるが相應。

しが　憚りながら、玄蕃さま、御料簡が相違いたしませう。

玄蕃　そりや又なぜに。

しが　ハテ、額五郎さまは御惣領なれどお妾腹。これにござる桂之助さまは、御次男なれども御本腹。外にお世繼なくば、イザ知らず、かゝる御本腹ありながら、妾腹たる額五郎さま、お世繼とある時は、御後室のお嘆きはいかばかり。さすればお家の騒動の基。おてまへ樣には、お家の亂れを、お願ひなさるゝか。

玄蕃　サア、それは。
しがお役柄にも似合ひませぬ。ちとお嗜みなされませ。
玄蕃　ウム。
　　　ト思ひ入れ。
雲六　柵どのゝお詞ではござれども
十助　佐々木のお家督定めには、無くて叶はぬ神妙劍。
雲六　たとへ桂之助さまのお世繼ぎにも致せ
兩人　その一卷がござりますか。
玄蕃　神妙劍は白井兵左衞門、名古屋山左衞門預りなりしが、お國許より下向の道にて、何者の爲にか殺害され、その一卷を奪ひ取られたではござりませぬか。それでもあなたの御代になりませうか。
しが　サア、それは。
玄蕃　なんの女の小差出た
敵役　すツ込んで、お居やれ。
桂之　方々の心配さる事ながら、正統たる某なれど、次男に生れし事なれば、佐々木の家督思ひも寄ら

ず。惣領たる額五郎どの、家を立つるはこれ順道。

才藏　お心弱いそのお詞。御本腹たるあなた樣、御代に出でずば祕書の一卷

雲六　その預りの兵左衞門、闇討ちにあひ、剩へ

十助　一卷取られし科によつて

皆々　白井の家も終に斷絶。

願哲　その御子息たる權八さま、此お寺へ日毎の參詣。

早枝　それにつけても名古屋山左衞門さま、同じその場でお果てなされしゆゑ

かへ　その御子息の山三さま、この程までは御遠慮あるべき筈なれど

もみ　桂之助さまのお附き人ゆゑ、假に御出仕御免との事。

しが　それと申すも當寺に於て、佐々木の系圖に御祈念あるが、古へよりの御吉例。その預かり主は名古屋山三どの。

才藏　イヤナニ、玄蕃さま。それに就いて、最前名古屋さまより、伴左衞門さまへ何か急用の御狀、拙者めに相屆けよとの仰せでござれど、未だ伴左衞門さま出仕なければ、憚りながら御同役のあなた樣より、お屆けなされては下さるまいか。

玄蕃　いかにも。伴左衛門どの出仕の上、身共が手渡し致さう。

才藏　有り難うござります。

　　ト手紙を玄蕃へ渡す。

轟坊　御前樣へ申し上げます。最早祈念の時刻でござれば

しが　御拜禮あつて、然るべう存じまする。

玄蕃　其うちには、御兄君にも御參詣。

桂之　然らば直ぐさま

轟坊　君の御座所へ

桂之　方々、案內。

皆々　先づ、入らせられませう。

　ト唄になり、皆々山門の內へ入る。この時、櫻の木へ、鶯二羽囀り居る。三味線入りの鳴り物になり、花道より名古屋山三、上下、衣裳、大小にて、三方に願書を持ち、出て來る。東の歩みより白井權八、振り袖の衣裳、袴、大小、花手桶を持ち、出て來り、兩人、舞臺の鶯に目を附け、思ひ入れ。篳篥の入りし鳴り物になり

山三　時は今、彌生の空。春告げ鳥の花に來て、その聲、雛に親鳥が

權八　敎へ草なる春鶯囀、鳥類だにもあの如く、親の手鹽に育つ身が

山三　我れには父母無き身無し鳥、早くも消えし蜻蛉の

權八　燃ゆる思ひは戀の意地、結ぼれ解けぬ絲遊の

山三　かゝりもつるゝ、花の枝に

權八　春は來にけり、鶯の

山三　巣を離れても

權八　餌食の父母を

山三　慕へる思ひに

權八　人たる我れが

山三　結ぼふる胸も

權八　今や解けなん。

山三　ハテ、風情ある

兩人　眺めぢやなア。

ト思ひ入れあつて、二人とも、舞臺へ來り、兩人顏見合せ

權八　ヤア、あなたは名古屋山三さま。

山三　これは權八。この程は打絶え、對面も致さぬが、益〻御無事で、重疊々々。

權八　あなた樣にも、御機嫌にて、喜ばしう存じまする。

山三　イヤナニ、權八。親御兵左衞門どの、この程、不慮の横死、殿より預かる神妙劍の紛失、その越度ゆゑおてまへまで、浪人の身の上なれど、先君の御恩を思ひ、御廟へ忍びの參詣よな。

權八　さやうでござります。私親どもと申し、あなたの親御山左衞門さま、場所も變らず、はかない御最期、互ひに親の敵を討ちたく、私しは若輩の上、父母に離れ、かゝる島なき孤兒同然。ふと致した事でこなたとは兄弟の義を結び、兄よ、弟と申すれば、親どもの本意を達し、力となつて下さりませ。

山三　成る程、其方と兄弟の、契約は致したなれども、そりや私しの事。敵討は武士の表、隨分力となつてやりたいが、して、その敵の手掛りは。

權八　サア、その手掛りは

山三　何者か相知れぬか。

權八　左樣でござります。

山三　ソレ、見やいなう。身共とてもその通り、親どもを討たれ、無念は同じ亡父の仇なれども、まだ知れぬ敵に身を粉に碎き、うか／＼尋ぬるは、なんと野暮な事ではないか。それよりは侍ひやめて、浮世を樂に、色と酒とに、樂しむ心は無いか。どうぢや／＼。

權八　さやうござれば、あなたには、敵を尋ぬる、思し召しはござらぬとナ。

山三　さればサ。併しながら我れらの方には、敵の手掛り少しはござるて。

權八　して、その手掛りは。

山三　親山左衞門討たれし砌り、帶せし刀は來國俊、その時紛失いたしたれば、それを所持する者が親共の敵。雌雄と名けし二振りの刀、名古屋の家に傳はるゆゑ、身共が刀と燒刃、鐵色、寸分違はぬ希代の業物。

權八　さほどの手掛りあるからは、私しの爲にも親の敵、あなたも共々

山三　二人一緒に尋ねたいが、こゝに一つの難儀があるて。

權八　そりや、何事でござります。

山三　何を隱さう。この節我れら眩暈の病ひ。今にも敵に出合ひなば、刀の光りを、見ると忽ち起る病ひ。それゆゑ當分、敵討は止めにした。

権八　そんならあなたは眩暈の

山三　病ひは身のほうけと、御奉公も勤まりかぬるゆゑ、伴左衛門まで暇の願ひ出し置きたれば、武士止めて、町人暮らし。

権八　さやうなれば、いよ〳〵あなたは親の敵を

山三　討たぬ證據は腰元の岩橋、此奴商人の女房には、見所ある奴、口說き落して身共が女房。

権八　そりや、今まで約せし兄弟の

山三　義理は猶更、武士道まで

権八　捨てゝ望むは腰元の

山三　岩木ならねば岩橋が

権八　色香に迷ふ御所存か。

山三　知れた事〳〵。

権八　今まで賴もしき心底ゆゑ、兄弟の義を結びしに、思ひがけなきその邪曲。どうぞ心を取直し、武士道立つて、親御の仇討。

山三　ハテ、長う云やんな。聞く耳持たぬ。それよりは當寺の小座敷で、兄弟分のおしまへを、精進酒

のさしつおさへつ。久し振りにて、どうぢや〳〵。

権八　色と酒とに心を奪はれ、親御の事はどこへやら

山三　捨てゝ見せるも、手管の一つ。

権八　ヤア。

山三　ハテ、野暮を云はずに、サア、來やれ。

ト唄になり、権八が手を取り、奥へ入る。山門の内より玄蕃、願哲、窺ひながら出で來り、兩人顔見合せ

願哲　玄蕃さま

玄蕃　コレ。

ト思ひ入れ。合ひ方にて、兩人こなしあつて

願哲　かねてのお頼み、今日の時。どさくさ紛れに、やりかけませうか。

玄蕃　イカサマ。山三が預かるところの系圖の一巻、今日祈念滿願なれば、所持いたして歸るは必定。屋敷へ行つては、むづかしい。あはよく寺にゐるうちに

願哲　折を見合せ、ひん盗んで上げませう。

玄蕃　併し、系圖の箱は山三が封印、これはどうも。

願哲　ハテ、坊主の事は何にも存じませぬが、小盗みの事ならば、やつたものではござりませぬ。

玄蕃　頼もしい。その小盗みは、系圖の一卷捲上ぐれば、それを越度に山三めは梵天國。差詰め跡目は額五郎さま、伴左衛門どのを初め我れ〳〵が、家の政事を執り行ふならは、御坊もその形では置かぬ。喜べ〳〵。

願哲　私しもその時は、大小ぼつこみ、立派な侍ひ。

玄蕃　ソレ、當座の手附け。

ト包み金を渡す。

願哲　こりや、コレ、ずッしり

玄蕃　かねての約束。

願哲　忝い。

玄蕃　必ずぬかるな。

願哲　ハッ。

ト奥へ入る。玄蕃殘り

玄蕃　伴左衛門どのと、事を計るは今この時。それにつけても、山三が方より、伴左衛門どのへ送りし書面。火急とあるは心許ない。密かに開封して。さうぢや〳〵。

ト件の書状を出し、上封を取り、袂へ入れ、状を見ようとする。この時、向う揚幕にて

三平　アヽコレ娘、危ないぞや。

トこの聲にて玄蕃状を懐中なし、奥へ入る。三味線入り、大拍子になり、向うより岩橋、奥女中の拵へにて、筒に入れたる花を持ち、草臥れたる思ひ入れ。あとより八内、繻子奴の形にて、茶瓶を擔ぎ、三平、老けたる中間にて、日傘と傘を籠に入れ、これを擔ぎ、出で來り

岩橋　モシ〳〵、八内どの、初瀬のお寺へは、まだ餘程あるかいなア。

八内　岩橋どのとした事が、何を云はつしやる。爰が卽ち初瀬寺でござります。

三平　こなたの足が遲いゆゑ、わしまでお供におくれた。サア、歩きませう〳〵。

岩橋　それぢやというて、草履の鼻緒が足に觸つて、一足も歩かれぬわいなア。

八内　そりや大方鼻緒擦れ。あれへ行つたら私しが、よいやうにして上げませう。

岩橋　そんならあの御門前で

兩人　辛抱して、歩いたり〳〵。

ト三人舞臺に來り、岩橋床几にかゝり

三平　最前から、直してやりたうても途中の事。娘、痛む所は、どこぢや〳〵。

岩橋　久し振りでの歩行路ゆゑ、思ひがけない鼻緒擦れ。こりやどうしたらよからうぞいなア。

ト寄らうとする。岩橋見て

岩橋　勿體ない、父様、どうしてお前に。

八内　ヤア、親仁どのゝ事を、父様といふからは、そんなら岩橋どのは

三平　ハイ、わしが娘でござります。

八内　こなたの娘にしては、これがほんの、鳶が鷹を生んだとやら。

三平　これは不躾な事を。

八内　それぢやというて、あまりの違ひ。

三平　そりやその筈、この岩橋は元來捨子の

岩橋　アモシ、父さん、人も問はぬに其やうな事を

三平　オツト、合點々々。

トロを押へろ。この時、才藏出で來り

二立め



三立め



才藏　荷物の親仁は、何を致して居るか知らぬ。

ト三平を見て

コレ〳〵、三平、女中衆が日傘をお待ちかね。早く來やれ〳〵、

三平　オツト、合點々々。

ト日傘を四五本持つて、傘三本殘し、才藏連れ立ち、奥へ入る。

岩橋　ほんに、わたしとした事が、お供に遲れ、御前の御機嫌

ト行かうとして、足の痛むこなし。

アイタヽヽ。こりや何うしたらよからうぞいの。

八内　草履の事なりや奴が商賣、よいやうにして上げませう程に、その代り、この短册を見て下さりまし。

ト懐中より短册を出して渡す。

岩橋　アモシ、こりや何でござります。

八内　サア、その短册は、さるお方より頼まれました。どうぞお前の心に叶うたらば、返歌をしては下さるまいか。

ト岩橋恟り、よく〳〵見て

岩橋　ヤヽ、この短冊は男の手跡。情を籠めし一首の歌。して、此お方は。

八内　サア、その主は、コレ。

ト囁く。

岩橋　ヤヽ、そんなら、アノ山三さまが

八内　アコレ。何にも云はずに返歌を一首。其うち我れらは草履の穿索。

ト草履を取り、鼻緒を直す。岩橋嬉しき思ひ入れにて、紅筆にて裏へ返歌を認め居る。好き時分、奥より玄蕃出で來り、岩橋を見て

玄蕃　ヤア、いつの間にやら岩橋どの。

トこれにて岩橋、短冊を隠し

岩橋　これは〳〵、玄蕃さま、今日のお役目、御苦勞に存じまする。

玄蕃　可愛らしいその口許にて、お優しい其お詞。身共もどうやら……イヤナニ、岩橋どの、さる仁に賴まれてござるが、この短冊へ、返歌をしては下さるまいか。

ト短冊を出す。岩橋見て

岩橋　この短冊にも一首の歌。して、此お方は。

玄蕃　お名は云はれぬ。雲に稲妻。

岩橋　そんならこれが

玄蕃　どうぞ色よい御返事を

岩橋　不束な私しへ、お送り下さりましたこの短冊、早速に御返歌は致したけれど、折わるう、アイタタヽ。

ト足の痛き思ひ入れ。玄蕃草履を取らんとするを、八内、玄蕃を退け

八内　オツト、待つたり。さうはなるまい。

玄蕃　ヤイ〳〵、下郎め、何でならぬのだ。

八内　ハテ、知れた事。今あなた、何と仰しやりました。武士たる者が、むさくるしい物持つものではないと仰しやりましたではござりませぬか。私しは下郎の事、あなた様にはお歴々のお侍ひ様。

玄蕃　サ、それは……それ〳〵、この女中が供先で、難儀と見たゆゑ。それに何でこの草履。

八内　あなた様にはお歴々。矢張り草履は、この下郎。

玄蕃　イヽヤ、身共が……その代り、今の返事を

ト寄るを、八内突退け

八内　イヤ、私しへ。

立番　イヽヤ、身共へ。

ト兩人、短冊を差附ける。

岩橋　それ程に思うて下さんすは、女の果報と嬉しけれど、どちらへ御返事いたしても、いづれ一人に恨みを受け、戀の遺恨は災ひの種。それを思へば、御返事は

兩人　ならぬといふのか。

岩橋　これぱつかりは

立番　ならぬところを

八内　内々で

ト短冊を差しつける。

岩橋　アタしつこい。存じませぬわいなア。

ト兩人の短冊を舞臺へ打ちつけ、片足の草履を脫ぎ捨て、唄になり、奥へ入る。跡にて兩人思はず抱き合ひ、顏見合せ

八内 ヤア、玄蕃さまか。

玄蕃 おきやアがれ。

八内 あの女めは逃げたさうな。

ト捨ぜりふ、いろ／＼あつて、互ひに取違へ、短冊を取つて

八内 岩橋どの、わしが頼みを、聞いて下さい／＼。

玄蕃 イヤ／＼、身共が頼みを

ト兩人爭ひ／＼山門の内へ入る。夜神樂になり、下の藪疊より、願哲、封印附きし系圖の箱を携へ來て

願哲 祈禱所に飾りある佐々木家の系圖、引ッ攫つて來たが、早く手渡ししたいものだが。

ト奥の方へ礫を打つ。玄蕃出て來り

玄蕃 願哲、首尾は、どうぢや／＼。

願哲 上首尾でござります。お頼みの系圖とやら、イザ、お受取り下さりませう。

ト出す。玄蕃取つて

玄蕃 出かした／＼。併し、山三が封印附け置きたれば、切り解いては事の破れ。ハテ、どうがな。

願哲 それは私しが仕様がござります。小柄をお貸しなされませ。

ト玄蕃の小柄を取り、箱の底を切り離し、系圖を出し、玄蕃に渡す。

玄蕃　奇妙々々。流石は願哲。出かした〳〵。

願哲　慥かにお渡し申しました。

玄蕃　一巻は受取つたが、跡の始末は

願哲　空殻は元の神前へ、私しが

玄蕃　そんなら萬事を

願哲　畏りました。……イヤ、此まゝでは箱が輕い。何ぞ中へ重みに。

トあたりを見廻し、岩橋が脱ぎ捨てし草履を箱の中へ入れる。

斯うして置けば、誰れも氣の附く事ではござりませぬ。

玄蕃　ちつとも早く

願哲　心得ました。

ト箱を持つて元の所へ入る。玄蕃あとに殘る。この時、風の音にて、日覆より鷹一羽舞ひ下がり、櫻の枝へ摑みつく。玄蕃きつと見て

玄蕃　ヤヽ、いづこよりかは、この外れ鷹。

ト思ひ入れ。早舞ひになり、向うより佐々木額五郎、掴み立ての前髪、若殿の拵へ、鷹野の形にて鞭を持ち、鷹を追つて出る。あとより近臣、二人、半弓を持ち、六角左京、上下、衣裳、大小にて、附添ひ出て來り、直ぐ本舞臺へ來り、鷹を見上げ、皆々思ひ入れ。

臣一 不斷剛氣のお鷹なれども、お拳外れてあの枝へ

臣二 緒を搦めて、アレ〱〱。

玄蕃 恐れながら、額五郎さまへ申し上げます。只今、名古屋山三出仕いたしますれば、彼れは日頃弓馬の自慢、彼れを呼び出し、弓を以て、緒を射切らせては如何でござりませう。

額五 それこそ幸ひ。山三めをこれへ呼び寄せい。

玄蕃 もし射損じなば、赤恥かゝせ

左京 何はともあれ、若殿の御入來。舊臣たる山三元春。

トこの時、奥より

山三 お召し無くとも、それへ參つて、お目通り致しませう。

ト合ひ方になり、奥より山三出で來る。

左京 これは〱、名古屋氏。

皆々　今日の御出仕、御苦勞に存じまする。

ト山三、額五郎を見て

山三　ヤヽ、若殿には父君の、御靮參と思ひの外、見るもいぶせき御遊獵、老臣がたもお側にあつて、何ゆゑお諫めなされぬぞ。

左京　及ばずながら、六角左京、御後室の御意を受け、お跡を慕ひ、お諫め申せど、お用ひ無きは、常の御氣質。

額五　ヤア、役にも立たぬその諫言。大小立派な武士なれば

玄蕃　山三どの、貴殿には御祕藏のお鷹が、外れたに氣が附かぬか。

額五　かゝる高木に搦みしことなれば

臣一　猿猴たりとも梢を傳ふに自由ならず。

左京　此まゝ置かば鷹の落命。さある時にはお家の恥辱。

臣二　日頃自慢の元春どの

皆々　射術の程が、見たい〳〵。

山三　こは思ひも寄らぬ御仰せ。この程拙者は眩暈の病あり。劍は元より、射術などは思ひも寄らず。

玄蕃　見下げ果てたるその一言。
臣一　片時も早く、あのお拳。
額五　オヽ、射切る射術を、早く〳〵。
玄蕃　差詰め、執權六角どの
臣二　急いで弓術。
左京　然らは拙者が、及ばぬまでも。

ト半弓を執ると、トヒヨになり、鷹は日覆へ飛び行く。

玄蕃　ヤヽ、御秘蔵のあの一物、雲井遙かに飛び去りしか。
臣一　あと追ッかけて、あの鷹を、

ト立ちかゝる。この時、揚げ幕にて

伴左　アイヤ、お拳はこれにて止め、伴左衛門重勝、それへ持參いたすでござらう。

ト誂への鳴り物になり、向うより不破伴左衛門、上下、衣裳、大小、はちかつら、袱紗の上へ件の鷹を据ゑ、出で來る。

左京　不破伴左衛門重勝どの

皆々　只今出仕召されたか。

伴左　凡そ人、生れてより一生を經るに、五蘊六氣離れずと。これを以て窺ふこと、軍法の第一とす。ましてや領主の御嫡子、この所に御座ある事、天文にて察せしゆゑ、お出迎ひと存ぜし折柄、翼を伸し行く君の御祕藏。鷹は好く人の氣に應ずる奇物、心を以て拳へ返し、君へ捧げ奉る。恐れながら、御賢慮の程、よしなに願ひ奉る。

額五　家の面目、他家への聞え。伴左衞門近う。

皆々　君のお召し、急いで御前へ。

伴左　然らば、御免下さりませう。

ト本舞臺へ來り、鷹を近臣二へ渡し、好き所へ住ふ。

山二　これは〳〵、重勝どのには、今日の御參詣、御苦勞に存じまする。

立番　それにつきまして、名古屋山三より、おてまへに屆けくれよと、遣はしましたるこの書面。イザ、お受取り下さりませう。

ト以前の狀を出し、見せる。山三思ひ入れあつて

山三　重勝どの、何卒御披見の上、よしなに御推擧、願ひ奉りまする。

伴左 何か樣子は存ぜねど、とくと一覽の上。拙者が方へ參りしこの狀、こりや、封印が切れてござるぞ。

立番 その儀は最前、おてまへの御出仕遲刻ゆゑ、火急の事もあらんかと、相役の拙者ゆゑ、開封いたしてござるが、何はともあれ、披見召されい。

ト伴左衞門件の狀を開き

伴左 ナニ〳〵……「私し事お家の厚恩有り難く存じ居り候ふところ、この程眩暈の病に冒され、武家の奉公成り難く、これによつて、貴殿方より、お上へ言上の上、長のお暇下し置かれ候ふ樣、御推擧の程願ひ上げ候ふ。不破伴左衞門どのへ、名古屋山三。」

臣一 すりや、山三どのには眩暈の

臣二 病とやらにて、暇の願ひか。

左京 これにて思ひ當りしは、父の最期の嘆きもなく、淫酒に耽り、身の放埒。草葉の蔭の山左衞門、最期の後まで武名の恥辱。

伴左 今まで祿を賜はりし、殿のお眼識違ひしと、世の嘲りは主人へ不忠。さすれば山三は祿盜人。

山三 控へ召されい、重勝どの。拙者の病は俄かの事。今まで盡せし忠義は云はず、なにゆゑ山三は祿盜人。

件左　そりや申さずとも、おてまへも承知でござらう。武士は、帶刀いたす役ではござらぬか。治國にも亂を忘れぬ魂ひ。すは叛逆の者あらば、劍を揮つて敵を防ぐが、臣の役ではござらぬか。それに何ぞや、眩暈の病とあれば、腰拔け同然。祿盗人と申したが、この件左衞門が誤りか。

山三　サア、それは。

件左　但し、無念に思はるゝなら、この場に於て、眞劍の立合ひなすか。

山三　サア、それは。

皆々　祿盗人か。

山三　サア、それは。

皆々　サア〳〵

件左　返答いたせ、山三元春。ドヾどうだ。

　トきつと云ふ。この時、權八後ろより、ツカ〳〵と出て

權八　憚りながら、伴左衞門さま、暫くお待ち下さりませう。

伴左　誰れかと思へば、白井權八。待てと申すその仔細は。

權八　お止め申しましたは、山三がお詫び、致さうと存じまして。

伴左　そりや何ゆゑに。
權八　ハテ、元春儀は眩暈の病。それを捕へて立合へとは、勝つ事御存じにてのお望みか。どうやら卑怯の樣に存じまする。
玄蕃　ヤイ〳〵、默り居らう。我れ〳〵を捕へ、卑怯者とは、慮外な奴めが。殊に、殿の御不興を受けながら、お召しも無きうち、何でこれへ出仕いたした。
權八　サア、その儀は。
額五　身の程知らぬ大白痴め。さほど身分を顧みるなら、山三の名代、其方、立合へ。
權八　どう致しまして、私し風情が
玄蕃　ハテ、其やうに卑下さつしやるな。
伴左　この場に於て武術の立合ひ。其方が打勝ちなば、山三が科を免してくれう。
權八　すりや、私しめがこの場に於て
伴左　まぐれ當りに勝つたなら、詫びの一埒、免してやらう。
權八　有り難う存じまする。
伴左　其方の相手には、石塚玄蕃。彼れと立合ひ遣はされい。

玄蕃　權八が相手に、アノ拙者が。

伴左　若輩の事なれど、蟲押への灸代り、打つて〳〵、打ちのめし召されい。

玄蕃　心得ました。

左京　御近習、竹刀。

臣二　ハア。

ト繪馬に打ちたる竹刀をよき所へ直す。

伴左　兩人、支度。

權八　ハアヽ。

ト白囃子になり、兩人、竹刀の側へ來て、式禮あつて、ヤツと立上がり、よろしくあつて、トヾ玄蕃を打据る。伴左衛門、後ろより玄蕃が落せし竹刀にてかゝる。權八よろしく立廻りあつて、兩人屹度とまる。誂への鳴り物になり、トヾ竹刀にて伴左衛門を當てる。權八すぐに打つてかゝるを、山三ツカツカと寄つて、權八を制し、下に置く。伴左衛門心附き、刀を拔いて、山三の目先きへ突附ける。これにて山三、扇を顏へ當て、タヂ〳〵となる。皆々、この體を見て

皆々　名古屋山三が、この體は。

伴左　御覧の如く眩暈の、病といへど、何とやら。

ト白刃を納める。

額五　心得難き彼れが胸中。

玄蕃　もしや作病構へし上

左京　當家退去は、祿の不足か。

山三　イヤ、全く以て。

伴左　さなくば、病は

玄蕃　療治を加へ、勤仕いたすか。

伴左　離散いたすか。

額五　善惡ともに、仔細もあらば

玄蕃　權八もろとも

權山　然らば御前へ

額五　方々、案内。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト唄になり、額五郎先きに、皆々附添ひ、入る。伴左衛門、玄蕃殘り

玄蕃 伴左衛門どの、

伴左 コレ。

ト音樂になり、兩人思ひ入れ。

玄蕃 石塚玄蕃、件の一儀、如何いたした。

仰せの如く、かねて一味の所化願哲、まんまと首尾よく系圖の一卷、イザ、お受取り下さりませう。

ト出す。この時、侍ひ一人窺ひより

侍ひ その一卷。

ト玄蕃が持ちし一卷を引ッ浚ひ、行きにかゝる。この時、揚げ幕にて

助太 エイ。

ト手裏劍飛び來て、侍ひの胸へ立つ。侍ひ苦しみ、撲となる。兩人見て

兩人 これは。

助太 お騷ぎあるな、重勝どの。本庄助太夫、それへ參つて、面談いたさう。

ト誂への鳴り物になり、本庄助太夫、上下、衣裳、大小にて出て來る。此うち、玄蕃、件の一卷を伴左衞門へ渡す。

伴左　助太夫どの、只今出仕召されたか。

助太　あれにて樣子を見受けますれば、折角手に入る系圖の一卷、持つて逃げ出す曲者ゆゑ、見るに忍びず拙者が手の內。

玄蕃　天晴れなお手際。

助太　何は格別、申し談ずる樣子もあれば

伴左　まづ〳〵。

助太　然らば御免下さりませう。

ト舞臺へ來る。

玄蕃　助太夫どの、お喜び下されい。山三が預かるところの系圖、手に入りましてござります。

助太　天晴れお手柄。一卷さへござれば、妾腹の額五郎どのを世に出しなば、我れ〳〵が大望成就。

伴左　支へ立てする白井兵左衞門を初め、名古屋山左衞門、人知れず失ひ、悴山三は退去の願ひ。

助太　併し、白井兵左衞門に二人の悴、兄の彌市は盲目ゆゑ、出國いたす筈なれども、弟權八は忠義を

伴左 その心配は無用々々。おてまへと權八は、叔父甥の事なれば、手段を以て身方に引入れ、異議に及ばず、コレ。
思ふ小癪者。

ト囁く。

助太 承知いたした。
伴左 あらまし手筈調へども、助太夫どの、御子息助市どの、神妙劍の一卷を奪ひ、其座より行方知れず。
助太 ハテ、その儀はお氣遣ひ召さるな。勘當なせども、親子の儀なれば、情けを以て誘きよせ、その一卷は此方へ。
伴左 それにつけても、我が願ひ、どうぞ首尾よく、此方へ。
助太 伴左衞門どの、おてまへの願ひと申すは。
伴左 仔細を申すも恥かしながら、某かねて腰元岩橋に、殊の外なる執心。玄蕃どの、お身に頼んだ短册の返事は、如何いたした。
玄蕃 サア、お聞き下されい。今日送りし短册、又、山三が家來八内も、同じく艶書の短册。女は一人、口說き手は二人、何れへ返歌もなりがたしと、その儘に突き戻され、面目次第もござりませぬ。

ト短册を出す。伴左衛門取つて

伴左　ヤヽ、こりや某が短册ならず。模様は雨に濡れ燕。……裏に紅筆にて一首の返歌。……「君ならば幾枝も手折れ櫻花、野山の嵐いとふ身なれば」……すりや、この一首は、山三へ返歌であつたよなア。……ムウ。

玄蕃　それといふのも、あの八内めが、まぜッ返した故の事。

助太　その八内は鹿藏と申して、身が家來なりしが、我れ〳〵が企ても氣取つた樣子、それゆゑ暇を遣はしてござるが、山三が方に仕へ居れば、迂濶に心は許され申さぬ。

伴三　山三もしれ者。最前の願ひといひ

玄蕃　常に變りし詞の端々

助太　油斷ならざる彼れら主從。

伴左　遺恨重なる山三元春。おのれ、其まゝ

ト短册を見て、思ひ入れ。

兩人　ヤア。

ト伴左衛門氣を變へ

伴左　助太夫どの、後刻お目にかゝりませう。

ト唄になり、伴左衛門先きに玄蕃奥へ入る。助太夫残り、こなし。

助太　今を盛りの不破、名古屋。ハテ、立派な武士ぢやなア。

トばた〳〵にて、權八、願哲を引立て、あとに才藏附添ひ、出る。

願哲　御免なされませ〳〵。

助太　ヤア、權八。如何いたした。

權八　若輩者と侮つて、我れをさみする法外者め。

才藏　その坊主は、系圖に心をかける樣子。必ず油斷なされまするな。

權八　さてこそ汝は

願哲　こいつは堪らぬ。

ト振り切り、一散に向うへ入る。

兩人　あの曲者を、ちつとも早く

才藏　心得ました。

ト寺鐘の送り、才藏あと追ッかけ、入る。

權八　ハテ、油斷ならざる彼れが振舞ひ。
助太　高の知れたる下司坊主、矢張り其まゝ、其まゝ。
權八　これは〳〵叔父者人には、未だこれにおいでゞござりまするか。
助太　只今聞けば、其方が御前にての立合ひ、諸家中の噂。某は元より、草葉の蔭の父御も、さぞ喜ぶであらう。
權八　有り難い其お詞。親兄弟も無き身の上、このうへながら叔父者人。
助太　なにサ、頼む、頼まぬとは、こりや他人の事。其方とは叔父甥の仲なれば、何によらず、身共が云ふ事、背きはせまいな。
權八　これは〳〵、改まつたる其お詞。親亡き後は叔父が親。何しに違背でござりませう。
助太　それ聞いて先づは安堵。然らば、何事によらず、身共が詞を背かぬといふ、誓紙が見たい。
權八　ヤヽ、なんと仰しやる。
助太　親亡き後は叔父が親、違背いたさぬ金打いたせ。
權八　何か存じませぬが、金打と申しては
助太　成らぬと申すか。

權八　イヤ、全く
助太　然らば早く。
權八　ハツ。

ト金打する。合ひ方になる。助太夫見て

助太　天晴れ金打。慥かに見屆けた。
權八　して、あなたの御所存は。
助太　荷擔いたせ。
權八　ナニ、荷擔とは。
助太　何も其やうに驚く事はない。大殿御逝去の後は、佐々木の家督未だ定まらず。然るに、家中二つに分れ、御本腹たる桂之助どのを家督になさば、我れ〳〵が心に任せず。それゆゑに今宵、茶の湯に事よせ毒殺なし、妾腹たる額五郎どのを世に出だし、家の政事を執り行ひ、あはよくば額五郎どのもおッ殺し、佐々木の家を押領なさば、其方とても立身出世。なんと、荷擔いたす所存は無いか。
權八　すりや、あなたには、家國を
助太　オヽサ、身共に荷擔いたしなば、事によつたら神妙劍も

権八　ナニ、神妙剣とは。

助太　イヤサ、眞實荷擔いたしなば、其方が心に叶へてくれう。

権八　すりや、アノ神妙剣も

助太　得心か。

権八　武士の金打。違背はござりませぬ。

助太　それで身共も安堵いたした。げにや、唐土にては、義を結びし花の桃園。

権八　それは兄弟

助太　これは叔父甥

権八　義に隔てなき

助太　武士の一言。

権八　叔父者人。

助太　権八。ドリヤ、歸宅いたさうか。

ト唄になり、助太夫向うへ入る。権八殘つて、思ひ入れあつて

権八　思ひがけなき叔父者人のお詞。血筋の縁に搦まれて、是非なく荷擔は致したれど、此まゝにては

山三どのへ義理立たず。……それは格別、今宵のうちに、お命危ふき桂之助さま。いつそこの事申上げうか。……イヤ〳〵、他言せまじき武士の金打。というて、申上げねば御主人へ不忠。口外すれば不孝の罪。忠孝二つの路に迷ひし、權八が身の一生懸命。ハテ、心にかゝる事ぢやなア。

ト思案の思ひ入れ。合ひ方になり、奥より山三出で來り

山三　これは權八。いつの間にやら。見れば、何か思案の體。どうしやつた〳〵。

權八　サア、私しも親どもの事思ひ出し、それゆゑ思はず、心の愁傷。

山三　イヤモウ、孝心のおてまへなれば、さこそ〳〵。さりながら、保元の亂れに、勅命とは申しながら、親子の心二つに分れ、親を討つたる源の義朝。武士の義理は、捨てがたいものではないか。

權八　ヤ、何と仰しやります。

山三　忠義ゆゑには現在の親を討つたる、源の義朝。

ト思ひ入れ。

權八　ハテ、武士の身の上は、つれないものでござります。

ト泣き落す。

山三　おてまへは、なぜ其やうに

ト権八心附き

権八　サア、親を討つたる義朝は、私しの心には、不孝のやうに存じまするが、忠孝二つの其うちで、何方が重うござります。

山三　これは又、むづかしい事を申す。忠孝二つは人情の常。何れの道も重けれど、武士は猶更、忠こそ大切。

権八　ムウ。承知いたした。

ト行きにかゝる。山三とめて

山三　血相變へて、コリヤどこへ。

権八　忠の一字が、重うござれば。

山三　義心によつて

権八　これより直ぐに。

ト花道へかゝり、思ひ入れ。

おさらば。

ト時の鐘の送りにて、權八向うへ走り入る。山三あと見送り

山三　仔細も云はずに、あの形相。ハテ、心がゝりな。

よび　殿の御歸館。

ト呼ぶ。音樂になり、山門の内より額五郎先きに、桂之助、伴左衞門、柵、早枝、楓、紅葉、岩橋玄蕃、左京、雲六、十助、その他、附添ひ、出る。玄蕃、三方に系圖の箱を載せ、舞臺の眞中へ直し

玄蕃　名古屋山三どの。預かりの佐々木家の系圖。御世代りには一七日の祈禱いたす御吉例。則ち今日滿願なれば、これへ持參いたしました。

桂之　封印はその係りたる名古屋山三。

額五　檢分いたすは伴左衞門。とくと改め、館へ持參。

伴左　ハッ、畏りました。

ト箱の蓋を明けて見て、ギョッと思ひ入れ。また蓋をして

山三どの。系圖の一卷、おてまへの預かりゆゑ、御内見下されい。

山三　畏りました。

ト何心なく、箱の蓋を明ける。中より最前の草履出る。恟り思ひ入れ。

ヤヽ、お家の系圖と思ひの外、中には片足のこの草履。

皆々　ヤヽ、なんと。

玄蕃　その草履は見覺えある、岩橋どのゝ草履の片足。

岩橋　ヤヽ、最前思はず脱ぎ捨てしに、どうした事でこの箱へ。

山三　封印切れざるこの器。ハテナア。

左京　系圖の一巻無き時は

皆々　お家に係はる一大事。

額五　伴左衛門、詮議いたせ。

伴左　ハツ。……腰元岩橋。山三どの。ちよつと御意得ませう。

岩山　ハツ。

ト思ひ入れ。

伴左　山三。岩橋。罪に服して繩にかゝれ。

岩山　何ゆゑあつて我れ／＼を

伴左　知るまいと思ふか。先君御逝去の後、御家督未た定まらず、某お附きたる額五郎さま、御惣領た

るによつて、お世繼となる時は、おのれが儘にならざるゆゑ、それを妨げんと系圖の一卷押し隱し、おてまへが附き人たる、桂之助さまを世に出だし、國家の政事心の儘に執り行ふ、汝等二人が計らひであらうがな。

山三　ハヽヽヽ。其方が心に引き比べ、跡方もなきその一言。

岩橋　女のわたしと心を合せ、事を計ると仰しやるのか。

山三　たとへ野心があるにもせよ。女如きを便りにせんや。痴けた事を。……但し、これには證據ばしあつてか。

伴左　證據無き事申さうか。

岩山　して、その證據は。

伴左　この短册。覺えがあるか。

ト以前の短冊を見せる。兩人悔り。

岩山　ヤヽ、その短册は。

伴左　雨に燕のこの模樣。送りし戀歌のその一首。……「憂しとても、更に思ひは返されぬ、戀はうらなきものにぞありける」――こりやコレ、正に山三が手跡。

岩山　サ、それは。
伴左　裏に返歌は紅筆にて、……「君ならば、幾枝も手折れ櫻花、野山の嵐いとふ身なれば」……この返歌は岩橋。其方が手跡であらう。
岩橋　サ、それは。
伴左　二人が心を一緒にして、系圖を盗み、其あとへ、重みに入れたこの草履。まつた二人は不義の大罪。
岩山　サ、それは。
伴左　云ひ譯あるか。
岩山　サア
伴左　サア
三人　サア〱〱。
伴左　云ひ譯無くば、この場に於て。
ト伴左の草履を以て、山三に打つてかゝる。この時、後ろに八内窺ひ出て、伴左衛門の持ちし草履を引取り、伴左衛門をしたゝかに打つ。伴左衛門その手を取り、兩人きつと思ひ入れ。音樂になる。
伴左　待て、下郎。何ゆゑあつてこの打擲。

八内　打つたがどうした。イヤサ、叩いたがどうした。事によつたら、命も取るワ。

伴左　何がなんと。

八内　最前より聞いて居れば、岩橋どのとお旦那が、心を合せ、系圖とやら、盗み隱したと云はつしやるが、おのれが科をおのれが現はさうと、草履をこの箱へ入れて置く痴呆があらうか。殊に、又、コレ、見やれ。

ト鼻緒に卷きし反故を取つて

鼻緒に卷いたるこの反故は、お旦那からおてまへへ參つた御狀、不破伴左衞門どのへ名古屋山三。其方で讀むは其方の反故。さすれば系圖の盗賊は、問ふに及ばぬ伴左衞門。きり〳〵一卷、出さつしやい。

伴左　ヤア、どうしてそれが

立番　そんなら最前の

八内　覺えがあるか。

伴左　サア、それは。

八内　なんと、好い極め所であらうがな。

伴左　イヽヤ、系圖の一埒は差し置き、二人は不義の科人だワ。

八内　イヽヤ、お二人は不義者ではござらぬ。

伴左　何と。

八内　その不義者は外にある。おてまへ、この品覺えがござるか。

ト最前の短冊を出す。伴左衛門見て

伴左　ヤア、この短冊は

八内　むら立つ雲に稲妻は、それといはねど、重勝さま、岩橋どのへ送りし戀歌」なんと、違ひはござるまいが。

伴左　サ、それは。

八内　云ひ譯ござるか。ナヽなんと。

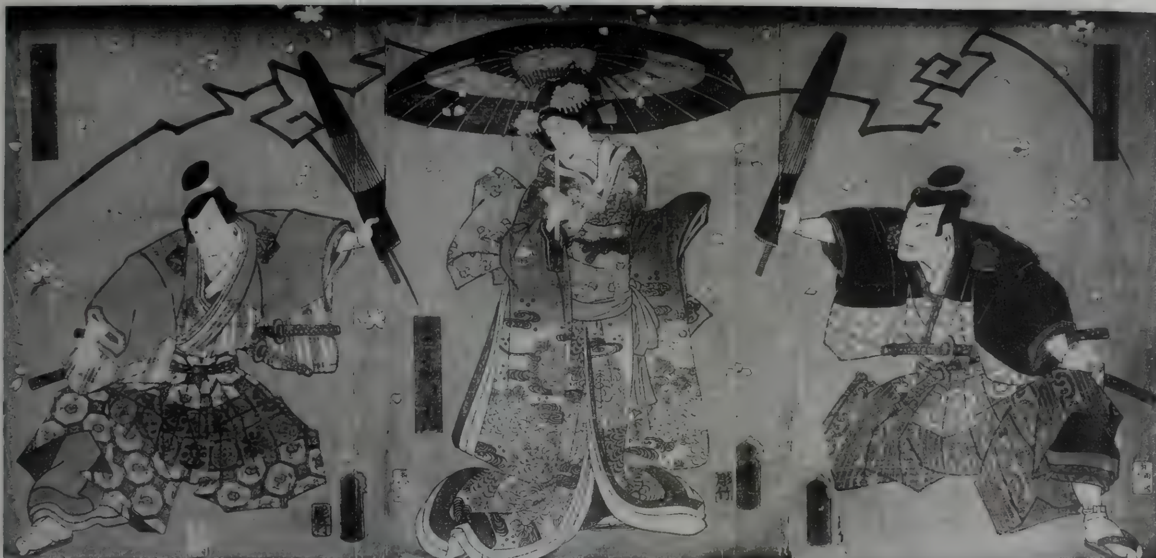
伴左　慮外な下郎め。

ト八内へ切り掛ける。兩人立廻つて、きつと留まる。

桂之　方々、控へい。

伴左　でも

桂之　ハテ、成敗は追つての事。しが爰は靈場、法の庭。生けるを放す法會の日に、血をあやなすは御廟へ恐れ。殊に、御前の御意でござる。
伴左　ハテ、命冥加な。
八内　行屆いたる御仁政。この上も無きこの御上意。
山三　有り難う存じまする。
伴左　して、この上の御賢慮は。
額五　今日の法事を幸ひに、助命とあらば六角左京、其方よきに計らへ。
左京　畏りました。……腰元岩橋。不破、名古屋の兩人。
三人　ハツ。
左京　其方ども二ケ條の申し譯立ち難く、既に御法の通り行ふべきところ、格別の思し召しを以て、助命申し附け、長のお暇下さる間、有り難くお受け致せ。
伴左　ヤヽ、岩橋、山三は兎も角も、何ゆゑ拙者に、長のお暇。
左京　何かはその身に覺えあらん。そこらあたりに一味合體。やゝともすれば、お家を窺ふ……イヤサ、



お家御法度は不義密通。艶書の短冊露顯の上は、三人共に科は同罪。

伴左　すりや、いよ〳〵拙者めも……ハテ、思ひがけない。

岩橋　これといふのも、皆私しがいたづらから。この身の科はいとはねど

八內　何卒主人山三が身の上、今一應お上のお慈悲で

山三　斯く成る事は知らねども、この程某多病の願ひ

岩橋　御病氣ゆゑのお暇ならば、また御歸參も叶ひませうが、不義ゆゑ今のお身の上。只悲しいはわたしゆゑに

トこの時、下の方へ三平出て

三平　最前より何かの樣子承りましたが、折角御奉公に差上げました娘が、長のお暇となりましたか。

岩橋　義理ある父樣ゆゑ、わたしや大事と思うたれど、斯うなつたら是非がない。堪忍して下さんせ。

三平　おぬしが出世を待つて居たに、ひよんな事してくれたなア。鳶が子は鷹にならずぢやなア。

玄蕃　今更未練なその吠え面。

雲六　暇が出たれば、二人の帶刀

左京　何處へ退去いたすとも、腰があいては見苦しい。二腰は身共が寸志。御法でござれば肩衣を

十助　心得ました。

　ト兩人の肩衣を取る。

腰元　お二人樣の、この體は。

岩橋　昨日に變る此お姿。

八内　たとへ浪人なされても、下郎はあなたと御一緒に。

山三　尤もなる願ひなれど、今日一日は殿の御供、役目終らば勝手次第。

八内　左樣ござらば、お供いたして

伴左　浪人するも自業自得。人を呪はゞ穴とやら。これから互ひに天竺浪人。

左京　やがて歸參は、お家の系圖、紛失なしたる神妙劍、持參の方が御家督定め。

伴左　すりや、拙者が尋ね出だしなば

額五　世繼ぎはさしづめ額五郎。

岩橋　元春さまのお手に入りなば

桂之　弟ながらも家督は某。

八内　疎かならぬお家の納まり。

山三　身を粉に碎き、寶の詮議を

桂額　きつと申し渡したぞよ。

山伴　委細承知仕つてござります。

　　　トこの時、雷薄く鳴る。

轟坊　恐れながら、御兩君へ申し上げます。雷氣催ふしましてござりますれば、御歸館あつて、然るべう存じます。

額五　最早黄昏。

桂之　住職には大儀。

山伴　左樣ござらば、御機嫌よろしう。

立番　殿のお立ち。

皆々　ハツ。

　　　ト時の鐘。行列三重になり、皆々附添ひ、向うへ入る。八内少し引下がり、山三と顏見合せて思ひ入れあつて、入る。あと三人殘る。

岩橋　殿樣のお暇の出た私し、爰に長居は御廟へ恐れ。

山三　岩橋どのには早くこの場を
岩橋　何かの事は、後に緩りと。
　　　ト行きかゝる。
伴左　岩橋。待たつしやい。
岩橋　御用でござりまするか。
伴左　イヤ、用ではないが
岩橋　そんなら私しは
伴左　エヽ、未練な奴だが、こなたにちつと、恨みを云はねばならぬ。
山三　重勝どのとした事が、女子供か何ぞのやうに
岩橋　お恨みなさるはそりや何事。
伴左　その身に覚えはござらうが、送りしばかりで返事もなく、その短册の一埒で、斯く成り果てし伴左衛門。俗に申せば、うまらぬ身の上。斯くなるからは破れかぶれ、是非とも色よい返事をば
岩橋　御尤もではござりますれど、御奉公の内なれば、不義はお家の堅い御法度。
伴左　そんなら何で、掟を破り、山三へ返歌の短册は。

岩橋　サア、それは。

山三　掟破りし科により、お暇出たれば、互ひに五分々々。

伴左　おまへの身の上は、眩暈の病ひゆゑ、暇の出たは折に幸ひ。

山三　その眩暈も眞は僞り。

伴左　ヤ、、そんなら貴殿は作病か。

山三　父山左衛門横死の後、暇を願ひ、身輕になり、何卒父の敵討……サ、堅き邸の奉公より、流れ次第に浮世の樂しみ。

岩橋　暮らす心はお二人さん。

伴左　同じ罪たる天竺浪人。

山三　主持たぬ身の氣散じは

岩橋　法度を破る氣遣ひなければ

山三　刀にかけて

伴左　身共が女房。

山三　イヤヤ、拙者が。

伴左　イヤ某が。

二人　何を。

　ト思ひ入れ。岩橋中へ入り

岩橋　モシ、待つて下さんせ。互ひに挑む刀の意氣地。直ぐさま斯うと云はれぬは、この身は一人、男は二人。

山三　何れが何れと、分け難ければ

岩橋　心の定まる其お方が、八千代をかけて、ナ、わたしの夫。

　ト山三にのみこます。

山三　成る程。この場の論を鎮めんと、尤もなるその一言。

伴左　その古への津の國の

山三　女夫ヶ池に准へて

兩人　ハテ、何をがな。

　ト思ひ入れ。誂への合ひ方になり、兩人櫻の枝を切り、岩橋が前へ持ち來り

山三　二人が心底。

伴左　まツこの通り。

山三　何れを手活けの

伴左　花と詠めん。

岩橋　同じ櫻の枝ながら、わたしが望みはこの櫻。

ト山三の枝を取り、花筒へさす。伴左衛門思ひ入れあつて

伴左　そんなら身共が

岩橋　花に嵐は、まツこの通り。

ト伴左衛門の花を打ちつける。伴左衛門拔きかける。山三この中へ入り、件の枝を取り、伴左衛門の目先きへ突きつけ

山三　落花再び枝に歸らず。思ひ諦め、重勝どの、とく〳〵この場を、退散召されい。

伴左　うぬ。

ト寄らうとする。山三とろしく留める。

岩橋　水際清く、きつとして、切れ口すぐにこの櫻。

伴左　ヤ。

岩橋　それに引替へ、お前の枝は、斜に切れしは心のひがみ。どうしてわたしが活けられませう。

　　ト伴左衛門の櫻を捨てる。

伴左　見るに目の毒、觸るに煩惱。嫌がられる程一しほ執心。

山三　イヽヤ、今日より手活けの花と

伴左　詠める心か。

山岩　今宵はしつぽり。

　　ト兩人思ひ入れ。伴左衛門見て

伴左　ハテ、羨ましい。

　　ト思ひ入れ。薄き雷になる。三人空を見て

岩橋　アレ、春雨が

　　ト有り合ふ傘を取つて、眞中に開く。

兩人　我れらも爰に。

　　ト兩方より傘を取り、差出すと、名古屋の紋になる。

岩橋　この春雨は結ぶの縁。わたしがさした傘と、合はしてちやうど三本傘。

件左　そんなら、どうでも。

ト正面の黒幕落すと、稻妻しかけ、雷落ちる。岩橋、「アレ」と山三に取りつく。これにて傘の兩人隱る。伴左衞門見て無念のこなし。傘振上げ、思ひ入れあつて、傘を投げる。木の頭。双方よろしく、キザミ、ひやうし

幕

時の鐘、雨車のツナギ、すぐに引返す。

本舞臺、三間の間、九尺の亭座鋪。前側へ障子立て切り、上下は柴垣、石燈籠、いつもの所に柴折戸。すべて助太夫住家の體。雨車、時の鐘、雷の音にて幕明く。

ト下座より中間一人、赤合羽、笠を着て、箱提灯、蛇の目の傘を持つて、出て來り

中間　何だか剛氣に降つて來たわえ。この雷の鳴るのに、御新造樣はどこへござつた。お迎ひに行かずばなるまい。

ト捨ぜりふにて向うへ入る。合ひ方になり。向うより八内、木綿やつし、赤合羽、中間の形、箱提灯にて、出て來り

八内　昨日に變る旦那の身の上。それにつけてもおいらまで、もッそう飯の喰上がり。まだも頼みは助太

夫さま、お上へ願ひ、旦那のお詫び。さうだ〳〵。

ト門口へ來る。この時、障子の內にて、

權八　すりや、どうあつても。

助太　小癪な事を。

權八　ハテ、是非に及ばぬ。

ト物音して、障子へ血煙りかゝる。八內驚き

八內　何やら險しきあの物音。

ト思ひ入れ。物凄き合ひ方になり、障子の中より白井權八、振り袖の着流し、白刃を提げて出る。八內提灯を袖に隱し、窺ひ寄つて目先きへ突出す。權八提灯を打落す。兩人きつと見得。鳴り物變り、立廻りよろしくあつて、兩人きつと見得。時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面の黑塀、見越しの松、裏手のかゝり。右鳴り物にてこの道具留まる。

ト向うより、バタ〳〵になり、願哲、才藏、以前の形にて、立廻りながら、出で來り

願哲　こりやァ野郎め。どうするのだ。

才藏　どうといつたら、最前の、系圖の箱を此方へ渡せ。
願哲　系圖とやら、黑鋼とやら、そんな物は知らねえわえ。
才藏　知らぬといつて、その儘に置かうか。
願哲　何を小癪な。

ト雷の音になり、兩人摑み合ひながら、下座へ入る。向うより彥左衞門、赤合羽、中間笠にて、箱提灯、六尺棒を持ち、安下駄を穿き、出で來り

彥左　火の廻り、火の廻り。……桑原々々く。氣味の惡い晚だわえ。雨が降つても、雷でもこの夜廻り、孫子の代まで、此やうな、下司奉公はさせる物ではねえわえ。……火の廻りく。

ト舞臺へくる。揚げ幕より、以前の中間、消えたる提灯を持ち、出で來り

中間　オヽ、火の廻りの衆。待つて下さいく。
彥左　なんだく。
中間　提灯の火を消した。火を貸さつし。
彥左　サア、つけさつしやい。

ト中間火を借りながら

中間　なんと恐ろしい雷ではねえか。

彦左　それサ。初瀬寺の方が剛氣に光る。

ト此うち、雷烈しく鳴る。

中間　そりやこそ鳴るワ。桑原々々。

ト件の傘を、花道よき所へ捨てゝ、走り入る。

彦左　アヽ、桑原々々。

ト氣味惡きこなし。この時、バツタリ音して、誂への鳴り物になり、黒塀を切り破り、權八以前の形にて、白刃を持つて出る。彦左衞門、おづ〳〵棒にて打つてかゝる。權八きつと見て、刀の血を拭けといふこなし。彦左衞門、ぶる〳〵しながら、手拭にて拭く。權八、彦左衞門が穿いて居る下駄を寄越せといふ思ひ入れ。彦左衞門下駄を脱いで渡す。權八、彦左衞門に提灯を持つて、先きへ行けといふ仕方する。彦左衞門提灯持ち、先きに立つて行く。花道へかゝる。

權八　正しく所持と思ひの外、ハテナア。

ト思ひ入れ。これにて又雨車になる。權八、中間が置いて行きし傘を見つけ、彦左衞門に取れといふこなし。彦左衞門おづ〳〵取つて渡す。權八取つて開く。木の頭。傘をかたげ、空を見上げる。キザミ

よろしく、拍子

幕の外、誂への鳴り物になり、彦左衛門に提灯を持たせ、入る。あとシヤギリ。

幕

二幕目　大師河原の場

役名——雪駄直し、彌市。三浦屋小紫。三浦屋女房、お高。新造、花山。幇間、左吉。判人、善六、錦絵屋、喜助。飴屋、清八。見世物師、又平。又平娘、お國。家主、杢郎兵衛。鷲の長吉長兵衛一子、長松。本庄助八。飛脚、とゞ平。

本舞臺、一面の淺黄幕。正面、九尺の障子屋體、軒口に市村座講中の團子提灯を吊し、御料理と書きし行燈懸けあり。上の方、葭簀の見世物小屋、蛇遣ひの看板。木戸口に浮世又平、白髪親仁にて、云ひ立てゝ居る。下座の方に、雪駄直し、古手拭にて顔を包み、菅笠をかむり、雪駄を直し居る。この側に、仕出しの若い者、雪駄を直させて居る體。屋體の前に、清八、飴賣りの荷を置き、口上云つて居る。開帳の建て札。すべて大師河原、平間寺開帳の模様よろしく、双盤の音、辻打にて幕明く。

卜仕出し大勢行違ひ、飴を賣る事あつて、見世物小屋へ入る。

清八　十で六文〳〵。

又平　ア丶、見しやれな〳〵。これは丹波の國大江山の、狩人の一人娘。嫁入り盛りを數多の蛇に見込まれて、あの如く、誠に親の因果が子に報ふと、生れもつかぬ不具者。見るも法樂、見らるゝも後生。僅か八文でお話になりまするワ。錢は、戻りぢや〳〵。

清八　これはお江戸に名代の三本飴。香ばしうて齒に附かず。お子樣方の腹藥。十で六文。廉いの根元ぢや〳〵。

ト此うち、仕出し、見世物小屋より出で來り

△　何と好い娘だが、蛇遣ひには惜しい事ぢやなア。

□　あれで又、顏に痣が無けりやア、品川の大見世の女郎にもあるまい。

○　ほんに、あゝして置くは惜しい物だ。

ト捨ぜりふにて入る。

清八　カウ、又さん。今朝から立て込んで、まだほそを附けなんだ。この間にちよつとかまして來るから、氣を附けてくんなせえ。

又平　オイ、承知だ。

淸八　ドリヤ、ちよつと搔込んで來ようか。

ト下座へ入る。

若者　オイ、錢はそこへ置くよ。

又平　ドリヤ、一服のまうか。

ト矢張り辻打にて、雪駄直しに錢を遣り、下座へ入る。雪駄直し、そこら片づけ、その儘に置き、下座へ入る。向うより本庄助八、小揚げの形にて、肴籠を荷ひ、本舞臺へ來て、正面屋體へ向ひ

助八　オイ、料理番さん。芝河岸から來やしたよ。

勘吉　オイ〳〵。

ト勘吉、料理人、前垂れ掛けにて出る。

こりやア小揚げの衆、御苦勞。

助八　アイ、送り狀。

ト勘吉へ送り狀渡す。

勘吉　よし〳〵。受取りました。茶でも飲んで行きなせえ。

助八　ハイ、有り難うございます。

ト勘吉肴籠を持ち、奥へ入る。助八、畚を棒に巻き居る。この時、又平、助八を見て

又平　ヤア、お前は本庄の若旦那、助八さまぢやァございませんか。

トこれにて、助八愕り

助八　ヤ。さう云ふは不破伴左衛門の下郎、又平ではないか。

又平　さやうでございます。

助八　そしてお前は、いま何をして居るのだ。

又平　お聞きなされませ。お前様も御存じの通り、伴左衛門さまのお頼みで、お前と二人して、名古屋山左衛門、白井兵左衛門、この二人をおッ殺し、山左衛門が差して居た蔭の太刀とやらを、伴左衛門さまに渡したゆゑ、定めし褒美と思ひの外、伴左衛門さまは浪人の身の上、虻も取らず、蜂も取らず、なんと好い見世物師とは成りました。

助八　人に骨を折らせ、寶は手前へ引上げる、伴左衛門の悪顔。それゆゑ、神妙剣はその場より引ッ渫つて、金と引替へでなけりやァ、渡さぬつもりで、コレ爰に。

ト出し、見せる。白蛇出る。

又平　ヤア、白蛇がお前の體へ。

助八　この神妙剣を守護なす白蛇。この一巻を出すたびに、誠にこれには恐れてるて。

ト懷中する。ドロ〳〵止む。白蛇消ゆる。

又平　ハテ、奇妙な事もあるものだ。

ト辻打になり、向うよりとゞ平、飛脚の形にて、狀箱を首に掛け、出て來り、障子屋體に向ひ

とゞ　アヽ、息が切れた。コリヤ、茶を一つくれ〳〵。

ト挨拶せぬゆゑ

ヤイ、こゝな內には、人は居らぬか。茶をくれ〳〵。

又平　アヽ、モシ、そこは水茶屋ではござりませぬ。料理屋でござります。

とゞ　アヽ、そんなら料理屋では、茶ばかりは賣らぬか。ハテ、不自由な。

又平　さやうサ。

とゞ　アヽ、コレ、息が切れたゆゑ、何ぞ……幸ひ〳〵、こゝに飴がっ　これで咽喉を濕ほして。コリヤ、飴屋々々。

又平　ハイ、飴屋は今、飯を食ひに參りましたが、いくら上げませう。

とゞ　茶の代りに、二文くれろ。

又平　たつた二文か。ハイ。

ト取つて遣る。とゞ平食つて居る。

助八　モシ、お前は急ぎのお飛脚さうなが、どれからどれへござります。

とゞ　身共は因州佐々木家の飛脚だが、因州の侍ひ白井權八といふ者、同家中本庄助太夫といふ者を討つて立退きしゆゑ、江戸屋敷へ知らせの早飛脚たて。

助八　エヽ、そんならおれが親仁の助太夫どのが、甥の權八に殺されたか。ムウ。

ト思ひ入れ。

とゞ　アヽ、さやうならば、お前樣が、本庄氏の御子息でござりましたか。さぞ、御無念にござりませう。幸ひ敵討には身をやつすものでござれば、その形にて直ぐに御出立なされませ。

ト此うち、又平飴屋の賣溜めを盗む事。

助八　なにサ、親は親だが勘當の、この助八。今は赤の他人も同然。

又平　さやうサ。古風な事をしようより、好きな事をして暮らすが當世だての。

助八　それはさうと、急ぎのお飛脚が、なぜ六郷を渡らずに、この廻り道はさつしやれた。

とゞ　さればサ。權八が事を知らすかた〴〵、お邸への爲替金三百兩、あの物騒な鈴ヶ森を、無難に通

りたいと、厄除け大師様へお願ひ申さうと存じて。

助八　ムウ、そんならお前、金を持つてお出でなされますかえ。

とゞ　オヽサ、しかも小判で三百兩、コレ爰に。

ト出して見せる。又平思ひ入れあつて

又平　随分大事になされませ。

とゞ　ドリヤ、お詣りして來ようか。

ト下座へ入る。

又平　ハテ、羨ましい大枚の金。

助八　ヤ。

又平　イヤサ、大師樣へこの間に、お詣り申さうか。

ト とゞ平の跡を追ひ入る。助八殘り、こなし。

助八　ハテ、とんだ話を聞くものだ。あの從弟の權八が、おれが親仁を殺したとは。……併し、この孝行な助八を勘當する程な親仁め、人手にかゝるも尤もだ。あんな親仁の敵討をしようより、この神妙劍を賣り拂ひ、この身の榮華。

ト懐中より一卷を出すと、ドロ〳〵にて白蛇出る。

エヽ、鬱陶しい。また出やアがつた。これぢやァ滅多に持つては居られねえ。どこぞ暫く隠し所が……オヽ、あるワ〳〵。幸ひこの雪駄直しの籠へ。

ト件の籠の中へ入れる。白蛇消ゆる。ドロ〳〵止む。

コリヤ、人が見たらば蛙ぢやない、蛇になれよ。

ト辻打になり、下座へ入る。直ぐに向うより三浦屋女房お高、引込み新造花山、餘所行きの形、幇間左吉附添ひ出る。あとより願哲、破れ衣の乞食坊主、建立の幟を持ち出る。

願哲　南無大師遍照金剛々々々々々々々々。厄除け大師様へ納め奉る金燈籠の建立。お心持次第、お施主にお附きなされませう。

左吉　エヽ、附くな〳〵。

願哲　ハイ〳〵。自力に及びませぬ。御他力を以ちまして。

左吉　エヽ、附くなといふに。

トこれにて、皆々本舞臺へ來て

花山　モシ、左吉さん。あの花魁は、六郷の渡し場から、後ばつかり見て居なさんすが、ありやどうな

さんしたのであらうな。

左吉 大方、乘合ひのお若衆、好い男であつたが

たか 大方、それに。

左吉 それにしても、粹を賣る商賣でゐながら、イヤモ、花魁といふものは、初心なもの、あんまり歩きなさるが埒が明かぬゆゑ、駕籠に乘せて先きへ寄越したが、どの茶屋へ下ろしたやら。

トこの時駕籠舁き二人、下座より出て

駕甲 お女中樣は、爰の内へ入りました。

駕乙 只今御酒下されまして、有り難うござります。

花山 モシ。

ト金の包みをやる。

兩人 へイ〳〵、有り難うござります。又お歸りにお賴み申します。

ト入る。

願哲 ハイ〳〵、結構なお詣り樣。どうぞお志を。

たか コレ、左吉さん、遣らしやんせ。

左吉　ハイ。……ソレ、遣るワ。
　　ト錢を出しやる。
願哲　今日のお志、南無大師遍照金剛々々〱々々〱々々〱々々。……ドリヤ、一杯引ッかけて來ようか。
　　ト捨ぜりふにて上へ入る。
たか　それはさうと、長松や長吉どんは、どうさんしたな。
左吉　あの子達は、何か後で買つて居やした。
　　ト流行り唄になり、茶屋廻り鷲の長吉、鳶の者、餘所行きの拵へにて、繪草紙屋喜助の首筋引立てゝ出る。あとより長松、長兵衛の忰の拵へ、渡邊と七綾の錦繪を持ち出て來る。判人善六、附いて出る。
喜助　御料簡なされませ〱。
長吉　イヽヤ、ならねえ〱。
長松　引摺つて行け〱。
善六　コレサ、大概に料簡してやらつし。
長吉　イヽエサ、幡隨長兵衛が子分、鷲の長吉だ。うぬらにちよつくり返されちやア、親分へ云ひ譯がねえ。うしやアがれ〱。

善六　コレサ、不承してやるがいゝ。

喜助　どうぞ御料簡なされませ。

長松　イヽヤ、ならねえ。うしやァがれ〳〵。

ト皆々本舞臺へ來る。

たか　これはしたり、長吉どの。どうしたもんでござんす。

花山　もう堪忍してやらんせ。

長吉　なにサ、聞きなせえ。この商人めが、一枚繪草紙を賣りやァがるゆゑ、新繪はねえかといつたら、ありますと云やァがつて、コレ、見なせえ。

ト長松繪をひろげ

長松　この通り、去年の顔見世の、七綾と渡邊の繪を出しやァがる。こりや古いと云つたら、子供には何でも同じ事だと云やァがつたから

長吉　そこで、この子が腹を立てゝ、なんぼ子供でも、新らしいのと古いのは知つて居ると云つたら、この野郎が吐しやァがるには、餓鬼の癖に洒落れた事を、そんなむづかしい繪はねえなどゝ、ちよつくり返されては、折角連れて來たこの長吉が云ひ譯がねえから、爰まで引摺つて來たのサ。

善六　コレサ、さうではあらうが、それにやァ詞の間違ひといふものがあるものだわな。

長松　おいらは嫌だ〱。うぬが腦天ぶち割つて

ト雪駄にて打つてかゝる。善六止める。此うち、下座より杢郎兵衞、麻上下にて、開帳場の世話人の拵へにて出て來る。

長吉　なにサ、善六さん、打ッちやつて置きなせえ。

善六　それだといつて

長松　うぬ、野郎め。

ト善六を振り拂ひ、又行く。

杢郎　コレサ、長松坊。どうしたのだ〱。

ト留める。

長松　イヤ、大屋の叔父、免しなせえ〱。

杢郎　イヽヤサ、待ちなせえ〱。

長吉　コレサ、大屋さん。あの子の十分にさせなせえ。江戸の生えぬき幡隨長兵衞さんの夜食の固まり。川崎近在の子を取扱ふやうにしやァがつて、あんまり目先の見えねえ野郎だ。

杢郎　コレサ、長吉、こんたまでが其やうに力んでは、事が納まらねえ。おれが惡いやうにやァしねえよ。
善六　それ〳〵、大屋さんに任せるがいゝ。
花山　ほんにさうでござんす、此やうな事が、長兵衞さんの耳へ入つたら、ナア、おかみさん。
たか　大概にして料簡してやりなさいな。
長吉　成る程、お前がたが、いろ〳〵に云ひなさるを、强情にいふは大人氣ねえ。長松さん、不承しなせえ。
長松　そんなら、もう堪忍してやらうか。引けにはなるまい。ナア、兄イ。
長吉　なにサ、そりやァ、皆樣が先刻から
長松　野郎め。堪忍してやる代り、おいらの方へ來て見やァがれ。病犬をけしかけてやるワ。
左吉　今、小さくつても解りのいゝ、どうでも達師の息子株。ほんに實もある花川戸、江戸市村と隱れなき、イヨ、音羽屋の若旦那ァ。
長吉　おきやァがれ。何を云ふのだ。
花山　モシ、繪草紙屋さん。きつう商ひの邪魔でござんしたであらう。早うござんせ。
甚助　ハイ、有り難うござります。どなたも大きにお世話でござりました。シタガ、とんだ氣の强い餓

鬼どもだ。

長松　どうしたと。

熹助　イヤサ、とんだ目にあひました。

　　　ト下座へツイと入る。

長吉　とんだ好い慰みをした。

善六　長公、お前がたは慰みでよからうが、素的においらに口をきかせやァがるぜ。

左吉　長松さん、そこに繪が落ちて居ますよ。

長松　ナニ、そんな繪は内にいくらもあるから、いらねえ。

　　　トよき所へ置く。

李郎　それはさうと、三浦屋のおかみさん、よう御參詣なされました。

たか　アイ、有り難い御開帳ゆゑ、やう〳〵の思ひで、詣らうと話したら、内の抱への小紫が、わたしも願掛けがあると頼むゆゑ、外の人に附けて詣らさうより

花山　おかみさんがお附きなすつての御參詣。花魁は駕籠に乘せて、先へ來てゞござんす。

たか　して、李郎兵衞さんには

李郎　大師様の講頭で、お開帳中取持ちに參つて居ります。御參詣なら私しが、御内陣へお連れ申しませう。

たか　ハイ、よろしうお賴み申します。

李郎　長松坊も、おかみさんと一緒にか。

長松　イヽエ、父さんの迎ひに來やした。

李郎　ムッ。して、長兵衞どんは、どこへ行かれた。

長吉　親方は四五日あとに、江の島の太々に行きやしたが、大方、今日らは歸りであらうと、外の子分の手合ひと一緒に行つたところ、三浦屋のおかみさんと、花魁がござつたゆゑ、川崎から一緒に、お開帳詣りサ。

李郎　それは奇特な事だ。

長松　兄ィ、もうお開帳へ行かうぢやァねえか。

長吉　さうしやせう。

ト立上がる。

花山　モシ、長松さん、とてもの事ぢや、花魁と一緒に行かしやんせいな。

長松　そんなら、姐さんと一緒に行かう。
左吉　時に、腹も八つ下がり。ちよつぴり爰で、一酒八つ山としては、どうでござります。
善六　成る程、こいつは奇妙。この善六がグッと承知だね。
左吉　お前に承知されちやァ、大變だ。何にしろ、ちつとも早く。
たか　成る程、左吉どのの云ふ通り、殊に小紫も、きつう待遠でござんせう。杢郎兵衞さんも御一緒に。
杢郎　有り難うござります。モシ、善六さん。お前には少し話があるから、ちよつと殘つてくんなせえ。おかみさん、後から參じませう。
たか　そんなら、お早う。
花山　サア、長松さん。長吉さん。
長吉　おかみさん、お先へ。
左吉　お客だよ。
たか　大きな聲だよ。

ト流行り唄になり、皆々正面の障子屋體へ入る。杢郎兵衞、善六殘る。下座バタ〳〵になり

とゞうしやァがれ〳〵。

大勢　泥坊々々。

　ト辻打になり、とゞ平、又平を捕へ、あとより番人一人、平の字の附いたる法被を着て、六尺棒を持ち、あとより彦六、麻上下を着たる世話人、清八、喜助、以前の商人にて、附き出る。屋體より勘吉も出る。

一同　どうしたのだ〱。

とゞ　イヤサ、聞かつしやい。此奴が、おれが持つて居る爲替金の三百兩、取逃げ致さうとしたゆゑ、引ッ捕へて、金はたうとう取返したが、この親仁を、川崎の、代官所へ引摺つて行くのぢや。

善六　ハテ、とんだ太い奴もあるものだ。併し、金に別條が無くつてめでたい。

清八　一體この親仁は、手癖が惡くつて、常から賽錢泥坊をしたり、今までは大目に見て居たが、今日は好い次手だ。ぐる〱卷きにして

勘吉　川崎の代官所へ差出すがいゝ。

一同　さうするがいゝ〱。

　ト多勢又平に立ちかゝる。この時、見世物小屋よりお國、木綿やつし、振り袖衣裳、顏に痣のある蛇遣ひの娘にて、走り出て來り

くに　マア〳〵、待つて下さんせ。

ト皆々が前へ出て、押し退け、又平を圍ふ。

彦六　コレサ〳〵、女の知つた事ぢやアねえ。

一同　退いた〳〵。

くに　イエ〳〵、退きませぬ〳〵、モシ、わたしが義理ある父さんでござります。あなた方に打擲かれるを娘の身として、どう見て居られませう。惡い事は、私しが、幾重にもあやまりませう。御料簡なされて下さりませ。お慈悲でござります〳〵。

とゞ　コレサ、お娘。慈悲も料簡も術によつたもんだわな。この親仁は、おれが持つて居る爲替金の三百兩を盜まうとしたのだ。

彦六　そればかりぢやアねえ。氣を附けて見て居れば、開帳場へ來て、足の裏へ飯を附けて、賽錢を盜みます。

勘吉　そして、わし等の隣に居るから、ツイ忙がしい時は、店を番してもらへば、茶漬け茶碗やら、火箸の失せたも、大方、この親仁だらう。

清八　ヤ、それで思ひ出した。

ト飴の荷を改め見て

おいらが賣溜めも無くなつたから、われが盗んだな／＼。

喜助　この間も川崎の茶屋で休んで居たれば、おのが小附けの風呂敷包みを引ッ浚つたのもこの親仁だ。

彦六　それ／＼。わしも開帳場で、この親仁に、雪駄を盗まれました。

善六　年に不足も無くつて、丈の知れねえ太い親仁だ、おらが仲間の源七が所へ、女を勾引して來たも、大方、この親仁だらう。こんな奴は、打ッちやつて置くと、大勢の難儀になります。

一同　ちつとも早く、代官所へ。

ト皆々かゝるを、お國、又平に逃げろと敎へる。これにて又平、下座へ逃げて入る。

一同　うぬ、泥坊を逃がしはしないぞ。

くに　アヽモシ、お待ちなされて下さりませ。

ト一同を留める。

一同　そんならうぬも、同類だな。

くに　サア、皆さんのお腹立ち、御尤もでござりますゆゑ、何とお詫び致しやうもござりませぬ。この盡父さんを、お代官所へ遣りまして、ひよんな別れになりましたら、娘のわたしが、ほんに、身も

世もあられませうか。モシ、その代り、あなた方のお盗られなされた品を、私しが辨まへませう程に、どうぞこの場は、お免しなされて下さりませ。

清八　なんだ。あの蛇遣ひの女が、皆の金を出さうといふのか。

一同　こいつは大笑ひだ。ハヽヽヽヽ。

杢郎　コレサ〳〵、そんなに笑ふ事は無いわな。見たところが孝行らしいこの娘。萬更當の無い事云ひもせまい。皆も默つて居るから……コレ、娘、皆の金を出すとあるが、金高を集めたら、餘程の事。その心當りがあるかよ。

くに　ハイ、ございます。暫くお待ち下さりませ。

ト合ひ方になり、善六の側へ寄り

只今も承りますれば、吉原の傾城屋へ、お世話なさるゝお方さうにござりまするが、折入つてあなたへ、お願ひがござります。

善六　成る程、わしやァ吉原の判人、善六といふ者だが、おれへ願ひとは。

くに　初めてお目にかゝりましたあなた樣へ、お願ひと申しまするその譯は、どうぞ奉公人をお抱へなされて下さりませ。

善六　そりやハヤ、江戸近在を股に掛け、と斯う云へば、どうやら一文字屋の臺詞のやうだが、奉公人の取引きは、商賣づくの事だから、世話もしませうが、何しろ、その玉を見ないうちは、値も附けられぬっして、その奉公人は。

くに　ハイ、私しでござります。

一同　イヤア。

ト一同惘り。

善六　呆れて物が云はれねえ。累以來の話だ。ハヽア、まだ羽生村の淨瑠璃を聽かねえな。この女は、路考おしやアそんな音が出る。

一同　ハヽヽヽヽ。

くに　そりや生れついたる不具ゆゑ。ハア。

ト泣き落す。

善六　この女もあの親仁の娘といふからは、これを機にしてこの出入りを、ちやアふうにする氣だな。

彦六　親子相摺りだ。いつその見せしめ

一同　ぶんのめせ〳〵。

ト皆々有り合ふ物にて打ちにかゝる。善六、莨盆にて打つてかゝる。杢郎兵衛支へて

杢郎　コレサ〳〵、孝行な娘を、マア〳〵

一同　イヤ、構ひなさんな〳〵。

ト杢郎兵衛支へる。皆々お國をくらはす。善六、此はずみに莨盆外れて、障子の屋體へ投げ込む。この時、長松、長吉出で來り、お國を圍ふ。

一同　子供は危ない。どけ〳〵。

長吉　イヽヤ、どきやすめえ。大道中の眞中で、ぶッつはッつの其中へ、飛込むからにやァ向う見ず。おれが斯うしたこの女中、指でもさして見やァがれ。それこそ忽ち一摑み、鷲の長吉といふ前髪だ。

長松　ちつと古いが、山椒は小粒だネ。

長吉　誰れだと思ふえ。風ひきだ。

勘吉　イヤハヤ、素敵な管を卷き出したな。コレ、兄ィ達、この女をかばひ立てすると、相摺りになるぞよ。

長吉　イヤ、その相摺りより、うぬらには、此方から云ひ分があるワ。

一同　アノ、こちとらに云ひ分とは。

ト障子の中より、小紫

小紫　その云ひ分は、わたしでござんす。

ト合ひ方になり、小紫、傾城、他所行きの形にて、莨盆を持ちて、顔へ疵の附きし思ひ入れにて出る。あとよりお高、花山、左吉附添ひ出る。

善六　誰れかと思へば、三浦屋のおかみさんに、花魁。

一同　こちとらに云ひ分とは。

小紫　この座舗は借り切りの、廓でいへば、わたしが部屋。たとへ二階廻しや遣手衆でも、自由にさせぬ小紫。それに何でお前がた、女子の嗜む化粧場へ、この莨盆を打込んで、なぜ此やうに疵を附けさんした。アイタヽヽ。

杢郎　その莨盆を振り廻したは、判人の善六どのだ。

善六　コレサ、とんだ事を云ふものだ。どうしておれが知るものか。

一同　おいらぢやァ無いぞ〳〵。

ト立騒ぐ。

長吉　やかましい、耄碌ども。黙りやァがれ。

小紫　モシ、おかみさん。ひよんな事の災難で、生れもつかぬ疵を受け、とてもこの顏では仲の町は張られませぬ。お内に居ても、益ないこの身。どうぞお情に、わたしが年季を下さんせ。

たか　成る程、其方の云ふ通り、顏を賣る商賣で、仲之町へ出られねば、朋輩の手前、面目なからう。いかにも暇は遣りもせうが、まづ判人の善六どのに渡つてから。……イヤナニ、善六どの、ちよつと爰へ來て下さんせ。

善六　アノ、わしにかえ。

ト前へ出る。

たか　外でもござんせぬが、今小紫が云うた事、聞かしやんしたでござんせう。なんと尤もではござんせぬか。サ、こゝが相談でござんす。もと、あの奉公人は、お前の判で寄越さんしたあの小紫。お前が手で疵を附け、おとの難儀を引出して置かしやんしたので、わたしが損をするも、あんまり阿房らしいではござんせぬか。殊に、あの奉公人は、廓で一二を爭ふ上林の葛城か、三浦屋の小紫かと、その大事な太夫が疵を附けられて、人に面が合はされぬといふを、なんぼ親方の威光でも、それでも勤めせいとは云ひにくい。ナア、善六どの、こりやどうしたらよからうぞいなア。

トこの時、善六術なき思ひ入れ。

杢郎　イカサマ、こりやおかみさんの云ふのが尤もだ。なんぼ抱へた奉公人でも、取扱ひがし憎いのサ。こりや花魁の面晴れに、お代官へ突き出して、善六どのを入牢させるがようござります。

たか　成る程、こりやいゝ思ひ附き。そんなら出羽長、大儀ながら。

左吉　ハイ〳〵、幸ひ大屋樣も、爰になら、直ぐに御訴訟申しませう。

杢郎　左吉どの、サア、ござい。

ト立上がる。

善六　アヽ、滅相な。この事を屆けられて堪るものか。

左吉　そんなら花魁の納得するやう、思案があるのか。

善六　ありますとも〳〵。マア、待つて下さい〳〵。

ト喜助清八を連れて行き

コレサ、お前がたも賴もしくねえ手合ひだぜ。人の困るを見て、面白さうに笑つて居る事はねえぢやアねえか。元この起りは、こんた衆が、親仁を窘めたから出來た事だ。

喜助　それだといつて、なんの其方の込めやう知るものか。

善六　知らぬとは云はさねえ。斯うした事は皆な一つだ。

喜助　この人は判人をする程もねえ。解らぬ人だぜ。
勘吉　それよりは、女を代官所へ。
　　ト皆々お園を引立てる。長吉、李郎兵衛支へる。この時、小紫、花山に囁き、花山の懐より小判を出し、皆々の顔へ打ちつける。
一同　アイタヽヽヽ。
　　トよく見て
　　ヤア、こりや小判。
花山　花魁から
小紫　この一埒の金、取つて置きなんし。
一同　エヽ、忝い。
喜助　そんならこれから勘定立つて、その高だけに分けて取らう。
小紫　それでお前方、その衆達に、云ひ分はござんすまい。
清八　これせえ取れば、ナニ云ひ分が
長吉　其方に無くとも、此方にあるワ。

一同　そりや又なぜ。

長吉　うぬらが騷いだばつかりに、花魁の顏へ疵附けし上からは

長松　この判人から

ト長松、有合ふ飴屋の天秤棒にて打つてかゝる。長吉、清六の六尺棒にて皆々を叩き散らす。これにて一同、下座へ入る。長松、長吉追つて入る。小紫、お高、花山、左吉、杢郎兵衞、お國殘る。

くに　承りますれば、吉原のお傾城樣とやら。親子の者が只今の難儀お救ひ下され、私しどもの爲には命の親とも、譬へがたない御恩の程、何とお禮を申さうやら。

たか　なんの、その禮に及ぶ事かいな。女子は相互ひ。ほんにお前は、孝行なお方ぢやなア。どこも怪我はなかつたかえ。

くに　イエ／＼、打叩かれても僅かな事。只お氣の毒なは、小紫さま。わたしが事から事起り、思はずお顏へ。痛みは致しませぬか。

小紫　イエ／＼、この疵は嘘でござんす。お前の難儀と見たゆゑに、おかみさんと云ひ合せ、喧嘩を此方へ買ひ取つて、お恥かしうこざんす。

くに　ほんに、どこからどこまで、お氣のついたお傾城樣。

たか　わたしが奉公人ながら、氏も素性もきつとした、中々勤めする身の上ではなけれども、これも浮世の七轉び。

小紫　元は佐々木の御家中にて、本庄助太夫が娘の八重梅、云ふに云はれぬ譯あつて、今では憂き川竹の小紫。今のお前の難儀をば、この身につまされ、お氣の毒に存じまする。

くに　アヽ、お羨ましいあなたの御身。同じ女子と生れながら、氏あるお武家のお娘御、たとへ落ぶれなされても、松の位の太夫職。氏無いこの身は蛇遣ひ。これ程までも違ふものかいなア。

左吉　コレサ、お娘、其やうに、くよ〳〵思はぬものだ。

たか　聞けば、あの親御とは、生さぬ仲と聞きましたが、その繼親を大切に、孝行盡すその志しが、何よりの氏素性。

杢郎　その孝行がお上へ聞えたら、やがて御褒美が出るだらう。これ程の娘を見捨てゝは、町役人の法が濟まぬ。こんな因果者にして置かうより、これから直ぐに、おれが長家へ來るがいゝ。及ばずながら、世話をして、どこぞへ奉公にでも出してやらう。

くに　それは何よりお有り難うござります。まことに親一人、子一人、便りの無い者でござります。父樣に話したら、喜ぶでござりませう。

杢郎　イヤ〳〵、親仁どんは構はねて。こなたはおれが世話をしませう。

小紫　アヽコレ、迚もの事に、親仁さんも

杢郎　折角花魁のお頼み、迷惑ながら、アヽまゝよ。

ト思ひ入れ。この時、下座より

長吉　太い奴だ。江戸ッ子の生え抜きは斯うしたものだワ。

ト辻打になり、長吉、長松、以前の形にて出て來る。

たか　お前がたも大概にしなさんせ。若し怪我でもあつたら、長兵衛さんへ、云ひ譯がござんせぬわいなア。

長吉　なアに、彼奴らにけじめを食ふやうな事では、仲の町を金棒引いては歩かれませぬ。殊に親分の名を聞くと、ぴり〳〵しやすよ。

ト此うち、お國、最前の錦繪に見惚れて居る思ひ入れ。小紫、物思ひのこなし。

くに　繪空ごとはいひながら、此やうな殿御があつたら

小紫　それに引きかへ、現在に、見染めた先刻のお若衆さん

くに　どうぞお側に宮仕へを

小紫　この身の年を入れ増しても
くに　せめて女子の一心に
小紫　間夫狂ひといはれうがまゝ。
くに　一目なりとも
小紫　どうぞ、ま一度
二人　逢ひたいわいなア。

ト小紫は向うへ、お國は繪を抱きしめ、心々の思ひ入れ。左吉はお國、花山は小紫の側へ來り

花山　花魁。
左吉　姐え。
二人　モシ。

ト背中を叩く。恟りして

お國　アイタヽヽ。

ト心づく思ひ入れ。

たか　太夫　其方は先刻の渡し場の

小紫　イエ、なんのマア、さうではなけれど、あの娘さんの心根を思ひやつて

ト脇へ散らす。

くに　モシ、此やうな男がござりますかえ。

長吉　無くつてサ。そりやァ顔見世に葺屋町でした

花山　役者の錦繪でござんす。

くに　アノ、これがえ、

ト見惚れ居る。

左吉　こりやァお娘は、おつりき揉み療治だわえ。

長松　娘さん、その繪はおれが捨てたのだ。欲しくば持つて行きなせえ。

くに　それはお有り難うござります。お貰ひ申しまする。

ト懐中する。

杢郎　それはさうと、この杢郎兵衛も、折角世話をしかけた娘、今から直ぐに同道しませう。ござれ。

くに　ハイ〳〵、有り難うござります。何から何まで、……嬉し涙が溢れますわいな。

ト泣き落す。

杢郎　これはどうしたもの。其やうな事を云うて、この家主もどうか貰ひ涙が……そんな事は儘にして、
　サア、おれと一緒に。
　　　ト お國を介抱し、花道へ行き
　ほんに思へば、孝行な娘。
たか　隨分ともに、親御を大事に
小紫　道を氣を附けて行かしやんせえ。
くに　ハイ。……おさらばでござりまする。
　　　ト 唄になり、杢郎兵衞附いて向うへ入る。
小紫　ほんに、可憐らしい、娘御でござんしたなア。
たか　併し、ひよんな事で
花山　肝腎の大師樣へ遲うなりました。
たか　早う參詣しませうわいなア。
　　　ト 皆々行きにかゝる。小紫下駄の鼻緒を切る。
小紫　アモシ、わたしの下駄が

ト長吉見て

長吉　エヽ、危ないの。幸ひ爰に雪駄直し。……エヽ、どこへ行きやアがつた。ちよつと探して來ませう。その內、もう一つ上つてお出でなせえ。

たか　成る程、さうしませう。長吉どの、賴みます。

長吉　ドリヤ、探して來ようか。

ト皆々奧へ入る。長吉下座へ入る。直ぐにバタ〳〵になり、助八下座より駈け出る。願哲追ひ出る。

願哲　どつこい。逃がしはしない。コレサ、助公、惡い洒落れだ。おれも初瀨寺の願哲といはれては、隨分惡企みの一つもしたものだ。こんた衆のお先きに遣はれるやうな、萬更人柄のいゝ坊主でもねえワ。鎌倉を追ひ拂はれ、居所に困り、どうか斯うかと、思案の矢先きへ、こんたが來て、斯ういふ筋だと話すから、あの薄鈍ツこい飛脚をば、冗談話しに騙しかけ、づぶ六酒を食はして、その間に盜んだ三百兩を、こんたがそれを丸呑みとは、あんまり胷張り、慾張り者だ。骨を折つたおれが方から、安目を打つた。山分けにしよう。サア、早く出さつし。

助八　成る程、てめえの云ふのは皆尤もだが、おれも三百兩なけりやアならねえ事があるから、斯うしよう。まづ三百兩を山分けにして、百五十兩宛奪つた積りにして、ナ、ムウと云ひねえ。その百

願哲　五十兩は、當分おれが借りたのだ。

助八　おかつしやい。人を好い加減に冷かすがいゝわな。こんたがさういふ料簡なら、おれも亦皆な取らにやアならねえワ。

願紫　ハテ、そんなに云はずと貸さつし。

助八　イヤ、ならぬ。

願哲　イケ情の剛い乞食坊主め。

助八　何吐かす、野郎め。

ト辻打になり、兩人立廻りあつて、トゞ願哲を當てる。助八、件のうちがへをもち、花道の中程まで行き、後戻りして再び好き所へ小隠れする。願哲心附き

願哲　おのれ、助八め、跡ぼつかけて。

ト辻打になり、一散に走り入る。助八出て、後見送り

助八　大泥坊め。……併しおれが持つて居ては、危ない仕事だ。幸ひ先刻の一物を隠したこの箱へ。

ト雪駄直しの籠の中へ三百兩入れる。

斯うして置けば、氣の附く氣遣ひはねえ。……此奴はいつその事、籠ぐるみ引ッ擔いで

トこの時奥にて

長吉　サア〳〵、早く來さつし。

ト辻打になり、長吉先きに、雪駄直し出て來る。助八これを知らず、件の籠を取上げるを、雪駄直し見て、だしぬけに助八を打つ。助八倒れる。長吉見て

長吉　ナニ、泥坊だ。

ト有合ふ天秤棒にてしたゝかに打つ。助八堪りかね、一巻と金を殘したまゝ、逃げて入る。長吉あと見送り

長吉　こんた衆の道具を盜むとは、とんだ奴もあつたものだ。

ト以前の下駄を出し

カウ、ちよつとこの鼻緒を直して下つし。

ト出す。雪駄直し、籠の蓋を取り、道具を出さうとする。ドロ〳〵になり、白蛇出る。兩人悧り、長吉天秤棒にて追ひ拂ふ。雪駄直しは、中にある一巻と金に心附かず、道具を出し、蓋をする。ドロ〳〵止んで、白蛇消える。始終辻打。向うより若い者、傳法の拵へにて出て來り

若者　モシ〳〵、長吉さん。追ツつけ幡隨の親方が、新羽屋まで歸つて來ると、知らせがあつたから、

早く歸りなせえ。

長吉 そりやァ斯うしちやァ居られねえわえ。……オイ〳〵、長松さん〳〵。

長松 何だ〳〵。

ト奥より出て

長吉 お父さんが歸ると知らせがあつたから、サア、行きやせう。

長松 そんなら兄イ、早く行かう。

長吉 オイ、直し屋さん。出來たらこの茶屋に居る女中に遣つてくんな。

若者 モシ、空合ひが惡い。早く行きなせえ。

長吉 なにサ、案じる事はねえ。こりやァ日和癖だ。

ト流行り唄になり、長吉先きに三人向うへ入る。下座より、とゞ平、生醉ひの思ひ入れにて出て來り

とゞ あの和尙めが捻ぢ上戸で、たうとうおれを盛り潰した。それはいゝが、大事のお飛脚、遲くなつたわえ。

ト云ひながら、花道の際まで來り、つまづき

南無三、草鞋の紐が切れた。幸ひの直し。コリヤ、これを直してくれろ。

四立めかへし





ト出す。雪駄直し思ひ入れ。

なんだ、これを直してからだ。……べら坊め、それまで待つて居られるものか。此方は急ぎのお飛脚だ。てめえは頼まぬ。おれが直すソ。

ト合ひ方になり、自分手に直し居る。この時、正面の障子を明け、小紫、少し酒に酔うたるこなし。長煙管にて煙草のみながら、四方を見晴らし居る。雪駄直し思ひ入れ。とゞ平こなしあつて

何といふ。おれが事を何飛脚だと尋ねるのか。……おれ様は、鎌倉佐々木家のお飛脚にて、今度本庄助太夫といふ侍ひを、同家中白井権八といふ者が殺して立退いたから、江戸屋敷へ触れ状を持つて行くのだ。

ト小紫、直し、兩人思ひ入れ。とゞ平草鞋を直して穿く事あつていらざる話しに時が切れた。コリヤ、斯しては居られぬわえ。

ト辻打になり、一散に向うへ入る。小紫きつと思ひ入れ。

小紫　顏は知らねど、實の父さん

彌市　別れてからが十四年、父の形見はどうぞして

小紫　おのれ、權八、やがて本望。

ト向うを見込み、きつと云ふ。これにて雪駄直し振り返り、持つたる下駄を小紫が前へ直す。これより誂への合ひ方、小紫向うを見詰めながら、これへ足を踏みかける。雪駄直し、下手より小紫の顔に見惚れ、ぢつと思ひ入れ。小紫これを知らず、ぢり〳〵と前へ出る。雪駄直し、顔に見惚れながら、小紫に附いて廻る。

小紫　いはゞ武士の胤たるこの身、

彌市　痩せはらしたる人の身も、年に一度は此やうな

小紫　男を持たば、助太刀して

彌市　本望遂げたら、死んでもよし

小紫　やはか恨みを

彌市　見染めし戀路を

ト抱きつく。小紫恂りして、持つたる煙管にて、ポンと打つ。これにて笠脱げて、初めて白井彌市の顔見える。チヨンと木の頭。小紫は「エヽ」と持つたる煙管を折る。彌市は笠を取つて、隠れる思ひ入れ。双方よろしく、拍子

幕

二幕目　返し　　鈴ケ森の場

役名　白井權八。幡隨長兵衞。飛脚、とゞ平。本庄助八。僧、願哲。雲助、政。同、辰。同、六。同、市。同、又八。同、どぶ六。

本舞臺、三間の間、後ろ一面の黒幕。こゝに藪疊、上手に大いなる題目の石。下手に六十六部の供養塔。この脇に榎の大樹、所々に杉の立ち木、日覆ひ吊り枝大に茂り、舞臺先き浪板。こゝに政、辰、雲助の拵へにて、五合徳利を焚火にてあぶり、筒茶碗にて酒を飲み居る。すべて鈴ケ森夜の景色、時の鐘、浪の音にて幕明く。

政　成る程、夜は短かくなつたな。今暮れたと思つたに、もう東海寺の五つださうよ。

辰　あんまり仕事がねえによつて、差しで組んで、しばこくり、てめえに取られた。あんまり智慧がねえぜ。

政　今に好い鳥を引いてくるであらう。

辰　それもさうだ。エヽ、もう一つかッ食はさう。

ト兩人酒を飲み居る。バタ〳〵にて、助八、前幕の形にて、走り出る。この跡を願哲追ッ駈け出て直ぐに舞臺へ來り

願哲　サア、どうしやァがつた。山分けを寄越しやァがれ。

助八　コレサ、さう云はれては一言もねえが、これには譯が

願哲　譯も絲瓜もいらねえ。きり〳〵金を出しやァがれ。

助八　それでも爰には無えものを。

願哲　無えといつて濟むものか。

ト兩人また摑み合ふ。政、辰、中へ入り

二人　願哲ぢやァねえか。どうしたのだ〳〵。

願哲　サア、聞いてくれ。この男はまだ仲間に入らせねえ素人だが、鎌倉に居るうち、心安くしたところ、今日大師河原で、ふッと逢つて、この男の賴みゆゑ、大枚三百兩の大仕事、首尾よくやつて渡したところ、割り前も寄越さずに隨德寺。サア、てめえ達に丸呑みにされては、おいらが商賣がならねえワ。キリ〳〵その金渡しやァがれ。

助八　成る程、さう云はれては面目ないが、おれが云ふ事聞いて、疑ひ晴らして下さい。

願哲　ナニ、云ふ事があるものか。

辰　ハテ、譯を聞いた後で、どうともなる事だワ。

政　靜かに譯を聞くがいゝ。

助八　今、あの和尙が云ふ通り、惡心きざして摑み合ひ、たうとう此方へ引ッたくり、隱し所に困つたゆゑ、側にあつたる雪駄直しの、籠の中へその三百兩と、外に大事な品を隱した。所へ雪駄直しが出て來て、おれを泥坊といつて、くらはした。イヤ、素的にくらはしやアがつたゆゑ、金の事はどこへやら、命から〴〵逃げて來た。所を願哲坊に捕まつて、この仕儀だが、その金どころぢやアねえ。おらが身にも代へぬ大事な品を、ちやアふうにするとは、よく〳〵不運な身の上だなア。

願哲　イヽヤ、その云ひ譯は、どうも呑みこめねえわえ。

政　コレサ、あの男もしよけ返つて居るからは、萬更嘘でもあるめえ。

助八　なにサ、斯うなつてから、嘘が出るものか。

願哲　して見りやア、無駄骨だな。いま〳〵しい。

辰　そんな間拔ぢやアいかねえワ。おいらが仲間へ入つて、よく見習ふがいゝわえ。

助八　そんならこれから、どうぞ願ひます。
政　新參振舞ひには、八幡前の、田樂は恐れるぜ。
助八　なにサ、濱川の角にしやす。
皆々　そいつは飲めるわえ。

ト波の音になり、向うより前幕のとゞ平出で來り、六、市、雲助の拵へにて、附き出で、花道にて

六　モシ〱、僅かな駄賃だ。この物騒な鈴ケ森、お獨り歩きしようより、安くして乘つて行きなせえ。
とゞ　エヽ、しつこい。飛脚が駕籠に乘るやうで、道中がなるものか。
市　成る程、お前は足はひよろ長く、早からう。ほんの酒手で乘つて下んせ。
とゞ　イヤ〱、どのやうに勸めても、乘らぬ〱。
二人　ハテ、乘らつせえよ。

ト本舞臺へ來る。六、先きへ廻り、好い鳥だといふ思ひ入れにて、皆々へ呑み込ます。

六　先刻から十四五丁、口の酸くなる程云つても聽かねえの。
市　どうせ乘せかゝつた籠の鳥、乘せにやアならねえ。
とゞ　ヤア、しつこい、雲助めら。たつてと云へば、手は見せぬぞ。

政　エヽ、てめえ達も氣が長え。

辰　ぶんのめせ／＼。

皆々　合點だ／＼。

トとゞ平ふるへながら

とゞ　さては噂の鈴ヶ森。身拵へして、

ト懐中の胴卷を直す心にて

ヤア／＼、大變だ／＼。三百兩の爲替金を、落した／＼。

皆々　ナニ、三百兩。

トこの時、願哲、焚火にて、とゞ平を見て

願哲　いま話しの金は此奴の金よ。

トとゞ平、願哲を見て

とゞ　うぬは先刻、身共に酒を飲ませた坊主だな。そんなら、その時

ト願哲にかゝるを、皆々引据ゑ

助八　金は奪つても、また物されたから

願哲 せめての腹癒せに、身ぐるみふん剝げ。

皆々 合點だ〳〵。

ト と平を引剝ぐ。

とゞ これは又情ない。

ト云ひながら、眞裸になり

泥坊々々〳〵。

ト逃げて下座へ入る。皆々顏見合せて

皆々 大笑ひだ。

ト政、衣裳を掻き集め

政 引ッくるめても二朱一本よ。

六 まだこんな狀箱がある。

ト落ちてあるを取上げる。

市 なんぞ中にあるだらう。明けて見ろ〳〵。

六 合點だ〳〵。

ト箱より手紙を出し

辰　こんな手紙だぜ

六　何ぞ仕事になるめえものでもねえ。讀んで見ろ〳〵。

政　無理な事を云つたものだ。これがどうして讀めるものかな。

願哲　ほんにさうだつけ。差詰め和尚、讀まつしやい。

ドレ〳〵。……「江戸お屋敷お役人中樣、鎌倉屋敷役人中。」……ナニ〳〵「飛札を以て申し入れ候、當三月廿日の夜、本庄助太夫の甥、因洲の浪士白井權八と申す者、叔父助太夫を討つて立退き申し候間、此段お屆け申し上げ候、尤も、權八江戸表へ出府と存じ候間、此段御吟味專一と存じ奉り候。以上。月日。」

助八　そりやア、おれの親仁を、權八が討つたと知らせの手紙だ。

市　アヽ、そんなら貴樣は敵討だの。

助八　マアそんなものだが、あの權八といふ奴、顏に似合ぬ太い若衆だ。

六　アヽ、そんなら、どぶ六や又が乘せて來て、土橋の駿河屋に立つて居た

辰　丸に井の字の紋を附けて居た若衆がさうだわえ。

助八　オヽ、その丸に井の字が權八だ。そんなら爰へ來るか。こりや斯うしては居られぬわえ。

ト騷ぐ。

六　コレサ〳〵。何を其やうに騷ぐのだ。貴樣の爲には現在の親の敵ぢやァねえか。

政　出合つた所が鈴ヶ森。おいらが助太刀すりやァ、敵討には好い場所だぜ。

助八　滅相な事を云つたものだ。どうしておれが權八に叶ふものかな。

市　お前も元は侍ひぢやァねえか。

助八　成る程、親の敵も討ちたいが。それよりは先刻の雲駄直しを探して、三百兩と大切な一卷を取返し、こんた衆にも分けてやるヮ。その代りに、親の敵は、皆寄つて討つて下つし。

皆々　そんならどうでも

助八　斯うしては居られねえ。

ト一散に下座へ入る。

政　併し、權八は手利きといへど、たつた一人。

願哲　此方は多勢。ナニ、構ふ事があるものか。

辰　定めて路銀もずつしりだらう。……コレ。

ト皆々と囁き合ふ。

市　そんならこゝに突ッ俯して頑張るのか。

辰　ソリヤ、これで。

ト菰を五六枚投げ出す。皆々着て。

皆々　ドリヤ、果報を待たうか。

ト別れ／＼に菰を冠り寝る。政と辰だけ焚火にあたり居る。時の鐘、浪の音になり、向うより又八、どぶ六、雲助にて、小田原提灯を附けし四つ手駕籠をかつぎ、此うちに權八、着流し、大小好みの形にて、駕籠に乗り出て來り、舞臺好き所へ駕籠を下ろす。

又八　モシ、約束の所まで參りました。

どぶ　なんと、早く來たぢやアござりませぬか。

ト權八駕籠より出て、あたりを見廻し

權八　然らば爰が觀音前と申す所か。

どぶ　さやうサ。爰が觀音前よ。

權八　ヤレ／＼、大儀であつた。眞に夜中といひ、勝手知れざるこの道筋。併しあたりは濱邊だな。

又八　何でも爰が約束の所だわな。
どぶ　どうぞ早く駄賃を、お貰ひ申したうござります。
権八　成る程。極めの駄賃は、六郷とやらより観音前まで、五百文の所なれど、夜中といひ、これにて一つ飲みやれ。
　　ト南鐐を一つ出す。取つて
どぶ　こりやアたつた二朱かえ。
権八　ハテ、五百文のところなれども。心を附けて
どぶ　たつた二朱か。おきやアがれ。二朱や三朱貰ふとて、夜中にあくせく駕籠を舁ぐものかえ。
　　ト権八へ打ちつける。
権八　して、どれ程貰はうと申すのぢや。
又八　おいらが駕籠へ乗れば、持つて居る物は有りつたけ。
権八　ムウ。さては案内知らぬ一人旅と侮つて、うぬらは盗人ぢやな。
二人　知れた事だワ。その褞袍から
　　トこの時、政、辰、出て來て留める。

政辰　コリヤ、待て／＼。

ト留めるを構はず、權八に打つてかゝる。政、辰、二人を追ひ拂ひ、隱す事。政、こなしあつて

政　ヤレ／＼、承りますれば、無法な事を申す者。嘸お腹が立ちませう。

辰　これがほんに、かつたいに棒打ちとやら。マア、御料簡なされませ。

權八　これは／＼、忝う存じます。さりながら、餘りの慮外。

政　サヽ、御尤もでござります。彼奴らは私しが、また仕樣がござります。まづ／＼、御料簡なされませ。して、あなたは、どれへお通りなされます。

權八　其許は、所のお人さうなが、これより江戸表までは、いか程ござるな。

辰　アイ、江戸へは、もう二三里もありませう。マア、ゆるりと莨でものんでござりませ。

權八　イヤ／＼、拙者は莨は所望でござらぬ。これはいかい世話であつた。

ト行きかゝるを、立塞がり

政　コレサ、旅人。人に道を尋ねて、禮もせずに通るのか。その上、莨をのめといへば、所望でない。莨が祭りに出やアしめえし。

辰　こりやア何だな。此方らを雲助だと思つて、この火で莨をのむは穢えといふのか。否でも應でも

のませにやならねえ。

權八　これは又無理を申す男ではないか。こなた衆が雲助やら、ナニ、身が知るものか。莨は實々嫌ひゆゑ、所望でないと申したが、なんと致した。無法を申すと、手は見せぬぞ。

ト屹度云ふ。

政　これは〳〵、お若衆のお氣短い。今のやうに申したは、ありや嘘でござります。成る程、流石お武家ほどあつて、この鈴ヶ森を只お一人、びくともなされぬは、眞に驚き入りました。

權八　ナニ。すりや、爰は觀音前ではなく、噂のある鈴ヶ森とやらか。

辰　さやうサ。御覽じませ、あの通り、供養塔や、題目の石がござりますわな。

政　お前さんの仰しやる觀音前までは、十丁からござりますが、また今のやうな奴等が居りまして、益なきお腹を立てさせましたらお氣の毒。私しどもが觀音前まで送つてあげます。コレサ、てめえもお送り申せ。

辰　それ〳〵。往來のお客方にお怪我でもあつちやア、雲助の商賣が上るワ。一緒にお送り申します。

權八　すりや、觀音前まで送つてくりやるか。

二人　左樣でござります。

權八　然らばこの提灯を借り受けて

ト駕籠の提灯を取り

オヽ、大儀ながら、案内頼む。

政　ハイ／＼。お提灯は私しが持ちませう。

ト提灯を取る振りにて權八の大小を取りにかゝる。權八驚き、政を捕へて

權八　コリヤ、何を致すのぢや。

ト辰、權八の紋を見て

辰　そりやこそ、丸に井の字だぞ。

ト皆々蓙を脱ぎ捨て、バラ／＼と取巻く。

權八　ナニ、丸に井の字と申すからは、コリヤ、何者にか頼まれたな。

政　オヽ、頼まれた。ぶツちめろ。

皆々　合點だ。

ト禪のツトメになり、皆々有りあふ物にて、打つてかゝる。立廻りあつて、鳴り物變り、しぬけのタテよろしく、此うち、辰、手を負ひ、逃げる所に困り、榎へ這ひ附く。よき時分、雲助二人、垂れた下

したる四つ手駕籠に、ヽヽヽ品川宿と書きし小田原提灯を下げ、向うより出で來り、直ぐ舞臺へ來て、この體を見て、悔りして

雲助　ヤア、拔いたワく。

ト駕籠を好き所へ置き、下座へ逃げて入る。此うち、權八止めを刺す。後ろより政かゝるを、見事に切り倒す。捨て鐘、合ひ方變つて、駕籠の垂れをあげ、幡隨長兵衞、半合羽、一本差し、脚絆がけ、駕籠の内より、樣子を窺ふ。市、下手へ逃げ行くを追ひかけ切る。この時、權八、長兵衞を見つけ、直ぐに切つてかゝる。長兵衞駕籠の中より、その手を押へ

長兵　お若いの。往來の旅人を何とさつしやる。

トこれにて權八、よくく見て

權八　心急きゆゑ、思はぬ粗忽。旅人とあらば、サヽ、少しも早う。

長兵　左樣ならば、間違ひでござりますか。

權八　如何にも左樣。

トこれにて長兵衞、刀の手を離す。權八こなし。長兵衞もこなしあつて、駕籠より出る。

長兵　見ますれば、お怪我もねえやうだが、どこも痛みは致しませぬか。





權八　御深切なる其お詞、忝う存じまする。さりながら、音に聞えし鈴ヶ森、町人體の其許が、たつた一人で

長兵　さやうサ。鎌倉方のお屋敷へ、多く出入りはわしが商賣、それをかこつけ有り樣は、遊山半分、江の島の、太々かけて思はぬ隙入り。どうで泊りは品川と、川端から戻り駕籠、通りかゝつた鈴ヶ森、若いお方のお手の內、あまり見事と感心いたし、思はず見惚れて居りました。

ト顔見合せ、思ひ入れ。

權八　拳もぬるき生兵法。お恥かしうござります。

長兵　不躾ながら、見ますれば、まだ角前髪のお侍ひ樣。お一人旅でござりまするか。

權八　御覽の通り、某は、勝手存ぜぬ東路へ、中國筋よりはるぐ\と、暮れに及びし磯端にて、一人旅と侮つて、無法の狼藉。彼奴らは正しく追ひ落し、命を取るも殺生とは存じたなれど、止む事を得ず、不敵者、刀の穢れと存ずれど、往來の人の爲にもと、據ろなく斬くの仕合せ。雉子も鳴かずば討たれまいものを、益ない殺生、致してござる。

長兵　ハテ、大丈夫なお若衆樣。切られた奴等は五六人、あなた樣には只お一人、若年のお手際には驚き入ります。今、中國と仰しやつたが、御生國は何れにて、何御用あつて江戸表へは。

權八　サ、別して用事もござらねど、繼しき母の讒により、心に思はぬ不孝の汚名。故郷は即ち因州生れ、父の勘氣に力無く、お江戸は繁華と承り、武家奉公でも致さうかと、仕官の望み、習はぬ旅行。見ますれば、其許は、江戸のお方と見受け申す。御深切のおたづね、しるべ、便りもござらぬ拙者、お詞に甘え、お賴み申す。

ト手を突き、こなしある。

長兵　成る程、御身分の一通り、承つて御尤もに存じます。併し、宿無しどもとは申しながら、四人五人のこの死骸。往來端に犬の餌食。

ト死骸を一々片附ける。

この御手練を見る上は、猶更以てお世話いたし、あなたの難儀となる事なら、どこがどこまで云ひ拔けて進ぜませうが、して、何れの御家中、又は御直のお方なるか、決して口外は致しませぬ。その御家名は。

權八　サア、お世話下さる其許へ、實名隱すに及ばねど、人の家名を聞く時は、我が名を名乘る、本文ござれば。

長兵　成る程、これは不調法。かゝる大事を眼前に、見聞き致した町人の、その名は何の某と、云ふ身

の上でもございませぬが、只今申した江戸生れ、身は住み馴れし隅田川、流れ渡りの氣散じは、江戸で噂の花川戸、幡隨の長兵衛と申します。

權八　エヽ、アノ、其許が、中國筋まで聞えたる、江戸に名高き長兵衛どのか。

長兵　イヽエサ、その名高い長兵衛ではございませぬ。わしやア三代目の俤ばかりサ。祖父や親父の長兵衛なら、面白い臺詞廻しも云ひませうが、親に似ぬ子の無口生眞面目。洒落れといつちやアこれ程もねえ只の俠ぐらし。今度の役廻りが、何れも樣の御贔屓で、ほんの當座の間に合せで、銀と見せたる七度燒き。附け句で覺えた藪鶯、阿波座烏の啼く聲は、西か東か知らねども、水道の水の有り難さ。野郎はちつと小せえが、産神柄で膽が大きい。弱い者をば引立てゝ、強い奴なら向う面。ほんの事だが、韋駄天が革羽織で、鬼鹿毛に乘つて來ても、びくともするのぢやアごぜえませぬ。及ばずながら、達衆の端くれ。枯れたる枝にも花川戸、金龍山は軒ならび、吉原雀、都鳥、隅田の流れを向うに構へて東男の端くれと、噂に乘つた私しは、ごろつき上がりの、けちな野郎でございます。

權八　音に聞えし達引きとやら、俠氣な長兵衛どのと聞くからは、願ひある身の某が、賴んで暫し便りには、石城よりも確かな隱れ家。拙者は即ち因州の浪人、白井權八と申す者。鎌倉表にて、義に

依つて人を殺め、命はさら〳〵惜しまねど、尋ねにやならぬ寶の詮議。首尾よく取り得るそれまでは、死ぬにも死なれぬ拙者が命。この身の願ひ叶ふまで、只管頼む長兵衛どの。

長兵　ようござります。お氣遣ひなされまするな。さう承つたら、金輪際、お世話しぬくが持前の、江戸で育つた男一疋。いつでも訪ねてごぜえまし、蔭膳すゑて、待つて居ります。

權八　御深切の其お詞、萬事よろしく

長兵　頼まれました、權八どの。さやうなれば、これより直ぐに御同道。

權八　何から何まで、お禮は詞に

長兵　なにサ、そこが江戸ッ子。恩には着ませぬ。

　　ト提灯を持ち、上手へ行きかゝる。この時、以前の手紙觸るゆゑ、取上げて

なんだ、手紙が落ちてある。モシ、ちよつとこの灯を

　　ト提灯を權八に持たせ、手紙を擴げ

ナニ〳〵「一飛札を以て申し上げ候。當二月廿日の夜、本庄助太夫の甥、因州の浪士白井權八と申す者、叔父助太夫を討つて立退き申し候間、此段御屆け申し上げ候。尤も權八事、江戸表へ出府と存じ候間、御地にて御吟味專一に存じ奉り候。以上。月日。」

権八　すりや、江戸屋敷まで、……ホイ。

ト思ひ入れ。

長兵　モシ、お案じなされまするな。

ト提灯の火にて件の手紙を焼き捨てる。権八思ひ入れ。辰、後ろより窺ふ。長兵衛こなしあつて

これで何にも、白井氏。

権八　武士も及ばぬ

ト思ひ入れ。文の火影にて、前の流れへ辰の顔映る。権八きツと見て、手早く手裏剣を打つ。これにて、

辰飛び下り

辰　うぬ、権八。

トかゝる。立廻り、権八、一太刀浴せる。

長兵　其奴も正しく

権八　彼奴らが同類。

ト長兵衛提灯を差出し、辰が疵口を見て

長兵　天晴れお手際。

権八　長兵衛どの。
長兵　ゆるりと江戸で
　　ト切り下げる。辰、見事に返る。長兵衛、肩へ合羽を掛ける。チョンと木の頭。
二人　逢ひませう。
　　ト権八、白刃を拭ふ。長兵衛こなし、双方よろしく、拍子
幕

三幕目

名古屋浪宅の場

役名――名古屋山三。上林の葛城。下女、お國。因果物師、又平。遣り手、お爪。家主、杢郎兵衛。呉服屋、勘六。小間物屋、六兵衛。縫箔屋、彦右衛門。禿、みどり

本舞臺、三間の間、天井に誂へある二重舞臺の世話場。揚げ幕際に三尺の路地の木戸あり、上の方女郎の文で張つたる障子。下手の方、竈、臺所道具飾り、門口の外、路地あり。本疊敷き、すべて淺草鳥越裏借家。こゝに山三、掻卷を着て、絹蒲團の上に、手箱引寄せ、葛城よりの文を見てゐる。禿みどり、大和風呂に急須をかけ、茶を拵へ居る。門口に杢郎兵衛、家主にて立ちかゝつて居る。表に

は勘六、彥右衞門、六兵衞、借金乞ひにて、わや〳〵云うて居る。內には、□、○ △、×、これも借金乞ひにて、歸りかゝり居る。てんつゝにて幕明く。

勘彥　大屋さん、入れて下さい〳〵。

李郎　掛取りならば、待つたり〳〵。

トてんつゝ、彈き流しにて、□、○、×、△、門口へ出かゝり

□○　腹がへりました。飯でも食つて、また出掛けて來ませう。

×△　さうしませう〳〵。

ト門口へ出かける。

李郎　どうだ、お前がたは解つたか。

□　イエ〳〵、今日も斷り。

李郎　そんなら歸るのか。

皆々　又、晩に來ませう。

李郎　さうしなさい。先きのは替り〳〵。あと入りは、續いて〳〵。

トてんつゝにて□、○、△、×、捨ぜりふにて、向うへ入る。門口に殘つた三人。

勘六　サア／＼、入れ替りませう／＼。

彦右　ヤレ／＼、恐ろしく待ちました。

ト内へ入る。

杢郎　掛取りならば、待ち札／＼。御油斷では詰ります。待ち札／＼。

勘六　モシ／＼、山三さま。呉服屋の勘六でござる。葛城さまへ拵へて遣らしつた襠裲や夜具の代は、どうして下さります。三月前もお斷り。三十兩の呉服代、今、勘定さつしやれ／＼。

六兵　サア／＼、其方がよくば、小間物屋の六兵衛。上林の花魁へ賣つた、鼈甲の櫛、笄、殘つた代金二十八兩三分二朱。幾度催促いたしても、葛城さんが斑甲のやうな涙をこぼしてお斷り。その斷りも大概がよいといふもの。今日はお客のお前から勘定なさい。又斷りならあかん鼈甲。代金貰はう代金貰はう。

彦右　モシ／＼、旦那、縫箔屋の松屋彦右衛門。度々催促いたしても、今日は拂はぬその代り、酒を飲めと仰しやるゆゑ、好きな酒に縫ひ代を、ツイうか／＼と二年越し。葛城さんの襠裲の手間代、たつた今、勘定さしつやれ／＼。

三人　拂ひを貰はう／＼。

ト皆々わめくを、山三、これに構はず、文を讀み居る。

六ど　オヤ、この衆は、靜かにさつしやいな。馬鹿らしいよウ。

二人　ナニ、馬鹿らしい。成る程、掛取りは馬鹿らしく見えるであらう。

杢郎　コレ〳〵、そんならお前がたは花魁の櫛、笄、夜具や衣裳の掛取りか。

三人　さやう〳〵。

杢郎　そんなら家主も云はねばならぬわえ。……コレ、山三さま。イヤ、山三どの。お前は〳〵。今も一組ばかり來た米屋や酒屋はお定まり。この三人の掛取りは、吳服、小間物、縫箔屋の代金とは、廓へ使ふ榮耀な借金。それほど贅澤をするならば、なぜ店賃を勘定しない。是非とも今日は家賃のたまり、今貰はう。今貰はう。

ト此うち山三、文を讀みしまうて

山三　これは家主をはじめ、町家の者ども、毎日々々、よう訪れてくりやるぞ。身共の歸參いたした節は、引上げ使ふ程に、さやう心得てよからうぞ。

勘六　イヤア、とんだ大風を極める。こなたに誰れが使はれるものか。

彥右　そんな無駄を云はずに、縫ひ箔の手間代を

六兵　鼈甲の代を、拂うて貰はう〳〵。

山三　これはしたり。誰れも拂ふまいとは云はぬワ。コリヤ、その拂ひ方の賄ひは、身が召使ひの下女の國、あの者が歸つたら、大方挨拶を致すであらう。それまで待つて、承つて戻るがよからう。

三人　エヽ、そんなら、あの下女が、爰の内の番頭か。

杢郎　これはしたり。町人ではない、武士の浪人者。

三人　成る程、武士の事なら女の家老か。

山三　勿論々々〳〵。

三人　イヤハヤ、呆れたものだ。

トてんつゝになり、向うよりお國、前垂れかけ、安下駄を穿き、下女のこしらへ、干大根、蒸鰈、一升徳利を提げ出で來り、足早に門口へ入り

くに　ハイ、旦那樣、只今歸りました。

皆々　そりや歸つたぞ。

トお國悄りして

くに　エヽ、悄り致しました。……アヽ、お前がたは、アノ掛乞ひの

六兵　いつもの三人。今日は是非とも取らねば歸らぬ。
彦右　貴樣が歸れば、お拂ひが出るとの事。
勘六　サア〱、勘定してもらはう〱。
みど　お國どん、歸らしつたか。
くに　オヽ、こりや葛城さまの禿衆。お前、どうして。
山三　コリヤ〱。あの禿が來て居るは、この山三がこの程の風邪ゆゑ、久しく廓へ行かぬというて、今宵葛城が見舞ひがてら、押しかけて來るといふ事を、禿に知らせて寄越したのを、幸ひ小間遣ひが無いゆゑ、今まであの者を使うて居たわいの。
くに　それはマア、よい吉左右を承ります。シタガ、此やうな穢い所へ、あの花魁がお出でなさるゝも、どうやらお氣の毒なやうで
李郎　何ぢや〱。店賃も寄越さず穢い所とは、無作法千萬。穢くば家賃を、拂はぬか〱。
六兵　さやう〱。拂ひもせいで、この內へ、花魁を連れて來るとは、あまり人を踏み附けにしやるの。
彦右　女郎を引込む奢りがなるなら、おいらが掛けをも拂つてもらはう。
勘六　サア〱、勘定を

二人　貰はう〳〵。

トわめく。お國とめて

くに　アヽ、モシ〳〵。左樣にお聞きなされましては、皆間違ひでござります。有り樣は、葛城さまが身上がりになつて、忍んで旦那に、逢ひにお出でなされますのでござります。なんの榮耀にどうしてマア、其やうな事がなりませうぞいなア。

杢郎　イヤ〳〵、忍んで來ようが、隱れて來ようが、吉原の花魁が、餘所へ來る程なら、そりや大物入りだワ。

二人　それが出來れば、拂ひを貰はう〳〵。

くに　イエ〳〵、全く左樣ではござりませぬ。

山三　コリヤ〳〵、其やうに卑下いたす事は無い。身共は何ぢや、武士ではないか。女でこそあれ、其方は身が召仕ひの腰元なり、當時にては侍ひ分も同じ事。二役を相勤めるぞ。あの者どもは、家主をはじめ、皆出入りの町人ではないか。其やうに丁寧に申さずとも、權威で申せ。聞き入れなくば、屹度曲事に、申し附けい〳〵。

くに　ハイ〳〵。左樣なれば、隨分大風に云ひ譯申すでござります。……コリヤ、家主をはじめ掛乞ひ

ども、皆下に居らぬか。

皆々　ナニ、下に居らぬか。……イヤ、呆れた飯焚きぢや。

くに　サ、わたしは……イヤ、おれは飯焚きに違ひないが、旦那のお指圖。其方どもの勘定は、もう四五日も待ち居らう。待たぬと、きつと曲事に……イヤ、曲事に申しつくるぞ。

ト雨車になる。

杢郎　ナニ、家主に曲事を申しつけるか。

三人　掛乞ひも同罪に行ふのか。こりや面白い。動きはせぬ／＼。

くに　さやう／＼。きつと曲事ぢや／＼。

ト雨車頻りに鳴る。

皆々　サア／＼、そこら中が、洩るワ／＼。

くに　旦那様も、嘸お濡れなさるでござりませう。

トあたりを見て、名古屋の傘を取つて

幸ひ借りて參りました番傘がござります。これをお召しなされませ。

ト山三番傘を取つて開き、名前を見て、

山三　アヽ、これは、身共が家の貸し傘か。

くに　イエ〳〵、この間出刃を買つて參りました節、借りて參りました。

山三　ムウ。さやうか。……コリヤ、みどりよ、其方もこの中へ入つて居れ。

みど　アイ〳〵。

ト傘の中へ入る。お國前垂れをかむり

くに　コリヤ、どうでも本降りになりませう。

勘六　ナニ、本降りになる。そんならおれ達にも傘を貸さつし。

彦六　斯う濡れては、大變々々。

くに　イエ〳〵、もう傘はござりませぬ。何なりと冠つておいでなされませ。

勘六　ナニ、傘は無い。……何ぞ冠りたいな。

ト内を見廻す。

六兵　コレ〳〵、火消し壺がある。これを冠らう。

ト冠る。

勘六　この飯櫃でも冠らう。

ト蓋を取り

中に白い物があるな。

くに　アモシ、そりや團子の粉でござります。

勘六　何でも頓着は無いワ。

ト冠る。

三人　ソリヤ、降つて來た。まだ爰らがよからう。

ト三人冠つた儘、竈の前に居る。

杢郎　イヤア、皆相應に冠る物が出來たが、この家主は何を冠らうな。

山三　コリヤ〱、家主、其方、なんと心得て居るぞ。

杢郎　どうしました。

山三　コリヤ、此やうに家内の雨漏りが、家主が目には懸らぬか。なぜ此やうに損ねた家を貸し附け、家賃を催促は致すのだ。この雨漏りを留めねば、家主とて容赦は無いぞ。

ト杢郎兵衛慄へ

杢郎　アヽ、御尤もでござります〱。借家は餘程損ねましたが、此やうに漏らうとは、毛頭心附きま

せぬ。これはしたり。イヤ、また漏つて來た。

　ト いろ〳〵思ひ入れ。

くに　わたしや御飯も仕掛けにやならぬが、旦那樣、マアどうぞして、

山三　コリヤ〳〵、いつ迄傘をさして居られうぞ。漏りを留めぬか〳〵。

杢郎　ハイ〳〵、只今留めます〳〵。

　トそこらを尋ね、大盥を見附け

あるぞ〳〵。コレ〳〵、旦那の上へ、この盥を吊さう。手傳つて下さい。繩は無いか〳〵。

くに　心得ました。爰にござります。

　ト竈の下より繩を出し、大盥を結へ、杢郎兵衞、お國、山三の上へよろしく吊上げ

杢郎　サア〳〵、これでどのやうな雨でも、請合ひでござります。

山三　成る程、これでは傘を持つ世話も無い。アヽ、いかう肩が張つて參つた。

　ト盥の下へ入り、横になり

コリヤ〳〵、其方は爰へ來て、足を撫つてくれ〳〵。

みど　アイ〳〵。


香蝶楼豊国画
一陽斎豊国画

ト山三が足を撫る。

くに　私しは小降りなうちに、お飯を焚きませう。モシ〳〵、お前様がた、雨やみのうち、お歸りなされませぬか。

ト水加減を見て、焚きつける。

勘六　イヤ〳〵、槍が降らうが、勘定の無いうちは、動かぬ〳〵。

六兵　さやう〳〵。掛けを取らぬうちは、居催促でござる。

彦右　一寸も爰の内は、動かぬ〳〵。

ト云ふ内、頻りに雨車、大降りの體。三人堪りかねて

六兵　サア〳〵、漏つて來た〳〵。誠に虎狼より漏るが怖いとはこの事だ。

彦右　これは大もり〳〵、飛んだ茶漬けだ。何分居催促も出來まい。

勘六　雨やみまで出直して來よう。

六兵　さうしませう〳〵。

ト各自冠りし物をとる。火消し壺をかむりし六兵衞の顔黑くなる。小桶を冠りし勘六の顔白くなる。千葉の鍋冠りし彦右衞門の顔萠黃色になる。三人の顔、三色になる。杢郎兵衞見て

杢郎　イヤア、三人の顔が、三色々々。

勘六　そんならおれは白くなつたか。面は變つて、雨には濡れ

彦右　こゝらで狂歌は、斯うであらうか。

杢郎　何と〳〵。

彦右　おれ青く、お前は白い面なるに

六兵　何とてわしは黒くなるらん。

杢郎　掛取りよろこべ、歸りは素的に、濡れるわやい。

三人　何を云はつしやる。……ソリヤ又、降り出すぞ。

ト糸立、席なぞを冠り、雪駄を下げ、腕捲りして、一散に駈け入る。お國、釜の下を焚きながら

くに　コレ、禿さん。旦那も御寢になつてぢやさうな。お前もちつと奥へなと行て、わしが借りて來た草双紙、それなと見て、花魁のござんすを待ちなさんせ。

みど　そりやア嬉しうおすが、また漏りはしんせんかえ。

くに　イヤ〳〵、雨はすつかり上がつたわいなア。

みど　そんなら行つて、見ようかいな。

杢郎　さて、　ト合ひ方になり、障子の中へ入る。杢郎兵衞思ひ入れあつて
山三どのは寢入るし、禿は奥へ行くし、コレお國、この間わしがわが身へ附けた文の返事を
ト手を取り、いろ〳〵と思ひ入れ。

くに　アモシ、惡い事なされまするな。わたしや、左樣な事は。

杢郎　ナニ、惡いものか、隨分好いものだ。コレ、爰でおれに
トしなだれる。お國門口へ逃げる。杢郎兵衞追ひ廻す。こゝへ下座より若い者一人、走り出て、杢郎兵衞を捕へ

若者　モシ〳〵、杢郎兵衞さま、人別がござります。今、お出でなされませ。

杢郎　イヤ、そこどころではない。ちつと此方に人別が

若者　ハテ、組合ひの衆が待つて居ります。
ト杢郎兵衞を無理に引摺り、下座へ入る。この時、暮れ六つの鐘鳴る。お國思ひ入れあつて

くに　あの家主樣がござんすと、逢ふ度々に、うるさうて〳〵。……コリヤもう日暮れ。どりや、灯をつけて
ト合ひ方になり、火打箱にて短檠の灯をつけて、山三が枕許へ持ち行き、思はず寢顔に見惚れ、懷よ

り前幕に貰ひし錦繪を出し、山三の顔と引合せ、見る事あつて

いつぞや拾うたこの錦繪、此やうな殿御もあらうかと、思うて居るに、旦那のお顔がこれ程までに。

ト錦繪を山三の顔と引合せ、思ひ入れ。この時、山三寝返りするゆゑ、お國ちやつと懐中なし、そしらぬ顔にて

ほんに、買つて來たこの酒、手の附けぬうち、お神酒に上げて

ト荒神棚を見て

これはしたり。また徳利を鼠が落したさうな。徳利の出るまで、この銚子でなりと

ト誂への銚子を取つて、徳利の酒を少しつぎ、火打にて銚子へ切火打ちかけ

お神酒徳利の出ますまで、御免なされて下さりませ。これで上げまする。

ト荒神棚へ上げる。この時、向うバタ／＼、人音して

大勢　泥坊々々。

ト聲して、向うより又平、懐へ男帯を入れ、駈けて來て、一散に内へ逃げて入り、キヨロ／＼する。お國悔りせしが、よく／＼見て

くに　ヤ、お前は父さんぢやないかえ。

又平　娘、ちつとの內、隱してくれ〳〵。

ト　うろ〳〵する。向うより長八、湯屋の番頭のこしらへ、仙八、流しの三助にて、その外、仕出し大勢出て來り

皆々　向うの內へ入つた〳〵。

長八　なんでも取返さねば云ひ譯がねえ。

仙八　番頭さん、逃がしなさるな。

ト此せりふ云ひながら、門口より又平を見つけ

皆々　ソリヤ、爰に居るワ。泥坊〳〵。

ト皆々寄つて、又平を捕へ、門口へ引出す。お國驚き支へる。

又平　コレサ、どうするのだ〳〵。

長八　どうするものだ。來やアがれ〳〵。

ト引ツ張る。

くに　アヽ、これいなア。お前がたは、老人を捕へて、どうしなさんすぞいなア。

長八　コレサ、姐さん、構ひなさんな。わしはこの新道の瀧の湯の番頭だが、この親仁が度々來て、板

の間を働くが、今日も無くなつた物があるから、追ツかけて來たのだ。退かつしやい〳〵。

仙八　連れて行つて、油煙を塗りやせう〳〵。

皆々　泥坊々々。

　　　ト立ちかゝる、お國留める。

くに　これはしたり。どうしてマア其やうな事を。

又平　おらア何も盗つた覺えは、無いぞ〳〵。

長八　コレ、人の目からは、女湯ばかり見て居るやうに見えても、どこの棚へは、どの人が脱いだといふ事は、百も承知だ。ハテ、われが盗つたに違ひはねえ。出せ〳〵。出しやアがれ。

くに　モシ〳〵、番頭さん。して、この人が何を盗りましたえ。

長八　その代物は、博多の男帯。懐を探せ〳〵。

又平　わしは何も盗んだ覺えはねえが、それとも疑はしくば、懐でも探せば知れる。ソレ、見ろ〳〵。

皆々　改めるがいゝ〳〵。

　　　ト立ちかゝり改める。何も無きゆゑ

又平　それ見たか。懐には何も無いワ。

長八　懷には無いが、背中を探せ〳〵。
皆々　後ろへ隱したな〳〵。

ト皆々立ちかゝつて吟味せんとするはずみ、背中の方より件の帶落ちる。

仙八　そりやこそな。
長八　サア、どうだ。太い奴だ。コレ、よく積つて見ろ。定りより二文づゝ込まれ、四文が糠で白水を流させ、その錢も拂はず、板の間まで挊がれては、其方は好いが、此方は渡世が出來ぬワ。なんぼおれの面が、輕石のやうでも、さう踏み附けにされてなるものか。大泥坊め。
皆々　ぶちのめせ〳〵。

ト立ちかゝるな、お國とめる。

くに　アヽ、モシ〳〵。惡いながらも老人でござります。どうぞ御料簡なされてお遣りなされませ。ハイ〳〵、私しがお詫び申しますわいなア。

ト取縋り、詫びろ。皆々思ひ入れあつて

長八　エヽ、見せしめの爲に連れて歸つて、縛つて置かうと思つたに、この女中が挨拶だから、料簡するワ。重ねて來るな。

ト件の帶を取る。

皆々　エヽ、太い奴だ。

ト合ひ方になり、皆々捨ぜりふにて入る。

又平　大箆坊め。帶一筋で縛られて堪るものか。間抜けめらがゝ打たれるなら打つて見ろ。縛らねえか。

ト行かうとする。お國縋つて

くに　アヽコレ、何をマア、みんなお前が惡うござんす。今度ばかりか、毎度の事、盗み心のあるお前。どういふ事か年寄る程、お前は惡い心が増し、もう、どうぞその心を直して下さりませ。モシ、拜みます〳〵。

又平　コレ〳〵、娘。おれの心を直したくば、親に不自由の無いやうに、われが方から金銀を送つてさへくれゝば、ツイ直る病ひだが、何をいつても一文無し。それだから日那へ願つて、金でも借りてくれまいか。

くに　どうしてマア、日那樣は、御浪人の便り無し。殊に、廓に馴染んだお方のある御身っ物入りこそあれ、貯へとては

又平　一文無しの素浪人。そんな主人に奉公するわれが惡い。それといふのも、爰の山三に、日頃から

われが惚れて居るから

くに　アヽ、申し、どうしてわたしが

又平　イヽヤ、わりや、惚れて居る〳〵。

ト大聲にて云ふ。これにて山三目を覺まし、思ひ入れあつて

山三　アヽ、誰れぞ居ぬか〳〵。

くに　ハイ〳〵。御用でござりまするか。

山三　茶を一つくれ〳〵。

ト起上がり、あたりを見て

アヽ、もう暮れたか。……そこに居るは、國が親の又平ぢやな。

又平　ハイ〳〵、左樣でござります。大きに御無沙汰を仕りました。御機嫌ようて、おめでたう存じまする。

山三　隨分機嫌は好いが、只吉原へ行く事が心に任せぬゆゑ、こればつかりは機嫌が悪いぢや。コリヤ、國よ。

くに　ハイ、御用でござりまするか。

山三　今宵、太夫が身上がりをして來るとある。おれも太夫の歸りに、連れ立つて行かねばならぬ。身の廻りの支度は好いか。

　　ト お國當惑の思ひ入れ。

くに　ハイ〳〵。隨分よろしうございます。あの濡れ燕のお小袖は、外へ預けて置きました。

山三　そりやまアどこへ、なぜに預けた。

くに　イエモウ、雨は降りますし、用心は惡うございますし、お小袖の分は、いつもの編笠茶屋へ預けて置きました。あれにてお着替へなされませ。

山三　オヽ、よし〳〵。あれが許にて着替へて行かう程に、必ず間違はぬやうに致せ。

くに　イエ〳〵、間違ひまする事ぢやござりませぬ。……父樣〳〵。

　　ト 又平を連れ、門口へ來る。

又平　娘、何ぞ用か〳〵。

くに　イヽエイナア、旦那があのやうに仰しやれど、このお暮らしで、どうしてお召し物がお内にあるものか。有り樣は皆質屋へ。

　　ト 又平に囁き

又平　これ程無ければ

又平　成る程、その入れ替へは、爰の内では、むづかしい。マア、何しろ、家内の道具を掻き集めて來るがいゝ。

くに　さうしやんせう。お前も手傳うて下さんせ。

又平　合點だ〳〵。

ト二人して、奥より小道具を、山三に見えぬやうに運び、風呂敷に包む。

山三　身共は太夫が見えぬうちに、心のたけを文に書き、彼奴に見せてくれやうか。

ト硯箱を引寄せ、文を書き居る。お國、件の風呂敷包みを背負ひ、片手に屛風を下げ、質の通ひを持ち、山三に見つけられぬやうに、兩人いろ〳〵思ひ入れあつて

くに　左樣なれば、私しは、太夫樣のお出での前方、お小袖の事に行つて參りませう。

山三　オヽ、大儀ながら、行て來てたも。併し、跡に誰れも

又平　ヘイ〳〵、私しが居ります。

山三　オヽ、又平、居てくれるか。

又平　左樣でござります。

くに　ドリヤ、一走り。

ト立戻り

コレ、父さん、飯が仕掛けてあるぞえ。

又平　オツト、合點。

くに　ドリヤ、行つて來うか。

ト唄になり、お國、風呂敷包みを擔ぎ、向うへ入る。

又平　飯が仕掛けてあるといふが、燃えて居るか知らぬ。

ト竈のあたりを見て

南無三、飯の下は消えて居る。もつと薪をくべて

ト竈の下を見て

これは大變。薪が一本も無いワ。……モシ、旦那樣、お飯を炊きまするに、薪が一本もござりませぬ。どう致しませう。

山三　アヽ、面倒な。何なりと焚けさうな物を見附けて、焚いて置きやいなう。ナニ、別しても無い事を。

ト構はず、文を書いて居る、又平思ひ入れ。

又平　それにしても、薪が無くつては、飯か出来まい。ア丶、何ぞ焚き物を

トあたりを見廻し、こなし。

有るぞ〳〵。根太板を剥して、あいつを焚いて。それ〳〵。

ト疊を取り退け、根太板を引出し、好き程に折る。この音を聞き、杢郎兵衞、路地より出で來り

杢郎　なんだ、あの音は。ア丶又、山三どのゝ内で、根太を剥すのか。ア丶、悪い店子に困り果てる。引渡さうにも店請けは無し。とんだ者に店を貸した。

ト内を覗き

さてこそ剥すぞ。……コレ〳〵、根太は御免だ。もう好い加減に剥さぬか。

ト戸を開ける

又平　剥せば悪いか。

杢郎　悪くなうてか。地主へ立たぬワ。

又平　ア丶、お前は家主だの。

杢郎　さうよ。店賃は寄越さず、おまけに根太板を剥されては、家主がどこで立つものか。

又平　それでも、飯を炊きかけて薪がござらぬ。
杢郎　アヽ、薪の代りか。イヤ、呆れたものだ。
又平　モシ、大屋さん。ちつとのうち、大目に見なせえ。
杢郎　そんなら今夜は大目に見るが、明日からは小目に見るぞ。
又平　明日の事はおらァ構はぬ。
杢郎　ハテ、宿六に云ひつけさつしやい。……殊に、この節は物騒だ。路地を締め切りにしよう。
ト合ひ方になり、五つの拍子木鳴る。又平、板を折り、釜の下へ焚く。杢郎兵衛錠を出し
締りますく。
ト花道へ錠を振りながら、捨ぜりふにて行き、路地の口へ錠を卸し、帰りくる。よき程に、勘吉、若い者の拵へにて、揚げ幕の路地を叩き
勘吉　お頼み申しますく。
杢郎　エヽ、今締めたに、誰れだよ。どこへござるのだ。
ト捨ぜりふにて、又帰りくる。
勘吉　お長屋の山三さままで参ります。

杢郎　いま締めた。早くござればよいに。

ト鍵を出し、路地を開ける。これにて勘吉引返し入る。杢郎兵衛、小言を云ひながら、路地をあける。

直ぐに歸るのかえ。

トこの時若い者一人、ズッと大提灯を提げ入る。杢郎兵衛惘りする。これより摺り鉦入り、出の唄になり、上林の葛城太夫(實は岩橋)、跡より禿一人附き出る。若い者、長柄を差しかけ出る。跡より勘吉、新造、藝者、若い者、三味線箱を持ち、幇間左吉、あとより若い者、二人、臺の物を持ち、この人數、路地の中へ通る。杢郎兵衛、肝をつぶし居る。葛城、門口にしやんと立つて

葛城　逢ひたさに、今宵くるわの夜櫻を、後に見なして雁がねの、聲もろともに來て見れば、爰がおもはく主さんの

左吉　深間のお客の、たしか別莊。

新造　根岸、三の輪に事かはり

藝者　ひねつた寮の一構へ

勘吉　五大力なら大和町

左吉　鳥越町の裏借家。モシ、葛城さん。

李郎 そんならこなたが評判の、上林屋のお傾城。

皆々 葛城さんぢやわいなア。

李郎 イヤア、道理こそ〳〵。併し廓に程近き、この鳥越の裏店の、三尺路地を道中とは、こりや、年代記に載るであらうよ。

左吉 無駄を云はずと、大屋さん、山三さんのお宅へ案内。

李郎 わしが店子の山三どの、今宵は内にぢや。

葛城 そんなら逢うて、何かの話を

皆々 太夫さん。

葛城 子供、來や。

禿 アイイイイ。

ト清掻になり、皆々内へ入る。奥よりみどり出て

みど 太夫さん、ござんしたかえ。

ト山三これを聞き

山三 ヤア、太夫。來やつたか〳〵。

葛城　山三さま。この程は、すつきり廓へ

皆々　お見限りでござりまするなア。

山三　ようマア皆も來てくれた。マア／＼、爰へ來や／＼。

ト盥の下へ葛城を連れ行く。皆々見て

若者　モシ／＼、旦那、このマア吊つた物は、何でござりまするえ。

山三　この盥か。こりや今まで雨が洩つたによつて、防ぎの爲に、吊して置いたのぢや。

皆々　エヽ、そんなにお内が洩りますかえ。

山三　洩るとも／＼。今まで内よりか、外がましであつた。コレ／＼、てまへ達も、そこらはぬからう程に、氣を附けて坐りやれ。

勘吉　イヤア、それほど爰のお内は、道が惡うござりまするかえ。

又平　モシ旦那、お客があつても、幸ひ爰に酒はござりますれど、肝腎のお肴がござりませぬ。

ト一升德利を出して見せる。

左吉　その心配は御無用々々々。肴は卽ち花魁のお持たせ。若い衆、爰へ持ち込まつせい／＼。

若者　心得ました。

ト件の臺の物を吊込み、好き所へ直す。杢郎兵衛見て

杢郎　こいつは飲めるワ〳〵。山三どの、店を追はうと思うたが、斯ういふ様子を見ては、わしが店に幾久しく、松杉をお植ゑなされて下さりませ。

山三　ハテ、家主めが、受けをつたな〳〵。……して、葛城は、どうしてマア、今宵、廓を。

葛城　さいなア。旦那様に願うて、これまで例しの無い趣向。僅かの間を斷りいうて、大門から早駕籠で、この入口でわたしが支度。仲の町と違うて手狭ゆゑ、大きに難儀を

新造　さうでござんす。太夫さんの頭の道具が、兩側へ觸るやら

藝者　外八文字の振出しあゆみ、下水の板から危なう見え

勘吉　さしかけてくる長柄さへ、物干へ觸るやら

又平　併し、そこが花魁の、稽古の爲には、肝腎々々。

山三　ナニ、太夫の稽古とは。

又平　どうでお前と女夫におなりなさるのは定の物。さすれば屋敷でお暮らしなさるか、また此やうに裏借家か。夫婦住居のその時は、水も汲んだり、飯も炊き、薪も割らねばなりませぬ。

杢郎　互ひに手鍋を提げ合うても、夫婦暮らしは女の情。併しお飯の炊きやう、知らずばなるまい。モ

シ花魁。

山三　成る程、又平の云やる通り、葛城、其方も習うて置きや。

葛城　そんなら、お二人さん、どうぞ教へて下さんせ。

又平　ハイ〱、承知々々。大屋さん、店子の事だから、お前教へて。

杢郎　教へます〱。併し、口教へては覺え憎いから、輕業の口上で教へて上げませう。お前がた、鳴り物を頼みます。

皆々　心得ました。三味線、胡弓、持つて來さつし。

ト箱の中より三味線、胡弓、その外、鳴り物を出し

ト輕業の鳴り物になり、皆々手んでに鳴り物にかゝる。杢郎兵衞、竹柄杓を葛城に持たせ

又平　サア〱、始めさつせい〱。

杢郎　さて〱〱〱、さて花魁。お飯炊くなら、始めちよろ〱、中くわつくわ。赤子泣くとも蓋取るな。これがお飯の炊きやうぢや。

ト此うち鳴り物、片脇より干大根と俎板を持出し來て

さて〱〱、お汁するなら、味噌をよい程、擂り置きて、沸え立つ程に此方では、若芽、大根、

干葉、豆腐、汁の實刻むは干大根。この庖丁を斯う持つて、ちよつきりちよいと斯う切つて、殘つた所は、はり〳〵と。……さて〳〵、もう飯が

皆々　出來たか〳〵。匂ふワ〳〵。

杢郎　匂ふか〳〵。もしやまんまが、片煮え〳〵。

　　ト釜の前へ行き

水の加減か〳〵。

　　トよく見て

東西。

　　ト鳴り物打上げる。こなしあつて

仕方を持ちまして、まんまと首尾よく

皆々　どうだ、出來たか。

杢郎　とつと焦げたり。

皆々　おきやァがれ。

　　ト杢郎兵衛、思はず下家へ踏込み、驚き

杢郎　アイタヽヽヽ。誰れか縁の下で、おれの足を引ッ張るやうだ。

皆々　ナニ、誰れが縁の下に居るものか。……ソリヤ、引揚げるぞ。

ト皆々杢郎兵衞を引上げる。縁の下より犬一疋出て來る。

ソリヤ、病犬だ／＼。

ト皆々騒ぐ。杢郎兵衞、路地の中へ逃げて入る。此うち、新造、祝儀の包み金を、各自へ渡す。

新造　旦那、花魁から。

皆々　エヽ、有り難うござります。

又平　時に、折角お出でだが、花魁は暇どつてもいゝのかの。

左吉　そこは我れらが呑みこんで、上林の內證は勿論、會所へちよつと屆けて來ませう。

新造　わたしも一緒に、暇どる樣子を

藝者　會所へわたしも參りませう。

皆々　左樣ならば、山三さま、跡でしつぽり

山三　また惡口を

皆々　ハテ、おしげりなされませ。

ト唄・時の鐘になり、又平奥へ、皆々殘らず向うへ入る。山三・葛城殘り、合ひ方。

葛城　山三さん。して、お前の親御の敵の手がゝり、その節失せしお家の系圖の

山三　今以て行くへ知れず。殊には親人の差し料、無銘なれども國俊の、劍を奪ひ立退く曲者。今、一振りは、山三が方に所持する刀。陰陽二つの劍にて、寸尺揃ふ二振りの、白刃は何方の鞘へなと、しつくり合ふが、これ名作。

葛城　わたしもいつぞや鎌倉にて、この身の越度にお暇の、その節お前も御浪人、貢ぎの爲と身を沈め、いま吉原で葛城と、辛い苦界のその中で、わたしへ心を掛けて居る、伴左衛門もこの程は、白柄組の頭分、その名も寺西閑心さん。

山三　廓に來るといふ事は、ほのかに聞いたそれゆゑに、其方に逢ひたう思うた譯は、心憎き伴左衛門、正しく系圖も、親人を、討つて劍を奪ひしも、彼奴が仕業と思へども、手がゝり無ければ、これとても

葛城　そりや氣遣ひなさんすな。夜毎に通ふ伴左衛門、わたしが屹度その詮議。……さはさりながら、かねてお前も御存じの、素性賤しきわたしは捨て子。

ト頭に挿したる割り笄の片しを取つて

後藤祐乗が蘆間の鷺。包んでありし書附けに、四十二の二つ子ゆゑ、捨てるとばかり、親御の家名、實名も、今にそれぞと知れぬ身の、便りに思ふ山三さま。

山三　その元春も、今の身は、尾羽打枯れし浪人の、我れに劣らぬ兄弟の、契約なせし白井權八、彼れも失ふ神妙劍。詮議の爲に正しく廓へ。

葛城　さう云はしやんすりや、この間から、三浦屋へ通はんす、扇蝶さんといふお方。似寄りと思ふに違ひなう、そんならあなたが、たしかに白井

ト云はうとする。

山三　アコレ、必ずその名を沙汰せぬやうに。……ア、思へば思ひ廻す程、今の山三が朝夕の、煙も細き浪々を、貢いでくりやる志し。コレ、手を下げて、禮を云ふぞや。

葛城　これはしたり、譯も無い。他人がましい。現在女房に

山三　サ、その女房に、勤めをさする

ト思ひ入れ。

葛城　エヽ、まだかいなア。

ト山三に寄り添ふ。唄になり、向うよりお爪、遣り手にて先きに立ち、以前の人數、殘らず、大提灯

を持ちし若い者も出で來り

つめ　モシ〳〵、葛城さん。どうしたものでござんすぞ。あれ程わたしが云ひ含め、知らぬ顔なる今夜の樣子。此やうにマア大業に、餘所も廓と同然に。お前がたも附いて居ながら。サア、花魁、お歸りなんし〳〵。

ト時、この又平出かゝり居る。

葛城　成る程、わたしが長居したのが惡うござんす。もう〳〵直ぐに歸りんす。モシ、山三さん。お前も一緒にござんせぬかえ。

山三　行くは行かうが、使ひにやつた、下女の國の歸らぬうちは。

又平　アノ、娘も、もう歸りさうなものぢやが。

つめ　ヤア、こなたは又平どの。こなたに逢うて、ちつと話が。

山三　アヽ、又平は昔馴染みといふやうな事か。

つめ　こりや、見通しぢやわいな。

新造　モシ、太夫さん、夜の更けぬうち、少しも早う

藝者　お歸りなさんせいなア。

葛城　そんなら、必ず。
皆々　お早うお出で、なされませ。
つめ　コレ、若い衆や、わたしや殘つた用事もあれば、ちつとも早う、太夫さんな
皆々　送り申して、太夫さん
葛城　山三さま。……さばえ。

ト唄になり、この人數皆々向うへ入る。三人殘り

又平　コレ〳〵、遣り手衆、わしに用とは。
つめ　これいなア、又平さま、お前も不粹な。どうして爰へ。
山三　アヽ、聞えた〳〵。又平は今獨身ゆゑ、遣り手の其方と茶飲み友達とかいふやうな事か。さうか
さうか。
つめ　アモシ、どうして左樣な事を。
山三　サア〳〵、遠慮は無い。しつぽり、話してゆけ〳〵。
又平　これは迷惑な其お詞。
山三　違ひはあるまい。

つめ　オヽ、恥かしい。

又平　氣が違つたさうな。

ト唄になり、お爪、又平の手を引き奥へ入る。この唄を借り、向うより以前のお國、風呂敷を抱へ出て來り、直ぐに內へ入り

くに　ハイ、只今戾りました。

山三　オヽ、國か。今歸つたか。今まで廓の者も、葛城も居たわいの。アヽ、其方も逢はいで。

くに　イエ〳〵、只今あそこで、ちよつとお目にかゝりました。

山三　それは滿足。わしも跡から行かねばならぬ。小袖はどうぢや。

くに　ハイ、よろしうござります。預けました先き樣より、受取りまするに手間がとれました。それゆゑ遲なはりましたが、いつもの通り、お召し物は、編笠茶屋まで、届けて參りました。

山三　それは滿足。コリヤ國よ、髮は結ひ直すには及ぶまいが、ちよつと爰へ來て、撫で附けてくれ〳〵。

くに　ハイ、畏りました。お髮は昨日お結ひなされましたから、見苦しくはござりませぬが、ちよつと撫で附けませう。

山三　サ、早うしてたも。

くに　ハイ〳〵、畏りました。

ト誂への合ひ方になり、お國、鏡臺を山三の前へ直し、髮を撫でつける。この時、例の錦繪出かゝり居る。山三、鏡に映るお國の顏を、つく〴〵見て、思ひ入れ。唄切れる。

山三　我が心、鏡にうつる物ならば、さこそは影の

くに　エ。

山三　あとは何とか。

ト　お國思ひ入れ。

くに　その下の句は、みにくかるらん。……とか申しまするな。

山三　ヤ。

くに　醜き下女のわたしの顏が、あなたの鏡へ映りまするも、勿體なうござりまする。……ハイ、もうよろしうござりまする。

ト行かうとする。この時、例の錦繪落ちる。山三ちよつと取るを

ア、モシ。

ト寄るをお國の手を取り

山三　コレ、國、其方は慥かに

くに　モシ、旦那樣、こりや、どうなされまする。

　　ト顫ふ。

山三　どうもせぬが、この山三は、わが身に惚れた。

くに　エ。

山三　サ、とうから其方に心があるが、コレ、今宵はわしが願ひ、叶へてはくれまいか。

くに　此やうな見苦しい私しに。

山三　眞實、心から、其方には

くに　モシ、旦那樣、そりや御胴慾でござりますわいなア。

　　ト泣き伏す。合ひ方變り、お國思ひ入れ。

只今も廓から、逢ひにお出での葛城さま、姿、風俗、何一つ、揃はぬものもない女子を、お持ちなされたあなた樣、それに水仕の私しが、十人並みにも勝れた不器量。それを捕へて惚れたとは、不具なわたしをお嬲りなさるゝお詞は、有り難けれど、旦那樣、そりや胴慾ぢや。お情けなうござりますわいなア。

山三　わが身に其やうに云はれては、この山三、面目次第も無い。……堪忍しやしや。物堅い其方の心を知つて居ながら、ツイ今のやうな戯言云うたのは、其方の手前恥かしい。今のは嘘ぢや程に、必ず氣にさへてたもるなや。

ト山三氣の毒なる思ひ入れ。

くに　其やうに仰しやつて下さりますれば、却つて罰が當ります。

山三　なんの其方に罰が當るものか。罰が當れば、この山三。其方のやうな貞女な者に、戯言云うたはおれが誤り。一人の男を守つて居るとは、ハテ、羨ましい。

トお國これを聞きとがめ

くに　そんなら何ぞ私しに、不義がましい事でも。

山三　アノ、白々しい。隱しやいなう。其方が朝夕、肌身放さぬその錦繪。まだその上に、慥かに腕に

くに　エ。

ト恥かしきこなし。

山三　それほど眞實惚れて居る、男があるゆゑ、それでわしに。……ハテ、その男はどこの誰れぢや。云うて聞かしや。……この山三とて野暮では無いわいの。

トいろ〳〵いふ。お國恥かしき思ひ入れ。

くに 其やうな有り難いお詞を下さりますれば、どうしてあなたに打ちつけに。

山三 云はれぬ程に心底づく。隠す程猶聞きたい。ちよつと其方の腕の

トお國が腕を取るを

くに アモシ、お免しなされませ。

山三 イヤ〳〵、何でも見にやならぬ。

ト嫌がるお國が腕を、無理に引捲り、見て思ひ入れ。

山三 何ぢや。……旦那様命、……ハテ、變つた腕の、刺青ぢやなア。

くに この旦那様とは、外にござりますかえ。

山三 ヤ。

くに 勿體ない事ながら

山三 そんなら其方は。

くに とうからあなたに

山三 ヤ。

くに　ハイ。

ト顔を隠す。

山三　ハテ、可愛い〻奴ぢやなア。……その眞實な志し、仇には思はぬ。今宵は互ひに。

くに　勿體ない事ながら、これで死んでも私しは

ト思ひ入れ。

山三　奥の小部屋で。……コレ、先づ屏風を

くに　ハイ。屏風は先き程、餘所へ

山三　餘所へ貸したか。ハテ、屏風代りに

ト件の傘を取上げ

幸ひ爰に有り合はす、開く屏風のその代り、開く傘、家の紋、これなど立て〻

ト傘を開く。

くに　モシ、有り難うござります。

ト寄添ふ。

山三　傘の文字は照降町の……降らねばよいが。

ト唄になり、上手の一間の内へ入る。あと合ひ方、時の鐘にて、又平、お爪出て來り

又平　そんなら貴樣は、おれが古主の、伴左衞門さまが乳人といふのか。

つめ　アイナウ。わたしが手汐に育てたアノ和子、惚れてござる葛城太夫、どうぞ叶へて上げやうと、上林屋へ遣り手奉公。所へ爰の山三めが、深う馴染んだあの葛城。生けて置いては戀路の邪魔。伴左衞門さまのお指圖で、山三を毒で押ッ殺す、その毒藥も持つて來ました。貴樣は山三へこの毒藥、服ます工夫を賴むぞや。

ト毒藥包みを渡す。

又平　アヽ、そんなら山三をこの毒でか。……よし／＼。そこらは拔からぬ又平。伴左衞門さまに荷擔して、境木の松原で、山三が親の山左衞門、權八が親の兵左衞門、二人を殺して神妙劍、系圖の一卷盜んだが、この又平も僅かな褒美。今では邸へ出入りも叶はず。この毒藥でコロリと殺つたら、こなたの世話で

つめ　伴左衞門さまには、わたしが好いやうに、取持ちをする程に、必ず共に油斷なう。併し、娘のお國には、この事を

又平　そりやア合點だ。山三が爲にも、この又平は、親の敵の片割れ。何ぼ間拔けな山三でも、彼奴があ

つては寢覺めが惡い。毒で殺すは物怪の幸ひ。して、この毒を彼奴に飮ますその工夫は

つめ　飮ます仕樣は酒の中。……ほんに幸ひ酒德利。これへ仕込んで。……お前は奥へ氣を附けて

又平　合點だ〳〵。

ト奥の方を窺ひ居る。其うち、お爪、德利の口へ毒を入れる事あつて

つめ　毒が廻れば泡立つ筈ぢや。

ト酒の樣子をたしかめんと、棚の銚子を取つて來て、これへ移し入れ、よく〳〵見て

成る程、泡立つて來たワ。

ト蓋をする。この時、棚へ鼠出て片口を落す。悔りして手早く銚子を元の所へ直す。又平此方向いて

又平　今の音は何だ。

つめ　鼠が棚の物を落して。

又平　毒はどうした。

つめ　この德利の中へ。これを山三へ。合點か。

ト德利を渡す。

又平　呑みこんだ。首尾よくやつて、追ッ附け飮まさう。

つめ　必ず共に、又平どの。

又平　おれが詫び事。作左衛門さままで。

つめ　氣遣ひさんすな。どりや、その事を。

ト唄になり、お爪向うへ入る。又平殘つて

又平　アヽ、婆アめが頼みの毒藥。これでゆかずば、寢込みをぐッさり。

トあたりを見廻し、出刃庖丁を取つて手拭に卷き

彼奴を殺す前かたに、金目の品を

ト件の障子の中を窺ひ、片手にて障子の間より、お國の帶を引出す。これにてお國恥かしき思ひ入れにて、出て來て、帶を尋ねるこなし。又平これを知らず

こりや、女帶、もしや娘が

トお國と顔合せ

ヤ、われは。

くに　父様か。

又平　コリヤ。

ト合ひ方變る。お國思ひ入れ。

くに　先刻ゟ爰へ多勢が、打てよ、叩けと、あのマア噂が人さんに、聞かされた事かいなア。今も座敷を窺ふお前、わたしが帯とも氣が附かず、盗む心でござんせうがな。

又平　靜かに云はいで、親の讒訴、何であらはに

くに　それでも、お前、あんまりでござんす。

又平　決して他人に沙汰するな。おれも有り樣この頃は、打續いての不仕合せ。工面が惡さに出來心。併し錢金乏しいうちは、盗み心は

くに　そこをどうぞ辛抱して、惡い心をやめて下さんせ。その代りには、娘のわたし、身に叶うた程貢ぎます程に、どうぞ盗み心は、この上ともに、必ず止めて下さんせ。コレ、拜みますわいなア。

又平　娘のわれが頼み事、惡根性はやめてやらう。併し、貢いだとて、高の知れた水仕奉公。貰らうといつて、野挊ぎの外、向かない代物。というて、それ程までに親への頼み。いゝワ。外に又われに頼む仕事がある。いゝワ。惡根性は、止めてやらう〳〵。

くに　エヽ、嬉しうござんす。その代りに、わたしが身は、どのやうな辛い目にあうても、厭ひはござんせぬ。そんなら屹度、やめて下さんせえ。

又平　ナニ、嘘を云ふものか。われには此上頼みがあるから、心は直す。必ず疑ふな。ほんに止めるワ。

くに　有り難うございまする。それ程までに云つてなら、わたしが疑ひ晴らすため、お前に誓紙を

　　トあたりを見廻し、神棚の銚子を取つて來り

　父さん、いよ〳〵心が直るといふ、神へ誓ひしその誓紙、この神酒飲んで下さりませ。

　　ト茶碗を添へて出す。

又平　ナニ、神酒を飲め。……この徳利の酒か。

くに　イエ〳〵、先刻神樣へ銚子のまゝ上げた酒。

又平　徳利の酒とは違ふのか。

　　ト思ひ入れあつて、件の酒を徳利のまゝ取り來り

　それなら飲まう。親が娘に嘘吐かぬ、誓ひの爲にこの酒を

くに　お前が上がつて、わたしが跡で

又平　親子互ひに、心の固め。サア〳〵、娘、一つ注げ。

くに　ハイ〳〵。嬉しうございまする。

　　ト酌をする。又平飲んで

又平　サ、おれは飲んだ。てめえも親が云ふ事を、背かぬといふ誓紙のこの神酒。飲んで見せろ。

くに　アイ〳〵、飲みまする。直ぐにわたしがこの神酒を

　　ト茶碗へ一つ注ぎ、干す。これを又平見て

又平　この上ともに同腹中。親が娘に頼むといふは

　　トあたりを見廻し、小聲にて

この酒、山三に、飲ませてくれろ。

　　ト件の德利を出す

くに　アイ、仰しやらいでも、この酒は、旦那が寢酒に

又平　飲むと其まゝ、斷末魔。苦しむ時に驚くな。必ずおれが指圖だと、その時云ふな。

くに　エヽ。……この酒飲むと、苦しむ譯は

又平　こりや毒酒ぢや。

くに　エヽ。

又平　われが意見で根性を、直す代りに此酒を、飲ませて殺せば此身の出世。きり〳〵山三にこの酒を

くに　エヽ。すりや旦那樣に、なんの恨みがござんすぞ。

又平　恨みは無いが、去年の事、さるお方に賴まれて、山三が親の山左衞門・おれが手傳ひおッ殺し、いはゞ此方は敵の片割れ、山三が知つたら只は置くまい。そこで彼奴が知らぬうち、殺してしまへば寢覺めがいゝ。きり〳〵毒を、飮ませてくれろ。

くに　エヽ、情けない父さん。現在のお主に、どうして毒が

又平　彼奴がわれに主なれば、おれも主人に賴まれた。誓ひの神酒を飮んだからは、それでも賴みを背くのか。

くに　サア、それは。

又平　誓ひは嘘か。

くに　サア、それは。

又平　サア

くに　サア

二人　サア〳〵〳〵。——

又平　きり〳〵、毒を山三めに

ト云ひさま血を吐き苦しむにぞ、お國驚き

くに　ヤ、父様、お前は

ト駈寄らうとして、これも苦しみ、血を吐く。

又平　ヤヽヽ。總身俄にこの苦しみ。發熱頻りに五體の痺れ。若しや酒が間違うて

くに　二人が毒を

ト又平、銚子の蓋を開き見て

又平　さてこそ泡立つこの酒を、現在親に飲ませたな。……もうこの上は、うぬ、山三めを

ト立ちかゝる。お國止めて

くに　その心ゆゑ、親も子も、毒に苦痛。どうぞ、あなたに、刃向ふ事は

又平　イヽヤ、刃向ふ。毒を飲んでもこの親仁、出世せぬうち滅多に死にやせぬ。邪魔すりや、うぬも

ト立ちかゝる。

くに　お主へ手向ひ見ては居ぬ。父様ながらも

ト縋り寄つて出刃を奪ひ取り、突いてかゝる。又平捕へて

又平　うぬ、親殺しめ。

くに　イヽエ、お前が主殺し。

トよろめき〳〵、又平の出刃を奪ひ、突いてかゝる。兩人次第に毒の廻るこなし。トヾ又平お國の出刃を取らうとして、出刃の柄拔けて思はず脾腹へあたり、たぢ〳〵として、床の拔けし穴へ落ちるこお國よろめくはずみ、短檠の火消える。此うち、始終忍びの合ひ方。この時山三、小袖を着替へ、上の障子より出で來り

山三　オヽ、灯が消えた。國は居ぬか〳〵。

くに　ハイ〳〵。これに居ります。

ト苦しき體。

山三　アヽ、醉ひ醒めか、咽喉が渇く。水を一つくれ〳〵。

くに　ハイ〳〵。

ト探りながら、手桶の水を茶碗へ汲み、山三へ取附きながら、差出す。山三思ひ入れあつて

山三　アヽ、其方はどうか致したか。持病か〳〵。

くに　ハイ〳〵。

ト此うち、山三、水を一口飲み

山三　アヽもう、飲めぬ。サア、捨てい。





ト茶碗を渡す。お國顫へながら、一口飲み

くに　これが末期の

ト ぐつと飲む。

山三　アヽ又、癪ぢやなア。

くに　ハイ〳〵。

山三　コレ、今から上林屋へ行く程に、また留守を頼むぞや。

くに　ハイ〳〵。お召し物は、いつもの茶屋へ

山三　オヽ、着替へて行かうぞ。草履を見てくれ。

くに　ハイ〳〵。……お穿き物。

ト門口へ直す。

山三　直してあるか。灯をともせばよいに。

ト草履を穿き、門口へ出て、心づき

コリヤ、編笠をくれい。

くに　ハイ。

トまた探つて、笠を取り、門口の柱に取りつき

お笠は爰に。

ト差出す手を取つて、兩人思ひ入れあつて

山三　ついした事の戯れに、思はず今宵は新枕。眞實其方を、宿に殘して

くに　お氣のむすぼれ、移るは廓の

山三　あの葛城は一夜妻。内に殘すは宿の妻。今より女房と

くに　エヽ、有り難うござりまする。……どうぞ末々

山三　オヽ、未來永々

ト手負ひと察し、思ひ入れ。

くに　エ。

ト嬉しげに手を合はす。山三門の戸をさす。途端、一時に木の頭。お國手を合せしまふ、ガツクリとなる。

山三　よう留守いたせ。

ト涙を隱し、思ひ入れ、よろしく、きざみ、拍子

幕

引附けると、清掻になる。兩棧敷へ、仲の町の茶屋々々の暖簾を引出し、吊り枝折り返しにて出る
幕の内、清掻のつなぎ、引返し。

大詰　吉原夜櫻の場

役名――不破伴左衛門。名古屋山三。長兵衛女房、お近。茶屋廻り、鷲の長吉。

本舞臺、三間の間、吉原仲の町夜櫻の景色、茶屋の門口望みあり、青簾、軒暖簾、櫻の吊り枝。よき所に大樹、四つ目垣に、枝垂れ櫻盛りの體。天水桶、たそや行燈、緣先きには、紋附き大提灯あり、賑かに幕明く。

ト矢張り清掻にて、長吉、茶屋廻りの形にて、臺提灯、金棒を引き、揚げ幕より本舞臺へ來り、東の揚げ幕へ入る。本釣り鐘鳴る。櫻ちら〳〵散る。河東めいたる唄淨瑠璃になり、揚げ幕より伴左衛門、深編笠、大小、雲に稻妻の羽織、衣裳。東より山三、深編笠、大小、雨に燕の羽織、衣裳にて出で來り、よき所へ兩人とまり、互ひに姿を見る事あつて、思ひ入れ。

伴左　遠からん者は音羽屋に聞け、近くば寄つて目にも三升の寬濶出立は、今流行の白柄組、通ひ廓の

山三　大門を、入れば忽ち、極樂淨土。

山三　歌舞の菩薩の君達が、妙なる御聲音樂は、まことに天女天下り、花降りかゝる仲の町、色に色あるその中へ、ごろつき組か雷の

伴左　これを知らずや、稻妻の、始まり見たり、不破の關。……せきにせかれて目關笠、ふられて歸るか、雨の鳥。

山三　濡れる心の傘に、塒貸さうよ、濡れ燕、濡れにぞ濡れし彼の君と

伴左　くらべ牡丹の風俗は

山三　下谷上野の山かづら、

伴左　西に富士ヶ根

山三　北には筑波

伴左　思ひ比べん

兩人　伊達小袖。

ト唄になり、兩人行違ひて、互ひに思ひ入れ。行違ひに兩人鞘當てる。唄切れる。伴左衞門、山三が鞘をキツと捕へる。鳴り物變つて、兩人思ひ入れ。

山三　刀の鐺捕へし御方。なんと召さるゝ。

伴左　これやこなたへ御免なれ。身はこの里へ通ひつめ、當世たゞら大盡と、人に知られて闇の夜も、吉原はかり月夜かな。殊に、夜櫻まばゆくも、咲き揃うたる仲の町、この往還を除けずして、なんで身共がこの鞘へ、武士の鞘當、挨拶さつしやい。

山三　そりや、此方より申す事。大道廣き廓の內。我が物顏の六法は、よしや男の丹前姿、模樣は雲に妻の、もしや噂の其許こそ

伴左　いま吉原に隱れなき、白柄組の寺西閑心、その名も高き富士筑波、心にちがへば闇雲に、拔けば忽ちこれ稻妻。

山三　その模樣とは事變り、雨の降る夜も雪の夜も、通ひ廓の上林、夜の契りも絕えずして、明くるわびしき葛城と、しつぽり濡るゝ濡れ燕。無法無體の行違ひ、除けて通すも戀の道。

伴左　そこを素直に通さぬが、白柄組の達師の意地づく。

山三　白柄組の隨市川、閑心どのとはおいやれど、慥かに不破の伴左衞門。包むとすれど物腰かつこう。

伴左　その聲音こそ覺えある、昔男の光る君、併し刃金は生鈍き、名古屋山三と見たは僻目か。

山三　面を包む目關笠、取つて貴殿の御面相。

伴左　こなたの面も覺ゆるため、マアその笠を。

　　ト手たかける。

山三　貴公の笠を。

　　ト手をかけ、兩人立廻つて、冠りし笠を兩方にて取り合ひ、顏を見て悔り、きつとなる。

伴左　思ふに違はぬ名古屋元春。

山三　さいふは不破の伴左衛門。

伴左　絶えて久しき面會に

山三　場所も多きに東なる

伴左　花の中なる花の頃

山三　こし折れ櫻、吉原に

伴左　よしや男の名古屋氏

山三　今の家名は寺西氏

伴左　折よく爰で

兩人　逢ひましたなア。

山三　その行違ひの鞘當が、緣となつたるこの場の出合ひ。して其許には、何ぞ用ばしでござつてか。
伴左　名古屋に用は別儀で無し。口數云はさず、其許の、馴染んで通ふ葛城を、身が合ひ方に貰ひたい。
山三　その儀でござらば、相成らぬ。一旦約せしあの女、たとへ刃金がなまればとて
伴左　イヽヤ、なまらぬ某が、刀にかけても葛城は、申し請けます、貰ひます。さやう心得、速かに
山三　貰ひかけられ、侍ひの、然らば貴公へ進上と、申したけれど、そりや成らぬ。
伴左　然らば斯樣申しても、承引なくば是非が無い。その時こそは看板の、雲に稻妻、劍の光り。
ト刀へ手をかくる。山三ちよつと留めて
山三　貴公の劍の稻妻の、その前かたに山三めが、身に降りかゝる濡れ燕、花の吹雪の仲の町。
伴左　色ある中にこの出合ひ。是非とも身共が
ト拔きかけるを留め
山三　決してならぬ。
伴左　ならぬとあれば、眞劍の
山三　相手になつて
ト兩方拔きつれ、立廻つて、キツと成る。誂らへの鳴り物、淸搔入り。兩人切り結ぶ。立廻りよき切ツ

かけに、向うより長兵衛女房お近、派手なる姿、衣裳、ぶら提灯を持ち來り、この體を見て、この中へ入り、兩方を留める事。兩人これにかまはず切り結ぶゆゑ、有り合ふ大提灯を取つて、双方の白刃を押へ、きつと見得。

伴左　いらぬ女の支へ立て。

山三　怪我せぬうちに、退いた〳〵。

ちか　イヽエ、退かれぬ、お二人さん。眞劍づくのこの出合ひ、わたしも常の女子なら、オヽ怖なんぞと色めかし、見て見ぬ振りが女の情。それが成らぬが持前の、水道の水で育つたお蔭。亭主は誰れぢや江戸ッ子の、先祖由緒も隱れなき、花のお江戸の花川戸、無理こじつけの長兵衛が、その女房の山の神、鬼の女房にきのつかぬ、生れながらもわたしが持前、劍の山の摘み草を、とめる女房は命づく。身は野晒しのしやれかうべ、あなめ〳〵に生えかゝる、その餅草に人知れず、雛の馳走に成田屋さん、今お一人は音羽屋さん。去年の顔見世深川で、仲直りして間も無いに、此いさくさはお二人さん、水道の水にさつぱりと、流してわたしに下さんせ。それも緣ある岩井の水、わたしが貰うたお互ひに、淸く流して、下さんせ。

伴左　すりや、其方は噂ある

山三　幡随長兵衛の女房の

ちか　お轉婆者のわたしが願ひ。お怪我の無いうち、この白刃

山三　引けとあるなら山三めは

作左　引く心なら、身共も共に

ちか　わたしを立てゝ

山三　爰を預けて

作左　白刃は此まゝ。

山三　イザ

作左　イザ

兩人　イザ〳〵〳〵。

ト引く事あつて

作左　拔いた刀を其まゝに、血を見ず納める、仕樣があるか。

ちか　こりや、尤もな其お詞。この場の遺恨聞かずとも、葛城さんの買ひ論から、事起つたるお二人樣。粋と通とが行き合へど、洗うて見ればこの里へ、通はぬ人が通ぞかし。わたしが亭主もこの程は、

世話するお方に濃紫、逢はす手前も様々な、狂言書くも戀の種。誰が始めけん買ひ論は、箱根手前に野暮だけと、化け物は無い世の譬へ。それを互ひにいひ募り、兎や角云ふは大きな野暮。粋と通とは其まゝに、別れた上にて心ある、女郎衆を口説いて色客に、なるのが矢ッ張り勝つた る中。お二人様もその通り。心を定めてこの道理、それ辨へて見やしやんせ。

伴左　イカサマ、云へばその通り。立つの立たぬは當座の利口。その通人を見習つて

山三　野暮は禁物、何事も、水に流るゝ吉原の、櫻と共に、遺恨は落花、散る花の

伴左　なれども揃つたこの白刃。武士が血を見ず、納めるは、刀の手前、侍ひの

ちか　掟が立たずば納める仕様。中へ入つた私が働き。お二人様の白刃と白刃。こりや兩方へ引分けて

ト山三の白刃を伴左衛門方へ廻し、伴左衛門が白刃を山三方へ廻し、兩方へ取違へ、兩人思ひ入れあつて

山三　山三が白刃を伴左衛門へ

伴左　身が白刃をば山三が方へ

ちか　取違へてもお二人の、御所持の鞘は矢ッ張り其まゝ。中ごの魂ひ取替へるは、いはば、この場の杯がはり。丸う納めるわたしが仲人。

伴左　イヽヤ、身共は浪人の、魂ひながらこの白刃、山三が方へは。

ト盜みし刀ゆゑ、迷惑のこなし。

ちか　それでは矢ッ張り、お心が、解けぬ樣子のあなたのお詞。是非とも中ごを

伴左　サア、そればかりは

山三　得心なくば白刃の納まり、血を見る心か。

ちか　それぢやによつてわたしが預り、亭主に變つて女房が計らひ、閑心さん、是非とも預けて下さんせ。

ト伴左衞門思ひ入れあつて

伴左　女ながらも長兵衞が、女房の詞、反故にもなるまい。然らばこの場で、この白刃を

山三　得心あらば、山三が白刃も

伴左　互ひに魂ひ取替へて

ちか　御遺恨殘らぬ　杯代り

伴左　そんなら鞘は

山三　兩方互ひに

ちか　御所持の鞘へ。

ト お近、鞘を取替へ、差出す。兩人思ひ入れあつて、納める。この時鞘の變りし白刃、しつくり合ふゆゑ、兩人取つて思ひ入れあり。

作左　納まり難き山三が白刃

山三　作左衞門が中ごも其まゝ

作左　寸尺少しも違ひなう

山三　しつくり合ふは

ちか　丸う納まるお互ひの

山三　丸に井筒の角なきやう

ちか　お頼みなくとも、亭主も承知。

山三　かねて噂も

作左　ヤ。

ト 思ひ入れ。

山三　杯代りの兩家の魂ひ、替りし鞘へしつくりと、陰陽揃ふ二振りの、その一腰は親人を、討つて立退く曲者が……さすればもしや、敵の手がかり。

ト伴左衞門立ちかゝるを、お留めて

ちか　サ、刀に掛けて、物事丸う

山三　面は解けても、心の中は

作左　解けぬは矢ッ張り葛城が

ちか　戀の遺恨の色事も

山三　胸の炎か陽炎の

作左　その稻妻の不破　名古屋。

ちか　互ひに不破の關越えて

山三　中を結ぶの名古屋帶、結び目かたき

作左　ヤ。

ちか　サ、かたき掟は大門の

山三　關は許さじ、肌ゆるされぬ

作左　何かといかい

山三　お世話の一禮。

ちか　ナニ、これしきに。……お二人様。

兩人　追つて、ゆるりと。

　　ト立ちかゝる。木の頭と共に本釣り鐘、櫻散りかゝる。お近會釋あつて

ちか　有り難うござります。

　　トこれをキザミ、二人笠をかぶる。本釣り鐘、早めたる淸搔にて、拍子幕引附けると、二番目の呼び、打込みになる。

幕

二番目　序幕

石濱八百善別莊の場
汐入堤非人小屋の場

役名 ——— 蘭蝶、實ハ白井篤市。扇蝶、實ハ白井權八。三浦屋小紫。三浦屋女房、お高。八百善女房、お吉。本庄助八。幇間、左吉。料理人、與吉。若い者、源助。藝者、お富。非人、段八。同、熊。同、べか助。同、おだん。同、おねぶ。同、どん。下女、お瀧。

本舞臺、三間の間、中足の二重、本緣側附き綺麗なる伊豫簾を掛け、上の方、九尺の亭座敷、明り

障子、好みの額を掛け、その左側に四つ目垣、連翹の盛り。手水鉢、雪見燈籠、舞臺前、山吹の上手板、青草のあしらひ。下の方、建仁寺垣。例の處、風雅なる枝折戸。すべて石濱八百善別莊の道具爰に古鐵買源兵衛、實は本庄助八、紺の脚絆、麻の財布を肩に掛け、秤と笊を持ち、古鐵屋の拵へ。與吉、前垂れ、煮方の形。源助、三浦屋の若い者、幇間左吉。お吉、八百善の女房の形、お瀧下女にて、あたりを掃除して居る。大拍子、流行り唄にて幕明く。

助八　おかみさん、今日は何もござりませぬか。

たき　與吉さん、慥か蠟燭の流れがあるぢやござんせぬか。

與吉　オヽ、古鐵屋さん、お前の來るのを待つて居た。

　　ト後ろより紙袋に入れし蠟燭の流れを出し

　まだそんなに溜らねえが、これを持つて行きなせえ。

助八　ハイ、有り難うござります。常住たゞお貰ひ申して、お氣の毒でござります。その代り、わたしが脇で掘出して來た刺身出刃がござります。これをお前に差上げませう。

與吉　そいつは有り難い。おれも今では煮方をして居るが、これでも何處かへ行けば板へ直るに、道具をほつ／＼拵へにやアならねえ。有り難い／＼。

ト刺身庖丁を手拭へ包み、腰に挿す

源助　カウ、蠟燭の流れや紙屑を、たゞ遣るのは惜しい物だ。おらア三浦屋に不寢番をして居る時分は、これが給金だから。

助八　源公。三浦屋の三助さん。なぜ此方へ來て居なさる。

源助　花魁と一緒に來やした。

きち　小紫さんが病氣に就いて、出養生にも、三浦屋の別莊は、氣が晴れいで惡いゆゑ、此方の寮へ二三日來て居なさんす。今日は又何やら小紫さんが、志しの日ぢやというて、藝者衆を呼んで、振舞ひぢやわいなア。

助八　見ますれば、お料理は魚類の樣子。ひねつた御法事でござりますね。

左吉　八百善の精進料理は、皆樣がよく御存じだから、今晚はひねつて、魚づくしで振舞ふのサ。

源助　江の島に逗留して居るやうなもので、斯う魚で責め附けられては、眞に苦しい譯だね。

左與　違えねえ。ハヽヽヽヽヽヽ。

ト流行り唄になり、奧よりお高、三浦屋の女房の拵へ、藝者お富と禿、あとより判人善六出て來り

たか　お吉さん。お前の所のお庇で、あの子の病氣も餘程見直して來ました。

きち　オヽ、おかみさん。今日は又何やらお志しの御法事。内の者へお志し、有り難うござります。花魁のお氣の晴れるやう、御遠慮無しに、お遊びなさるがようござります。

たか　イヤモウ、内より却つて心易う、我がまゝ云ふも養生のため。わたしまで氣が晴れましたわいなア。

善六　わしも花魁の御法事に呼ばれ、魚類の御馳走で腹が一ぱい。次手ながら申しまする。庵崎の蘭蝶さまが身請けの相談。其お話を致しませうと存じて參りました。

とみ　その蘭蝶さんは、花魁が嫌うてお出でなさんすゆゑ、その話をしだしたら、又病氣にさはらうぞえ。

たか　それ〳〵。兎角勤めの意氣張りで、お客を振るが吉原の癖。抱へた身では意見せにやならぬ所なれど、そこが傾城の張りで、今吉原で一二を爭ふ、上林の葛城か、三浦屋の小紫と世間の評判。

善六　左樣でござります。その葛城さんは、山三さんとやらに大惚氣。それを寺西とやらいふお客が、引張り合うて居るとの事。

とみ　ちやうど花魁と扇蝶さんのやうなもの。

たき　さしづめ、蘭蝶さんが寺西さんでござんす。

たか　サア、それ程派手を爭ふ全盛の小紫に、一日でも寢られては、まづ立入つた事ながら

左吉　左樣でござります。私しどもまで勘定が違ひます。

與吉　なんでも花魁の氣に逆らふ事は、云はぬがようございます。
善六　それでもお前、商賣づくの事、是非得心させにやアなりますまい。
たか　サア、それも餘程好い折を見て、機嫌の好い時、話し出す事もあらうわいの。
善六　左樣ではございませうが、今日、その蘭蝶さまが、爰へお出でなさる筈でございます。
源助　それでは又大變、花魁が癪でござんす。
きち　その癪の起らぬやう、蘭蝶さまのお出なされぬ其先きに、今朝花魁に頼まれた……お瀧、かの物を。
たき　ハイ〳〵。これでございますか。

ト懷より文を出す。

きち　今日鳥越まで來てお出でなさる筈。この文を……コレ、ゆかりどん。

ト禿を呼んで囁く。

ゆか　そんならこれを、扇蝶さまに
きち　早う連れ申して來な。
ゆか　アイイイ。

ト駒下駄を穿き、禿向うへ入る。

たか　ほんに、こりや好い思ひ附き。扇蝶さんが來なさんしては、あの子の機嫌も直るであらう。

左吉　今日は、扇蝶さんと蘭蝶さんと、二人のお客を。わしらは、ます／＼、開運だね。

源助　金儲けのひるとなりやした。

助八　そんならお客は扇蝶、蘭蝶、お船はギッチラコ、は如何でござります。

左吉　南無三。洒落れの先陣をやられた。

とみ　コレ、源助どん、花魁が書いた卷、山谷の毘沙門様へ納めて來てくれと云はしつた。ちよつと持つて行つておくれ。

源助　これは近頃お情けない。この金儲けを見捨てゝ、どうも。

與吉　ハテ、慾張つた男だ。そんなら斯うしなせえ。あの古鐵屋さんに頼んでやんなせえ。

源助　これは、ちやうど幸ひ。先生、頼む／＼。

助八　そんなら山谷の毘沙門様へ、上げればようござりますか。モシ、規模がありやせうね。

源助　云はずと知れた事サ。

與吉　これは覺束ない。

たき　モシ、花魁の御法事だから、一つ飲んで行きなさんせ。

きち　ほんに、よう氣がついた。臺所へ行きなさんせ。

助八　左樣なら、御馳走になりやせう。

善六　わしは蘭蝶さまのお出でまで待つて居ませう。

たか　マア／＼、話は御無用ぢやぞえ。

きち　おかみさん、お湯でもお召しなさいまし。

たか　ほんに、さうしませう。

とみ　わたしも一緒に。

きち　サア、どなたも

與吉　マア、お出でなされまし。

ト流行り唄になり、この人數下座へ入る。直ぐ本釣り鐘になり

〽鷄が啼く吾妻の水に濃紫、花の影汲む流れの身にも、かたい心で石濱の、鷗を盟ひに角田川

ト此うち正面の簾をぢり／＼巻き上げる。内に小紫、錦の袷蒲團に寄りかゝり、派手なる切り繼ぎの肌着、平括けの締め帶、黒襟の座敷着、さゝげの島田、紫縮緬の鉢卷したる拵へ。馬盥に杜若を生げて居る見得。思ひ入れあつて

小紫　いつしかと、法の臺にあらねども、手向けに生けし杜若、この世を去りし父さんの、しかもその日の廻り來て、猶忘られぬ果敢ない御最期。忘れぬ中に戀しいは、名は由緣ある紫さん。色も變らぬ言の葉を、勤めのうちの樂しみと、嬉しい中にも、或ひは又、逢はねば辛き物思ひ。何かにつけて世の中の、苦界に果は、無いわいなア。

〽君を待乳の山々嬉し、文の橋場に紅附けて、これが由緣と思はせぶりに

トこの文句にて向うより權八、大小、着流しにて、文を見ながら出る。禿ゆかり、權八の袖を引き來り、花道にて

權八　「手に摘んで、いつしかも見ん紫の、根に通ひける野邊の水草。」紫式部が歌の心、身に當りたるこの通ひ路。長兵衞どのゝ思はくも、外に見なして吉原の、晦日も月はあるものを、戀の闇路に迷ふこそ、身は煩惱の、犬ぢやなア。

ゆか　紫さん、早うござんせいなア。

權八　ハテ・せわしない。行くといふに。

〽假名で用事の一筆に、つい乘せられて渡し船、棹の雫や濡れて來ぬらん。

トこれにて權八、禿に引かれ、舞臺へ來る。

ゆか　花魁、扇蝶さんがござんしたわいなア。

ト小紫思ひ入れあつて、二重より下りて來り

小紫　紫さん、ようござんしたなア。お前を待つて、居たわいなア

權八　これは花魁、美しい杜若の投げ入れ、御風雅な事なア。

小紫　何ぢやぞいなア。お前に見せるは、恥かしいわいなア。

權八　イヤ〳〵、流石は全盛の花魁、根〆めの臘梅、心の立てやう、お手際の程、感心々々。心は立てゝも傾城の、心は冷たき水の力。今に枯れやうも知れぬわいなう。

小紫　こりや、お前、味な所からひぞりなさんす。わたしの心は眞直に、立てゝも立たぬ流れの葉。客衆はどんな大盡の、その冠り葉の襟に附く、小紫ぢやござんせぬ。

權八　なんぼ其やうに、活けの手際でくろめても、仇附きな花配り。身の薄端なわしらには、その猪口に乘せられて、釣り花活けにあはぬうち、思ひ切ッ立て、ずんど切り。オヽ、怖い事〳〵。

小紫　エヽ、その口合ひ置きなさんせ。いつぞはお前に、聞かうと思ふ事がござんす。

權八　何なりとお尋ねなされ。

小紫　お前の附けて居なさんす、丸に井筒の紋所。そりやお前の定紋でござんすかえ。

權八　何を問ふかと思うたら、藪から棒に、何でこれを。

小紫　サア、ちつとわたしも、心がゝりな紋どころゆゑ。

トこれにて權八、ギックリと思ひ入れあつて

權八　イヤ、こりやわしが紋どころぢや無い。身貧なわしが餘所から貰はしやんしたといふやうな事。そんなら、どこぞの色さんに

小紫　マア、そんなものよ。

權八　わたしがちつと廓に居ぬ内、よい幸ひに、お前は、外の立派な花魁と、お樂しみでござんせうがな。

小紫　イヤモ、樂しみの段では無い。わしが眞實惚れたといふ花魁がござんすか。ソレ、見やしやんせ。油斷も隙もなるこつちや無いわいな。そりやマア、どこの女郎衆でござんす。

權八　どこであらうか。其方、當てゝ見や。

小紫　待ちなさんせ。仲の町で仇附いたものは、山本の勝山さんか。

權八　イヽヤ、違うた。

小紫　そんなら、仙臺屋の陸奥さんか。

権八　それでもない。わしが惚れたは、京町の
小紫　アノ、京町の
権八　三浦屋の太夫職。
小紫　そんなら内は、三浦屋で
権八　二とは下らぬ
小紫　花魁は
権八　小紫。
小紫　そんならその小紫づらは……わたしぢやわいな。
権八　其方に眞實
小紫　アノ、お前が
権八　のろい奴。
小紫　きつウい嘘の。
権八　大誓文。
小紫　それが定なら、わたしもお前に、たんと用があるわいな。



権八　して、その用は。

小紫　サア、その用は……この用ぢやわいなア。

ト ずつと寄添ふ。

権八　ハテ、結構な御用ぢやなア。

小紫　エヽ、憎らしい。

権八　可愛らしい。

小紫　何ぢやぞいなア。

ト ひつたり寄る。この時、奥より與吉、源助、左吉出て

左吉　不義者見附けた。

三人　そこ動くな。

ト 権八、小紫、ほぐれて思ひ入れ。

左吉　二人とも、金時さまの御前へ引ッ立てる。

ト かゝる。奥よりお吉出て來て、左吉を引きのける。左吉一人にて中返りする。

きち　紫さん、ようお出でなされました。花魁がお待ちかねでござりました。

小紫　お吉どん、あの人は。

きち　左吉さんでござります。

與吉　オイ、左吉さん、どうした〳〵。

ト左吉起上がり

左吉　アイタヽヽ。花魁と紫さんが、あんまり氣の惡い事をしたゆゑ、役者の氣にてやらかした。所へお吉さんが出たゆゑ、見事に中返りをしようと思つて、腰の骨をしたゝかくらはした。

與吉　左吉さんには打つて附けの役だ。

左吉　これは御挨拶。

きち　役者氣取りはよいが、金時さまとは、又あんまり。

左吉　これはあやまり。

權八　思ひ附きとは知らずして

小紫　ほんに恟りしたわいなア。

權八　サヽ、酒にせい〳〵。

小紫　お吉さん、モシ。

ト お吉に囁く、お吉頷き

きち　お瀧や〳〵。

ト 奥よりお瀧、銚子、肴を持ち出る。お吉、お瀧に囁く。お瀧頷き、奥へ入る。

左吉　サア、わたしが始めまする。

源助　飲む事といふと、直ぐに乗出すの。

與吉　モシ、お富ちやんも來るぢやござりませぬか。

きち　今、呼びにやつたよ。

ト 奥よりお富、お瀧出で來り

とみ　紫さん、ようお出でなされました。

たき　ハイ、おかみさん。

ト 紙包みの金を渡す。

きち　サア、めい〳〵に渡しませう。旦那と花魁だよ。

ト めい〳〵に祝儀を遣る。

皆々　有り難うござりまする。

左吉　サア、大きに浮山町。これからが酒だ。飲めや、唄へや、わい〳〵のわい。

ト流行り唄になり、向うより四手駕籠一挺、段八好みの形にて附添ひ、出て來り、直ぐに舞臺へ來て

段八　お旦那、石濱の別莊へ、參りましてござります。

ト駕籠の垂れを上げる。内より蘭蝶、實は白井彌市、羽織、大小、眼病の拵へにて出る。駕籠舁き引返して、花道へ入る。

彌市　案内いたせ。

段八　畏りました。……賴まう〳〵。

きち　ハイ〳〵、どなたでござります。

ト門口へ來り、彌市を見て

ヤ、お前さんは

彌市　小紫を身請けの客。卽ち庵崎蘭蝶でござる。

權八　ヤ。

ト思ひ入れ。皆々折わるいといふこなし。權八ヅイと立つて、奧へ行かうとする。小紫留めて

小紫　ハテ、大事ござんせぬ。爰にチツとして居やしやんせ。

彌市　ハア、小紫もこれに居るな。

小紫　蘭蝶さん、又ござんしたかえ。

彌市　御身に戀慕の庵崎が、切なる戀も陸奥の、その錦木にあらねども、又ぞろ爰へ

ト　お吉、小紫の顔を見る。小紫通してもよいといふ仕方する。

きち　マア、此方へお通りなされませ、

彌市　然らば、許しやれ。

ト　彌市目の見ゆる振りにて、ズツと通り、硯蓋の上へ坐らうとする。

きち　アヽ、モシ〳〵、そこには硯蓋がござります。

彌市　承知々々。

ト　探りながら、片脇へ坐る。

左吉　時に、旦那、花魁とさう並んでお出でなさる所は、誠にお雛様のやうでござります。

ト　權八に云ふ心。彌市、我が事と心得

彌市　小紫が身が側に居るを、好く似合うたと申すのか。愛い奴〳〵。

ト　紙入れより金を出して

ソレ、褒美の肴、

ト遣る。

左吉　これは飛んだ間違ひで、思はぬ開運。有り難うございます。

段八　旦那、あなたの側には小紫は居りませぬ。美しい若衆の側に。

彌市　なんと申す。

ト思ひ入れあつて

イヤ、それも存じて居る。その若衆も、大方胡散であらう。コリヤ、其方の名は何と申す。

權八　身共が家名は

ト云はうとする。

小紫　ア、モシ、蘭蝶さん、この若衆さんは、アノ、按摩さんでござんす。

ト權八思ひ入れ。小紫、權八の膝にもたれ

モシ、按摩さん、肩先きの所を、もそつと強う揉んで下さんせえ。

ト云ひながら、こなし。

段八　アレ〳〵、あの若衆が小紫を

彌市　ハヽア、さては小紫が病氣との事。コレ、按摩どの、隨分念を入れて、揉んでやつて下され。

權八　イヤモウ、念を入れる段ではござりませぬ。力一ぱい、斯うして

小紫　嬉しうござんす。もそつとしつかり。

權八　斯うか〳〵。

トこなし。段八これを見て

段八　アレ〳〵、按摩を揉むのか。角力を取るのか。エヽ。

彌市　それ程に身を入れて、揉まねばきかぬ。身共も後で、揉んでもらひたいものぢや。

權八　お客の座敷に無遠慮な按摩取り。わしはこれから奥へ行て、殘りの療治は……小紫……ではない、

モシ、花魁。

小紫　そんなら先きへ

權八　ドリヤ、あちらで待ちませうか。

ト奥へ入る。

皆々　あの按摩さんの代りに、わたしどもが揉んで上げませう。

彌市　イヤ〳〵、按摩よりは此方、酒に致さう。小紫も一つ過しやれ。

小紫　イエ、わたしや酒より、按摩さんの方が好きぢやわいな。
彌市　ハテ、きつい按摩に惚れやうぢやなア。
きち　花魁は、あの按摩さんでなければ、夜が明けぬわいなア。
とみ　側から見ても羨ましい程、まるで色事のやうでござります。
彌市　ハテ、それは羨ましい。身共も按摩になりたいものぢや。
たき　按摩はいつそ、盲目の方がようござります。
彌市　ヤ。

トぎよつとする。

きち　サア、一つお上がりなされませ。

ト杯を出す。彌市見えぬゆゑ、うつとりとして居る。

とみ　モシ、わたしがお酌を

トこれを聞き、彌市、杯を探り取つて受け、一つ飲み

彌市　サ、小紫、飲みやれ。

ト誰れも居らぬ所へ献す。小紫笑ひながら、彌市の上の方へ廻る。

きち　花魁は爰に居てゞやわいなア。

ト彌市嬉しき思ひ入れ。段八ムツとして

段八　わいら、最前から、おらが旦那を馬鹿にひろぐな。この上は、この奴めが料簡しない。

ト立ちかゝるを、皆々止めて

左吉　ハテ、奴さん。野暮を云はずと、奥へ行て

與吉　氣の詰らぬ酒でも飲みなせえ。

段八　でも、あんまり。

トまた立ちかゝるを、三人とめて

三人　ハテ、あゆびなせえ。

ト無理に段八を連れて、奥へ入る。

小紫　ドレ、わたしも奥へ。

ト行かうとする。彌市探り寄つて、小紫が裾を捕へ

彌市　小紫、待ちやれ。傾城は、情けを商ふものなるに、さりとては情けない。この蘭蝶が云ふことを、うるさからうが、一通り

小紫　イエ、聞きたうござんせぬ。情けも義理も辨へぬ、我が儘な小紫。お前、愛想が、盡きようがな。

彌市　イヽヤ、盡きぬ。御身が嫌へば嫌ふ程、おりや可愛うて〳〵、どうもかうも堪へられぬ。勤めのうちなら、間夫とやらに、立てる義理もあらうなれど、根曳き致して宿の妻、身儘にならはその身も歡樂。苦界は同じ島原の、太夫の中に咲く櫻。我れは廓の榮種さへ。どうだ、小紫、返事が聞きたい。

小紫　鴨川へ、放して見たい都鳥。儘ならぬものでござんす。

彌市　すりや、どうあつても不承知か。

小紫　身請けと聞けば、死ぬるが高。死んだ體をどうなりと。

ト振り切つて行かうとする。又、彌市裾を捕へ

彌市　そりやつれないぞや、小紫。

ト屹度云ふ。變つて合ひ方、蛙の聲になり

何を隱さう、蘭蝶は、其方を戀に、この程より、兩眼ともに、そこひの病ひ。

小紫　エ、そんならお前は

彌市　戀に目無しの庵崎が、思ひ染めたは先月の、廿日の夜半の大門口、客を送りのその風情。見るに

煩惱、さりながら、亥中の月の朧にも、其方の顔がありありと、見ゆると思ふ戀煩ひ。傳手を求めて、やうやうと、玉の臺に入りながら、枕も一つ、いたづらに、夜を明かしたは幾度か。思へば武士のあるまじき、心は千々に結ぼれて、盲目となつたるこの蘭蝶。アレ、庭に啼き立つ蛙の聲。いゝいゝみずにかはずに、この思ひ、あるまいものを小紫、不便と思はゞ、一夜さの、情けを賣つてたもいなう。

ト小紫思ひ入れあつて

小紫　嬉しうござんす。其お心を聞くからは、義理にも惚れねばならぬ所、お前の心に從はぬその譯は

彌市　それも疾くより存じてある。紫の扇蝶とやら、其方に深い譯ある事。

小紫　サア、それ知つてなら、猶の事、わたしが事はふツつりと

彌市　思ひ切らるゝ程ならば、盲目とまでは、ならぬわやい。

小紫　それでも、わたしや

彌市　たつて嫌だとあるならば、色も戀も打捨てゝ、縛つてなりとも抱いて寢る。是非とも返事を

小紫　ぢやというて。

ト逃げうとする。彌市、無理に小紫を捕へ、抱かうとする。この時、薄ドロドロになり、差し金附きの

蛇出て、彌市にまとふ。

アレ、蛇が

ト恟りして飛退く。彌市ちやつと懐を押へ

彌市　又もや、一物。

小紫　オヽ、怖。

ト行かうとする。彌市捕へるを、振り切り

知らぬわいなア。

ト唄になり、小紫奥へ入る。彌市思ひ入れあつて、此うち、助八後ろへ出かゝり、様子を窺つて居る。

彌市　斯程に云へど、心強き小紫。可愛さ餘つて、憎さが百倍。もうこの上は……何をいうてもこの眼病。とはいへ、此まゝ

ト屹度なり、奥へ行かうとする。有り合ふ莨盆にけつまづき、神妙剣を落す。ドロ／＼になり、また小蛇出る。彌市懐を探り見て、一巻落したゆゑ、あたりを探る。この内、助八ソッと出て、右の一巻を取る。彌市、探りながら助八の裾を捕へ

おのれ、曲者。

助八　モシ〳〵、曲者ではござりませぬ。あなたのお落しなされましたは、この品でござりませう。

ト最前の夏書の巻と摺り替へ、彌市に渡す。彌市これを取り

彌市　如何にも、大切なこの品。して、其方は。

助八　この家の下男でござります。庭を掃除のこの所に、落ちてござりましたゆゑ、ツイ、取上げましたのでござります。

彌市　それは大儀。

ト一巻を懐中する。

助八　左様なれば、しつかりとお渡し申しました。

ト助八ニツコリと思ひ入れあつて、向うへ入る。

彌市　いつぞや不思議に手に入りし神妙劍。こりやこれ、正しく白井兵左衛門が預かりの品。はかなき最期と聞くからは、この出所より詮議したなら、敵の行くへ、いはゞ、血筋に

ト云ひさす。この時、上手より權八窺ひ出て、ツカ〳〵と彌市が側へ寄り、懐中へ手をかける。彌市、その手を拂ひ退け

彌市　身が懐中へ手を入れし、其方は何者だ。

權八　サ、身共は

彌市　さういふ聲は最前の

權八　按摩取りと申すは僞り。貴殿の心をかけられし小紫が深間、紫の扇蝶と申す、尺八指南の、かすかな世渡り。

彌市　すりや、小紫の間夫とやら。

權八　いかにも左樣。

ト彌市、物云はずに行かうとする。

アイヤ、暫くっ御立腹は御尤も、お腹立ちの其許へ、申し兼ねたる拙者が願ひ、聞届けては下さるまいか。

ト合ひ方。

彌市　そりや、何を。

權八　外の事でもござらぬが、ちよつと見かけた貴殿の懷中。

ト彌市の懷中へ手をかける。彌市その手を拂ひ、右の一卷を出して

彌市　この一品が欲しいといふのか。望みとあらば、賣りませう。

權八　ヤ。すりや、その品を。

彌市　劍術秘法の神妙劍。武士たるもの、懇望いたすこの一品。さぞ欲しからう。異議なく貴殿へ、お讓り申さう。……と申したら、よからうが、罷りならぬ。外の人なら、兎も角も、小紫が深間とある、扇蝶なれば猶以て、罷りならぬ。否でござる。よし又賣らうと申したところが、價が高い。尺八指南の世渡りで、虚無僧の手の内を、貰ひ溜めた端錢では買はれぬ品。無駄話しを致さうより、こりやマア、よしに致さう。

權八　貴殿が所持の品ゆゑに、所望いたせば價の金。それ程の覺悟は

彌市　覺悟とあらば、賣りませう。則ち價は五百兩、耳を揃へて今渡しやれ。

權八　すりや、その價は五百兩。

彌市　金があるか。

權八　サ、それは。

彌市　あるまい。そりやこそな。口は立派に申せども、金の無いのは首の無いにも劣つた事。價の金が無いゆゑに、身が懐へ手を入れて、盜む心か。コリヤ、ヤイ、晝の鳶も四十八鷹、女郎の部屋の睃め鳥。客の比翼の枕探し、盜みのいろは、果は啄木鳥、留り木に、首の留るを見るやうな。ハ、

ハヽヽ。

ト権八思ひ入れあつて、刀をスラリと抜く。左の手に持ち、彌市の目先きへ突出し

權八　浪人しても嗜みの、價の金は鍛へし刃金。小紫が意趣を根葉に持ち、身共へ過言の庵崎蘭蝶。器の小さいお身達には、武士の所存はえゝ知るまい。女童の遺恨はさておき、申し懸りしその一品。樣子によらば、互ひの身の上。返答おしやれ、庵崎蘭蝶。

ト屹度云ふ。彌市思ひ入れあつて

彌市　流石は扇蝶。大丈夫の魂ひ見屆けた。返答いたす。……マヽ、納めさつしやい〱。

ト探り見て白刃に觸るゆゑ

イヤサ、納めさつしやい。

ト屹度云ふ。權八思ひ入れあつて、悠々と刀を納め

權八　然らば右の一品を

彌市　交易いたさう。

權八　なんと。

彌市　恥かしい事ながら、ぞつこん惚れた小紫、武士の意氣地も糸瓜の皮。身を捨てゝ口説いても、お

てまへといふ間夫があるゆゑ、身が心には隨はぬ。云ひ交した小紫を、身共に身請けさして下さらば、この一品は其許へ、たゞ進上申さう。

權八　よく〳〵思ひ詰めたその一言。白痴らしい事ながら、此方とても末始終、云ひ交したる小紫、差し當つたる貴殿の望み、身共が望みも叶へて欲しさ。小紫さへ其許へ、異議無く渡したその時は

彌市　一言と云はず、この一品、今にも貴殿へお渡し申す。

權八　併し樣子の變らぬうち

彌市　後とも云はず

權八　今こゝで

トこの時奧にて

善六　サア〳〵、花魁、お出でなさいまし。

ト合ひ方になり、奧より善六、嫌がる小紫の手を引き、お高、お吉、段八附いて出で來り

申し、花魁、なんぼお前、我が儘を云うても、お前の出世になる事だ、是非得心して、蘭蝶さまの方へ行きなさせえ。

小紫　どうあつても、わたしや、否でござんす。

善六　おかみさん。これぢやァ濟みませぬ。こりや困つたものでござります。どうしたらようござりませう。

たか　どうといふたら、辛い苦界の其うちにも、せめて末はこの人にと、思ふ樂しみは有りうち。それに、あの子の氣の濟まぬ所へ、なんぼ慾得でも、どうも勸めにくい。ナア、お吉どん。

きち　左樣でござります。そしてマア、云ふに云はれぬこの場には、扇蝶さんも居てなれど、たとへ何方がどのやうに云はうとも、花魁の氣質では、嫌と云ふのも、こりや、尤もでござんす。

善六　コレサ、お前がたが、其やうな事を云つちやァなりませぬ。猶々それでは、花魁が

小紫　イエ、誰れが何と云うとも、わたしや、主より外の男は、嫌ぢやわいなア。

ト權八の側へ來て、思ひ入れ。

權八　イヤ、小紫。由なき我れゆゑ其方の身の、出世の邪魔と思ふゆゑ、わしはふツつり諦めた。思ひ直して、蘭蝶どのゝ方へ、行きやらずばなるまい。

小紫　エ。……そりや、なぜでござんす。

權八　サア、其方の心を云うて見ようなれば

ト最前の小紫が活けし馬盥の杜若を持ち來り

小紫　この馬盥の杜若。

小紫　エ。

ト合ひ方になり

權八　今更云ふも愚かなれど、去年初めて燈籠の、灯影にちよつと見るよりも、初手は一度か二度の月、長兵衛どのゝ情けにて、深うなつたる二人が仲。其方の名にも由縁ある、濃き紫の杜若、水を注されて退去りも、いはゞ其方は馬盥の、その廓屋に遊びの女。いつしか餘所に手活けぞと、恥辱にならぬ其うちに、身共の方より紫の、色も變りしこの活け花。

ト馬盥を打返し

小紫　そんならお前は、アノわたしに覆水、盆に、返らぬ心。

權八　愛想が盡きた。

小紫　そりやマァほんまに。

權八　ふッつり思ひ、切つてたも。

彌市　コレ、あれを聞いたか、小紫。なんぼおぬしが惚れて居ても、男の心と秋の空、氣拙い男に心中

立てゝ居ようより、この蘭蝶が女房になれば、活計歡樂。
段八　左樣でござります。ひつてんな浪人者に、心中立てるは今流行らぬ。名を取らうより、得の世の中。
善六　お前がうんとさへ云へば、側の者まで皆仕合せ。扇蝶さんにくツついて居ちやァ、お前がむしり取られるばかり。とつくり思案をして見なせえ。
小紫　イエ〳〵、思案も何もいらぬわいなア。たとへしがないお方でも。惚れたに高下はござんせぬ。云ふに云はれぬわたしが身の上。大事な願ひあればこそ、見かけて惚れた扇蝶さん。まだその事も明さぬ内、主に愛想を盡かさるゝ、わたしや覺えはござんせぬ。そりや胴慾でござんすわいなア。
權八　心の底まで明かさぬうち、切れてしまへば、念も殘らぬ。
小紫　イエ、切れる事は否でござんす。
彌市　切れるが否なら、身請けは止めて、この一品。
ト懷よりチラリと出して見せる。權八思ひ入れあつて
權八　イヽヤ、愛想の盡きたる女、どのやうに慕ふとも、未練はござらぬ蘭蝶どの、其許の御勝手次第。
小紫　イエ、わたしやお前に嫌はれても、一旦嫌と云ひ通す、お方の所へどうしてマア。この儘お前に別るゝなら、いつそわたしが命を捨てゝ

彌市　死ぬほど嫌なら勸めはせぬ。その代りにはこの一品。
　　　　ト見せびらかす。
權八　サア、それゆゑにこそ、小紫。飽かぬ別れもこの一枝。紫は、朱を奪ふの譬へもあり。
　　　　ト小紫に目で知らせ
　　得心なさば、某も
たか　心有り氣な扇蝶さんの詞の端。
きち　貞女を捨てし讀本の、常磐の心で、モシ、花魁。
たか　嫌でも、得心せずば、なるまいがの。
小柴　そんならわたしが得心して、身請けさるれば、主の爲に。
善六　主の爲よりお前の爲、人に義理があるものかな。
段八　貧乏神をやめにして、大盡の奥樣に、なる方がよからうぜ。
權八　この身を貶するその詞。勝つ方守るが、こりや當世。
彌市　望みの品が欲しいゆゑ、押し附け業の愛想づかし。氣拙いながら小紫さへ、得心いたした上ならば、身請けの代は五百兩。

ト二幕目の金を出す。

善六　お金さへ速かなれば、たとへ花魁がどのやうに申しましても、得心してあなたの方へ、先づ、この金は

ト取りさうにする。

たか　コレ、待ちやれ。あの子も得心せぬ上に、抱へたわしさへ挨拶せぬ内、その金取つて、どうせうと思やる。

善六　でも、お前、大枚の五百兩。時節柄ゆゑ、ちつとも早く

たか　ハテ、差出る人ではあるぞいなう。

ト小紫の側へ寄り

其方の心には濟むまいけれど、差かゝつたるこの場の納まり、わが身はマア、どうせうと思やるぞ。

小紫　我がまゝ氣儘の小紫、叱るところを深切に、有り難いおかみさんのお詞。思ふ男に引き別れ、嫌なお人に請け出されるも、これが苦界でござんせう。

たか　そんならわが身は、得心か。

小紫　推量して下さんせ。

きち　花魁、出來ました。それでこそ、この場の納まり。
善六　相談極れば、善は急げ。證文卷いて蘭蝶さまへ。
たか　廓の名殘、朋輩へ、暇乞ひやら、何やかや。一先づ、廓へ
きち　蘭蝶さまも共々に、今宵は一先づ、
小紫　イエ〳〵、生中時が延びたなら、未練が殘つて……とても行くなら、今宵の内に
彌市　それ〳〵。寸善尺魔の無い内に、爰から直ぐに、
善六　花魁連れて御一緒に
段八　汐入村の夜の景色、二挺並んで相合ひ駕籠。
彌市　日頃の本望、今この時。
善段　エヽ、おめでたうございます。
權八　身請けが濟めば、約束の
彌市　この一品は、直ぐさま御身へ。
　　ト渡す。
權八　この品ゆゑに、小紫

小紫　思ひがけない今宵の身請け。覺悟極めて行く心。少しは可愛いと

權八　コリヤ。何事も、この胸に

彌市　明かして云はれぬ血筋の緣。

權八　ヤ。

彌市　サ、緣なればこそ、

權八　義理に迫つて

小紫　思ふに別れ

彌市　思はぬ身共へ

小紫　添ふも、緣づく。

權八　戀の敵か。

彌市　金が取持つ今宵の身請け。ア、移り變るは

ト兩人思ひ入れ。

權八　色ぢやなア、

ト唄になり、權八ヂツと思ひ入れ。彌市こなし。お高、お吉、段八、善六、附添ひ、皆々奥へ入る。權

八殘り

エヽ、忝い／＼。日頃尋ねし神妙劍、思ひがけなく手に入りしも、小紫があつたゆゑ。飽かぬ別れも得心して、行つてたもつた、忝い。何はともあれ、この一品

ト右の一品を開き見て、恟りして

ヤヽ。こりや神妙劍と思ひの外、まつかな似せ物。……ムウ。さては小紫を引き上げうばつかりに、この扇蝶を深い所へ、やつたのぢやなア。最前よりの憂き恥も、神妙劍が欲しいばつかり。もうこの上は、あの蘭蝶。歸りの道は汐入堤。土手に待ちうけ、先きへ廻つて、この欝憤

ト白刃を拔き、きつと思ひ入れあつて、上の方の水鉢にて、これを濯ぎ、草履にて白刃を拭き

おのれ、蘭蝶、

ト右の草履を打捨てる。これを木の頭。權八無念の思ひ入れ。刻みにてよろしく拍子　幕

禪のツトメにてつなぎ、知らせにつき、鳴り物變り、幕の外へ本庄助八、以前の形にて出る。跡より非人、べか六、同、熊、附き添ひ、出て來り

熊　モシ、旦那。して私しどもへ

二人　頼みといふは。
助八　外の事でも無いが、三浦屋の傾城小紫を身請けの客、この汐入を通る筈。その客の蘭蝶といふ者、おれがちつと恨みがある者。それゆゑわいらを頼む程に、その蘭蝶を殺らしてくれろ。
熊　モシ、その小紫を身請けの客は、わたしどもが知つて居る、元は因州とやらの浪人との事。
助八　さてこそおれが推量の通り。して、わいらは、どうして身許を知つて居る。
熊　その蘭蝶といふのは、モシ。
ト助八に囁く。
助八　ムウ。そんならわいらの
べかたとへ頭であらうとも、金との相談。ナア、熊。
熊　それ〴〵。とつくり素性を糺した上
助八　首尾よくやつたら、金はわいらが望み次第。
二人　随分承知いたしやした。
助八　必ずぬかるな。
二人　そんなら先きへ行きませう。

ト兩人は幕の内へ入る。助八殘り、以前の一卷を出し

助八　先刻、夏書の卷き物と、摺り替へたこの一卷。こりやア慥かに神妙劍。あの若衆めが、跡で見て、蘭蝶を憤り、同志討ちさせれば二人もろとも。何れか一人は親の敵、權八に違ひない。手も濡らさずに敵討ち。この助八が出世の小口。それで行かずば、賴んだ非人、これで二人を押しかたづけ、小紫はおれが引ッ浚つて、又も金。こいつはうまいわえ。

ト獨り喜び、幕の引附けへ入る。これにて、知らせ直る。

本舞臺、三間の間、高足の土手。後ろ黑幕。正面藪疊。上の方、少し寄せて蒲鉾小屋。土手の下、上の方に、松の立木、その脇、庚申塚、松の吊り枝。すべて汐入堤の道具。日覆より月出て居る。土手の上に、おだん、おねぶ、女乞食、以前の熊、ぺか六及びどん、同じく非人にて、皆々焚火して居る。總泉寺の双盤にて、幕明く。

だん　おねぶさん、今夜の用意は出來て居るかえ。

ねぶ　頭の婚禮ゆゑ、酒も取つて來やした。

ト股倉より貧乏德利を出す。

べか　エヽ、穢ねえ。てめえの股倉から出した酒が飲まれるものか。
熊　酒に干鰯の匂ひが移るワ。
どん　その上、徳利の口から虱が落ちるぜ。
ねぶ　お前方が、野暮な事を云つたものだ。虱が交れば、霰酒のやうでいゝわな。
だん　ちやうど好いわえ。股倉へ入れて置いたから、好い加減に燗が出來て居たらう。
熊　それはさうと、頭はもう戻りさうなものだ。
べか　大方、花嫁御を一緒に連れて來るだらう。アレ／＼、向うへ、駕籠が二挺見えるぜ。

ト向うより四つ手駕籠二挺、段八これに附き添ひ、出て來り、土手の上へ下ろし

段八　オヽ、大儀々々。駕籠は二挺ともおれが屆ける。どこぞで一杯飲んで來さつし。

ト金を出してやる。

駕舁　ハイ／＼。有り難うございます。左樣なら駕籠をお賴み申します。

ト駕籠舁き四人、引返して向うへ入る。

皆々　段八、今歸つたか。
段八　花嫁御を連れて來た。みんな來て、近づきになりや。

皆々　サアノ〳〵、花嫁御さん。爰へ出なせえ〳〵。
　　ト口々に云ふ。駕籠の中より小紫出て、皆々を見て驚き、ぶる〳〵慄うてゐる。
だん　コレ、お嫁御さん、何もそんなに怖がる事は無い。お前を身請けした蘭蝶さんというたのは、わしらが仲間の頭分でござります。
ねぶ　わたしらが小屋へ請け出されてござつた嫁御さん、これからは同じ仲間。聞き及んだ吉原の花魁、美しい顔だなう。
皆々　成る程、頭が惚れたも尤も。美しいものだ。
小紫　蘭蝶さんの別莊へ、行くと思うた駕籠の内。見れば賤しいこなさん達。して、蘭蝶さんは。
段八　その蘭蝶は、とうに歸つてござる。
小紫　そりや何處へ。
段八　あの小屋の中へ。
小紫　エヽ。
　　ト驚く。小屋の中より彌市、非人の姿にて出て來り
彌市　皆の者。今夜の用意は。

熊　祝言の酒肴は、とうに用意をして置きました。
だん　肴は鯛の頭に鰯のぬた。今日のは自腹で、お剰りぢやございませぬぞ。
彌市　それはよくした。皆も喜んでくれ。日頃戀しい床しいと、思ひ思つた小柴、身請け致して今夜の祝言。
段八　乞食の小屋へ花魁が、鋲打ちならぬ四つ手駕籠。
熊　白無垢引きかへ、酒の菰
べか　三國一の花嫁樣
皆々　エヽ、おめでたうござります。
段八　時に、嫁御もおいらの仲間へ入るからは、衣裳を着替へさせずばなるまい。ナウ、皆の者。
ねぶ　それもわたしらが拵へて置いた今夜の晴れ着。

ト小屋の中より穢き襤褸を出し

サア〳〵、これを着替へなさんせ。
小柴　エヽモウ、穢らしい。斯ういふ事とは露知らず、扇蝶さまのお爲ぞと、嫌な身請けも得心して、見れば賤しい非人の仲間。こりやどうしたらよからうぞいなア。

段八　今更泣いても、悔んでも、もう叶はぬ。思ひ直して、頭の女房にならつしやい。

小紫　エヽ、穢らはしい。わたしは爰を

ト逃げようとする。皆々小紫を捕へ、無理に襤褸に着替へさする。彌市探り寄つて小紫が手を取り

彌市　もう逃げようとて逃がしはせぬ、……皆の者、仲人は宵の程。こゝらは粹を通してナ。ハテ、氣の利かぬ奴等ではあるぞ。

段八　成る程、これからおれらは酒の拵へ。仲人役を一緒にして

だん　めでたく一つ唄ひやせう。……高砂や、この裏店の御新造さん、有るの無いのと仰しやるやうな御仁體ぢやござりませぬ。脊中にも一人居りやすわな。お遣んなせえ〳〵。

ねふ　めでたい奥さん、御新造さん

皆々　しつぽり跡でおしげりなさんせ。

段八　おいらはめでたく

皆々　開きませう。

トわや〳〵云うて下座へ入る。あと一つ鉦、合ひ方になり

彌市　サア、これからは、誰れに遠慮も差向ひ。心を盡して、今といふ今、日頃の本望、此やうな嬉し

い事は無いわいの。

小紫　思ひがけないお前の身の上。なんの因果で、わたしが夫に

彌市　サア、膽が潰れやう。腹が立たう。思ひ廻せば去年の事。こなたは十九の厄年に、大師河原へ詣りし下向、遊山半分旅駕籠より、歩行もならぬ駒下駄の、鼻緒の切れしが縁の端。その時直した雪駄直し。フッと見染めたわしよりも、見染められたがこなたの因果。樣子を聞けば、吉原の、小紫といふ傾城。金さへあれば身を任す、一夜遊びの浮れ女と、思うてこの身を押し隱し、通へど、つれない小紫。比翼にあらぬ三つ蒲團、その後朝に引替へて、壁は蓆に、戸は菰垂れ。犬の吠えるを寢耳に聞き、はかない夜半の草枕。寢られぬ儘に忘られぬ、乞食非人が切ない戀。推量して、下されいなう。

小紫　ほんに思へばわたし程、因果な者はござんせぬ。思ひは同じ川崎の、渡し場で見た扇蝶さん、人を思へば思はれし、その日も變らぬ因果な緣。大師樣も聞えませぬ。いつそわたしを、殺して下さんせいなア。

彌市　非人のわしに思はれて、世間へ立たぬ小紫。死なうと思ふはコリヤ尤も。さりながら、わしも腹からの乞食でもない。それゆゑ身請けの三百兩、乞食の身にて大枚の、金の出所何もかも、斯うな

第二番目序幕



同返し



るからは云うて聞かさう。もと某は因州の浪人、白井權八といふ者。

小紫　エ。……そんならお前が

彌市　仔細あつて、本庄助太夫といふ侍ひを討つて立退き、浪々の其うちに、非人とまでは成り下がり、御身を請け出すその爲に、或ひは夜盜、辻切り、戀の盜みにやう〳〵と、調達したる三百兩。念願屆いて今宵の身請け。人を害せし報いにて、皆目見えぬそこひの病ひ。斯程心を盡す果、あまり憎うは、あるまいがの。

ト此うち、上の庚申塚の後ろへ、助八、熊、べか六、どん、出て窺ふ。助八、三人に囁き、思ひ入れあつて入る。小紫、いろ〳〵こなしあつて

小紫　そんなら日頃尋ぬる……ほんにマア、聞けば聞く程眞實なお前……その心にほだされて

彌市　ヤヽ、何といふ

小紫　サア、勤めのうちこそ意氣張りで、嫌と思うた蘭蝶さん、わたしゆゑ命も厭はず、切取りしても、わたしが身を、請け出して下さんす程の心意氣、なんぼ義理を知らぬわたしぢやとて、嬉しうなうて、何とせうぞいなア。

彌市　すりや、この程よりの心盡しの數々を、嬉しと思うて

小紫　わたしやお前の女房に、なる氣になつたわいなア。
彌市　そりや本心か、小紫。エヽ、忝い〳〵。と喜ばして置いて、逃げるのではないか。
小紫　なんのマア。お前が行けと云はしやんしても、滅多に側を離れる事ぢやござんせぬ。

　　　トきつと云ふ。

彌市　その心ならおれも落ち付く。乞食になつても、昔の嗜み。

　　　ト以前差して出たりし大小を出し

　男の魂ひ一對の、離れぬ大小引分けて、其方へ渡すが、一生離れぬといふ、誓紙の代り。

　　　ト右の脇差の方を小紫へ渡す。

小紫　そんならこれを起證代りに
彌市　互ひの心、解け合ふからは
小紫　今日から非人の、わたしや女房。
彌市　濁酒ざけのつかみどり
小紫　嫌うたお客に色直し
彌市　雪駄直しが

小紫　緣のはしやら
彌市　三々くどかず
小紫　直ぐに床入り。
彌市　菰改めて
ト彌市刀を杖に突き
小紫　エ。
ト木魚の入りし合ひ方になり、彌市思ひ入れあつて、小屋の內へ入る。小紫殘りこなしあつて
彌市　待つて居るぞや。
小紫　思ひがけない非人の身の上。うか〳〵名乘りし白井權八。天の敎への敵討ち。未來にござんす父樣の、導き給ふ今宵の幸ひ。誓紙代りと渡したるこの白刃。これにて討てと、神々樣のお引合せ。色に事寄せ、近寄つて、今宵は過さず、おのれ、權八。
ト脇差を拔き、思ひ入れあつて、白刃をきつと見る。この時、チョンと月隱れる。
折よき月の雲隱れ。この間に一太刀。
トそろ〳〵土手へ上がり、小屋の側へ來り

親の敵の白井權八。恨みの刃金。思ひ知りや。

ト小屋の上より白刃を突込む。内にて彌市アッと苦しみ、手負ひの思ひ入れ。拔刀にて出で、屹度見得。

彌市　なに恨みあつて某を騙し討。

小紫　其方が討つて立退きし、本庄助太夫が腹變りの娘、幼少の名は八重梅。父さんの敵、サア、立上がつて勝負しや。

彌市　女と思ひ悔つて、飼ひ犬に手を喰はれしか。この上は返り討だ。覺悟しろ。

小紫　迚もかよはき女なれども、一心凝つて、せめて一太刀。

彌市　何を、小癪な。

ト立廻りの內、彌市小紫をあしらひ、討たれようとする仕組み。この時、下座より助八、熊、べか助、どん、出で來り、くらがりにて彌市にかゝる。彌市あちこちと立廻りの內、助八、小紫を彌市と心得、一太刀切り附くる。小紫ワッと苦しみ

小紫　女一人に多勢の、荷擔人賴む卑怯な權八。

トこれを聞き

彌市　ナニ、荷擔人とは。

助八　權八、覺悟。
彌市　さてこそおのれら。
ト彌市三人を相手に立廻り、小紫は助八と立廻り、深手を負うて倒れる。下座より段八、出て、助八を支へる。彌市三人を相手に、きつと見得。
彌市　何奴なれば、この妨げ。
助八　本庄助太夫が倅、同苗助八、親の敵の白井權八。
段八　ナニ、お旦那を權八とは。
助八　物數云はず、皆の者。
皆々　合點だ。
トごつちやの立廻り、段八、助八、立廻りしながら、向うへ入る。彌市、三人を相手に、盲目の立廻りあつて、皆々を切り倒す。好き時分に、後ろの藪を押し分け、權八出で來り、三人よろしき見得にて月出る。三人顏見合せ
小紫　ヤア、お前は扇蝶さん。
權八　小紫、手を負ひしか。

小紫　蘭蝶といひしは、この所の非人にて、素性を聞けばわたしが爲には、父さんの敵、白井權八。

權八　ナニ、權八とは。

ト彌市思ひ入れ。

彌市　絕えて久しき弟權八。堅固で居つたな。

權八　ハテ、心得ぬその詞。我が名を名乘り、又ぞろや、弟といふは、何の仔細か。

彌市　以前は本國因州にて、顏も知らずに別れし兄、即ち白井彌市ぢやわやい。

二人　ヤヽ、なんと。

彌市　まことや、人間の榮華は、あざなへる繩の如しと、我れは即ち白井の惣領なれど、生れついて身の性惡く、侍ひの家筋を、繼ぐべき事の叶はざる、人相なりと卜者の敎へ、その頃、汝はまだ稚き當歲なれど、まして二男の其方ゆゑ、何とぞ家の相續させんと思へども、順を守る父の氣質、惣領の某ゆゑ、我れを家督と父の指圖。それゆゑ我れは家出なせしも、其方に家督を繼がせたさ。然るに某出國せしその後にて、父の橫死。汝は父の弟たる、即ち伯父の助太夫、預かり置きしと聞きつるが、元より邪智の助太夫、義に依つて其方が、討ち果して立退きしと、それも後にて樣子を聞き、まツた、これなる小紫が素性は、矢張り本庄の娘八重梅。この彌市にも、汝に

も、全く因みの、從妹同士。それとは知らず、小紫、權八こそは敵ぞと、思ひ詰めたる女の孝心。圖らず去年大師の道にて、その事詳しく聞いたるゆゑ、名乘り合ひなば我が從妹、討たれし親は卽ち伯父。さすれば身共が、助太刀して、討たせにやならぬが、討つべき敵は實の弟。伯父の邪ま、是非なくも、義理で討つたに違ひはあるまい。それを敵と討たせる時は、女も共に非道の沙汰。我れは元より世の中に、望み無き身の彌市郞。小紫が覘ふを幸ひ、我れは汝、權八の、その名を借りて敵ぞと、名乘つて討たれん志し。また小紫に戀慕と見せしも、汝に迷ふ小紫。不便ながらも敵同志、どうで添はれぬ因果な緣、それゆゑ仲を引裂かんと、心に思はぬ無理口說き。我れ權八と名乘るを聞き、いづこに隱れ忍びしや、八重梅が兄、本庄助八、共に敵と切り込む刀、支ふるはずみ、盲目ゆゑ、思はぬ女に手を負はせしか。思ひ廻せばその以前、卜者が云ひしに露違はず、そこひになりし彌市郞、せめて弟が罪科を引受け、名乘つて相果て、其方を、世に立てたきが我が願ひ。如何なれば因みの三人、戀と仇とに鎬を削る、因果な緣であつたなア。

ト これを聞き、權八思ひ入れあつて

權八 初めて聞いたる御身の素性、また小紫が身の上も、明かして見れば敵同士。いかにも某、父兵左衞門橫死の後、伯父の助太夫に引取られ、はかなく月日を送るうち、助太夫が實の悴、助八こと

は惡黨にて、その頃行くへ知れずといひ、外戚腹に出生せし、娘八重梅ありと聞けど、これまた行くへ知れざるゆゑ、某を養子にせんと、恩に着せたる伯父の詞。止む事を得ず、親子の緣、結びし砌り、助太夫、不破伴左衞門と心を合はせ、佐々木の家國を奪はん企み、某にも身方せよと、初めて明かす養父の惡事。親子の緣は結びしかど、目前の存亡見捨てがたく、忠義の爲に我が手にて、助太夫どのを是非なくも、討つて立退きしも、その頃失ふ神妙劍、尋ぬる爲に、我が本名包みしゆゑに、我れを敵と知らずして、力と賴まん小紫、緣は繫がる養父の娘、取りも直さぬ身が妹。卽ちこれも因果の道理。

小紫　そんなら今まで戀ひ慕ひ、二世の夫と語らひし、お前が尋ぬる親の敵、權八さんでござんしたか今また敵と名乘りしは、お前の兄さん彌市さまの、顏も知らず、元より尋ぬる權八さん、因みありとは猶知らず。一圖に憎しと思うた敵が、云ひ交したる夫とは、こりやマアどうせう、どうせうぞいなア。

權八　さるにても心得ざるは、さほど我れへ御厚志の、其お心で何ゆゑに、神妙劍の似せ物を、我れに與へし御所存は。

彌市　ナニヽ、すりや、最前渡したる、あの一卷が似せ物とな。

權八　いかにも。

彌市　ムウ。さては伯父が邪曲を、受け繼ぎし本庄助八、手段を以て摺り替へしか。あの一卷も小柴を、身請けの金も、先いつ頃、大師の道にて圖らずも、手に入りたりし故にこそ、汝に逢うて渡さんと、思ひの外に似せ物とは。

權八　ムウ。これにて思ひ當りしは、最前の古鐵屋。夏書の卷を持ちし樣子。彼れが仕業か、何にもせよ、似せ物渡して、小柴を、騙りしかと一圖の怒り。兄とも知らず藪陰より、邪慳の刃に貫きしも、養父といひ、兄といひ、現在語らふ女もやみ／＼、我が手にかけしは皆天罰。せめてはこの身の云ひ譯に、この場に於て

ト腹切らうとする。彌市留めて

彌市　ヤレ、早まるな、弟權八。汝を殺す程ならば、斯くまで心を盡しはせぬ。父兵左衞門が闇討ちも、今更思へば助太夫、作左衞門と語らひて、名古屋山三が實父たる、山左衞門と兵左衞門、忠心無二ゆゑ企みの邪魔と、彼れらが仕業に相違はあるまい。それとは知らず、助太夫を、汝が討ちしもこれ天命。殘る敵は作左衞門、まッた、失ふ神妙劍、詮議仕出すは其方が役。

權八　でも、これまでに、多くの人を害せしこの身、罪は遁がれぬ。

彌市　サア、罪科も今こゝで、我れこそ白井權八と、名乘つて討たれしこの彌市、まツた、小紫もこの場にて、死ぬは心中と云ひ觸らし、さすれば、この世に亡き權八、汝は矢張り扇蝶にて、めでたく寶詮議仕出だし、其あとにては一月寺、我れ〳〵親子、小紫が、菩提を頼む、弟權八。

小紫　敵同志のわたしゆゑ、迚もこの世で添はれぬ上、この深手では、所詮、長らへ、居られぬこの身。

彌市　我れ〳〵二人に構はずと、見咎められぬ其うちに、ちつとも早く

權八　然らば暫し、惜しからぬ、命長らへ、勸めに任せ、寶詮議の其あとでは、やがて跡から、未來で一禮。

彌市　絶えて久しき弟の、顏さへ見られぬこの眼病。思へば薄きこの世の緣。

小紫　この世の緣は敵同志でも、未來はどうぞ、權八さん。

彌市　恨みのきづな切つたれば、あの世は必ず

權八　一つ蓮と今までに

小紫　苦界の中に嬉しい逢ふ瀨

彌市　今は果敢なきこの二人。これぞ權八、小紫

小紫　戀に果たせし心中と

彌市　覺悟極めた

二人　この血汐。

　　　トこの時ゴーンと曉の鐘。藪より雀、大分舞ふ。

權八　最早雞鳴。

彌市　鳥も塒を

小紫　我れはこの世を、後朝に

權八　立てし屏風も吉原の

彌市　すゞめ形なる

三人　比翼塚。

　　　トこの時、熊起上がり

熊　　權八、うぬを。

　　　トかゝるを權八、拔討ちに切り下げ

權八　思へば夢の

　　　ト彌市、小紫、ガツクリと思ひ入れ。木の頭。

世の中ぢやなア。

ト愁ひの思ひ入れ、これをキザミにて、よろしく、拍子

幕

二番目　中幕

上林二階の場

役名——不破伴左衛門。名古屋山三。上林の葛城。遣り手、お爪。新造、浦里。同、初風。若い者、喜八。茶屋息子、清六。茶屋女房、お常。禿、みどり。唐犬權兵衛。野晒五助。石塔勘八。湯灌場傳吉。早桶半助。

本舞臺、三間の間、長持を置きたる上林の二階、廊下飾り附け。上の方、障子屋體、花道よき所に、梯子の上がり口を見せ、舞臺に遣り手お爪、禿みどりを引附け、煙管を振り上げ居るを、浦里新造にて、取縋り居る。若い者喜八、茶屋の息子清六、取押へて居る。吉原騷ぎにて、幕明く。

喜八　お爪どん、子供の事だ。さうしなくつてもいゝぢやアないか。

浦里　花魁へ知れては悪い。堪忍して遣らしやんせいなア。

皆々　禿、子供を、大概にさしやんせいなア。

つめ　イエ〳〵、禿の事ぢやから、折檻するは遣り手の役。新造衆の口出しは御免。この餓鬼は耳、口で行くのぢやない。構はんすな〳〵。うぬ、小刀針で

ト立ちかゝる。みどり逃げて、浦里に取りつき

浦里　アヽモシ、堪忍して下さんせいなア。

つめ　ナニ、堪忍せい。この間から、店を引かせた葛城さんと山三さんの、文の取り遣りするゆゑ、きつとわたしが折檻するのぢや。退かんせ〳〵。

清六　エヽ、そんなら花魁は

浦里　とうから店を引いてぢやわいなア。

喜八　それだによつて、この子を折檻するも尤も。

つめ　縛り上げて云はせにやらぬ。

ト清搔になり、立ちかゝる。皆々留める。みどり逃げて、花道の階子より下家へ入る。お爪追ツかけ下りる。この時、お常、茶屋女房にて、提灯を持ち上つて來るを、お爪搔き退け、下家へかゝる。下より伴左衞門、羽織、衣裳、大小、お爪が手を捕へ、みどりを後ろに圍ひ、上つて來る。あとより、半助、五助、傳吉、勘八、鶴の形、男達、白柄の一本差しにて、上つて來る、勘吉、若い者にて、小

腰を屈め、附いて上がり、皆々本舞臺へ來る、伴左衞門、お爪の手先きを屹度締め上げる。

つめ　アイタヽヽ。あなたは寺西閑心さま。なんでわたしを

つね　お客のお出でのその先きへ、なんぼ禿の折檻ぢやとて、あた無作法な遣り手さん。

五介　お頭始めおいらまで、今この里に隱れない、白柄組の親方は、向う見ずなる寺西の、閑心さまのお側には、いつも離れぬ四天王。その名も野晒五助といふ

半助　雲に稻妻、一對に、揃ひも揃ふ破落戸は、さし擔ひやら、早桶半助。

傳吉　寺の一字で思ひつく、その名も子分の湯灌場傳吉。

勘八　達引き出入りを商賣に、臍を固めし石塔勘八。

傳吉　今夜は、葛城太夫を

四人　なう、お頭。

伴左　逢うて今宵は思ひをと、樂しむ心の大一座。神を誘うて通ふ神、その葛城が今更に、見世を引いたと云はれちやァ、白柄組の面が立たぬ。コリヤ、遣り手、その挨拶を、きり〳〵致せ。

トお爪の手を突き放す。

つめ　ア、モシ〳〵。見世を引かせた葛城さんは、山三さまのそりや面當。お前様なら出さいでかいなァ

四人 お頭、聞かつしやりましたか。

伴左 こりやさう有りさうなものだ。

ト この時勘吉揉み手して

勘吉 モシ〳〵。あなた方のお腰の物は私しへ。ハイ〳〵、これは廓の大法でござります。

半助 やかましいわえ、箆坊め。この吉原へ、やう〳〵と、今夜初めて上がりはしねえワ。

五助 廓の法も、定まりも、知らねえ客だと思ふのか。

勘八 知つても頭は、この里の、掟を守らぬ氣性だワ。

傳吉 當時吾妻に隠れなき、白柄組の頭分、閑心さまを見損なつたか。蛆蟲め。

四人 大間抜け。

勘吉 イエ〳〵、存じて居りますが、お腰の物は、掟でござりますゆゑ。

四人 どうしたと。

ト 立ちかゝる。

伴左 コレサ、其やうにがさつに云ふな。この吉原はいふに及ばず、色里、廓は二階まで、刃物帯した者は揚げぬ。その掟を知りながら、閑心ばかりは何處までも、帯む魂ひ、こりや離されぬ、

勘吉　それでは外のお客様まで。

　　トもじ／＼する。

つね　ハテ、さうであらうが、とやかうあつては後がもつれ。遣り手衆さへ承知なら、マア其まゝに機嫌の好い時

つめ　さうでござんす。あなたばかりは、外のお客に事かはり

四人　ひねりかゝると、素では遣らぬぞ。

　　ト此あたり、葛城、扱帯の姿にて、莨盆下げ、禿附き添ひ、出かゝり、窺ふ。

伴左　さうだ／＼。長い刀は侍ひの魂ひ。餘人は格別、この閑心は、そりやならぬワ。それとも、預かりたくば、心の腐つた素浪人の、山三が所持の

葛城　清い心の魂ひは、この葛城が預かりませう。

伴左　ヤ、其方は葛城。いつの間に

四人　御來臨だの。

葛城　伴左衛門さん。……今の替へ名は閑心さん。今、お前が云はしやんす、心の腐つた浪人は、山三ぢやと云はしやんすが、主さんばかりか、お前まで、主持たぬ身は、互ひに浪人。

作左　その浪人のこの身でも、戀なればこそ此やうに、其方へ通ふを、少しは不便と思ふなら

葛城　逢うてあげたいものなれど、それでは深う云ひ交した、わたしの男へ

作左　その男とは山三が事か。この程、仲の町の眞中で、山三に逢うて鞘當のその喧嘩、ぶつ放さうと思うたを、幡隨長兵衞が女房の、利發な裁きに、遺恨殘さぬしるしにと、鞘は其まゝ、中ごを取替へ、差しては居れど、白刃は山三。

葛城　その白刃なりや主の魂ひ。わたしが爰で預かつては、どうでござんせうぞいなア。

作左　それぢやア、山三が魂ひも、作左衞門が魂ひも、みんな其方へ取上げ婆アか。山三に逢はねば、いづれ刀は取替へ憎い。……コレ、葛城、これ程通ふに、どうでもそもじは逢はぬ氣か。

葛城　浪人者でも、山三さん、一旦盟うた事もあり、いかに流れのわたしぢやとて、それではどうも女子の道が

作左　立たぬとあれば、身請けせう。コリヤ、遣り手、葛城は身共が身請けぢや。して、身代は。

つめ　ハイ〳〵。親方さんと相談の上、主の身代、お聞き申して參りませう。

葛城　この身を任さぬその時は、身請けをしても、アノ、わたしを

作左　身請けなしたら、奥樣だぞ。

葛城　嫌でござんす。たとへ身請けをさんしても、好かぬお前と一日も、どうして一つに居られませう。嫌でござんす。この葛城は、山三さんといふ、可愛いゝ男のある女郎、無駄な身請けをしようより、止めておくれ。よさしやんせ。身請けの沙汰は、兎も角も、わたしやお前と、相性が悪いわいなァ。

トこれにて、伴左衞門思ひ入れあつて

伴左　その挨拶では、可愛さ餘つて憎さが百倍。色も戀も覺め果てた。コレサ、若い者ども、これから、もう自棄だ。名代取つての惡洒落れだ。ヤイ、遣り手、内の女郎を、一萬人でも、總揚げだ。殘らず座敷へ連れて來い。

傳吉　それ〳〵、五丁町の藝者は皆總揚げだぞ。

五助　蟲ツ子でも、外へ遣つては、合點しないぞ。

勘八　これから今夜暴れ客。その氣で勤めろ。

半助　サア、頭、座敷を變へて

四人　飲み直しませう。

伴左　酒にしようか。それとも心が變つたら、コレ、葛城、必ず返事をしてくれろ。

葛城　思案して見ようわいな。

ト思ひ入れ。伴左衛門ムッとして

伴左　エヽ、勝手にしろ。

皆々　サア〳〵、ござりまし。

ト騒ぎ唄になり、伴左衛門先きに皆々附いて奥へ入る。葛城殘る。この唄を借り、山三、頭巾を冠り、易者の姿にて初風、新造にて附添ひ、あたりへ心遣ひのこなしにて、出で來り

初風　花魁、お連れ申したぞえ。

葛城　來なさんしたかえ。

山三　葛城。……ヤレ、嬉しや、やう〳〵隠れて來たわいの。これといふのも初風が働き。忝い〳〵。

初風　なんのマア、禮どころぢやござんせぬ。あの意地わるの遣り手が見たら、大抵の事ではござんすまい。殊に、白柄組の大勢も、來て居なさんすわいなア。

山三　アヽ、そんなら、あの伴左衛門も來て居るか。コレ、葛城、聞けば其方もおれゆゑに、店を引いて居ると聞いたゆゑ、どうぞ逢はうと思ひ、枕を碎いた占屋さん、當卦、本卦で格子へ立ち、あの初風が働きで、首尾よう二階へ。こんな嬉しい事は無いぞや。

葛城　さう云ひなさんすりや、ほんまの占屋さんと見えるわいなア。
山三　人相を見てもらひたくば、この天眼鏡で見てやりませうか。
　　ト天眼鏡を出す。
葛城　そりや、ほんまの眼鏡でござんすかえ。
山三　天眼鏡というたは茶焙じぢや。遅まきながら、こりや其方へ、今のお禮にお年玉ぢや。
初風　何を云はんすぞいなア。
葛城　今の今まで伴左衛門づらが、わたしを捕へて身請けするの、何のかのと、辭ぐ事ばかり云うてぢやわいなア。
山三　又、身請けせうといふのか。それにしても、この間、花川戸の內儀が挨拶で、伴左衛門とこの山三、取替へて差して居る刀、無銘なれども過ぎ行かれし、慥かに親の差し料に
葛城　そんなら、若しや、敵の手がゝり。
山三　アコレ。
　　トあたりを見て初風へこなし。
初風　さういふ內にも意地わるの、遣り手の目褄にかゝらぬやうに、お前の部屋へ、こつそりと、床を

敷いて置くぞえ。

葛城　必ず首尾を、頼むぞえ。

初風　承知ぢやわいな。……山三さん、これにえ。

ト清搔にて奥へ入る。此あたり障子を細目に明け、伴左衞門窺ふ。

葛城　今のお前の話の通り、最前兩腰を帶して二階へ、伴左衞門が我が儘云うて預けぬは、もしやお前に見られてはと、その疑ひぢやあるまいかえ。

山三　成る程、そこも知れぬわいの。何しろ彼方の白刃が、山三の鞘へしつくりと、納まつたが不審の一つ。若しや今にも逢うたなら、お家の系圖の一巻を、隱し持つまいものでもない。必ず詮議を

葛城　心得やんした。騙しすかして系圖の詮議を。何かの話は、わたしが部屋で、灯を消して床の内、必ず忍んで居やしやんせ。

山三　合點々々。わが身は病氣の床の内、灯を消して待つて居よう。必ず待たせてくれまいぞや。

葛城　マアちつとの間、辛抱して下さんせいなア。

トこれを聞き伴左衞門障子を閉す。初風走り出て

初風　モシ〱、花魁、座敷の首尾はようござんす。内證で旦那さんが、身請けの相談があるによつて

葛城を呼んで来いと云はしやんす。其うち、主を忍ばせう。

葛城　ほんに、それでは、どこぞへ隠れて居やしやんせ。主を忍ばす

ト思ひ入れあつて

アレ〳〵、あの長持はどうであらぞいなア。

初風　ほんに、あの中がようござんせう。

葛城　ドレ、わたしも手傳うて。

ト行かうとする。頭の割り笄落ちろ。山三取つて

山三　コレ〳〵、太夫、笄が落ちたぞや。

トよく〳〵見て

常から話の捨て子の時に、添へてあつたる

葛城　アモシ、他聞のきこえ。

山三　オツト、あやまつた。

ト渡す。葛城長持を明け

葛城　サア、少しの間、この中に、お前は隠れて居やしやんせ。

山三　合點ぢや。これといふも、心の外の色戀ゆゑ、武士が長持の住居とは、何の事はねえ、湯の無い大阪風呂へ入つたやうな。

ト入る。

葛城　ほんに、お前もわたしゆゑ。

山三　ヤ。

葛城　苦勞しなさんすわいなア。

ト長持の蓋をする。浦里出で來り

浦里　モシ〳〵、花魁、內證でお呼びなさんすわいなア。サア、お出でなんしよ。

葛城　エヽ、忙しない。いま行くわいなア。

ト淸搔になり、この三人奥へ入る。障子の中より伴左衞門、お爪忍び出で、兩人近寄り、小聲になり

つめ　若旦那樣。

伴左　コリヤ。

ト合ひ方變る。

すりや、其方が生さぬ仲の、娘と申すは

つめ　山三めが家來の八内め。さすれば、滅多に娘にも

伴左　所持の系圖の一卷を尋ねる奴ら。それゆゑ參る先き〲まで、肌身離さず

ト懷中より、一卷出して、ちよつと見せる。

つめ　アノ、そんなら、それが

伴左　コレ。

ト囁く。お爪思ひ入れあつて、あたりの錠を取つて、長持へピンとおろす。伴左衞門見て

籠の鳥だヮ。

ト長持の方へ系圖を見せびらかし、笑ふ。これにて騷ぎ唄になり、この道具廻る。

本舞臺、一面、葛城の部屋。上の方に屏風立てゝあり。誂への行燈を灯し、道具とまる。

ト淸搔になり、階子の口より男達權兵衞、町人の形にて、淸六、提灯を持つて、上がつて來る。奧より

お常出で來り、舞臺にて行合ひ

權兵　てめえ、お常ぢやァねえか。

つね　これはしたり、今お前樣を呼びに參るのでござります。

權兵　さうであらう。屋敷の衆がおれを、狩り場の奉行のお役人の權門で、據なく今夜來たか、長兵衞は來ないか。

清六　アノ、花川戸の親方でござりますか。あなたは慥か三浦屋へ、お出でなすつたやうでございます。

權兵　ア丶、そんなら大方、小紫が、心中の事で來て居るのであらう。是非長兵衞に逢はねばならぬ。そんなら三浦屋へ行つて逢つて行かう。

つね　それぢやといふて、お屋敷のお客樣が、お尋ねなされてゞござります。

權兵　そんなら逢つて行かう。コレ、てめえはナ、三浦屋へ行つて、長兵衞が來て居るか、もし來てるなら、知らせてくれろ。

清六　畏りました。

權兵　ドリヤ、逢つて來ようか。

ト淸搔にてお常、權兵衞奥へ入る。淸六引返して、階子より上がる。奥より伴左衞門出で來り、あたりを窺ひ、屛風を明け、中の行燈にて、よく〳〵見て

作左　葛城が病氣の床、山三を引込む前かたに、今の話で先駈けして、爰でこつそり。

ト思ひ入れ。この時、猫一疋出て、伴左衞門にじやれかゝる。伴左衞門恟りして

エヽ、何をしやァがる。

ト蹴飛す拍子に、一巻落す。ちやつと取つて

寢るにもうつかり、離されぬ。

ト灯を吹消し、床へ入る。時の鐘・合ひ方になり、奥より葛城出で來り、探り〳〵、床へ入る。小聲にて

葛城　山三さん、來なんしたかえ。

ト云ふ。伴左衞門頷き、思ひ入れある。葛城・山三と心得寄添ふ。伴左衞門夢中になりしが、ふッと心附き、懐中の系圖を蒲團の下へ隱す。矢張りこの猫狂ひ居る。葛城思ひ入れあつて

伴左衞門に見られぬうち……モシ。

トこなし。屛風引廻す。唄になり、奥より權兵衞出で來り

權兵　イヤア、こいつは暗い〳〵。イヤ、素的に暗いワ。コレ、灯をつけねえか。……あの茶屋の息子めは、長兵衞が來てなら、知らせさうなものだが。

ト探り〳〵、階子の方へ行きかける。屛風の蔭より件の猫、伴左衞門が隱せし系圖を咬へ出し、轉がし、じやれる。權兵衞、足に觸るゆゑ飛退き

エヽ、なんだ。猫が鼠を取つたな。シイ〳〵。

ト追ふゆゑ、猫は逃げて入ろ。權兵衞捨ぜりふにて、落ちてある一卷を踏附け、恂りし

ト足にて探り取つて、捻り見て

エヽ、鼠か。氣味のわるい。

ト探り見る。淸搔になり、階子の口より、提灯を下げ、三浦屋の若い者、喜助先きに立ち、跡より淸

六附き添ひ、捨ぜりふにて出で來り、權兵衞を見て

ヤヽ、此奴は卷き物だ。ハテ、おつりきな物だ。

喜助　これは權兵衞さま。只今、淸さんへのお言傳でございましたが、花川戸の親方も、只今お出でな

されました。

權兵　アノ、長兵衞が來たといふのか。

喜助　左樣でござります。……モシ、旦那え。お聞きでもございませうが、小紫さんが汐入の土手で、非

人と二人切られたは、白井權八の仕業ぢやと、昨夜から、その詮議でござりまする。

權兵　その權八は長兵衞が、平常世話する紫の扇蝶。慥かにあれが

二人　エ。

權兵　ドリヤ、行つて逢はう。

ト濤掻になり、この三人階子の下へ入る。奥より半助、手燭を持ち、窺ひ出て、屛風に向ひ

半助　頭、首尾よくお前の念願叶つて

ト屛風を取る。伴左衞門、葛城、蒲團の上に居る。葛城、伴左衞門を見て、驚き

葛城　ヤ。そんならお前は。

伴左　山三が吹替へ、伴左衞門だワ。

葛城　エヽ。

伴左　すツぱり行つた。

半助　おめでたうござりました。

伴左　コレ、葛城。今からわれとは眞の色事。知らぬながら、斯うなるからは、あんまり憎うはあるまいがな。

ト葛城口惜しき思ひ入れ。

葛城　そんなら此くらがりを幸ひに、主と思はせ、わたしをば、おとさう爲の拵へ事か。さうとは知らず、恥かしい。こりやどうせう、どうせうぞいなア、

ト此の時、奥よりお爪、山三を引立て、傳吉、五助、勘八、がや／＼云うて出で來り

つめ　モシノ＼、伴左衛門さま、いつの間にやら山三さん、廊下に置いた長持の、中に隠れてござんしたは、盗みする氣でござんせう。

山三　なんの盗みに來るものぞ。樣子があつて、忍んだ長持。

傳吉　默りやァがれ。何の樣子で

勘八　長持へ隠れるものか。

伴助　てつきり、此奴は浪人の、食ふべき物が無いゆゑに、枕探しにうせたのか。

つめ　女郎の部屋々々、うろついて、櫛、笄を目がけるのか。

半助　モシ、お頭。

四人　油斷さつしやりますなえ。

伴左　そんなら山三は、二階へ忍び、枕探しか。こりや、さうありさうなもの。浪人の身の活計に困り、盗みをするとは名古屋氏、味な商賣さつしやるの。

ト山三、床の樣子を見て

山三　ヤ、床の上には伴左衛門と、一人は葛城ぢやァないか。そんなら身共に忍べといふて、この、マ

ア、體裁は、二人打解け
　　ト腹の立つ思ひ入れ。葛城顔そむけ

葛城　山三さん。面目ない。恥かしい〳〵わいなア。

山三　何ぢや面目ない。コリヤ、ヤイ、最前の詞に相違の體裁。あの長持へ忍べよと、いうたは眞と、
　　隱れて居ても、沙汰も無う

つめ　なんの沙汰があるものか。長持へ隱したは、葛城さんの思ひつき、入つた跡へ錠を下し、跡でし
　　つぽり伴左衛門さま、床の入れ替へ、魂膽まで、みな花魁の狂言ぢやわいなア。

葛城　なんの〳〵。どうしてわたしが其やうな

山三　それでもわが身は、この床へ、なんで二人で其やうな

葛城　サア、これには段々

山三　イヤ〳〵、わりやこの山三を、騙した〳〵。ようマアわしを
　　ト立ちかゝるを、四人押へて

半助　何をびくしやく刎ね廻る。

五助　おらが頭の思ひ者、葛城どのに指でもさすと

傳吉　只は置かぬぞ、コレ、山三。今宵は頭と花魁の
勘八　うまくきまつた新枕。今から色客。
四人　色だ〱。

　ト山三無念の思ひ入れにて

山三　この場の様子、何もかも、承知いたして默つて居るに、譯があらうと此方に、料簡附けては見たなれども、餘りといへば、コレ、葛城、さうした義理ぢやあるまいが。

　ト屹度云ふ。葛城いろ〱思ひ入れあつて

葛城　サア、尤もでござんす。道理でござんす。わたしぢやとて、どうしてマア、勤めはすれど、人さんに、肌を穢さぬ心ぢやもの。まして譯ある伴左衛門さん。
伴左　コレサ、葛城、なんぼ嘘を賣るのが商賣でも、白々しいその詞。肌を穢さぬ其方が、なんで身共と一緒に寢た。寢たばかりかは、可愛いゝと、勤め離れた一言が、有り難くつて、結構で、伽羅で造つた佛も同然、現になつた伴左衛門。おぬしとても嬉しげに
葛城　イエ、そりや嘘でござんす。なんのお前に
伴左　嘘とはいはさぬ、屛風の中で

葛城　サヽ、それも主と思うたゆゑ。恥かしい。……エヽモ、濟まぬわいなア〳〵。

山三　濟むぞい〳〵。斯かる手管に身共を僞り、ようマアわしを

　ト立ちかゝり、思ひ入れあつて

昨日今日まで眞實盡し〳〵、貢いでくれた心根を、貞女なものと思うたに、打つて變りしこの體裁、これが浮世の下世話の通り、七人の子はなすとも、女に心ゆるすなと、譬へは丁度

　ト思ひ入れ。

こゝであらうか。

　トぢつとなる。

つめ　コレ〳〵、山三さん。見世を引かせた花魁を、そんなら、こなさん、盗みにござんしたか。コレ、さうかいな。葛城さんを盗みに、お前、來たのぢや〳〵。

　ト詰めよる。山三俯向き居る。

葛城　アヽ、コレ、どうして主に其やうな心が

つめ　其やうな心が無くば、何しに又、二階へ忍んでござんした。何であの長持へ、隱れて居たのぢや。

山三　サヽ、長持に忍んで居たは

トつかへる。

傳吉　そいつも大方、勝手を知つた二階ゆゑ、枕探しにうせたのであらう。

勘八　道理でおれの煙管が見えぬワ。

半助　おれが胴亂も此奴が盗つたな。

五助　枕許の紙入れが見えぬも、山三が仕業であらうか。

四人　モシ、頭、油斷なされますな〳〵

トロ々に云ふ。伴左衞門こなし。

伴左　わいらが云ふので氣が附いた。蒲團の下へ大切な

ト件の系圖を探す。見えぬに惘りして

さてこそ、無いワ〳〵。少しの間蒲團の下へ、入れて置いたを

ト云ひながら、山三の顏をヂロ〳〵見て

ハヽア、これも矢ッ張り。……イヤナニ、山三、モシ、ちよつとそれへ。

山三　アノ、身共にな。

伴左　いかにも。

ト合ひ方になり、山三前へ出て

山三　身共に用とは、伴左衞門、何の用事で。

伴左　用は云はずと知れてある。大概に出してしまはつしやれ。

山三　なんと。

伴左　おてまへといひ、身共といひ、同じ浪人なれども、身共は運好く、白柄組の頭分、何不足無けれども、おてまへは尾羽打枯し、貧窮に迫つての盗み心か。そりや惡い。以前のよしみ、伴左衞門、武士の情けに口外は致さぬ程に、床の下へ入れ置いたる、その一品を出さつしやい。

山三　思ひもつかぬ盗人の惡名。身にとつて覺えござらぬが、たつて身共を疑ふなら……して、失うたその品は。

伴左　オヽ、身共が大切に所持いたして居る

ト云はうとして

サ、その品をあらはに云へば、猶以て御身が恥辱になるゆゑ、默つて、そツと出さつしやい。

山三　品は云はぬ、盗みし品を出せ、とは、どうも心得ぬ。

伴左　サア、それは云はずと覺えがあらう。

山三　イヤ、ござらぬ。その一品、あらはに云へぬは其方にも、何か一物、伴左衛門、隠し持つたと思ふゆゑ、それと詮議のその爲に、葛城頼んで忍んだ二階。それが却つてこの身の難儀。これも誰が業。性根の腐つた女めゆゑ。

ト葛城を恨めしげに見る。

葛城　サ、それゆゑわたしも心を盡す、その甲斐も無う今宵の體裁。拵へ事に、やみ／＼と

ト云ふを、伴左衛門打消し

伴左　拵へ事とは山三めが、二階へ忍ぶ枕探し。詞の甘い其うちに、盗んだ品を爰へ出せ。情けを以て某が、穏便に云へば附け上がる。まだその上に、せかれた二階、伴左衛門が揚げ詰めの、葛城までも盗みにうせた。

トお爪、山三の側へ寄り

つめ　コレ、山三さん、お前は／＼、浪人者の分際で、全盛な葛城さん、買はうといふのが厚顔しい。茶屋の諸拂ひ、揚げ代の、溜つたゆゑに二階へは、揚げぬ筈を、押し強う、忍んでござんすその上に、お客の物を盗んだり、身請けの相談極つたる、葛城さんの邪魔になる、とツとゝ去んでもらひませう。丈の知れない野太いこなさん。

ト山三たくらはす。山三キツとなつて

山三　こりやおのれまで、通ひし客の身共に手向ひ。誤まりあるなら辛抱せうが、身請け沙汰との今の詞。そんならいよ〳〵葛城を

つめ　身請けの沙汰は伴左衛門さま、葛城さんも承知の上。

葛城　アヽコレ、なんのわたしが。

つめ　イヤ承知ぢや。承知でござんせうがの。

ト葛城、いろ〳〵思ひ入れあつて

葛城　アイ。成る程、承知ぢやわいなア。

皆々　ヤア〳〵。

つめ　そりやこそ、葛城さんの口から、承知ぢやわいの。

山三　コリヤ、葛城。そりや本心で申したのか。

葛城　アイ。

山三　なんと。

ト合ひ方になり、葛城ズンと立つて、締めて居る帛紗帯を解き

葛城　わたしが心はこの通り、勤めの内は餘の人に、解かぬ心の判じ物。勤めに馴れた心から、容解けのしたこの帯に、陰と日向が出來たゆゑ、解ける心になつたのも、浮氣な土地から、尤もな、事と思うて下さんせ。間夫と客との手管にて、二道かけるぢやなけれども、義理と情けの鯨帯、合はせた物は何時か一度、離れにやならぬ世の成行き、結び目堅き名古屋帯、切れてこれから雲の帯、締め替へる氣で、ござんすわいなア。

山三　すりや、今までの眞實な、心もいつか

葛城　仇に解けたる帯紐も、據ないお前の顔の、文のおとしはしまひ口、りゝで暮らしたいわいな。

ト帯を締め立上がる。この時、山三刀の鐺にて、しつかと留め、乾度見得。胡弓入りの合ひ方になり

山三　エヽ、おのれはなア、廓にあつては君傾城、一夜流れの浮かれ女に、誠ありとは思はねど、女郎の舌頭取るに足らねども、それとこれとは譯が違ふ、屋敷勤めの以前より、馴染重ねた其方が身は、戀路なれども武士の意地、おのれに心掛けしより、家を忘れ、身を忘れ、嘲り譏りも、ナニ厭へと、千辛萬苦も我が誤まり。さはさりながら、今までに、身貧なわれを立たさうと、心に思はぬ簪や、派手な衣裳が面目ないと、云うた詞を忘れはせまい。腸までが傾城に、成り下つたか、コレ、葛城。名古屋山三は面皮を缺いた。夜叉め、魔王め、エヽ、おのれはなア。

葛城　サア、尤もでござんす。……それも苦界に沈んだこの身、樂しみなうては、勤まらぬわいなア、

山三　よう其やうな

ト立ちかゝるを、伴左衞門隔てゝ、屹度思ひ入れ。

伴左　瘦せ浪人の身を以て、斯かる遊里に刃物三昧。誰れを斬らうと思ふのだ。さしづめ戀の遺恨にて、身共を切るか、葛城を、手にかけようと思ふのか。云はうやう無い大痴者。

ト扇にて散々にくらはせる。山三かい潜つて、その手を留め

山三　こりや、山三を、滿座の中で

伴左　打つてもいゝ。盜人、夜盜の名古屋山三。そんなけちな根性で、われが願ひの叶ふものか。

山三　ナニ、この山三が願ひとは。

伴左　其方が親の山左衞門、武士のあるまい闇討ちに、その敵さへ何者とも、知れぬばかりか預かりの、佐々木の系圖失ふも、山三がその身に懸つた事。その系圖さへ今以て、詮議も仕出さず剰へ、親の敵を討たうといふ、所存の無いは大腰拔け。劍術自慢の山左衞門、相手の一人も仕留める事か、手もなうやみ〳〵くたばつた、親が親なら悴まで、揃ひも揃ひし智慧無しめ。それゆゑ身共が、情けの敎訓、骨身にしッかと、こたへたか。

トまた散々に打据ゑ、きつと見得。山三無念の思ひ入れあつて

山三　身共へ異見の扇のしもと。さし當つたる山三こそ、汝の爲には、今までは、戀の敵と爭ひしに、今宵は汝が吉日にて、本望遂げたこの場の仕儀。打つといふのが羨ましい。いかなれば元春は、身の誤まりゆゑ、盗人とも、夜盗とも、身が事なら云ひ譏るも苦しからねど、その父の名まで云はすとは、如何にも山三は人非人。斯く成り行くも皆天罰。理の當然のこの教訓、打つとも、擲つとも、伴左衞門、手出しは致さぬ。勝手におしやれ。

葛城　その憂き恥も誰がさす業。云ふに云はれぬ

伴左　云へば猶更山三が一分、立たぬ今宵のこの體裁。武士の魂ひ腐つた山三、仲の町にて取替へた、身共がたばさむその刀、穢れになるは元々へ、ほぐれた心も今こゝで、又ぞろ、元の遺恨の上塗り、この葛城と床入りの、樣子を見ては、山三も武士、立つまい〳〵。

山三　もう斯うなつたら魂ひも、取替へさすとも何の益。サア、伴左衞門、こなたの心は戻す程に、身共が心も

伴左　承知した。

ト刀を出し、思ひ入れあつて

コリヤ、遣り手、仔細あつてこの刀を抜き放す。必ず共に驚くな。別條無いぞ。

つめ　ハイ〳〵。

トあたりへこなし。

山三　コリヤ、遣り手、山三とてもその心、狼狽へ騷ぐな。

トお爪、山三へ目を附ける。伴左衞門、山三、思ひ入れあつて

伴左　然らば取替へ、差したる刀

山三　こなたの白刃も

ト兩人刀を出し、拔いて、兩方を取替へ

二人　これで互ひに

トしやんと差す。又シツクリ納まる。山三思ひ入れあつて

山三　刃金の鍛へ、差し手變れど、鞘へしつくり。さすれば推量なした通り、慥かに父の

伴左　互ひに魂ひ元々へ、戻りし上は、次手にあの品、返してくりやれ。

山三　そりや何を。

伴左　今云ふ通り、その品は、云はねど、其方に覺えがあらう。併し身共も、外手より、不思議に手に

入りし、お家の系圖のその一卷。

山三　さてこそ系圖を所持するからは

伴左　その所持せしも歸參の願ひ。

山三　ヤ、なんと。

伴左　山三を差置き某が、詮議仕出だし、歸參の手蔓。

山三　それを横合ひ、伴左衛門、詮議したとは合點がゆかぬ。さほどの事をこれまでに、知らぬ顔なる今宵の仕儀。人の皮着た畜生め。

伴左　貧乏神を叩き出せ。

皆々　きり〳〵爰を、出やアがれ。

ト山三を花道へ突き飛ばす。山三やう〳〵起上がり、思ひ入れあつて

山三　この身に願ひあればこそ、じつと辛抱して居たも、最早許さぬ武士の意地。最前よりの詞の端、正しく彼れが。……限りあらば、吹かねど花は散るものを、心せはしき春の山風。……最期を急ぐ、彼れら兩人。

葛城　覺悟ながらも、せめて一言。

伴左　云はぬが花の、牛を馬

山三　乘り替へられたこの恨み。

伴左　今宵はしつぽり、

葛城　この身を捨てゝ、

山三　今にぞ思ひ

伴左　ヤ。

山三　覺えて居らう。

ト氣を替へ、唄になり、山三下座へ入る。

つめ　モシ、花魁、思ひ直して山三めを、ぐつと長棹、出來ましたわいなア。

五助　これから跡がしつぽりと、口舌たつぷり、云ひ草も

傳吉　今までの事は堪忍しておくんなんしと

伴左　首玉へ噛りつかれちやア堪らねえ。

半助　その時は親玉の、大きな目玉が三日月の、はらんべになつたやうな、眼になつてあらうなア。

伴左　無駄を云はずと、早く行け。

つめ　アイ〳〵、行きます〳〵。行くは行くが、嘸あとで

伴左　エヽ、煽てるなえ。

四人　アイ、おめでたうござります。

ト皆々わや〳〵云うて下座へ入る。葛城思ひ入れあつて

葛城　山三さん。堪忍して下さんせ。お前への云ひ譯は。さうぢや。

トすらりと拔いて死なうとする。伴左衞門狼狽てゝ留める。この時、葛城の頭の笄落ちる。伴左衞門葛城が拔く手を留めながら、件の笄を見る。葛城は伴左衞門が刀に差してある笄をよく見て

葛城　似寄りも似寄りし笄の、模樣は同じ蘆間の鷺。

伴左　後藤祐乘が蘆間の鷺。これを所持する傾城葛城。若しや揃ひし一對の、その片割れか。何とも以て。

葛城　合せて見たるその上で、語り合うたら

ト兩方より、笄差出し、伴左衞門合はせて見て

伴左　ヤヽ、一對揃うた。模樣もしつくり

葛城　割り笄の合うたる上は、

伴左　親道犬が四十二の、二つ子なりとて笄の、片しを添へて都なる、五條あたりの橋詰めに

葛城　捨てゝありしと後の親、常に話しのこの割符。
伴左　明け暮れ父の物語り。もしや添へたる書き物は
葛城　その幼名は岩橋と、書いてはあれど、親の名の
伴左　書かぬも道理、捨て子ゆゑ。そんなら其方は
葛城　譯は知らねど、譯有るお方か。
伴左　血筋も血筋。現在の
葛城　エ。……してマア、お前は
伴左　われが兄だワ。
葛城　エヽ。そんならわたしや
伴左　實の、妹。
葛城　すりや、お前とは
伴左　親身の兄妹。
　　ト兩人呆れて顏見合せ、葛城燭臺の灯を消し、兩方へ飛び退き
葛城　コレ、兄さん、わたしや畜生になつたわいなア。

伴左　知らぬ事とて、思ひがけない。畜生は、てまへばかりか、おれも矢ッ張り。ア丶、面目ない。

葛城　サ、それゆゑ消したこの灯。名乘つて逢うては、どうして、マア、お前に顏が合されませう。コリヤマア、どうしたらよからうぞいなア。

伴左　どうといつたらおぬしが身を、屋敷勤めの砌りより、知らずに居たゆゑ惚れた其方。山三が爲にこの廓へ、勤めをすると聞いたゆゑ、女房にしやうと身請けの相談。

葛城　お前の心に從へば、山三さんへ義理立たず。不義の女も同じ事。殊に、互ひに兄弟と、素性知れたる上からは、何方にしても死ぬより外は、しやうもやうも無い體裁。これを思へば先刻にも、山三さんが腹立つて、お前とわたしを畜生と、云はしやんした一言が、今身に當るこの前表。因果な緣で、ござんすなア。

伴左　今更それを云つたとて、初手から妹と知つたなら、何しにおぬしを口說くものだ。とても兄妹畜生に、なつたるからは、世間へ顏も。われが死ぬならおれも死ぬ。これが眞の兄弟心中。併し非人と心中した、小紫よりちつとは增しか。覺悟極めて、この場で直ぐに。

葛城　そんならお前も前非を悔いて、死ぬる心にならしやんしたか。それがまだしも、世間へ云ひ譯。處を變へてわたしも覺悟。マア、お前から、モシ、兄さん、どうぞ死んで下さんせ、

伴左　死ぬとも〳〵。武士たる者が畜生になり、片時も生きては居られぬ。物の見事に、この場にて

葛城　そんなら、ほんまに、もう爰で。

伴左　今が最期だ。南無阿彌陀佛。

ト脇差へ手をかけ、死なうとして

待てよ。小さい時から顔も知らず、生れた儘で別れた妹。名乗り合つたは、たつた今。われとおれとが兄妹とは、外に知り手は一人も無し。そんなら死ぬるに及ばない。こりや、止めよう、止しにしよう。

葛城　そりや、お前、卑怯でござんせう。

伴左　卑怯未練も、誰れ一人、見た者無けりやア、義理も無し。大事の命を輕々しく、コリヤ、滅多にやア死なれねえ。それより大事な、床の下へ、入れて置いたるその品を、山三めが知らぬといふが定ならば、これも尋ねにやならぬ品。

葛城　してマア、お前が主さんを、疑はしやんすその品は、いよ〳〵お家の

伴左　それが佐々木の家督の系圖。今では山三が緣も無い、この伴左衛門が妹の其方、この身の大事を

トあたりを見廻し、思ひ入れ。

葛城　その系圖こそ山三さんの實の親、山左衞門さまが預りの一卷、又、白井の親御が神妙劍、鎌倉武將へ持參の道筋

伴左　處は戸塚の松原にて、荷擔人引き連れ、待ち合せ、切つて捨て、身が手に入れし神妙劍、荷擔なしたるその一人、心變りか、本庄助八、直ぐに奪うてその場を逐電。その後、鎌倉利澁寺にて其方も存じの通り、山三が難儀となつたる系圖、身が盗ませて、所持なしたるワ。

葛城　すりや、その系圖もお前の業。殊に、名古屋の親御まで討つて捨てたりや、伴左衞門、山三が爲には、身共は敵サ。

伴左　云ひ交したる山三さま、主の親御は舅も同然、縁あるうちに私も共々、覘ひし敵は、現在兄さんの

葛城　山三が尋ぬる系圖の一卷、爰の二階で失せたるゆゑ、それを尋ねるそれまでは、山三がおれを覘へばとて、成るたけ隱れて居ねばならぬ。それ程大切なおれが命、滅多に死なれぬ。どうして〳〵。

伴左　わたしはどうで長らへぬ命。わたしが死ねば畜生の、惡名とても知れぬ道理。

葛城　これまで直さぬおれが根性。われは死ぬとも勝手にしろ。併し今まで可愛いと思つた葛城。名乘つて見れば、矢ッ張り妹。縁はある。おれが明かした今の大事。夫山三へ義理を立てゝ、他言いたさば兄が身を、訴人をするも同然だぞ。

葛城　サヽ、それゆゑ、わたしは身を捨てゝ

伴左　死んでしまふか。ヤレ、可哀や。

葛城　エヽ、お前は邪慳な

ト胸倉を取るを、伴左衞門振り切り

伴左　妹ながらも、遺恨ある、山三に惚れた女ゆゑ、酷く云ふは云ふものゝ、今から思へばその以前、惚れて通つたこの廓、夜は來れど、深窓の、晝をば何と烏羽玉の

葛城　闇で契りし惡緣は

伴左　名乘つて三輪の神ならで、その葛城にうか〳〵と

葛城　迷ひの雲に稻妻を

伴左　悟らぬ先きの尊さよ。今となつちやア

葛城　エ。

ト伴左衞門頭へ手を上げる。チョンと木の頭。

伴左　アヽ、よせばよかつた。

ト投げ首する。葛城泣き落す。これをきざみにて、よろしく拍子

幕



禪のツトメにて引返し。

二番目　大切

吉原田圃の場

役名──名古屋山三。けいせい、葛城。幡隨長兵衛。野晒五助。石塔勘八。湯灌場傳吉。早桶半助。

本舞臺、正面、忍び返し附き、誂への板羽目。刎ね橋掛けあり。向う一面、櫺子障子の二階、閉め切り、好き所に柳、見越しにて、すべて吉原田圃の體。こゝに蛇の目の傘、後ろへかたげ、二階を見詰めて居る男あり。時の鐘、雨の音、蛙の聲、禪のツトメにて幕明く。

ト本釣鐘になり、件の男、正面を向くと、山三にて、高からげ、大小、身拵への體にて、思ひ入れあり。

山三　思ふに違ひ葛城が、伴左衛門に心變りの上からは、正しく山三が願ひの一々、物語りしに疑ひなし。さある時には、親の敵、尋ぬるお家の系圖まで、手に入るは覺束ない。昨日今日まで貞女ぞと、思ふ女が心變り。それに引替へ、下女の國、毒の横死も某を、助けん爲に命を捨て

トほろりとして

もうこの上は、あの葛城、伴左衛門が身請けにて、根岸の寮へ通り筋、爰に待ち受け、討つて捨て、正しく所持するお家の系圖、殊には親の仇敵、伴左衛門め、おのれ、その儘、置くべきか。

ト屹度なる。この時、揚幕にて、四つ手駕籠の掛け聲するゆゑ、向うを見詰めて

あの駕籠こそは伴左衛門、爰に待ち受け。さうぢや。

ト思ひ入れあつて、顔を隱す。矢張り時の鐘、禪のツトメ、向うより中間一人、雲に稲妻の留守居提灯を持ち、駕籠舁き四つ手駕を早目に擔うて、出で來り

中間　道が濘るぞ。氣を附けさつしい。

駕舁　合點でござります。棒組、ぬかるな。

同　のみこんだ〳〵。併し雨がやんでよいぞや。

ト思ひ入れあつて、行かうとするを、向うへ廻り、駕籠の棒を捕へる。中間恟りして、提灯を上げ

中間　山三だな。

ト聲かけるを、提灯を切り落す。これにて、ワツというて驚き、中間、駕籠舁き、逃げて入る、この物音に駕籠の中より半助、黑き頭巾を冠り、飛んで出で、逃ぐるを山三引捕へ引き附ける。半助、ワナ〳〵慄ふ。山三襟髪を摑み、顔を見て

山三　こりや人違ひ。……併し子方の此奴も同類。

半助　アヽモシ、お助けなされて。

ト慄ふを引附け

山三　コリヤ、命は助ける。作左衛門は〳〵。

半助　アイ〳〵。爰へ、駕籠で來ます〳〵。

山三　相違ないか〳〵。

半助　今參ります〳〵。

ト慄ふ。

山三　助ける。失せろ。

ト突き飛ばす。逃げんとして

半助　作左衛門さま、山三が居ます〳〵。

ト逃げながら呼ぶゆゑ、見事に切り倒し、きつとなる。これより向うの二階明るくなり、伊勢音頭のやうなる唄になり、山三思ひ入れして、半助が死骸の懷を尋ね、若しや系圖を預り居るやと思ひ入れ。向うより五助、傳吉、頬冠りして、何心なく話しながら、下駄がけ、傘を一本持ち、出で來り

五助　明日の晩は、てめえ來るか。

傳吉　エヽ、この男も持てると思つて、鈍い奴だ。

五助　置きやァがれ。鈍く見られちやァ、山三と引ッ張るな。

ト噂云うて行くを、山三聞いて、二人の足を切り附ける。これにて二人「ワッ」というて

二人　ヤヽ、山三だな。

ト跛引き〳〵逃げるを、傳吉を引捕へ、五助が目先きに白刃を突出す。五助手を合せて慄うて居る。

山三　コリヤ、伴左衞門は、この道をうせるか〳〵。

二人　ハイ〳〵〳〵。後からでござります〳〵。

トこれにて手を放し、向うを見て居る内に、二人は跛引き〳〵

二人　人殺し〳〵。

ト聲立てるゆゑ、ちよつと立廻つて、二人を切り倒し、懷中を探り見て、系圖無きゆゑ、死骸を蹴飛ばし、又向うに人聲するゆゑ、花道まで行き、屹度見屆けし思ひ入れあつて、舞臺へ來る。揚げ幕より中間一人、目立たぬ留守居の提灯持ち、駕籠の者三人、長襌の駕籠の者にて、勘八、駕籠に附き添ひ、捨ぜりふにて出で來り



三人　親方、根岸へ行つたら酒であらうね。

勘八　勿論サ。急いでもらはう。

三人　濘りやすぜ。

ト行き過ぐるを、山三提灯を切り落す。「ワツ」と云うて中間逃げる。

皆々　盗人め／＼。

ト息杖を持つて、打つてかゝる。山三是非なく駕籠舁きを相手に立廻りしながら、駕籠の中へばかり立寄る思ひ入れあつて、立どまり、駕籠の内を突く。勘八後ろより組附くを、切り拂ふ立廻り手早くあつて、四人とも見事に切られる。駕籠の中より葛城、黒の男頭巾を冠り、稲妻の羽織にて、書き物を持つてよろぼひ出るを、山三引留める。葛城胸づくしへ取附く。山三摑みし手を切り落す。腕、胸を摑みしまゝ殘る。葛城の首を打落し、切つたる髮の髻を引下げ、空にすかし見て、いろ／＼しても、暗きゆゑに、顏の見えぬこと。

山三　伴左衞門と思へども、面もしつかと

ト有合ふ袖を引きちぎり、これに首を包み、腰に附けて・

系圖の行くへ知れざる上は、宅へ歸つて

ト腹切らうといふ思ひ入れにて、東の歩みへかゝる。時の鐘、凄き合ひ方、蛙の聲、こゝにて風の音する。山三、歩みを廻り、花道へかゝりし時分に、舞臺の道具、鷹揚に廻り

以前の山三の世話場になる。

件の門口、風の音、一つ鉦聞える。揚げ幕の上より怪しき光り物、ふはり〳〵と舞臺の方へ來る。山三フツと目を附け

山三　螢の如きあの光り、……その色青く、心火とやらんか。

トこの時、件の光り物、門口の上を引取り、内へ入りし體にて、舞臺へ落ちて消えると、佛壇にて花活け倒れ、物音して煙硝火パツと立つ。尤も、其うち、ドロ〳〵、一つ鉦、凄き合ひ方、風の音聞える。山三惣身ゾツとして寒氣立ちし思ひ入れあつて、舞臺へ來り、門口をしやくり、戸を明け、内へ入る。暗き思ひ入れ。あたりを尋ね、火打ち箱を探り、火を打つて行燈を灯し、炬燵櫓の上へ葛城の首をのせる。本首出る。山三見て

ヤヽヽヽ。伴左衛門と思ひの外、こりや葛城が首。すりや人違ひで討ち洩せしか。エヽ、口惜しい。さるにても、彼奴も恨みの

ト思ひ入れ。この時、切り首の髷より書置出かゝり居るを見附け、直ぐに取上げ開き見て

「書き置きの事。」……ヤヽヽヽ。

ト行燈にかざし屹と見て

「御さげすみも顧みず、書き残しまゐらせ候。我が身事先んじ御前様と契約いたし候ふ所、作左衛門承り候ふてや、灯を消し、床に忍び居られ候ふを、御前様と取り違へ、仇なる人に戯れ候ふ事、恥しき體裁。悔ゆるとも甲斐なく、すぐに消え果て申すべき我が身なれども、心を亂し、親の敵を聞く手段にて、心に思はぬ最前の愛想づかし、お腹立にて、我が身事御前様の手にかゝり、相果て申すべき身の願ひ、それゆゑ作左衛門が身許分の筆の證據にて、常々私、お話申し上候ふ通り私しは捨子にて、名乗り合せば、伴左衛門事、我が身の爲には實の兄。假初ならぬ床の内、この世からなる畜生に、猶更申し譯立ち難く、その上、親御様の敵も伴左衛門にて、このながら系圖の一卷は、床の内にて失ひ候ふに違ひ御座無く候ふ。私し命ある内は、兄の罪人も同じ事。相果て候ふ後は血筋の我が身を親御様の敵と思し召し候ふて、伴左衛門の命お助け下され候ふやう、偏にゝゝ願ひ上げまゐらせ候。二世と語らふ御前様、今際の際には腹立たせ、冥路の障りはこれ一つに御座候ふ。我が身一つに降りかゝる涙の雨のをやみなき心を、不便と思し召し、何事も

御堪忍下されかし。申し上げたき數々は濱の眞砂に候へども、思ひに掻きくれ、別ちなく、惜しき筆とめり〳〵、卜し、我が夫へ、葛城より。」……ヤヽヽヽ。さては二人は兄妹にて、思はぬ枕を交せし葛城。その云ひ譯に覺悟極めしこの書置。さうとは知らず、一圖に思うて

ト首を抱へて思ひ入れあつて

さるにても、系圖の行くへ。伴左衞門が、よもや知らぬといふ事はあるまい。在所を尋ねて

ト行かうとして首の方へ思ひ入れ。

せめて我手で阿伽の水。只一遍の

ト凄き合ひ方、風の音、一つ鉦。あたりの茶碗へ水を汲んで、首へ手向け、樒の葉無きゆゑ、心づき、佛壇へ行き、花活けを持ちて來り、この花活けの中に、燕一羽とまり居るに、眼を附け

思ひがけない佛間の中、樒に塒のあの燕。

ト不審のこなし。

もしや死んだる葛城の、魂ひ佛間へ。

ト思ひ入れあつて

南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト件の燕を持ち、門口へ來りて

「亡き魂よ、主は誰れかは知らねども、結び合せよ、下がへの褄。」……もしや妻の一念の、暇乞ひにと濡れ燕、性を返して未來は夫婦。南無阿彌陀佛。

ト件の燕を放つ。仕掛けにて日覆へ引上げる。よき所にて、この燕二つに割れる。中より仕掛けの人魂出る。寢鳥、ドロ〱になる。山三これを見て、手を合せ、目を閉ぢ、思ひ入れあつて

疑ひも無き葛城が靈魂なるか。不便の最期もこの身の誤り。併し長らへ居るとても、敵の妹、添ふ事ならず。未來は必ず一つ蓮。南無幽靈、出離頓生菩提。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト大どろ〱になり、件の人魂引いて取る。どろ〱止む。山三氣を替へ、思ひ入れあつて

身の愁傷に取紛れ、一大事を忘つたり。この上はなに猶豫。伴左衞門が在家を探し、系圖の一卷取返し、親人の敵討を。……ソレ。

ト身拵へして、行きにかゝる。この時、向うより長兵衞、系圖の一卷を持ち、出て來り、直ぐに入る。山三これに關はず、出にかゝる。長兵衞ちよつと留め

長兵　お喜びなされませ、山三さま。

山三　こなたは長兵衞。喜びとは。

長兵　お前樣が艱難辛苦の、元はといへば、お家の系圖、不思議な事で手に入りました。

ト一卷を山三に渡す。

山三　ヤヽ、こりや、コレ、紛ふ方なきお家の系圖。チエヽ、忝い。

長兵　そればかりぢやァござりませぬ。わしが世話する權八どの、今日思はず上野にて、本庄助八に出會ひしゆゑ、只一太刀に討つて捨て、懷中見れば神妙劍、やす／＼御手に入つたれば、寶出づれば用無き命と、我が家へ歸り一部始終を物語り、この二品をお前へ渡し、殿へ忠勤二人前、賴むとばかり、立派な最期。

ト神妙劍を渡す。

山三　すりや權八には腹切つたか。ホイ。……何から何まで長兵衞どの、最早二品手に入る上は、親の敵の伴左衞門。

長兵　隱れ所は根岸の寮。

山三　やがて本望。

長兵　めでたい／＼。……先づ今日はこれぎり。

めでたく

打出し

當狂言幕數多きに附き、これまで興行仕り候ふ所、此あと、長兵衛内の場相殘り候ふ間、一幕奉入御覽候。

第二番目　大切

長兵衛内の場
今戸人形屋の場
山谷堀祭禮の場

役名　白井權八。幡隨長兵衛。下部、八内。八内女房、お傳。長兵衛女房、お近。唐犬權兵衛。蝮の次兵衛。遣り手、お爪。ぜげん、善六。一子、長松。一子、岩松。出ッ尻清兵衛。極樂十三。本庄助八。子分、三太郎。講中、太郎兵衛。同、八左衛門。同、嘉兵衛。名古屋山三。不破伴左衛門。

本舞臺、三間の間、世話場の平舞臺。上の方、佛壇。爰に前幕の小紫が小袖を置き、香花手向けてあり。眞中、暖簾口。下の方、鼠壁。大柱。吊り物にて水口を見せ、上手を見切り、二枚障子。よき所に門口。これに誂への櫺子を附け、反故張りにて所々破れてあり。この外に、大路地の入り口。爰に近在手紙便町飛脚八内と書いたる表札あり。すべて花川戸幡隨長兵衛住居の模様よろしく、幕

の内より佛壇の前にお爪、太郎兵衛、八左衞門、嘉兵衛、いづれも講中の形、三太郎居候ふの形にて、百萬遍の音頭を取つて居る。側に極樂十三居る。淸兵衛、前髪丁稚の形にて、凧の骨を巻き居る。長松、附紐の形にて、暫の凧の繪を擴げて居る。てんつゝにて幕明く。

皆々　南無阿彌阿佛々々々々々々。

清兵　コレ〳〵、坊さん。お前そんなにすると、大事な凧が皺になつて、「暫」が腹を立つぜい。

長松　馬鹿を云へ。おれが贔屓の成田屋は、どうも強いなア。

　ト頭を振つて、餘念なく見て居る。

十三　エヽ、なんだ、内の親玉に似て居ると思つて、豪勢に嬉しがる。

長松　知れた事サ。おれが附いて居て、國貞に描いてもらつたのよ。

三太　ほんに、おれが親方と「暫」とは、何方が强からう。コレ、坊さん、とてもの事に、この「暫」に、鯰の猿を遣るといゝなう。

十三　無駄を言ふな。又、注文が出て、困るわやい。ドレ、その骨がよくば、おぬしは講中へお茶でも上げろ。爰は邪魔だ。奥へ行つて貼り上げよう。

清兵　さうしなさい。おかみさんが居ねえで、内の始末が亂騒ぎだ。

長松　オヽ、母さんは、いつ戻らしやるな。

十三　それが嫌さに「暫」で御機嫌取るのだ。サア、來なさい。

ト合ひ方になり、十三よろしく大凧の繪と骨の竹を持ち、長松の手を引き、暖簾口へ入る。此うち、

六字つめになる。

皆々　平等一切發菩提心……往生安樂。

ト鉦を打ち納める。

三太　ヤレ〳〵、皆さん、御苦勞でござりやした。サア〳〵、お茶を上がりませ〳〵。

ト盆の上に茶碗を並べ、持つて來る。

つめ　構はつしやるな〳〵。ほんに、どなたも御苦勞に、よう精出して下さりました。

太郎　イヤ、わしらよりは清兵衞どの、大きに大儀でござります。

つめ　それさ。ねえ、出ツ尻さん。お前、見掛けに似合はぬ、しほらしい。その癖見なさい、好い聲サ。ねえ、皆さん。

清兵　なにサ、そんなに褒めなさんな。百萬遍は不間でも、毎日地内の念佛講で、双盤ぢやア餘程賣れた顏サ。

太郎　さうでござらう。イヤ、奇特なものだ。

八左　イヤ、奇特といへば、こゝの長兵衛どの、何の由縁か知らないが、この間、汐入堤で切られて死んだ、三浦屋の小紫

喜兵　側に一人の非人體の男の死骸。それで、どうやら、心中のやうに聞きました。

八左　その小紫の問ひ弔ひ。ほんに、お袋、お前、その時分、三浦屋に居たの。

つめ　アイサ、お聞きなされませ。縁づくとやらは味なもので、死なれたわしが連合ひの所へ、二度添ひの女房が、連れ子にして來た小紫。今のお傳は、先妻の腹に出來た。その時分には、どこかの御家中、縁づいて、今の岩吉は、その亭主の子サ。わしは丁度三度目の女房で、今のお傳も、小紫も、なさぬ仲のわしが娘。非業な死で、可哀さうで、他人のやうには思ひませぬ。わしも、たとへ遣り手こそしたれ、鬼ぢやアなし、可哀さうな事を致しました。

トほろりと泣く。

清兵　カウ〳〵、お爪婆さん。そんなら、何か、こなさんも、元は乳母奉公でもして

つめ　アイサ。わしも不破の

ト云はうとして

なんの昔を云ふ事も無いが、さるお屋敷のお乳の人。

清兵　道理でおれが名のやうだ。

つめ　なぜでござんす。

清兵　出ッ尻だものを。

皆々　何を云はつしやる。

ト鳴り物になり、向うより助八出て來り、内を覗いてお爪を手招ぎし、門口へ呼出して

助八　これだ。

ト手紙を出す。お爪取つて

つめ「お爪どのへ額五郎。」……そんなら若殿樣が。

ト開き見て

そんなら、源さん。

助八　お爪。……氣を附けさつし。

ト助八向うへ、お爪は元の座へ戻る。懷より手紙を落す。合ひ方、時の鐘、本釣り鐘になり、花道より長兵衞、浴衣に細帶、日和下駄、着物を抱へ、湯戻りの形。あとより捕り手甲乙二人附いて來て、花

道にて立廻りあつて

甲　幡随長兵衛、

二人　腕廻せ。

ト十手を振上げる。長兵衛思ひ入れあつて小腰を屈め

長兵　これは存じも寄りませぬ。私しに何科あつて

甲　云ふな、長兵衛。汝が隠まひ置いたる紫扇蝶

乙　彼奴こそ誠は白井權八。繩打つて渡さばその通り、

甲　異議に及ばゞ、

二人　腕廻せ。

ト又立ちかゝる。長兵衛よろしく留め

長兵　まづ〳〵、お待ち下さりませう。……成る程、一二度出合ひました紫扇蝶。白井權八とやらは存じませぬ。由縁かゝりも無い長兵衛、隠まつた覺えはござりませぬ。町人なれども、私しも、人に知られた幡随長兵衛、子分、子方もござりますれば、手筋もそれと分り次第、繩打つてお渡し申しませう。

甲　すりや、其方の働きにて

長兵　花川戸の長兵衞。毛頭、嘘言は申しませぬ。

乙　神妙なる返答。

甲　捕へ次第に、その時屹度

長兵　畏つてござります。

二人　然らば、イザ。

ト捕り手二人引返して、花道へ入る。矢張り合ひ方。長兵衞これを見送り、思案しながら、本舞臺へ來て、門口へ入る。

三太　エヽ、親方、笊を持つて迎ひに行かうと思つた。とんだ長い湯でござりやすね。

長兵　何を吐かす。うぬぢやアあるまいし。そりやさうと、皆様、大きに御苦勞でござりました。コレ、茶でも入れて、云ひつけたお菓子でも上げたかよ。

太郎　イヤノヽ、何も構ひなさるな。深切づくの念佛講中。御馳走よりは、ナウ、何れも。

八左　さやうサ。氣の毒なのは、こゝの内のお内儀。定めて譯もあらうなれど

嘉兵　幸ひ百萬遍のめでた次手、講中寄つて、どうぞ、コレ、詫び言の口をきいて見たい。

長兵　アヽ、モシ〳〵。お近めが事なら、思し召しは有り難いが、もう仰しやつて下さりますな。

清兵　お爪婆さん、聞かつしやい、あの通りだから、おいらが云ふと、叱られてばかり居るわな。

つめ　さうであらうが、長兵衞さん、講中のお方があのやうに、皆さん寄つてのお詫びごと。

長兵　コレサ、往生づくめにこなさんまで。萬更目の明かないおれぢやアあるまいし、料簡のなるもならぬも、みんな胸に有る事だ。彼奴が日頃の一部始終、皆樣にも話したいが、マア、ちよつと云やア小まめな方よ。亭主の裾から襤褸の出るは、女房の恥とやら。うぬの勝手な針仕事が好きでその癖、朝寢が大嫌ひ。夜のうちから起きて、掃いたり、拭いたり。それだから見なせえ、おれが所の銅壺は、御門徒宗のお持佛堂を見るやうに光らア。無駄錢を遣はず、他人樣におれそれがよくつて、ちつと遊山にでも出ろといへば、その錢で、長松が給の一つも拵へるがいゝなんぞと、しみッたれが、わしの氣に入らない。……コレサ、お婆どん、講中の衆へ免じてと云ひたいけれど……マア、當分のところは

太郎　さうだが、おいらは、折角口をきいて、左樣ならようござりますと、歸られもしまい。急に思案も附くまいての。

嘉兵　さうサ。マア、今日は歸つて、機嫌の好い時。

三人 それ〳〵。

長兵 お婆どん、そこいらをいゝやうに頼みやすぜ。

ト奥の方を向き

十三や〳〵。

ト呼ぶ、奥より十三出で來り

十三 アイ〳〵。何でござります。

長兵 サ、何は無くとも、講中の衆へ上げてくりやア。

十三 アイ、何たかわからねえ精進料理だ。何をいふにも、これの無い

ト小指を出し

ほんに埒口は無えわな。

つめ なにサ、お心安い仲たものを。サア、どなたもお出でなせえ。

皆々 これはいかい御馳走でござります。

ト合ひ方になり、講中にお爪附いて奥へ入る。十三あとを見送り

十三 あのねえ、伯母さん。いゝやうにして上げてくんなせえ。……イヤ、上げてといへば一番一のこ

の凧に、糸目を附けねえで、あの子が腹を立てゝ居よう。

長兵　イヽヤ、十三にはおれが頼みがある。糸目位ゐは三太、丁度おぬしにいゝ仕事だ。泣かせぬやうに遊ばせてくりやれ。

三太　オット、そこらが山の宿、差詰め相手はこの三太。

ト凧の絲巻を持ち、奥へ入る。あと合ひ方。

十三　親方、わつちへ頼みとはえ。……聞えた。彼の事かえ。

ト二階へ思ひ入れ。

長兵　さればサ。先刻も湯からの歸りがけ、二階へ隱して置く事も、どうか嗅がれた樣子だ。それだによつて、アノ、當分、主を一月寺へ遣らうと思つて。

十三　さうでごんす。人出入りの多い爰の內。マア彼處へさへ預けて置けば、まさかの時にやア

長兵　日が暮れたなら、駕籠に乘せ、目立たぬやうに、中田圃から、てめえも附いて……だが、待ちやれよ。あの形ぢやアどうも先きへやつちやア

トあたりを見廻し、佛壇の下の小袖を取つて來て

幸ひ女のこの小袖。

ト十三へ渡す。十三受取り

十三　これぢやァ誰れも氣が附かない。

長兵　コレ。

ト二階へ思ひ入れして囁く。

十三　呑みこみやした。わつちもとつくり

長兵　頼んだぞよ。

十三　合點でござります。

ト合ひ方、時の鐘になり、十三よろしく、今の小袖を持ち、二階へ上がる。

長兵　可哀さうに、科も無い女房に暇を遣り、世間の人の目を忍び、世話せにやァならぬも男の意氣張り。生中人に知られた長兵衞。うるさい世話の、浮世ぢやなァ。

ト莨盆引寄せ、思ひ入れ。唄になり、向うより蝮の次兵衞、木綿やつし、羽織の形、鐵漿壺を下げ、跡よりお近、世話女房の形にて、風呂敷包みを抱へ、出で來り

次兵　コレ、日頃にも似合はぬ。何も案じる事はない。早く歩まないか。

ちか　お前また、機嫌の惡い所へ行つて、つけ〳〵と云はしやんすな。わたしや外に待つて居る程に、

次兵 お前ゝア、先きへ入つて

次兵 合點だ〳〵。

ト門口へ來り

長兵衞、內にか。

トずつと入る。長兵衞莨をのんで居る。

オヽ、內に居るワ〳〵。この頃から、いつ來ても〳〵、つひに內に居た事が無いゆゑ、今日も留守なら待つて居る氣で來た。よく內に居たな。

長兵 わしだつて用がありやア、留守な事も無くつてサ。ようござりましたな。

次兵 來ないでわサ。噂を聞けば、どうか金の要る事、ある樣子だから、娘のお近も鐵漿を持つて來た。銅壺の前へ直して置きやれ。

長兵 去つた女房の鐵漿を、なぜ銅壺の前へ直すのだ。

次兵 知れた事だ。お近はおれがかゝり娘、小藏持つた所から、貰ひに來たれど、遣らずに居たが、其うち、こなたにくツつき、こなたも人に知られた顏。諸道具揃へて寄越した上、ソレ其やうな、子まで出來た夫婦仲ぢやないか。それに委細に跡からと、今日が日まで、此おれも、馬道ぢやア

知られた蝮の次兵衛、娘に何か仕落ちがあるか。間男でもしたか。大酒くらうたか。但し又、小盗みでもしたといふのか。譯があらう。サア、それを聞かう〳〵。

長兵 ハテ、こなさんも、馴れ馴染んだ女房去るに、よく〳〵な事が無くつて、どうするものだ。疵も附けずに歸したは、こりやこなさんへ達引きだ。大概、そこらは推量して、引取つて行かつしやい。譯を云つたら、血で血を洗ふ、恥かき道具でござんせうぞえ。

ト此うち、お近聞いて居て、ズッと入る。

ちか ヤイ、うぬは去られた内へ、何しに來た。

何しに來たえ。モシ、先刻から門口に聞いて居れば、血で血を洗ふ恥かき道具ぢやと、云はしやんしたが、なんで、譯を云へば、血で血を洗ふ恥かき道具でござんすえ。サア、それを云はしやんせいな〳〵。

長兵 ハテ、云はねえのが此方の情けだわえ。

ちか イエ〳〵、お前は云はぬが情けでも、此方は聞かにやならぬわいなア。

次兵 さうだ〳〵。それでこそ、おれが娘だ。コレ、長兵衛、サア、その譯云つて聞かしやれ。譯が聞きたい、譯が聞きたい。

長兵　サア、その譯は。
ちか　どうでござんす。
長兵　サア、何でも置かれない譯だ。出て行けく。
ちか　イエく、聞かぬうちは出やせぬわいなく。
次兵　オヽ、聞かないうちは、出るなく。
長兵　出ないといつて、去られた內へ、誰れが許してうしやァがつた。
ちか　その去つた譯、聞かうと思つて。
長兵　譯を聞かうも、凄まじい。出やァがれく。
ト外へ出さうとする。この立廻り、皆々よろしく、てんつゝになり、向うより杢郎兵衞、家主の形にて出て來り、捨ぜりふにて直ぐに舞臺へ來り、この中へ入り、間違つて、踏のめされる。
杢郎　コレサく。どうするく。
トこれにて、杢郎兵衞を見て
長兵　こりやァ、大屋樣かえ、御免なされませく。
杢郎　御免なさいぢやァないわな。……大屋を踏むは、家賃を踏むも同じ事だ。

ちか　ほんに、大屋様、好い所へお出でなされました。恥を申さねば、理が知れぬとやら、わたしは爰の内を出されましてござりまする。何の越度やら、わたしは爰の内を出されましたが、越度が知れぬゆゑ、それを聞きに參りまして

次兵　お前、譯さへ立ちますれば、引取らないでどうするものでござります。いゝしなも無くつて出されたと云はれちやァ、この次兵衛が立ちませぬ。

李郎　こりやァ、いかさま、譯は知らぬが、別れるならばこれが疵だと、得心づくがよささうなもの。コレ、長兵衛どの、何もわしに遠慮は無いから、お近どのゝ惡い事を云つて去るがようござります。

ちか　大屋様の仰しやる通り、それぢやによつて置かれぬといふ事なら、詫びの仕樣もござります。それも云はずに、親元へ

長兵　モシ大屋様、好い所へお出でなされました。斯ういふ事には、他人が一人交らないと、理窟がわかりませぬ。マア、好く聞きなさい。第一、女の癖に朝起きだワ。その上に綺麗好きで、他人様に愛想が好くつて、無駄錢とては怪我な事。

李郎　成る程、こりや尤もぢやわいの。

長兵　まだその上に、子を可愛がつて、遊ぶ事が大嫌ひ。髪結ひに髪は結はせず。縫ひ針業は持つて來な

さい。酒は飲まず。長屋歩きをした事無し、どこの國にか、この通り、人出入りの多いわしが内で、つひぞ間男をした事が無い。この通りの女房だものを、去つたも無理ぢやァござりますまい。

杢郎　イヤモ、聞けば聞く程、長兵衛どのが皆尤も。これぢやァ次兵衛どのも、二言と云はずに、引取らずばなるまい。

次兵　成る程、娘が悪い。……ハテサ、おぬしが悪い事になつて居ろサ。そんなら、こなたの云ひ状を立つて、お近を連れて行かうから、諸道具はいふに及ばず、夏冬の物、品数揃へて、爰へ出しやれ。鐵漿壺と風呂敷包みばかりぢやァ受取るまい。

長兵　サア、そりやァ

次兵　それもこなたと縁を切つて、他人になつて、ちつと詮議が……サア、去り状書きやれな。

ト長兵衛思ひ入れ。

長兵　そんなら、お近を離縁すりやァ

次兵　諸道具揃へたその上にて、また金にする手段があるよ。

長兵　それぢやァ、滅多に去られねえ。

次兵　去り状書くか。

長兵　サア

三人　サア、〳〵。

次兵　長兵衞、返事は、どゝどうだ。

長兵　ようごんす。女房を裸にしたと云はれちやア外聞が悪い。塵ツ葉一本残らず附けて、去る、去らないは、後かたまでに。

次兵　そんなら返事の分かるまで、マア、矢ツ張り聟、舅。……こりやア、大屋様、お世話でござりました。

李郎　なにサ、お前、わしもひよんな所へ來合せて、懸り合ひにならうと案じましたが、どうか丸く納まりさうだ。そんなら、もう歸りませう。お内儀も、これから心を改めて、小遣ひなぞも湯水のやうに、パツ〳〵と遣はつしやい。着物なぞも長くして、あの女房は引摺りだといはれるやうにせにや、あの御亭主の氣に入りませぬぞ。

ちか　イエモウ、私もこれから、内に居りますなら、隨分心を改めて、何一つ云はれぬやうに致しませう。

李郎　コレ〳〵、隨分と仲悪くして、はした喧嘩もさつしやれ。コレサ、必ずしませぬぞえ。……そんならわしは歸りませう。ほんに、これでなけりやア納まらねえ。……それ〳〵、何か忘れたやうな。

長兵　モシ〳〵、大屋様、お觸れの事かえ。

杢郎　ハテ、ようごぜえす。

　ト唄になり、杢郎兵衞思ひ入れあつて向うへ入る。

次兵　ドレ、おいらも後まで、二階へ行つて

　ト行かうとする。長兵衞留めて

長兵　イヽヤ、二階は取り散らかつて、足も踏み込まれねえ。奥へ行つて、野郎どもと、酒でも飮んでござらつせえ。

次兵　そんならさうしよう。コレ、お近、去り狀取るとも、取らねえとも

ちか　後かたまでは、お前マア

次兵　ドレ、四五杯煽らうか。

　ト唄になり、次兵衞奥へ入る。直ぐ奥より三太郎、長松を抱へ、出て來て

三太　モシ〳〵、親方、長松さんが奥に寢て居なさつたから、連れて來やした。

ちか　ほんに、長松か。久し振りで寢顔を見た。……風邪でもひかすであらう。とんと男といふものは。邪慳なものでござんすなア。

ト長松が側へ行き、いろ〳〵思ひ入れ。三太郎はすぐに奥へ入る。此うち、長兵衞ふとお近と顔見合せ

ちか　モシ、待ちなさんせ。何ぢやぞいな。其やうに怖い顔ばつかりして、少つとはわたしが心にもなつて下さんせ。いつぞや、旅から歸らしやんすと、どう云ふ事か、譯も云はずに、男つくで世話せにやならぬ人がある。てめえが居ては遠慮ゆゑ、迎ひを遣るまで、親元へ行つてくれろと云はしやんした。それから、梨も礫も無し。父さんは知つての氣質。どうした事ぢやと、毎日々々、聞かれて困るは、わたし一人。惡い事でもしたやうに、世間の手前も氣の毒ゆゑ、今日連れ立つて來たのもナ……長松の顔も見たし、そして人さんが、いろ〳〵な事を云うては聞かす。わたしもしやくるのぢやとは思うて居れども、ひよつと此まゝ去られたら、マア、どうしようと思ふわいなア。

長兵　成る程、女といふものは、解らねえものだ。大概、おれが氣も知つて居さうなものぢやァねえか。もう少つとのうちだから、辛抱して、マア今日は、親仁を連れて、早く歸れ。

ちか　サア、さう云はしやんすりや、よいやうなものぢやが……モシ、マア、お前はきつう苦勞でもあるかして、痩せなさんしたぞえ。何をマア其やうに。苦勞があらば、わたしにも、ちつとは話して下さんせ。

長兵　やかましいわえ。よくべら〳〵と口をたゝきやァがるワ。苦勞はおれが好きですらア。早く出て行

きやァがれ。

ちか　アイ、參ります。出て行くわいなア。

長兵　きり〳〵、出てうしやァがれ。

ちか　出て行きは行きますが　願ひがあるわいな。

長兵　何だ、願ひとは。

ちか　わたしが願ひといふは……久し振りでござんすなア。

ト此うちお近、長松をそつと下へ寢かし、長兵衞の側へ寄る。

長兵　久し振りだといつて、今まで出て行けといつたものが、どうしてそんな事が……そして、親仁も奧に待つて居らア。

ちか　あの父さんは寢上戸ぢやわいなア。それぢやによつて、今夜は泊つて、明日は早く歸つても、大事ないぢやござんせぬか。

長兵　サア、さう云へばそんなものぢや。

ちか　久し振りで歸つて見れば、どこもかも埃だらけ。ほんに女子の無い內といふものは、洗濯物もたまつて居ようし。ドレ、マア、こゝらを一遍

ト箒にてそちらを掃き、梯子の方へ來て

大方、二階も埃だらけであらう。

ト行かうとするを、長兵衞見附け

長兵　コレエ。去られた内へ來て、二階を掃く者があるものかえ。

ちか　それでも埃が

ト裾を捲る。

長兵　そりやこそお見舞ひ申すワ。

ちか　アヽコレ、悪い事をしなさんすな。

ト長兵衞に寄添ふ。

長兵　堪忍しろ。ほんに女房といふ奴はいゝ奴だ。どうでも店屋物よりも生蕎麥がいゝ。このまた、襟足にやア打殺されるわえ。

ちか　めんような。男といふものは、そんな事いうて。女子ほど割りの悪いものは無いわなア。

長兵　ハテ、誰れに遠慮はねえ。

ちか　アレ、マ、滅相な。

ト長松目を覺まし

長松　ホウヤラホヤラ〱。

トこれにて

長兵　コレ

ト長松を引抱へ

此方へ來い。

ト唄になり、長松を抱へて、ツイと奥へ入る。お近思ひ入れあつて

ちか　エヽ……ほんに今の子供は

ト思ひ入れ。この時　三太郎奥より窺ひ出て

三太　今のを見ちやア

トお近に戯れようとするを、お近拂ひ退けて

ちか　エヽ、誰れかと思へば

トまた三太郎の頭をピツシヤリ

酒を飮んだの。

ト思ひ入れ。三太郎頭を抱へたまゝ、屋體囃子になり、この見得よろしく、この道具廻る。

本舞臺、正面、上下まいら戸附き。誂への押入れ、戸棚。下の間、反故貼りの二枚障子。上の方、離れ家にて、隱居の間と見える、一間の障子屋體。すべて、花川戸裏店の模樣よろしく、こゝに、近在手紙便飛脚八内と書いたる看板、粗末なる門口あり。二重舞臺に、お傳、前垂れ、襷、世話女房の形にて大火鉢へ繪の具をかけ、今戸細工の人形を卷き藁に刺し、彩色して居る。此そばに岩松、附け紐の木綿やつしにて、獨樂を持ち、遊んで居る。時の鐘、合ひ方にて、道具とまる。

岩松　母樣、この人形、わしに下されや。

ト取りにかゝる。

でん　アヽコレ、何をしやる。こりや、コレ、外の伯父樣から、お誂への大切の人形、早う仕立てゝ上げにやならぬ。ほんに、追ツつけ父さんが、お土産を持つて歸らしやんすであらう。待つて居や〳〵。

岩松　アイ。そんなら、父樣が、押ツつけ戻つてや。

でん　オイナウ。もう追ツつけであらう程に、茶も沸して置かにやならぬ。サア〳〵、奥へ行つて、遊

んでおぢや〳〵。

岩松　アイ〳〵。母様、後に何ぞ下されや。

ト合ひ方になり、岩松奥へ入る。この合ひ方にて、花道より唐犬權兵衞、ばつち、尻端折り、羽織を肩へかけ、跡より善六、判人にて附き出て來て

善六　權兵衞さん。お前、マア、妙な所の穴を知つて、モシ、何かえ、亭主持ちぢやァござりやせぬか。

權兵　何でもいゝわな。おれ次第に。掘出し物だ。マア、來やれ。

ト云ひ〳〵、本舞臺へ來て、門口を入る。

權兵　お內儀、內にか。オヽ、仕事だの。大層に精が出るの。

でん　オヽ、權兵衞さん。大方、今日あたりは樣子も知れようと、心待ち。……ほんに、あなた、ようお出でなされました。

ト莨盆を持つて來る。善六、お傳をヂロ〳〵見て

善六　權兵衞さん〳〵。これなら剛氣な代物だ。

權兵　コレサ、まだ挨拶をしないで、つか〳〵と……マア、下に居やれ。

善六　ほんに、さうだの。

ト下に坐り

モシ、お初にお目にかゝりやした。何か、權兵衛さんのお話しで

權兵　コレサ。先走つた男だ。待つて居やれ。……コレ、お傳さん、合點がゆくまいが、高が、斯うだ。ソレ、この中お前がわしに賴んだ、佐々木の系圖の一卷、是非に欲しいといつたばかりにて、在所は知れても、金次第。不躾な事だが、爰の身代、逆さに振つても、五十兩とは手重からう。

でん　サア、取戻さるゝ事なれば、たとへわたしが身を賣つても

權兵　サア、そこだ。この男は、ソレ、吉原の判人、三浦屋へ、大概下話しをして、金を直ぐに持つて來たは、手短かに埒を明けよう爲サ。善六、これからおぬしが挨拶にしやれ。

善六　オツトよし。成る程、その理窟を云はにや解らぬ。なんだ。いよ／＼それなら其やうに、わしが方はマア得心サ。

でん　ハイ／＼。それはマア御深切に、有り難うございます。

善六　サア、さうだが、モシ、金を渡すにやア、親判も要るし、第一マア、御亭主があつちやア

でん　ハイ。サア、それも、この間、權兵衛さんへ申した通り、

權兵　さうサノ／＼。當人のお前が是非とさへ思やア、筋道の立つた金の譯。御亭主にやア去り狀取るが

い〻。

善六 さうサ。それが解りやア、何時でも、飛びついて相談したいのサ。

權兵 アレ、あの通りだ。代物は金と引替へに、今でも直ぐに持ち主を連れて來て、こなさんの手へ渡すわな。

でん イエ、モウ、わたしはどうなりましても、取戻さねばならぬ系圖の卷き物。それにつけても、八内どのは、商賣用で在方へ、急な使ひに參られまして、ハイ、もう今日は是非とも、追ッつけ戻るでござりませう。それまで、どうぞ、今暫く。

善六 出來る事なら、少つとやそつと、待つても埒の明くのが勝手。

權兵 そんなら、斯うしよう。おれもどうで、爰の長、長兵衞に逢はにやアならぬ用もある。いつそ後まで、爰の內で

善六 御亭主の歸りを待ちやせう。

でん ハイ、それは、モウ、日も段々長くなり、晝寢も勝手。ナウ、權兵衞さま。

權兵 ほんに、枕でも借りなせえ。

ト矢張り合ひ方にて、權兵衞、善六附いて、下の障子の中へ入る。お傳殘り、あたりを見廻し

でん　嬉しや、主が戻つてなら、喜ばしやんす系圖の在所。

ほんに、さうぢや。

ト云はうとして

ト思ひ入れ、よろしく、合ひ方になり、お傳、二重舞臺の押入れの側へ寄り、下戸棚を少し明け、土瓶の茶を汲み、押入れの中へ入れ

モシ、御窮屈にござりませう。思はぬ不時の御災難にて、人を害めし、お身の上、鵜の目、鷹の目、上林の、噂の鎮まるそれまでと、お隠し申すは、申すものゝ、折わるい夫の旅稼ぎ。併し、申し、お喜びなされませ。尋ぬる佐々木のお家の系圖、在所を慥かに。金さへあれば、追ッつけ夫の戻り次第、心易く手に入りまする。……ハイ／＼。イエ、モウ、其やうにお禮仰しやるは、冥加ない。先きの連れ合ひ文平どの、今際の際にも、くれ／＼と、名古屋のお家の深い御恩、忘れぬやうにと遺言を、守る甲斐なく岩松が、年端もゆかぬそれゆゑに、今の夫の八内どの、頼もしい氣立てを幸ひに、二度の夫をお家へ奉公。それもいつしか、御流浪の、共に辛苦は家來の役。思ひ廻せば、佐々木のお家。アヽ、世の中でござりますなア。

トほろりと涙を隠す。上の方の障子屋體を明け、お爪うそ／＼あたりを見廻し、連尺附きの誂への葛

籠をツッと明け

つめ　コレ、モシ、和子。寝てござるか。作左衞門さま。……サ、何ぢやわいなア。この家の內には、お前を敵と附け覘ふ、名古屋山三が由縁の奴等。氣遣ひでならぬ矢先きへ、最前額五郎さまよりの手紙。內證でお邸へあなたをお供いたせとある巧い手筈。サア、これからこの葛籠の儘で、引ッ背負つて、わたしが直ぐにお供する。ちつとの內の辛抱ぢや。窮屈にはあらうが、ソレ、蓋を締めるぞや。

ト葛籠の荷拵へする。矢張り合ひ方、時の鐘にて、花道より八內、股引、草鞋、旅戾りの形にて、一本差し、菅笠を持ち、思案しながら、出て來り

八內　千住の道で噂に聞けば、汐入の土手の人殺し、女は女房が行きあひ姉妹、おれが爲には元のお主の、本庄の娘の八重梅さま。側に非人の死骸とやら。これも慥かに白井の惣領、彌市どの。切り手は噂の權八どの。古主の敵でありながら、今の御主人山三さまと、契約ありし假にも弟御。思案する程、こりやどうでも、科を此方へ引受けて、

ト云はうとして、あたり見廻し

エヽ、埒もない。內でも思案のなる事だ。

ト氣を變へ、ツイと本舞臺へ來る。此うち、お爪、葛籠の荷拵へして背負ひあげ、お傳は押入れへ物云

ふ模樣。八内窺ひ見て、外より門口を明け、ツイと入る。この物音に、お傳押入れをシャンと締める。お爪も恫り、三人顔見合せ

でん　オヽ、戻らしやんしたか。

八内　今戻つたが、なんだ。うろ／＼。

でん　イヽエイナア。岩松が待ちかねてなア。コレ、父様が戻つてぢや。ちやッとおぢや／＼。

岩松　父様、待つて居ましたっ。

ト奥より走り出て來て

何ぞお土産を下されや。

ト八内へ取りつき、甘える　お爪、葛籠を背負ひ、出て行かうとして、うろ／＼する。

八内　オヽ、土産も遣らうが、お袋、お前、葛籠を背負つて、どこへござる。

つめ　ヤ。……サア、わしはアノ

トつかへる。

八内　何だか、ソワ／＼。……お傳、何ぞおれが留守に、變つた事でも。

でん　イエ／＼、別に變つた事も、ナア、母さん。

つめ　どうぢやか。わしは離れ座敷の隱居家に居るから、知らぬわいの。
岩松　コレ、父樣、變つた事は、お前の留守に、どこかの知らぬ伯父樣と、母樣がナ。
でん　エヽ、頑是もない。何を見て　譯もない事云はぬものぢや。
岩松　イヽヤ、それでも伯父樣と
でん　アヽ、これはしたり。ほんに、子供といふものは、惡い聞き手のあるをも知らず
　　トお爪へ氣をかねるこなし。八内心得ぬ思ひ入れ。お爪これを聞いて
つめ　それ聞いてか、聟どの。わしがこの家を出て行くも、有り樣は娘のお傳、どうやら怪しいこの頃の素振り。もしもの事があつた時、わしがこなたへ云ひ譯なさ。それでこの母親は、出て行きますわいの。
八内　それなれば、何ぞ女房に、不足、恨みがあつて
つめ　それ／＼。その譯は、コレ／＼、孫、今われが云うた事、父の留守へ誰れが來て、何と云うた。
岩松　アイ。母樣と二人話して、淚こぼして
八内　何ぢや、淚こぼして。
でん　コレ／＼、岩松、何をマア譯も無い事、つか／＼と

八内　イヤ、子供は何より正直。して、その來たは何者ぢや。イヤサ、お傳、來た人は誰れぢや。

でん　サア、その人はナ。

つめ　どうして〳〵。そんな事では白狀せぬ。恐ろしい心の女ぢやわいの。

ト葛籠をおろし、莨をのんで居る。

八内　お傳。その男は云はれぬか。

でん　サア、それはナ。

八内　男の留守に男と二人、涙こぼして、

でん　それにはナ

八内　云ひ譯あるか。

でん　サア

八内　サア

二人　サア〳〵〳〵。

八内　ムウ。これぱつかりは云はれまい。

トぢつと思ひ入れ。時の鐘、風の音になり、向うより長松、三太郎を連れ、凧を持ち、出て來て

長松　エヽ、馬鹿め。折角摑んだものを、てまへがたぐつたから悪い。

三太　いゝわな〳〵、今度は岩さんを誘つて、ふるふんべいをかけるわな。サア〳〵、來なさい。

ト絲を巻きながら、門口へ來て

岩さん、内かえ。凧を揚げるワ。お出で〳〵。

トこれにて、お傳幸ひと

でん　それ〳〵、お友達が迎ひにぢや。ちやッと行きや〳〵。

ト岩松が手を取り、表へ突き出す。

三太　サア〳〵、「暫」を揚げらア。早く來なさい〳〵。

ト長松、三太郎、岩松向うへ入る　八内思ひ入れあつて

八内　女房、去つた。

でん　エヽ。

八内　イヤサ、驚く事はない。譯を糺せば、男の意地、去つた女房に念は無い。きり〳〵この家を、出てうせう。

でん　エヽ、モシ、コレイナア。道理ぢやけれど、これには譯の

八内　ヤア、くど／＼と、なに云ひ譯。

でん　それぢやけれども、その人はナ。

ト云はうとして、思ひ入れあつて

サア、云ひたうても、云はれぬわたしが因果と成る程、暇を取りませう。去られませう程に、せめては、岩松は、矢ッ張り、お前の子に

八内　ナニ、穢らはしい。心の腐つた汝が腹に、宿した餓鬼は誰れが倅。汝が連れ子だ。連れてうせう。

でん　それぢやというて、わたしが身を

八内　何が、どうしたと。

でん　サア、身一つは、ともかくも。可哀さうに、頑是もない、あの子は矢ッ張り。コレ、モシイナアつひにこれまで、何一つ、腹立たした事も無い、曇らぬわたしが日頃の心、知らぬかいなア。そりやお前、胴慾でござんすわいなア。

ト泣き落す。お爪ヂロ／＼見て

つめ　鼻毛の伸びた御亭主に、おぬしが心、なに知れよう。親と名の附くおれにさへ、知れぬは日頃の我が儘氣儘。その罰で、見ろ。内證でうまい事して居る化けの皮、旅稼ぎの留守に引摺り込んだ、

でん　男は誰れだ。それを吐かせ。

つめ　エヽ、お前まで其やうに、有りもせぬ事焚き附けて、いとゞ疑ひ受けし身を

でん　まだ〳〵、罰とは思はぬなア。疑ひ受けるもうぬが心。悲しくば、隱した男を云へ。

つめ　それぢやというて。

でん　エヽ、面倒な。親にまで恥をかゝせるお轉婆め。吐かさぬがいゝか。これがいゝか。うぬがやうな奴は、カウ〳〵〳〵。

ト煙管でお傳をしたゝか打ちのめし

いつその事に、ぶち殺して

ト立ちかゝるを、八内よろしく突き廻し、直ぐにお傳が襟髮取つてヂツと引寄せ

八内　エヽ、うぬはなア。御主人がたのお爲にこそ、男は苦勞するわやい。それをば外に、うぬら親子、先きの夫の文平が、受けたる恩のお主も旣に、身の榮えより隱し男。最前戾つて押入れの、しかもあらまし見て置いた。それを明せば、おれが恥。親や夫に生き恥を、よくかゝせたな、人畜め。斯う成るからは、男めも、爰へ引出し、尋常に。男の意地だ。覺悟しろ。

でん　サア〳〵、道理ぢや。お前の腹の立つのは道理ぢや。わたしが心は、神かけて、大事な〳〵お人

八爪　ゆゑ、お前に隠したお方はナ。

ヤ。

　　ト思ひ入れ。

でん　わたしは此まゝ殺されても、その名はどうも云はれぬわいなア。

　　ト泣く。

八内　それ程までに、エヽ、うぬは母と一緒になつて、出てうせう。

　　ト突き放す。此うち、お爪火鉢の火箸を取つて、ソツと焼き

つめ　エヽ、恐ろしや。それが嫌さに出て行く母。畜生の娘は持たない。親子の縁を、切つたしるし。

　　トだしぬけにお傳の顔へ火箸の焼き鐵を當てる。お傳「ワツ」と悶絶する。八内悄り、寄らうとして思ひ入れ。お爪せゝら笑ひ

女房にのろい御亭主さん。未練に縁は切り得まい。重ねて淫事ひろがぬやうに、面へ極印、親の慈悲。親子でなけりやア、出て行く母。お聟さん、大きにお世話になりやした。

　　ト太々しく葛籠を背負ひ、門口へ出て

ほんに譬へに違ひなう、子は三界の、首枷よナウ。

ト唄になり、お爪よろしく、ぼやき〳〵、花道へ入る。直ぐに奥より權兵衞、善六出來りて

善六 ヤレ〳〵、ぐつすりと一寢入り。御亭主はお歸りか。

權兵 ヤア。コレ、お內儀。どうしたのだ。

ト引廻す。お傳悔り、あたりを見廻し

でん エヽ、モシ、お前は權兵衞さん。望みの通りわたしはナ、主に暇をもらうたわいなア。

權兵 オヽ、そんなら首尾よく去り狀を

善六 貰つたか〳〵。

トお傳の顏を見て

ヤア〳〵。お前、どうしたのだ。その顏ぢやア、どうも五十兩

權兵 ほんに、不粹だ。何の事だ。これぢやア、系圖も佐々木の若殿、額五郎さまに賣る方が

善六 右から左を近道だ。

ト行かうとするを、お傳悔りして留め

でん エヽ、モシ、そんならわたしの身代

權兵 金にやアならない。放さつしやい。

八内　コリヤヤイ、お傳、なぜおぬしは身を賣るのだ。
でん　佐々木のお家の、系圖が欲しさ。
八内　ヤア。……して、望みの系圖は、その持ち主は。
權兵　おれが持つて居る。
八内　すりや、その品を
權兵　賣つてはやらうが、肝腎の金があるまい。
八内　それでも、ちよつと

ト寄るを、權兵衞突きのけ。善六附いて門口へ出て

權兵　これから直ぐに長兵衞に
善六　サア、行きやせう。

ト權兵衞・善六向うへツイと入る。八内思ひ入れ。お傳向うを見て

でん　酷い、邪慳な親の身で、この疵ゆゑに、願ひの品、手に入れ自慢に、山三さまへ、云うた詞も、面目ない。

トじつと泣く。

八内　ヤア、ナニ、名古屋の御主人とは。
でん　敵に緣ある母さんゆゑ、云ふに云はれぬ疑ひ受けし、隱し男は山三さま。
八内　さすれば、猶更、捨おかれぬ。今の系圖の一卷を
　　ト身拵へして行かうとする。向うよりバタ〳〵にて、笹野才藏、股引、大小、足輕、飛脚の形にて走り出て來り
才藏　八内どの、どこへ。六角左京之進さまよりお家の密事、火急のお使ひ。
八内　ムウ。時も時、御密事とは。
才藏　紛失の二品、お家の系圖はいよ〳〵在所知れざる時は、桂之助さまには御切腹、お家の跡目は額五郎さま、相續あらば、一國の嘆き。この儀急いで物語れと、左京之進さまより密のお使ひ。
八内　御念のお使ひ、それゆゑに心を碎く我れ〳〵夫婦。
才藏　然らば詮議の、手掛りあつて
でん　それに就いても、折角と、在所知れたるお家の系圖。
八内　ハテサテ、金子調達せば、今にも手に入る望みの品。
才藏　さすれば、それを、六角さまへ

八内　お案じなきやう、少しも早く

才藏　承知いたした。これより直ぐに

八内　急いでござれ。

才藏　必ず吉左右、お頼み申す。

　　ト時の鐘になり、才藏よろしく引返し入る。

八内　アヽコレ、最前斯うと知るならば、權兵衞とやらを引留めて

でん　さうぢやけれども、五十兩の、金が無ければ渡さぬ系圖。

八内　それゆゑ此方も氣おくれして、手に入る寶やみ〳〵と

でん　心盡しも母さんの

　　ト我が顔へ思ひ入れして

　　よくも邪慳に

八内　云うて返らぬ身の嘆き

でん　お家の大事

八内　今更に

でん　仕やう、もやうも
八内　ハテ、何としたもので
二人　あらうなア。
　ト途方に暮れし思ひ入れにて、兩人ヂツと思案する。入相の本釣り鐘になり、花道より十三、額に疵の附いたる岩松を背負ひ、走り出て來り
十三　もしえ。岩さんを送つて參じました。
八内　僅かでも無い大枚の、五十兩を早速に
　ト思案に餘つたる思ひ入れ。お傳、岩松を見て
でん　岩松ぢやないか。エヽマア、頭をどうしやつたく。
　ト抱き取ると、十三氣の毒のこなしにて
十三　イエ、わたしが内の息子どん、大きに麁忽いたして、凧の糸の引ツかゝつたを、何か子供の頑是なさ、無理無體に引ツ張る勢ひに、瓦が落ちて此お子の、額へお怪我させまして、折わるう長兵衞は留守なり、わつちが早速お詫びに參りました。
でん　怪我とあるなら、なんのマア、頑是の無いは同じ事。

十三　イエモウ、大きな不調法、申し譯の無い事いたしました。

ト云ひ〳〵、門口へ出て

長兵衞もお詫びに參じませうが、どうぞよろしく。ほんに〳〵、お氣の毒な事をしました。

ト合ひ方にて、十三、もぢ〳〵氣の毒なるこなしにて、引返して直ぐに向うへ入る。

岩松　母さん、こゝが痛い。

でん　オヽ、道理ぢや。怪我とはいへど、滅相な。これ見なさんせ。

ト介抱する。八内思案のうち、ふつと見て

八内　ヤ、岩松が何とした。

でん　何としたぢやない。モシ、最前誘うて行つた表の子がナ

八内　エヽ、コレ、半金の手當があらば、あの權兵衞に無心云うて

ト矢張り思案して居る。

でん　それもさうぢやが、コレ、何ぞ岩松に藥は無いかいなア。

八内　ナニ、藥とは。

でん　エヽ、モシ。今も云うた表の長松が、凧の糸がかゝつて、瓦落してなア。

八内　ヤアノ〳〵、そんなら長兵衞の倅が

でん　此やうに、マア、危ない。怪我とはいひながら

八内　アノ、幡隨の倅長松が……ムウ。

ト思ひ入れあつて

ドレ。

ト岩松を引寄せ、脇差の鍔にて岩松が頭を打破る。ウンと直ぐに落入る。お傳悔り

でん　エヽ、モシ。

ト呆れる。八内向うを屹度見る。思ひ入れ宜しく、時の鐘にて、道具廻る。

本舞臺、元の長兵衞の世話場。眞中に長兵衞莨盆を扣へ、この左右に、權兵衞と本庄助八、序幕の形にて、詰め寄り居る。矢張り時の鐘、合ひ方にて道具とまる。

權兵　コレ、長兵衞、貴樣もおれも狩り場の人足。受合ひ金の五十兩、子分ヽ子分へ渡さにやならねえ。オヽよし、と聞いて歸つたらよからうが、おれも唐犬權兵衞だ。さう〳〵は待てないよ。

長兵　ハテ、渡すまいと云やアしねえ。もう四五日待たせて置きやれ。

助八　その四五日も久しいものよ。望み手の多い系圖の一卷。五十兩の金は何時下さる。

長兵　やかましい。花川戸の長兵衞が、買はうと云つたら手附けも同然。外へやつちやァ頼まれた、先きのお方へ幡隨が立たない。痴言吐くな。

助八　成る程、さうあらう。町人の持つて、役にも立たない神妙劍の一卷、佐々木の系圖。

權兵　して、貴樣が頼まれた、その先きの人は、どこの人だ。

長兵　ヤ。

權兵　イヤサ、この頃噂の汐入堤の人殺し。その上見りやア、最前も、裏からこツそり四つ手駕籠。びらしやらしたのを見て置いた。子分、子分の金までも、引摺り込んでの榮耀狂ひ。

助八　但しは、こなたの頼まれた、先きの人は日陰者か。

長兵　何と吐かす。

助八　何と吐かすも氣が強い。一卷はとうに渡して置く。横取りされたその金を、その人に逢つて受取るのサ。

長兵　イヤサ、そりやァ

權兵　佐々木の系圖の一卷も、持つては居るが金次第。それとも欲しくは金を出せ。

長兵　サア、その金は
助八　頼まれた人に逢はせぬか。
長兵　サア、そりやア
權兵　金を渡すか。
長兵　サア、
權兵　サア〳〵〳〵。……長兵衞、返事は、どゞ、どうだえ。
ト兩方より詰め寄る。長兵衞思ひ入れあつて
長兵　成る程、大切な代物を、買ひ取りながら、金を遣らぬは、此方の誤り。併し、おぬし達にも、ちつと聞きたい事がある。
二人　聞きたい事とは。
長兵　イヤサ、外でも無い。その金にすると吐かす佐々木の系圖、神妙劍の一卷。おぬし達は何處から持つて來た。
二人　ヤア。
長兵　ヤアとは、うぬら、大切な佐々木のお家で紛失した二品、何處から出た。

二人　サア、その出所は。
長兵　金にしようとはいけ太い。但しは、うぬらが盗人か。
二人　サア、そりやア
三人　サア〳〵〳〵。
長兵　なんと、返答はあるまいが。……うぬらのやうながらくたが、うぬらうせていぢめたとて、この長兵衛が腰押しは、恐れ多いが八百八町のあなたがた。なんと、皆様、それに違ひはござりますまい。誰れだと思ふ、アヽ、つがもねえ。
權兵　この權兵衛はつがもある。子分、子方へ渡す金。
助八　四の五と吐かしやア、いつもの事、代官所へ、うぬを引摺つて
二人　受取る所へ引いて行く。立ちやアがれ。
　ト兩人立ちかゝるを見事に投げ、權兵衛が懐の一巻引ツたくり、薪にてしたゝか打据ゑる。兩人這々起上がつて
權兵　ヤイ〳〵。うぬは子分、子方の金を渡さず
助八　二品の寶も捲き上げて、それで男か。

二人　盗人め。
長兵　そのいけ口を
　　ト立ちかゝる。この以前より次兵衛、路地より出て來り、門口に窺ひ、この時、走り寄つて長兵衛を留め、助八立ちかゝるを次兵衛よろしく突き退け、五十兩双方へ金を投げて遣る。權兵衛、助八、これを拾ひあげ
二人　ヤア、こりや封金五十兩。
次兵　子分、子方の五十兩。二品の寶の代金。それで云ひ分あるまいがな。
二人　これでさつぱり仲好しサ。
　　ト金を集める。長兵衛思ひ入れあつて
長兵　思ひがけない。……併し大枚百兩は
次兵　その金主に、禮を云やれ。
　　ト此うち路地より四ツ手駕籠にお近乘り、善六ついて出て來る。長兵衛これを見て
長兵　ヤア、わりや女房。
ちか　こちの人、長松を、頼みますぞえ。

長兵　そんなら、おぬしは、身を賣つて

善六　捨てる神ありや助ける神。權兵衛さん、先刻の間違ひより、上へ行く玉でござりやす。

次兵　去られたお近は、この親が、叱つて渡した手切れの金。女房は賣らぬ幡隨長兵衛。それで男が、立たうがな。

長兵　何にも云はぬ。眞實親身。お近、達者で勤めてくりやれ。

ちか　その一言がわたしは百倍

次兵　嬉しい、悲しい

長兵　親は泣き寄り

次兵　他人となれば

ちか　心殘らぬ。

長兵　苦界のうちも

ちか　健で暮らして、下さんせ。

トぢつと泣く。

次兵　エヽ、未練な。……駕籠を遣つて

ト唄になり、四つ手の垂れを下し、善六、次兵衛附いて宜しく向うへ入る。權兵衛、助八、もち〳〵して

助八　サア、モシ、權兵衛さん。氣の毒らしいまん直し、歸つて酒でも飲みやせう。

權兵　それもさうだが……思へば、長兵衛

ト立ちかゝる。双方へ蹴飛ばし

長兵　イケ業ざらしめ。耄碌めら。一昨日うせろ。ハヽヽヽ。

ト笑ふ。唄になり、長兵衛よろしく一巻持ち、暖簾口へ入る。兩人顔見合せ

權兵　エヽ、儘にならぬが

二人　浮世ぢやなア。

ト奥より清兵衛出て

清兵　權兵衛、待ちやれ。子分、子方へ分ける金、おれも人足の仲間だよ。誰れだと思ふ、アヽ、築地の兄さんだワ。なんぼ居候ふでも、コレ、花川戸ぢやァ顔の幡随長兵衛……ぢやアない、その子分の出ツ尻清兵衛。恐ろしいか。

ト鉢巻を締め、力む。

権兵　仰山な奴等だ。欲しけりやア、金も遣らうが、それよりは、一緒に来て、酒でも飲みやれ。

清兵　へ丶丶丶丶。飲食で騙すな〳〵。さうはいかねえ。待ちやアがれ。

ト権兵衛が胸倉を取る。助八笑ひながら

助八　イヤ、若い人。酒が嫌なら鰻にしよう。

清兵　おらア寅の年で断ち物だ。

助八　そんなら、汁粉か。

清兵　あやまるの。

権兵　蕎麦ぢやアどうだ。

清兵　それも嫌ひサ。

助八　八里半ぢやア

清兵　猶嫌ひ。

二人　そんなら、勝手にしやアがれ。

ト突然に清兵衛を踏み倒し、曲撥になり、権兵衛、助八笑ひながら、一散に向うへ逃げて入る。清兵衛、やう〳〵起上がつて

清兵　ヤイ、コレ、食ひ逃げめら。待ちやァがれ〳〵。

ト追つかけ、門口へ出ようとする。路地の内より、八內、一本差し、岩松が死骸を引ッ抱へ、門口へ來る。清兵衛悔りして跡へ寄る。八內、其まゝ、內へ入り

八內　御亭主に逢ひたい。長兵衛どのは在宿か。

清兵　アイ〳〵、在宿で他行いたしやした。

八內　ヤア、くど〳〵と。火急な用事で、八內これへ參つた。通達しやれ〳〵。

清兵　アイサ、仲立ちもしやすがね。お前さん、何ぞ御用なら、十三さん。

トもぢ〳〵いふ。暖簾口より十三出て

十三　出ッ尻か。何だ。……ア丶、八內さま、ようお出でなされました。

八內　イヤサ、好いも、惡いも、お身達に用事は無い。長兵衛どのを爰へ呼びやれ。

十三　ハイ〳〵。何だか血相變へて

清兵　コレ、極樂、親方を呼ばうかナウ。

トこは〳〵云ふ。

十三　エ丶、やかましいわえ。其方へ退いて居ろ。

清兵　オイ〳〵。そんならそこを鹽梅よく

トこつちへ來る。十三、八内に向ひ

十三　モシ、八内さま、最前ちよつとお内儀樣へはお詫致しましたが、大きにハヤ不調法。お氣の毒な儀を

八内　イヤサ、不調法で相濟まうか。これお見やれ。

ト子役の死骸を前へ出す。

十三　ヤア、こりや……そんなら御子息樣は

ト愕りする。八内屹度なつて

八内　見たか。仔細は斯くの通り。こゝの息子の長松とやら、遊びにほだされ、凧の糸の、搦み落ちたる屋根瓦、悴が頭を打割られ、深疵ゆゑか、元となり、死したる悴岩松が、敵をこれへ、解死人取りに參つたのだ。

十三　ハイ〳〵。左樣に仰しやるは御尤も。さほどの疵とも存じませず、不調法のお詫び、最前も

八内　詞の詫びで相濟まうや。裏店に住居の浪人と、見侮つて幡隨長兵衞、聞きしに違ひ、卑怯な奴。身は輕けれど、侍ひの、扶持を喰つたこの八内。詫びで濟さぬ。解死人出しやれ。

十三　イヤモウ、重々御尤も……なれども、ほんの頑是なし。申さば怪我でござります。

清兵　さうサ。子供の事だ。お前、料簡しなさい〳〵。

ト八内の側へ來て、宥める。

八内　エヽ、馬鹿盡すな。

ト殴り倒す。清兵衛猿返りして、眞面目になり、十三が顔を見る。十三思ひ入れあつて

十三　モシ、八内さん。イヤサ、八内どの。怪我過失は世の習ひ。瓦が落ちて死んだ子なら、誰れを敵と恨みもない。解死人呼はり見つともない。但しは金でも欲しいのか。

八内　何を尾籠な。

十三　コレサ、そんなに極める事はねえ。威しでいかねえわしらが內。さうでねえなら歸りなせえ。

八内　イヤ、御亭主長兵衛どのに、お目にかゝらにや、金輪奈落

十三　さう云ひなさりやア不躾ながら、手を取つて引ッ立てやすにえ。

ト八内默つて居る。

モシ、此方も詞の甘いうち、惡い事は云はねえ。マア〳〵、歸りなせえ〳〵。

ト無理に引ッ立てる。八内立廻る。この時、奥より長兵衛、つか〳〵と出て、十三を支へ

長兵　これはしたり。どうしたものだ。

十三　親分、構はつしやるな〳〵。

長兵　好いよサ。おれに任せて置いて

ト鎮める　これにて十三扣へる。長兵衛、八内に向ひ

これは、あなたが八内さんでござりますか。同じ店には居りますが、商賣用でお互ひに、まだしみ〴〵とお近附きにもなりませぬ。長兵衛に何か御用とやら、ようお出でなされました。……コレ、騒がずと茶でも入れろえ。氣の利かねえ奴等だ。

八内　アイヤ、馳走は受けますまい。お云やる通り、まだしみ〴〵……すりや、お手前が、當所で男と噂ある、幡隨長兵衛どのとな。……立派な男だ。拙者は八内と申して、お長屋の隅に貧乏世帶を踏まえて居るが、小身なれど、以前は武士。その武士の悴が、斯くの通り。委細は定めて知つてござあらう。こゝの息子の手悪戯、小兒の業とて捨て置れぬ。相手は、男一疋の、長兵衛どのゝ御子息ゆゑ、猶更濟まぬ。サア、町人ながら、性根を据ゑ、身が武士を立てゝおくりやれ。

長兵　ようござります。あなたが仰しやらいでも、極樂が戻つて、委細の話。大方、今にあなたから、お沙汰があらう。品によつたら、私しが、御挨拶に上がりませうと、思案とり〴〵では居りますが、お侍ひのお顔を、どうして〳〵、お立て申すと申す事は

八内　イヤサ、なつても、ならいでも、忰が藥代、弔ひ料……サア、町人ならば申さうが、身貧に暮らせど拙者も武士。面を立てる、返答おしやれ。

長兵　ハイ。左樣にまで仰しやるを、お氣には叶ひますまいが、この長兵衞が御返答。

　　トあたりを見て

ヤイ、その爼板を爰へ出せ。

　　ト合ひ方になり、淸兵衞大爼板をよき所へ直す。此うち長兵衞奥へ入り、直ぐに長松を抱いて來り、この爼板の上へ載せ

さうして居ろ。サア、八内どの。長兵衞が忰の長松、御子息の敵、こなたのお顏を立てるため、その爼板でお手料理。煮るとも、燒くとも、刺身でも、旅と違つて江戸前の、この長兵衞が生の魚。こなたの差した一腰で、親が見る前、細作り。あらの出ぬうち、きり〳〵と、摑み料理に、やらつしやい。

十三　親分、そりや又

長兵　默つて居ろえ。二つ取るなら、弔ひ金、何ぞの多足の心當て。こなさんの顏の立てやうが、間違つたのか知らねえが、幡隨長兵衞、未練らしく解死人を、金ぢやァ扱はねえ。サア〳〵、どうだ、

大



切



八内どの。きり〳〵料理に、かゝらつしやい。

ト八内ギツクリ思ひ入れ。

八内　悴を元手に……イヤサ、元より聞き及んだ流石の男氣。長兵衛どの、こゝは義理にも、此まゝに、納得しようと思はうが、惡推量の金々と、さみせらるゝがむやくしい、馳走に任せて悴が敵、攫み料理にかゝるぞよ。

長兵　念には及ばぬ。餓鬼めが命。サア、存分に。……コレ、長松、われも幡隨長兵衛が子だ。一度死んで二度は死なゝい。百まで生きる者もあり、生れて直ぐに死ぬもあり。われは七つでくたばるも、皆それまでの約束だ。その俎板の上で死ね。吠え面かはくは見つともねえ。どうで死ぬなら、笑つて死ね。

長松　アイ、笑つて死にます。コレ、伯父様。鯉や鰻は刎ねるけれど、おりや強いから、刎ねずに死にます。

十三　アレ、あんな氣性な息子、どうして疵はつけさせねえ、切るなら、八内、おれを切れ。

ト寄らうとするを長兵衛留め

長兵　コレサ、十三。おぬしは此方へ。ハテマア、退きやれ。

ト十三を引退け

八内　サア、八内どの、庖丁さつしやい。

ドレ、そんなら、望みの庖丁。

ト俎板の側へ來て

世上の譬へに、子を捨つる、藪は萬鋤の長兵衞どの、熱い湯を我が子に浴せても、惜しいは金づく、命づく。切ない時は、子を出せだの。

トせゝら笑ふ。長兵衞これを聞いて長松を引退け、十三へ渡し、身拵へして俎板の上へドッカと座す。

十三　親方、何をするのだ。

長兵　イヽヤ、長松連れて奥へ行け。

十三　それでも

ト云ふを長兵衞叱るゆゑ、無理に入る。

長兵　數の子が嫌なら鳴戸鯛。骨のあるのだ。スッパリと、こなたの望みの古主の敵。

八内　ヤ。

長兵　名古屋譜代の御家來とは、とうから見込んだこなたの忠義。佐々木の系圖も、コレ、こゝに、幡

隨が懐にありやア、鯉の餌袋料理して、盗られたものなら、取つてござい。熱湯を小兒に浴せもせず、卑怯未練でねえ長兵衛。男の魂ひ見違へたか。敵を名乘るに、二つはねえ。古主の敵、御子息の、恨みを共に長兵衛が、くたばり所は花川戸。花の江戸前、鰻裂き。サア、やらつしやい。

ト屹度なる。この以前よりお傳、路地より出て、門口に窺ふ。八内思ひ入れあつて

八内　解死人望むも、お家の系圖。

長兵　欲しくば、すつぱり、長兵衛が、息あるうちは、遣る事ならぬ。

ト お傳これを聞き、つか／＼と内へ入り

でん　我が子の敵、長兵衛其方を

ト長兵衛を目がけ行かうとする。八内、下の方へ突き廻し

八内　男同士の達引に、いらざる女め、扣へて居ろ。

長兵　サア、これからは一本立ち。御夫婦寄つて長兵衛を、思ふ存分、佐々木の系圖。

八内　是非に及ばぬ。お家のため。

ト長兵衛へ立ち寄る。上の方の障子の内にて

權八　ヤレ。早まるまい。敵はこれに

トよろしく合ひ方になり、上の障子をサラリと明ける。白井權八、着流しの形、一腰提げて出る。

八內　さてこそ白井

二人　權八どの。

　　ト思ひ入れ。權八眞中へ來て

權八　兄弟、牆にせめげども、外侮りを防ぐといへり。汐入の堤に思はずも、討つて捨てしが現在兄の彌市郎どの。小紫をも心になく、非道の刃に討つたる惡緣。八內が爲には古主の敵、內儀のお傳は妹の仇。二人が敵の、權八なるワ。

長兵　その罪科を引受けんと、女房、悴を見捨てしも、元より覺悟のこの長兵衞。

權八　名乘つて出でたる上からは、イザ、權八を立寄つて

八內　討つ、討たるゝも武士の

でん　義理にからまる敵討ち。

八內　兄弟討つたる人非人。刀の穢れ。オヽ、幸ひ。

　　ト幕明きの凧の青竹を取つて、一腰にて、二本一緒に切り拂ひ、一本をお傳へ渡し、八內ともに、見得よく權八に詰め寄せ

ならば、手柄に返り討。

でん　敵は遁がさぬ

八內　白井權八。

長兵　是非に及ばぬ、双方へ、助太刀ともいはれぬ長兵衞。佐々木の重寶、この二品。

ト懷中より神妙劍の卷き物と系圖を出す。

權八　慥かに預ける上からは

八內　斯う成る上は、お家の不易。さは知らずして不便や悴。お主の爲に果敢なき最後。古主の敵、權八どの。

權八　イザ、首取られよ、八內夫婦。

三人　イザ〳〵〳〵。

トよろしく鳴り物になり、ちよつと立廻りの內、向うより、助八先きに捕り手大勢出て來り、思ひ入れあつて、捕り手は路地へ入る。助八、門に窺ひ、好き程に

助八　ヤア〳〵、正しく佐々木の重寶。

ト長兵衞の方へ行くを、權八引戾して助八を當てる。この時、以前の手紙を落す。兩方より突き出す

竹槍を兩手に摑み

權八 めぐる因果は車の輪。今はこの世を

ト竹槍を我が手に腹へ突き立てる。

長兵 ヤヽ、そんなら、かねて覺悟の權八どの。

八內 お助け申さん其ために、刃にあらぬこの竹槍。

でん 返り討の覺悟も水の泡。

權八 イヤ〳〵、二品手に入る上は、佐々木の重寶その儘に、因みの契約なし置きたる、山三どのへ渡し、田圃、石原、八丁堀、多くの人を害めし科人。傾城葛城を殺せしも、權八が身に引受けての

この刑罪。

長兵 佐々木の系圖も、山三さまの

八內 お手に入れば、お家は萬代。

ト助八起上がつて

助八 親の敵の權八を、召捕る知らせの合圖の礫。

ト火入れを取つて門口へ打ちつける。軒へあたつて火散亂する。これをキツカケに、向うに早拍子木

打ち立てる。路地より、今の捕り手大勢、弓張り提灯、十手を持ち出て窺ふ。

權八　最早捕り手の

長兵　はや取りましか。

ト屹度なる。この時、助八の手紙をお傳取りあげ

でん　密事を記せし怪しい手紙。

八内　ドレ……ヤヽ、名古屋の親御、山左衞門さまを

でん　討ち取つたるも伴左衞門。

長兵　落ち行く手段を知らせの密書。

權八　文體慥かに佐々木の惣領

八内　額五郎さまより。

でん　纏しき姑は

長兵　伴左衞門ハ、由縁の女。

權八　嬉しや、この由、山三どのへ。我れは冥土へ

長兵　南無阿彌陀佛。

ト三人思ひ入れ。

助八　敵の權八。

ト又かゝるを、權八片手投げに助八を取つて投げ、直ぐに引敷く。此うち、外より門口を明け

捕手　權八、捕つた。

ト走りかゝる。八内、門口をシヤンと締める。お傳思ひ入れ。權八ガツクリ落ち入る。長兵衞、珠數を振り上げ、介錯の見得。皆々よろしく、拍子

直ぐに引返し。

幕

本舞臺、三間の間、後ろへ黒幕。上下栗丸太の垣、眞中に、、大入と記したる酒樽の積み物。これに獅子をかいたる長提灯。兩棧敷の柱に地口行燈、殘らず灯を點し、爰に伴左衞門、上の方に立ち身、この側に以前の葛籠打捨てあり。山三、伴左衞門の腰を捕へ、下の方に、八内、お爪を引捕へ、手古舞多勢、揃ひの絆纏にて、獅子を持ち、後ろに並び、三社祭の花やかなる鳴り物にて幕明く。

山三　いかに伴左衞門。さいつ頃、某が父山左衞門、まツた權八が親、白井兵左衞門を手にかけ、お家の系圖、二つには、神妙劍の一卷まで、助太夫と心を合せ、奪ひ取つて佐々木の家國、押領なさ

ん汝が企み。一時に露顯の上からは

八内　長兵衞どの、志しにて、二品ともに手に入れば、お主の敵、伴左衞門。

山三　また某にも因みある、權八が爲にも親の敵。イザ、尋常に

二人　勝負々々。

伴左　覺え無きその痴言。戀の意趣ある某ゆゑ、無き名を附ける山三こそ、廓で多くの人殺し。世を憚からぬ日蔭者。命知らずの大べら坊め。

つめ　葛城さんを手にかけた山三どの。遣り手のわたしが訴人をして

ト振り切って行かうとするを、八内引ッ捕へ

八内　どつこい。うぬは女房の親なれば、免して置けば、惡に與なす老ぼれめ。

山三　彼れが所へ額五郎どの、密事の書翰、この文體。一々知れたる親の敵。

つめ　ヤ、その手紙が、どうして其方に。

山三　斯かる證據のある上は、覺えないとは云はれまい。また廓での人殺しも、現在女房の葛城まで、不便の最期を遂げたるも、これ皆汝のさせし業。恨み重なる伴左衞門、イザ、尋常に覺悟せよ。

伴左　すりや、その密書にて、何もかも。エヽ、口惜しい。斯く成る上は、何をか包まん。いかにも某、

佐々木の家國奪はんと、忠義立てする山左衛門、まツた白井兵左衛門、二人ともにぶッ放したは、斯くいふ不破の伴左衞門だワ。

山八　さてこそなア。

伴左　この上は返り討た。覺悟しろ。

つめ　和子の加勢は、手古舞ひの、皆さん共々。

皆々　合點だ。

山三　小癪な荷擔人。

伴左　者ども、ソリヤ。

ト屋體囃子になり、手古舞ひの人數、八内へかゝろ。立廻りながら、八内皆々を下座へ追ひ込む。伴左衞門、山三、お爪殘り、鳴り物變つて、樣々タテあり。トゞ、山三、お爪を切り倒し、伴左衞門の脇腹へ刀を突き立て、抉り

山三　親の敵。思ひ知つたか。

ト矢張り祭の鳴り物にて、きつと見得。チョン／＼にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、一面の吊し枠、三、、、、、、、と書きし大提灯、前側見事に飾り附け、向う打抜き、山谷堀船宿の遠見。爰に八内、大童になり、手古舞ひ多勢を相手に、よろしき見得にて、道具納まる。

○一文奴め。

一同　動きやァがるな。

八内　小癪な奴輩。撫で切りだぞ。

一　撫で切り、蕎麥切り、唐辛子。その馬道の鬼鹿毛胴六。

二　不破の頭に賴まれて、うぬを竹割り、竹門の、油揚のねえ、豆腐の豆助。

三　寄つて〆めます釜入りの、田町にござるお先き者、法印ならぬ、法螺貝傳八。

四　喧嘩は豆打ち、石打ちに、摑む砂利場のかうじや五郎太。

五　祭りに三日、山谷堀、相手を砂地の庄九郎。

六　命を鳥越、橋場村、眞崎かけて稲荷の快介。奴め覺悟を

皆々　ひろぎやァがれ。

八内　ハヽ、吐かしたり。ほざいたり。三社祭りの獅子頭。打てや、囃せや、その首を、飛んで驚く最期の時節、今行く程に、今戸なる、土でこねたるがらくためら。うぬらが五體は粉微塵、碎けて

元の土になれ。

皆々　面倒な。疊んでしまへ。

　トこれより屋臺囃子により、皆々花々しきタテ様々あつて、ドツコイととめる。この時、バタ〳〵になり、向うより山三、伴左衞門の切り首を持ち、上の方より、長兵衞出で來り

山三　親の敵の伴左衞門、首尾よく討つて、まツこの通り。

長兵　覘ふ敵を討取れば、益なき彼奴等は殺すに及ばぬ。權八どのは多くの人、害めし罪科身を悔いて自殺も本庄助太夫の、敵を討たれし義心の最期。

山三　すりや、權八は相果てしか。

八内　長兵衞どのゝ情けにて、家の系圖と今一種、神妙劍まで手に入る上は

山三　これより本地へ歸參して、佐々木の跡目は桂之助さま。

長兵　わしは葛城、小紫、彌市、權八兄弟の、跡を弔ふ一月寺。助八どのも前非を悔い、出家となりし上からは

山三　心にかゝる雲も無く

八内　めでたく歸參の山三さま。

長兵　二品所持してお國元へ。

ト二品を山三へ渡す。

山三　エヽ、忝い〳〵。

八内　めでたい〳〵。

皆々　やらぬワ。

ト取巻く。

長兵　まづ、今日はこれぎり。

めでたく打出し

攙雑(とりまぜて)石燕(せきえん)贐(みやげ)

幪雜石尊贜

第一番目　三建目

瀬戸明神の場
松切りの場

役名　澤井股五郎。澤井又左衞門。仁木小島之助。山名宗太郎。細川多門之助。乳人、濱町。荒卷伴作。佐々木團右衞門。佐竹左五郎。仁木息女、彌生姫。腰元、山路。同、野菊。同、小萩。和田靱負。同一子、志津摩。侍ひ、左司馬。同、五平太。仁木春太郎。

本舞臺、三間の間、奥深に一面の惣門、左右廻廊、この前に石の大鳥居、これに瀬戸明神といふ額あり、爰に左五郎、疊上下、大小にて床几にかゝり、後に菖蒲革の足輕多勢、六尺棒を突き、警固してゐる　神主、烏帽子裝束にて扣へゐる。大拍子にて幕明く。

左五　今日、主人仁木大内記どの御病氣につき、武運祈りの御祈念、殊には古例に任せ、當社に於て御家督御定めとして、山名細川の兩執權、お立合ひこれあるにつき

神主　その御用がゝりは、澤井又左衞門どの、御子息股五郎さま、和田志津摩さま、未だお詰めはござ

りませぬな。
左五　然らば相役の荒巻伴作どのも、まだお見えなされませぬか。
神主　左様でござりまする。
左五　それは何より。あの伴作どのゝ意地悪さ、箸の上げ下ろしに小言だら〳〵。お目玉をもらはぬうち、警固の役仕落ちなきやう、見廻り申さん。
神主　左様なれば左五郎さま。
左五　溜り〳〵へ案内めされい。
神主　斯うお出でなされませ。
ト三味線入りの大拍子になり、この人数残らず門内へ入ると、直ぐに向うより山路、腰元にて、日傘をさしかけ、彌生姫、さら毛附き、着流しの姫の形にて、手を引かれ出てくる。跡より小萩、野菊、同じく腰元にて出る。跡より團右衞門、近習侍ひの拵へにて出て來り、花道にとまり
團右　モシ、彌生さま、ついにおひろひもなされぬお足にて、あまりお早い事でござりまする。
山路　お姫様のお御足の早いは、その筈の事。ナウ、小萩。
小萩　さうでござんす。さぞお嬉しうござりませうなァ。

彌生　アレ又、皆が弄つて

野菊　もう思惑さまも、來てゞござんせう。

山路　サア、ござんせ。

ト皆々本舞臺へ來る。

園右　お腰元衆、どうも合點がゆき申さぬ。何を思し召してやら、急にこの瀬戸明神へ、御參詣なされたいとあるゆゑ、お供は致して參りましたが、何のお願がけでござります。

彌生　自らが今日の神詣では、兄上樣の御家督、首尾よう濟むやうにと、それゆゑの事ぢやわいなう。

園右　それは〳〵、御兄弟思ひ。併しながら、あなたがわざ〳〵御參詣なされずとも、今日の御祈念はお表に愚かゞござりませうか。

彌生　サア、それはさうなれど、外に又、願はにやならぬ事があつて

園右　なに御不自由なきあなた樣が、どのやうなお願ひが

山路　モシ〳〵、園右衛門さま、あなたも不粹な。彌生さまの明神樣へ御參詣はナ

小萩　八十島かけて漕ぎ出でんぢやわいなア。

園右　八十島かけて漕ぎ出でんとは、そりや慥か百人一首の中の歌。それが願がけとは

野菊　その上の句の五文字がお願ひ。
團右　上の句の五文字とは。秋の田のでもあるまいし、但し猿丸太夫、奥山か。
山路　團右衞門さま、何仰しやります。辻占の悪い、其やうにまだお逢ひもなされぬ内から、秋の田の猿丸太夫でよいものかいなア。
團右　でも、愚案の身共、一向相わからぬ。
小萩　モシ、和田の……原ぢやわいなア。
團右　エヽ、解りました。あの御子息の志津摩、心なく花の散るらんかな。
野菊　又お前も其やうな事。なんの、花が散るらんものかいなア。
山路　モウ〳〵あなた、お供は御無用でござります。早うお屋敷へお歸りなされませ。
彌生　これはしたり、皆の者、なんの團右衞門が悪からう。自らが志津摩に惚れたによつての事ぢやゆゑ、其やうに云はいでもよいわいなう。
山路　ほんに、お優しい彌生さま、それ程のお心にて、あの志津摩と、どうしたら斯うしたらと、私しどもへお話しゆゑ、あなたのお心をお察し申し
小萩　今日志津摩さまも御參詣と聞いたゆゑ、表向きは兄上樣の、御武運祈りの御願望をかこつけに

野菊 誠は私しどもが執持ちにて、日頃のお願ひを、叶へてあげたいばつかりに、それゆゑ今日のお百度詣りぢやわいなア。

團右 それで解りました。左様な事なら、早く私しに耳打ちをなされたらよいに。ハテ、團右衛門は粋でござらう。これからは共々、お執持ちを仕らう。兎角斯様な事は、障りのない内に

彌生 ちつとも早う、皆の者

皆々 お百度詣りを、しようわいなア。

ト三味線入りの神樂になり、五人して門内へ出入りよろしくあり。此うち向うより伴作、麻上下にて出て來り、直ぐに舞臺へ來り、百度詣りを見て

伴作 これは／＼姫君様、ようこそ御參詣。

ト云ふうち、彌生姫、門内に入るゆゑ、山路が捕へて

お腰元の山路どの、かね／＼其許へもお頼み申した

ト袖を捕へようとするが、物も云はず振り切つて門内へ入る。引違へて小萩出て來るを

小萩どの、常々お執持ちを頼んだ姫が事。文を屆けて下されたか。

小萩 存じませぬ。

ト又門内へ入る。野菊出て來るを、また捕へて

伴作　其許にもお話し申した、文の御返事は

野菊　そこどころではござりませぬ。

ト振り切り、門内へ入る。團右衞門出て來るを、また捕へて

伴作　コレサ〳〵、お賴み申した。

團右　何の御用。

トこれにて團右衞門の顏を見て

伴作　エヽ、其許ではござらぬ。

ト突き放す。

團右　これは御挨拶。

ト門内へ入る。また彌生姬出て來るを捕へて

伴作　彌生さま、あなたはお情ないぞえ。これ程に思うてゐる伴作、せめて一度なりと

彌生　しつかうしやると、兄さんに告げるぞや。

伴作　一度がならずば半分でも

ト抱きつかうとする所へ、山路出て引分け

山路　アタしつこい。およしなされませ。

ト此うち彌生姫逃げて門内へ入る。また山路を捕へ

伴作　もう斯うはずみ切つては、誰れでも大事ない。山路なら猶の事

ト戯れる。小萩出て振り離す。山路、門内へ入る。また小萩を捕へ、しなだれる。野菊出て引退ける。また野菊へかゝる。この時團右衞門何心なく出てこの中へ入る。女形皆々逃げて入る。伴作、團右衞門にかじりつく。團右衞門悄りして突きとばし

團右　イケ馬鹿々々しい。

ト思ひ入れあつて門内へ入る。伴作心づき、いろ／＼こなし。向うにて

呼び　參籠。

ト三味線入りの神樂になり、向うより宗太郎、衣裳上下、摑み立ち。多門之助、同じく衣裳上下。濱町、裲襠、抱へ帶、お乳の人にて附添ひ、跡より小島之助、衣裳上下。靫負、すりへがし、上下。志津摩、剃立て、袴羽織にて、白木の箱を三方に載せ持ち出る。左司馬、五平太、麻上下。紺看板の草履取り二人附添ひ出て來り、花道にとまり

宗太　今日瀬戸明神へ社參の儀は、仁木大内記家督の願ひ。それにつき、家の重器内見の爲、父宗全が名代として、山名宗太郎持行。

多門　同席に連なる政元が嫡子、細川多門之助政滿。

濱町　まだ御幼年につき、差添へとして乳人濱町、これまで參籠。

宗太　小島之助を始め、家臣の面々、案内おしやれ。

小島　ハッ、卽ち設けの席は、神職方にしつらひござれば

靱負　まづ〳〵あれへ

皆々　お通り下さりませう。

宗多　然らば、許し召されい。

ト右の鳴り物の切れにて、皆々本舞臺へ來る。伴作、矢張り、こなしにてマゴ〳〵してゐる。左司馬、五平太、側へ寄り

左司　これはしたり、伴作どの、兩管領の嫡子方、これへお出でなさるゝに

五平　そりや何の眞似、如何いたしたのでござる。

トこれにて伴作心づき

伴作　イヤサ、これは何でござる……それ〳〵、持病の眩暈で、難儀いたして居りまする。
靱負　それは氣の毒、隨分大事にしめされ。して、澤井股五郎は
伴作　股五郎ことは、一體怠け者でござれば、大方今時分は、晝寢でも致して居りませう。
志津　アイヤ、伴作どの、朋友の交はりは信を以てすと申す、古語に違ふその一言。何とて股五郎、左樣な惰弱者にござらうや。今日の役目、大切と存ずるゆゑ、役目首尾よく相勤むるやうにと、神佛へ立願に、隙どり居るのでござらう。
濱町　成る程、こりやさうありさうな事のやうに存じられます。何は兎もあれ若殿樣、今日これへお入りなされし、御用の趣きを
多門　いかにも。宗太郎どの、小島之助へ、仰せ渡されい。
宗太　成る程……イヤナニ小島之助、其方が父、仁木大内記、願ひに依りて、この度家督の儀を相定めんと、繼目に用ゆる蟠龍雌龍の印、まつた將軍家より御懇望あるところの正宗の刀、内見のため罷り越したる我れ〳〵兩人。
多門　尤も大内記の惣領、小島之助には兄たる春太郎こと、外戚腹とはいひながら、武道に秀でし若者なるを、本妻の讒により、家出なして行くへ知れず。

濱町　大内記さまの奥方は、それにござる宗太郎さまの伯母君にて、宗全さまの妹君、その御内縁により、室町どのへ執成して、今日小島之助へ、家督仰せつけらるべきに極まれども、大殿大内記どの、願ひには、惣領を差措き、次男に家を繼がすは道ならずと、我が君政元公へ内々の願ひにより、右の二品檢分の上、何れへなりとも家督の儀は、お上のお目鏡とあつて、お越しありし御兩所樣。

宗太　いくら春太郎贔屓の細川どのでも、肝腎の當人が、家出なして爰に居らねば雲をあて。小島之助より外に、家督すべき者があらうか。馬鹿々々しい。

濱町　イヤ、宗太郎さま、そりや内縁によつて贔屓の沙汰。たとへ春太郎さま、出國いたし行くへ知れずとも、日本國を尋ね探し、その上居らねば、その時の御沙汰。

多門　何は兎もあれ今日は、寶内見の役目なれば、その品々を持參いたしたか。

小島　ハツ、即ち右雌雄の印と正宗の刀は、澤井股五郎、和田志津摩の預かりにて

志津　即ち今日、守護仕りました。

多門　然らば、神職方へ罷り越し、檢分いたさう。サ、宗太郎どの

宗太　アイタヽヽ。こりや堪らぬ。アイタ／＼。

ト腹を押へる。

濱町　あなたは如何なされました。

宗太　少し暑氣中りの氣味と見えます。アイタヽヽ。

多門　左樣ござらば神職方へ、お越しあつて服薬めされい。

宗太　イヤ、さほどでもござらぬが、少し歩行がどうも

濱町　左樣なれば私しが、お手を取りませうか。

宗太　それでは却つて迷惑いたす。お構ひなくとも、サヽ、お先きへ

多門　然らば拙者は

濱町　御養生なされませ。

ト唄になり、多門之助濱町先きに、靫負、志津摩、足輕中間附いて下座へ入る。敵役殘つて

宗太　父山名宗全、かねて大望の企てあるによつて、現在甥の小島之助、御身を仁木の家督となし、備前一國を押領させ

伴作　一の味方になされんと、種々に心を碎き給へど、兎角に仁義立てする細川政元。

小島　彼奴が贔屓の兄の春太郎は、母人と云ひ合せ、讒言を以て追ッ拂つてしまつたが、まだ心がゝり

は和田靭負。
伴作　それはお案じなされぬがよい。
小島　そりや又なぜ。
伴作　今日内見の、雌龍雄龍の二つの印と、正宗の刀は、和田志津摩と澤井股五郎の預かり、それを人知れず奪ひ取つて、雌龍の印は合體のしるしとして、澤井城五郎どのへ渡し、また雄龍の印は、股五郎が親の又左衞門、正宗の刀は、斯く申す伴作が預かり、三品の寶を別れ〳〵に隱し持たば、いくら靭負が春太郎を、世に立てようと思つても、寶なければ及ばぬ事。なんと稀代な智慧でござらう。
小島　さほど身共へ忠節の其方が、何ゆゑあつて右の正宗、質物に入れたのだ。
伴作　ヤ。
小島　知るまいと思ふか。先達て又左衞門が方より、身共へ通達いたしたワ。
宗太　さすればわれは反り忠、一味の者へ見せしめに
　　ト揚げ幕にて
呼び　澤井又左衞門出仕。

ト皆々向うを見て

宗太 ナニ、又左衞門の出仕とや。

伴作 申し合せし刻限違へず

小島 幸ひのよき折から

左司 澤井氏には、急いでこれへ

五平 出仕めされい。

ト揚げ幕にて

又左 罷り出るでござりませう。

ト大拍子になり、向うより又左衞門、胡麻鹽、すりへがし鬘、上下、大小にて出で來り、花道にて

これはく、執權職の御嫡子宗太郎さま。

小島 遲かりし又左衞門、急いでこれへ。

又左 然らば御免下さりませう。

ト本舞臺へ來る。

宗太 其方も存じの通り、今日の內見、事の破れが此方の幸ひ。

又左　いかにも、今日内見の席に至り、兼ねて計らひ置く通り、首尾よう參らば小島之助さま、差づめ殿の御跡目。

小島　さすれば其方は家の補佐、預け置いたる雄龍の印。

伴作　此方の手から差上げなば、御前首尾よう某も、高祿加增は心のまゝ。

左司　これまで輕き我れ〳〵も、御金藏の預かり役、榮耀榮華は寶の山。

五平　ハテ、心地よい儀でござりまする。

ト大仰に云ふ。

又左　コレ……謀計は密なるを以てよしと申す事。只今の事は、穩密々々。

ト皆々を鎭める。向うバタ〳〵にて、菖蒲革の侍ひ一人走り出で

侍ひ　ハツ、何か見苦しき浪人者、御前へ面談の筋ありとて、無理に推參仕りまするが、通しませうか、如何計らひませう。

小島　家督定めのこの席へ

伴作　浪人體の直訴とは

又左　何か仔細のあるものならん。

左司　これへ引ッ立て、糺明せん。

宗太　ソレ、引ッ立てい。

侍ひ　ハッ。

ト揚げ幕へ向ひ

いづれも曲者、引ッ立てい。

ト揚げ幕にて

侍ひ　あゆめ。

ト三味線入りの大拍子になり、春太郎、着附け、袴、大小、深編笠の浪人、好みの形にて、赤子を抱へ出る。この兩方を、菖蒲革の侍ひ二人、六尺棒を以て圍み出て來る。舞臺の皆々見て

宗太　ヤア、推參なるその出立ち、我れ〳〵連なるこの席へ

小島　かむり物も其まゝに、尾羽打枯らせし浪人姿。

伴作　殊に餓鬼めをひん抱いて、小謠うたうて一錢の、合力願ふ乞食が、管領職へ願ひとは

左司　氣が違つたか、氣紛れか、場所を知らぬ大馬鹿め。有無を云はせず、ぶち据ゑろ。

侍ひ　心得ました。

ト六尺棒にて打つてかゝる。少し立廻つて一人を膝に引敷き、また打つてかゝる一人を、その手を取つて捻ちあげ、きつとなる。

皆々　手向ひか。

春太　いかにも手向ひ。

皆々　ヤ、なんと。

春太　無禮承知、緩怠合點。てまへどもにクドクド申し聞かさば、時刻が延びやう。無益の論は國土のつひえ。

ト兩人を振りほどき、また打つてかゝるを、よろしく身をかはし、投げのけ。ツカツカと本舞臺へ來る。舞臺の皆々、急いたる思ひ入れ。

左司　この上は我れ我れが手を下ろし

作作　先づ、うぬの面體を

ト兩方より編笠に手をかける。春太郎よろしく立廻つて、左司馬を投げのける。この間に作作、編笠を取る。其まゝ見事にかへる。春太郎きつと見得。この物音にて赤子泣き出すゆゑ、素知らぬ體にて赤子をいぶりつけゐる。皆々春太郎を見て

小島　ヤヽ、あなたは兄上

皆々　春太郎さま。

ト皆々思ひ入れあつて、衣紋を直す。

宗太　これサヽ、春太郎どの、其許と存じなば、何しに聊爾いたさうぞ。

伴作　左樣でござる。畢竟、時の間違ひと申すものでござる。

左司　この場の事はこれぎりに

五平　眞平御免下さりませう。

又左　これはヽヽ、春太郎さま、某とくより、斯樣な儀であらうと存じたゆゑ、差扣へ罷りあつた。さりながら、家出ありしといひながら、あまり見苦しきそのお姿、何ゆゑあつてこの所へ

ト春太郎こなしあつて

春太　世にある時は用ひられ、世になき時は瓦石の如く、予が物好きでこの境涯も、一興かい。

伴作　アヽ、その身になつても

春太　恥とは思はぬ。

又左　ムウ、すりや、國取り國司を差措いて」

春太　非人も三日と譬への通り。

ト此せりふの內、始終赤兒をあやしゐる。小島之助、皆々顏見合せ、思ひ入れあつて

小島　いよ〳〵左樣な心なら、弟ながらも某が

ト扇にて打ちにかゝるを、よろしく拂ひ

春太　こりや、何と致す。

小島　何とするとは知れた事、仁木は武功の家柄と、世擧つて知るところ。家に泥塗る御身こそ、流石は賤しき外戚腹、小島之助とは性根が違ふワ。

又左　成る程なア、なんぼ兄御と生れても、下賤の腹の血筋ゆゑ、賤しき業を好きこのみ

伴作　見れば幼なき子を抱かれしは、非人仲間の品玉に、借り子をしての袖乞ひか。又はどこぞの宿なしと、乳繰り合つて拵へたか。イケ馬鹿々々しい儀でござる。ムヽ、ハヽヽヽヽ。

春太　今日の襤褸は明日の錦と、なにこれ式を恥とせん。いかにもこの子は予が實子、春太郎が祕藏の忰。

ト赤兒に、てうづをやる。

又左　ムウ、すりやそれが、春太郎さまの跡取りか。

伴作　先づ、その小僧を

ト伴作掴みにかゝる。春太郎、赤兒を突きつける。伴作の顔へ、てうづかゝりしこなしにて、飛びのく。春太郎手早く懐へ入れていぶりながら

春太　身を捨てる藪はあれど、子を捨つる藪なしと、たゞ捨て難きは恩愛一つ。

左司　その守り役は、身共がちよつと

トかゝるを、立廻つて見事に投げる。伴作「ムウ」とかゝるを、立廻つて捻ぢあげ

春太　管領職の、御前へ直ぐさき

ト振りほどき、伴作を見事に投げて

ドリヤ、面談を致さうか。

ト唄になり、思ひ入れあつて入る。敵役残り

伴作　サア／＼、大變だ／＼。今まで行くへの知れぬ春太郎、ぬつくりと爰へ出られては、此方の思ふ算用違ひ

宗太　こりやアどうしたならよからうな。

又左　ハテサ、先達てより申す通り、なんぼ政元が最屓をしても、誠の春太郎が出て來やうが、繼目に

用ゆる二品の寶、此方にあれば、いくら跪いても、どうなるものか。氣遣ひせずと、落ちついてござりませ。

卜門内より足輕一人出て來り

足輕　宗太郎さまへ申し上げます。多門之助さま、先刻よりお待ちかねにて、最前の御持病如何かとお案じなされ、拙者に見て參れとの儀にて、罷り越してござります。御全快にござらば、急ぎお入りなされませう。

宗太　それは政滿どの丶御深切。イザ、小島之助にも同道にて

小島　然らば罷り越して、何かの密談

又左　アモシ……サ、お越しなされませう。

卜唄になり、宗太郎先に小島之助、又左衞門、左司馬、五平太に足輕附いて門内へ入る。伴作殘つて

伴作　ハテ、思ひがけない春太郎が出たが、此方の仕事がうまくゆけばい丶が……併し、腰押しが管領の山名公に、荷擔人が昵近の澤井城五郎どの、そこに案じはねえが、只案じられるのは、城五郎どのから頼まれた鳴見が一件。こいつは餘ッほど手こずり物だわえ。これにつけても先達て、一味のしるしに預けたる、正宗の短刀、質屋めをたらしこみ、刀ばかりを差入れて、折り紙は我が手

にあれど

ト懐中より折り紙を出す。この時書附けを落す。よき時分より鞘負出かけ、窺ひ寄つて、この書附けをソッと取つて小隠れする。件作これを知らず

アヽコレ、刀が無ければ何の役には……イヤ、それよりは今一度、鞘負に逢つて鳴見が一儀を…

……さうだ。

ト門内へ入る。鞘負、跡を見送り

鞘負 心得がたき彼れが振舞ひ、合点ゆかずと思ふがゆゑ、密かに様子を窺ひ見るに、かねて某が推量の通り、心よからぬ宗太郎どの、小島之助に家督を譲り、仁木の家を味方に引入れ、その虚に乗つてあはよくば、天下を押領せんず山名親子が企みよな。それに荷擔の荒巻件作、いま懐中より落せしは、後日のそくたく合ひ役と、取交せしに違ひない。我れもたつて宗太郎どの、御代に出でねば今日中……こりや好い物が、手に入つたわえ。

ト大拍子になり、書附けを持つてキッと見得。この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、高足の御屋體、向う金襖、左右紺の暖簾、上下に振りよき臺松、石の手水鉢、手

拭掛け、植込み、すべて神職書院のかゝりよろしく、爰に志津摩、以前の白木の箱を側に置き、彌生姫以前の姿にて、兩人しどけなきこなし、變つた合ひ方にて道具とまる。

彌生　たとへどうした事があらうとも、斯うなつたからは、女夫ぢやぞえ。

志津　有り難うはござりまするが、恐れ入つたるそのお詞。

彌生　アレ又、矢ッ張り主あしらひ。

志津　ぢやと申しまして

彌生　コレ、その口で、女房どもと、云うてたもいなう。

ト志津摩に縋り寄る。この時伴作、後より窺ひ出て

伴作　さてこそ不義者、動くまいぞ。

ト兩人見て

志津　ヤア、伴作どのか。

彌生　コレ／＼、志津摩に科はない。みんな自らがする事。

伴作　イヽヤ、あなたが何と仰しやつても、主の娘をそゝのかす憎くい志津摩。不義の兩人は、これより直ぐにお屋敷へ。キリ／＼歩べ。

ト中の舞になり、兩人を引摺つて花道へかゝる。向うより股五郎、剃立て、羽織袴、大小にて、三方に刀を載せ、持ち出て、花道にて皆々に行きあひ

股五　ヤ、こりや姫君樣

彌生　股五郎か。

伴作　不義の兩人引ッ立て參る。そこ退かれい。

股五　たとへ不義であらうとも、某これへ參りかゝり、事の實否を聞かぬ内は、姫を此まゝには遣られませぬ。

伴作　でも現在、見拔いた不義ゆゑ

股五　何であらうと、あれにて聞いた上

伴作　でも

股五　ハテマア、お歸りなさい。

ト無理に本舞臺へ押し戻す。

伴作　ヤイ、股五郎、こりやァ不義者を庇ふのか。

股五　イヤ、庇ひは致さぬが、こりや不義と申すではございますまい。

伴作　どうしたと。

股五　いよ／＼この兩人が不義者なれば、貴殿には不忠の武士。

伴作　コレ、股五郎、足袋の上から足の裏を搔くやうに、をかしく味な事を云ふが、志津摩と姫と不義をしたのが、なんで伴作の不忠だ。

股五　誠この兩人が不義者なれば、どうなさるゝ御料簡だ。

伴作　ハテ、知れた事、不義はお家の堅い御法度、縛り首でござる。

股五　主君の惡事は、隱すが臣下の道なるに、それを却つて罪に落し、姫を縛り首になされんとは、俗に云ふ厄病の神で敵とやら。

伴作　ヤ。

股五　ハテ、忠心な侍ひだなア。

ト伴作ムッと思ひ入れ、この時奧にて

小島　仁木の重寶、御内見下さりませう。

ト音樂になり、奧より小島之助案内して、宗太郎、多門之助、濱町、二重へ出る。下座より又左衞門靱負、左司馬、五平太出てくる。舞臺の皆々よろしく住ふ。

股志　股五郎、志津摩、その品々を内見に供へい。
股志　畏まつてございます。
　　ト合ひ方になり、各自三寶を持ち出て、小柄を拔き、封印を切りほどいて、志津摩は宗太郎、股五郎は多門之助へ持ちゆき、這ひ下つて平伏し
イザ、御内見下されませう。
　　ト兩人箱の紐を解き、蓋を明け、悧りして其まゝ蓋をして
宗太　アノ、これが仁木の重寶か。
股志　左樣にございます。
宗太　とくと改め、差出だせ。
股志　ハツ。
　　トつかくと行つて、右の品々を持ち來り、蓋を明け、悧りして
ヤヽ、この内には、ホヽホイ。
宗太　上を騙かる不屆き者めが。
股志　ハヽツ。

ト平伏してゐる。

小島　コリヤ〳〵、兩人、家の寶が、如何ぞ致したのか。

又左　御内見の今日に至り、もし仕落ちでもある時は、御寶預かりの其方達より

靱負　この親々の申し譯はないが、どうしたと。

股志　サ、その儀は

又右　それでは事が解らぬわい。

ト急いて云ふ。

伴作　口籠つて愚圖々々するからは、箱の中に仔細があらう。ドレ、身共が改めて

ト箱の蓋を取つて、わざと悕りせし思ひ入れにて

ヤア〳〵、無いワ〳〵。雌龍雄龍の二つの印も、正宗の刀も……こりやどうぢや。

ト騷ぐ拍子に、箱の中より割り笄の片し落ちる。伴作取上げ

ヤア、箱の中からこんな物が……こりやァ何だ。いつぞや股五郎が、大殿から拜領した、割り笄でござる。いづれも御覽なされい。股五郎のでござる〳〵。

ト皆々に見せびらかす。股五郎、心得ぬこなしにて

股五　ドレ、お見せなされい。

ト取つて

いかにも、この品は……モシ、親仁様、こりやコレ慥か、あなた様が

又左　ナニ、おれがどうした。

股五　ソレ、いつぞや見せいとあつて

ト云はうとするを

又左　何を痴言。

トこれにて股五郎ちやつと懐中する。又左衛門、靫負立つて、又左衛門は股五郎、靫負は志津摩を引附け

又左　ヤイ、悴、去年蟲干しの節、志津摩の兩人が立合ひの上封印なし、おのれらが預かりしに、今いづれもの前で、自身と封を押切つて、内見に入れし折に、何ゆゑ箱に入れてないのだ。この又左衛門とは義理あるおのれ、盗み根性を持つて、斯様な事を仕出しては、死去したる先又左衛門へ、身共が立たぬワ。エヽ、おのれはなア。

靫負　アレ、又左衛門の一言を聞いたか。大切な役目を疎かにして、代々武功の家柄と、人も羨やむ和

田の家名、ようもおのれが穢したなア。
又左　この親々が爲には惡魔外道め。云はうやうない
兩人　人外めが。
　　　ト突き離す。
小島　汝等はそれでも相濟まうが、家督定めの今となり、この小島之助は、如何いたさうと思ふ。
作作　いま身共が事を何と云つた。それよりは、主の家を絕やさんとする、ハテ忠心な侍ひだなア。
左司　こりやアなんでござらう。その身の放埒にて、酒色の價に行詰まり、兩人が云ひ合せて
五平　その品を盜み取り、賣り代なしたものでござらう。
股志　どうして左樣な
靭負　然らばその申し譯があるか。
股志　サア、それは
又左　親の首へ繩を附けるか。
股志　サア
敵役　盜み取つたか。

閏志　サア

皆々　サアノ＼ノ＼

又左　兩人が、云ひ譯は、ド、どうだ。

ト段五郎は割り笄を出し、云ひ譯したき思ひ入れにて堪へてゐる。

志津　その申し譯は

ト刀の柄へ手をかけるを

多門　ソレ、とめい。

濱町　多門之助さまの仰せ。志津摩どの、お待ちなされい。

志津　でも、

多門　いま其方が死ぬればとて、失せたる寶が爰へ出るか。

濱町　今日内見とは申しながら、表立つて御覽に入れるにもあらぬ品。また正宗の刀も、將軍家御懇望とは申しながら、今日多門之助さまの御持參なさるにもあらねば、とくと詮議いたしなば、知れざる事はよもあるまじ。

多門　詮議の内は某しが、よきに執成し致しなば、いま切腹にば及ばぬ事。

濱町　急かずとマア／＼、お扣へなされい。

ト志津摩「ハッ」と平伏する。

靭負　あれ承つたか、志津摩、いま親が手にかけ、討ち果すところなれど、多門之助さまの有り難いお詞ゆゑ差免す。今日より勘當だぞ。

志津　ハッ、身の誤まりに申し上ぐる、詞とてもござりませぬ。

靭負　寶の在所知るゝまで、姉聟の政右衞門に面談なし、先達て渡し置いたる彼の一巻、渡すとも、そりや其方が勝手次第。明日をも知れぬ老の身の、もしやこれが

志津　エ。

靭負　それまでは、親子でないぞ。

ト此うち彌生姫、思ひ入れあつて

彌生　コレ、志津摩、その身に云ひ譯ある事なら、なぜに云ひ譯しやらぬぞいなう。

伴作　何の云ひ譯あるものだ。人我れに辛ければ、我れ又人に辛しと、ナア、彌生さま。

彌生　なんの其方に、穢らはしい。

小島　ヤア、女の小差出た。其方達の居る席でない。サヽ、早う館へ

彌生　おのれ申して、これを見捨てゝ

ト志津摩へ駈け寄らうとする。奥より山路走り出て

山路　アヽモシ、お姫樣、お待ちなされませ。そりやお惡い、何事も私しどもが、呑みこんで居りまする

トとめる。

作作　この上は、志津摩を門前より阿呆拂ひに。ソレ、足輕衆。

ト下座にて

足輕　ハアヽ。

ト菖蒲革の足輕二人、割り竹を持ち、出て來る。

多門　寶紛失の上は、當所に用なき我れ〳〵兩人。

濱町　何とも以て氣の毒ながら、家督の御沙汰は追つての事。

宗太　ナニ小島之助、この宗太郎が情にて、暫しの程は相待つ間、詮議の手がゝりもあらば、吟味いたして差出だせ。さすれば家督は、異議なく其方へ。

小島　ハツ、少しの存じ寄りもござれば、何卒今暫くの御休息を

宗太　承知いたした……多門之助どの、あの通りだ。暫く猶豫して遣はされい。

濱町　見す〳〵紛失の品々を、今にも差上げんとの一言は、何か樣子の
小島　エ。
濱町　アイヤ、樣子ありげな小島之助さま、暫しの事なら
多門　別書院にて相待ちくれう。
山路　サア、姫君樣にはお館へ
彌生　ほんに、夢見たやうなこの場の仕儀。
志津　斯くなる上は何事も
靱負　云はぬは云ふに
敵役　ヤア。
志津　御無事でござりませ。
多宗　案内いたせ。

ト音樂、三重になり、チョンと簾を下ろし、四人を隱す。彌生姫には山路附添ひ花道へ、志津摩は靱負、彌生姫へ思ひ入れして、悄々と東のあゆみへかゝる。足輕せり立て、双方とも向うへ入る。又左衞門、股五郎の側へ摺り寄つて

又左　ヤイ、股五郎、そちや寶の紛失を、役目の越度とは思はぬか。
股五　越度とは存じまするゆゑ、ぢつと蟄して居りまする。
又左　蟄して居れば相濟むと思ふか。靱負どのゝ御子息は、流石侍ひだ。おのれは腹切る術も知らず、いづくの果までも驅け歩き、詮議しようといふ所存は無いか。
股五　ハテ、腹切る術は元より、爰を立退く事もなりませぬ。
又左　そりやどうして
股五　寶の詮議いたさうと存じて、この所は滅多に
又左　ヤ。
靱負　アイヤ、又左衛門どの、貴殿の御子息ではござれども、斯樣な粗忽者にては、なか／＼以て、この者を捕へたればとて、斯程の品を盜む者が、なに一人して致さんや。正しく多勢。果しも詮議の筋に、心附かぬにはあらねども、迂濶に吟味なさば國の亂れと、そこを存じてゝナ、何事も取措け。
又左　左樣でござる。その上、武藝は未熟、なか／＼大敵なぞに向ひ、詮議なぞとは及ばぬ事。取措け
股五　成る程拙者は、未熟者ではござれども、靱負どのゝ御指南にて、少しは覺えも

靫負　イヽヤ、無い。
股五　なんと。
靫負　おのれが心に慢心して、度々身共に許しを願へど、まだ太刀筋も定まらぬゆゑ、極意の傳授は致さぬぞよ、それに何ぞや、荷擔人多き盜賊の、その詮議とは、粗忽者めが。
股五　左樣には仰せあれども、そも入門のその日より、御流儀に心を碎き、何卒奧儀を極めんと思へど許しなければ力なく、御子息志津摩どのを相賴み、內々披見いたしてござる。
左司　ムウ、すりや神道神影
五平　鞠ケ瀨の傳授を
股五　會得いたし居ります。
靫負　ナニ汝如きが、傳書を見やうが、ほんの盲目の垣覗き、役にも立たぬ事だ。
股五　さほど胡亂に思しめさば、この場で拙者が手練の程を……ムウ。幸ひ〳〵。
ト合ひ方になり、下の方の松の木を見て、ズッと立つて刀を拔き、左にて松の枝を斜に切り落し、その枝を持つて、靫負の前に差出し
靫負どの、御覽なされい。曲れる松のこの親木を、討つは何より易けれども、それを助けて心に

隨ひ、共に曲れる枝木まで、探る心の……イヤサ、斜にスツパリこの切り口、股五郎が心の底意、なんとこれでも、寶の詮議は出來ませぬか。

靭負 イヽヤ出來ぬ。そりや料簡が違ふ。

ト云ひさま立つて、上手の松の木を見て、刀を拔き、背打ちに切り落し、その枝を持つて來り

これ見たか。刀で切るは庭造り、そりや木造りも若氣の短慮、よしにせい。刃を用ひず背打ちの、手練は心に落ちつけて、狂ひなければこの通り。切り取りしは心に殺氣があるゆゑ、横筋違ひにしかも刀目、ゆがめる枝を切る時は、根深き企みに幹をそこなふ。コレ……この和田かまりなき直ぐなる一木を討取り、敵に心を許させて、イヤサ、身共に敵たふ今の切り口、そんな心得違ひの侍ひは、弟子といふのも師匠の恥だ。向後師匠と思ひ居るな。

股五 ムウ。すりや、今よりしては

靭負 師匠の緣はこれぎりだぞ。殊に許しもなき傳書を覗き見たは、取りも直さず盜賊の所爲。武士のあるまい、大盜人めが。

ト此うち股五郎、ヂリ／＼無念の思ひ入れにて、この時キッとなつて

股五 ヤイ靭負、舌頭が過ぎるぞよ。これ程に心を碎く、股五郎が胸中を悟らぬのか。流儀を懇望すれ

ばこそ傳書も望め、それを盗人とはあんまりだぞ。傳書々々と、なにが傳書だ。あんな事は、二ツ子も知つてゐるワ。これからは股五郎さまの無敵流だ。人を盗人と吐かした、その返報を

ト拔いて切りつけるを、靱負遠くにゐて當てる。股五郎ウンと倒れる。

皆々　これは。

靱負　流儀の極意、眞の遠當て。

敵皆　ムウ。

ト皆々擬勢する。

靱負　又左衞門どの、ちと御意見召されい。

ト唄になり、こなしあつて奥へ入る。敵役皆々足摺りして

伴作　側で見てさへ憎いのに、股五郎どのゝこの始末は、どうせうと思はつしやる。

又左　それには身共、思案がござる。硯を持つてござい。

五平　心得ました。

ト硯箱を持つてくる。

又左　抱き起さつせえ。

ト皆々股五郎を抱き起し、又左衛門、その額へ文字を書く。

作作　ヤア、股五郎どの、額へ、犬といふ字を

ト大きな聲で云ふ。

又左　コレサ、靜かにさつせえ。これが卽ち、細工の仕揚げた。ソレ、活を

作作　心得た。

ト作作、股五郎に活を入れる。股五郎心づき

股五　チエヽ。

ト無念の思ひ入れ。

又左　口惜しいか、無念なか。

股五　無念でなうて、なんと致さう。

又左　ムウ、さうであらう〳〵。

股五　モシ、親仁樣、この恥辱も、お前ゆゑでござる。

又左　ナヽ、なんと。

ト股五郎、以前の割り笄を出し

股五　これ覺えてござるか。

又左　その品は

ト手を出すを押へて

股五　エヽ、お前はなう。

ト合ひ方になり

最前、寶內見の節、箱より出たるこの目貫は、いつぞやあなたが見せいとあるゆゑ、相渡し申した拙者が品。モシ、三品の盜賊は、あなたに相違ござりますまい。

又左　イヤ〳〵、どうして其やうな

股五　お隱しなさるな、その節あなたと推察は致したなれど、それをその場では申しませぬぞ。それと申すも私しは、お前の實子にあらずして、いづくの何人の胤か知らねども、藁の上より澤井の家へ養子の身。これまで御養育下された、その大恩は須彌大海。それゆゑ寶の紛失も、この身に引受け、現在盜賊のあなたにさみされ、ヂッと蟄して居りましたも、內々にて寶の在所をお聞き申し、志津摩もろとも差上げなば、事穩便に相濟む道理。親仁樣、密かに私しへ、お聞かせなされて下さりませ。

又左　アヽ、誤まつたく。いかにも我れく申し合せ、盗み取つたに違ひない。

伴五　アヽ、コレく、それを云つては

又左　イヤ、大事ござらぬ。これまで悴に明かさぬは身が誤まり。今こそ明かす、よく聞けよ。

ト皆々思ひ入れ。又左衛門摺り寄つて

この又左衛門が育てし君は、御次男小島之助どの、何卒御代に相立てんと、思ふところ御父君には脇腹の兄、春太郎どのへ家督との願ひ。それを妨ぐるには、三品の寶奪ひ隠し、繼目の時仕損じさせ、その跡で此方より、上覧に入れ、仁木の家督、小島之助どのへ繼がせんと、逆と知りつゝ順に逆らふも、何卒折よくば一天下も……イヤサ、今こそ一大事も明かし聞かせる。父が心は、この通りぢやわい。

ト謀叛の事は隠して云ふ。

股五　ムウ、初めて聞いて驚き入る。父に主なら、股五郎にも御主人。今よりはいづれもと合體なし、小島之助さまの御味方。して、寶の在所は

又左　イヽヤ、滅多には云はれぬ。

股五　そりや何ゆゑ

又左　眼前恥辱を受けながら、その無念を晴らす所存もない、腰抜け武士には、云はれぬ〳〵。
股五　武士と生れて、無念を存ぜぬ者は無けれど、一旦は師匠の義理を思うて
又左　其方はさほどまで義を立てゝも、その師匠は弟子を犬に譬へて
股五　そりや又どうして
ト又左衛門立つて、手補を持つて來り
又左　其方が面體、とつくと見ろ。
股五　ナニ、面體とは
ト水鏡を見て
ヤ、、額に犬といふ文字が
又左　靫負が書いた。
股五　エ、。
ト驚く。敵役皆々思ひ入れ。
又左　コリヤ、この親は、汝が今の遲れさへ、無念と思ひ口惜しきに、畜生侍ひ犬侍ひと、額にしるしのその文字。

伴作　側で見る目の我れ〳〵まで、口惜しいやら、無念なやら
左司　手出しをせうにも、名に負ふ達人
五平　人の事より我が身の怖さに、チッと見てはゐたものゝ
伴作　なんぼ弟子ぢやと申しても、人畜生とはあまりの雜言。
左司　又左衞門どのゝ心中思ひやつて
又左　熱い淚がこぼれるわい。
ト思ひ入れ。
股五　チエヽ。
ト本當に無念の思ひ入れ。又左衞門、股五郎の樣子をトックリ見て
又左　コリヤ、忰、惡と知つて忠義を盡す親が心と
股五　忠義に見えても、靱負が胸中、惡なるか。
又左　忰
股五　親仁樣
又左　いづれが善か、思案をしやれ。

ト唄になり、又左衛門こなしあつて下座に入る。股五郎思案してゐる。敵役皆々取卷いて

伴作　今の御親父の詞を、何と聞かしつた。善惡の思案とは、解りましたか。

股五　善惡二つの親の詞、悟らぬにてはなけれども

左司　なんぼ心善しの股五郎どのでも、事もあらうに武士の面へ

股五　日頃この股五郎へ、不便をかけしあの靭負が

五平　あまりといへば無禮の振舞ひ、口惜しくはない事か。

股五　よもやと思ふ今日のしだら、さてはいよ／＼本心に

在司　いつそ朋友の我れ／＼が、股五郎どのになり替り

股五　武士たる者へ額の恥辱。

皆々　この恨みを、返す思案は

股五　こりやモウいつそ

皆々　靭負をバツサリ

股五　コリヤ。

ト左右を押へ、キツと思案の思ひ入れ。皆々口を押へ、股五郎を見てあざ笑ふ思ひ入れ。中の舞にて、

この道具ぶん廻す。

本舞臺、向う二重の高足、簾屋體、左右柴垣、爰に水打ち奴二人掃除してゐる。白囃子にて道具とまる。

奴一　なんと、御兄弟でも、慾といふものは恐ろしいものだ。弟御の小島之助さま、伯父御の山名さまに取入つて、たうとう仁木家の跡取りださうだ。

ト兩人よろしくあつて納まり

奴二　それよ。七ツの時計を合圖に、仰せ渡されがあるとの事だ。

奴一　小島之助さまの世になれば、附いてゐる役人が惡いから、人使ひが思ひやられる。

トこの時七ツの時計鳴る。

奴二　そりやこそ御家督の刻限だ。

奴一　サア來い。

ト序の舞になり、兩人下手へ入る。上手より小島之助先きに、靭負、伴作、左司馬、五平太出て來り、よろしく住ひ、屋體へ向ひ

小島　仁木小島之助を始め、家臣の者ども、殘らず相詰めましてござります。

皆々　願ひの通り、お聞き屆け下さりませう。

　　卜簾の內にて

多門　家督の評議、これにて委細聞き糺さん。

　　卜樂になり、簾上がる。爰に、多門之助、宗太郎、濱町、以前の形にて扣へてゐる。皆々見て平伏し

小島　宗太郎さまへ申し上げます。寶紛失の儀は、三日の內に詮議いたし、御覽に供へますれば

伴作　主人大內記、隱居願ひの上は、何卒小島之助へ家督の儀を、異儀なく仰せつけ下さりませうなれば

皆々　有り難く存じ奉ります。

宗太　イカサマ、寶詮議は家督の上にて、致してもよさゝうな事にござれば

多門　一日もその國に主なくては、政道も行屆くまじ。

濱町　御父政元さま仰せの通り、急ぎ仁木の家督、仰せつけられてよろしうござりませう。

伴作　すりや、この所にて小島之助へ

多門　イヽヤ、惣領春太郎へ

皆々　ヤア。

濱町　春太郎どの、急いでこれへ。

　　ト揚げ幕にて

春太　ハア、。

　　ト三味線入りの樂になり、向うより春太郎、以前の形にて、矢張り子を抱いて出て來り、花道に住ふ。

　　皆々見て

又左　ヤヽ、仁木の家督は、小島之助さまと思ひの外

小島　すりや兄上春太郎さま

春太　管領職のお召しにあづかり

伴作　おめず臆せずつん出たは、以前に變らぬ袖乞ひ姿

左司　それを家督に定めては、家中の思惑、世の誹り。

小島　仁木の家は勿論、この小島之助の顏までよごれるワ。

宗太　殊に若輩ながら、多門之助どのにこの宗太郎、今日一日は親々の名代。

五平　管領職の御前なるぞ。見苦しいその形で

皆々　叶はぬ事だ。
春太　でも、多門之助さまの御意に任せて
宗太　たとへどなたが云はうが、どいつが吐かさうが、この宗太郎がならぬ。とつとゝ爰を
皆々　下がり召されい。
濱町　春太郎さま、お待なされい。
春太　ハ、ッ。
濱町　立つには及ばぬ、お下にござれ。
宗太　なんと。
濱町　先年大内記どのより密かの訴へ、別腹ながら兄春太郎へ、家督を仰せつけ下されよと願ひにより
　お合ひ役の山名さまには御沙汰なく、將軍家の嚴命にて、お越しありし多門之助さま。
多門　大内記の願ひに任せ、故なく家督申しつける。
春太　すりや、某しに仁木の家名を
多門　下し置かるゝ即ち墨附き。
　ト墨附きを出す。

春太　ハヽツ。

トつか〳〵と本舞臺へ來り、墨附きを受取り

有り難く頂戴仕ります。

宗太　一國一城の主となる春太郎、こりやア聞えた。寶の品々は盗み取り、細川どのへ内見に入れたゆゑ、事の實否も糺さずに、家督を云ひつけたのでござらう。そりやア依估贔屓と申すものでござる。こりやア蒔き直して、小島之助に申し附けてよくござらう。

濱町　イヤ、仰せではござれども、御父政元さま、將軍家の命によつて、御持參ありしお墨附き、これにも御批判がござりまするか。

宗太　サア、それは

濱町　よも嚴命は背かれまい。

宗太　ムウ……いゝワ、勝手にさつせえ。

春太　違背は却つて上への恐れ、今より國の主となれば……小島之助を初め、皆の者ども、席が高い、下がり居らう……御兩所、高座御免。

ト樂になり、上手へ通る。敵役「ムウ」と思ひ入れ。チリ〳〵と跡へ下がる。奥より小萩、野菊出て來

り、野菊、褥を敷き、春太郎これに住ふ。小萩、春太郎の刀を持ち、野菊、幼な兒を取つて、皆々よろしく住ふ。春太郎、思ひ入れあつて

蛟龍地に潜む時は、蚯蚓の爲に縛しめられ、昇天の時に至れば、雲を起し、霧を吐き、大山も手鞠の如しと。我れ不肖たりと雖も、將軍家のお目鏡を以て、仁木家の跡目相續なし、國の守りと仰がるゝも、偏へに貴所の御執成し。まツたこれなる靱負が養育にて、人となつたる春太郎、元來賤しき腹に宿り、家中の歸服あるまじと、父の御深慮、それゆゑに、下賤となつて國中隅々まで巡檢なし、家中の者どもが私慾の心、委しく日記に相記し、我が世に出でなば政事を糺し、先祖よりの家風を改め、民百姓の安穩を計らん。弟はじめ、一家中

と鷹揚に云ふ。皆々「ハツ」と平伏する。

今日より國の主となつたる某し、國政を相糺す。よも違背はあるまい。

皆々　ハツ。

ト平伏する。

伴作　イヤモウ、斯くお世繼と定まる上は、この伴作は申すに及ばず、御舍弟小島之助さまにも、何しに違背がござりませう……ナ、若殿、御兄君へ御挨拶を……ナ、御合點か。

ト高かに云ふ。小島之助呑みこみ

小島　成る程、兄弟兩の手の如しと、兄上の御家督ゆゑ、某しも力を得申した。

靱負　こりや斯うなうては叶ふまい。隨分以後は御兄弟仲、御和合あつて、お家の治まり、肝要かと存じまする。

伴作　成る程、靱負どのゝ仰せの通り、我れ〳〵も只今までの忠義に、又々覆輪をかけまして、晝夜ともに眠らず、寢食も斷ちまして、御奉公を致さう。ナウ、左司馬どの

左司　左樣でござる。伴作どのゝ仰せの通り、忠義一圖の我れ〳〵なれば

五平　この後ともに、恐れながら

皆々　お目かけられて下さりませう。

ト皆々平伏するを、春太郎見て、こなしあつて

春太　ムヽ、ハヽヽヽヽ……さもあらん。館の樣子窺ひ見るに、忠臣は遠ざけられ、佞人は世を奪はんと、反逆徒黨の國賊ども、一々に引ッ捕へ、吟味の上、刑罪に行ふは易けれど、國の騷動、こゝには、今日家督の喜びに、大赦を行ひ遣はすぞ。一々に姓名は相知るなれど、慈悲を以て申さぬぞ。心に覺えのある者は、胸の劍でおのれの魂ひ、きつと刑罪申しつくるぞ。

　ト敵役皆々顏見合せ、氣味惡きこなし

先づ改めて政道はじめ、家中の仕置き、善惡を相糺す。イヤナニ伴作、其方は何役を相勤める。

伴作　ハッ、只今にては、勘定方を勤めまする。

春太　おのれ憎くき奴なれども、料簡あつて出世させ、番頭を申しつくる。

伴作　アノ私しに……有り難う存じまする。

春太　左司馬には、納戸頭を申しつくる。

左司　有り難う存じまする。

春太　五平太には側役を申しつくる。

五平　有り難う存じまする。

春太　この座に居らぬ者どもは、追つての沙汰。ナニ靱負、備前へ早飛脚を立てゝ、荒木政右衛門を早召し出せ。

靱負　ハッ、畏まり奉りまする。

春太　さてこれからは又左衛門、次に扣へ居らば、早々これへ罷り出い。

　ト下座にて



又左　ハヽア。

ト又左衛門出て來り、平伏する。

春太　今日家督の春太郎、忠勤老功の其方、いま改めて轉役申しつくる。

又左　ハツ、拙者への役替へなら、定めし重役を

春太　イヽヤ、改易いたす。

又左　エヽ。すりや拙者めに

春太　永の暇を申しつくる。

又左　チエヽ。

ト無念のこなし。奥より左五郎、三方に九寸五分を載せ、持ち出て、小島之助の前へ直し

左五　當主春太郎さまより、下し置かるゝお墨附き。

ト小島之助見て

小島　臣下の列とあるさへ無念なるに、こりや三方に九寸五分。

左五　サヽ、御用意なされい。

小島　ヤア、慮外な左五郎、何ゆゑあつて某しに、短刀は突きつけた。

春太　科はその身に覺えあらん。靭負、ソレ。

靭負　ハツ。

ト最前拾ひし伴作の書面を出す。

伴作　それを

トかゝるを扇にて叩き伏せ

靭負　最前伴作の手より、落ちたる品はこの書き物。

春太　名宛では無けれど汝が實印、それに荷擔の輩は、そこらあたりに

ト宗太郎と又左衞門とを尻目にかけ

これを一々吟味いたさば、天下の亂れ、國の騷動、それゆゑ何事も穩便に致す。ハテ、仕合せなうじ蟲めら。

濱町　この上は小島之助どの、せめて最期は潔く

小島　ムウ……さては靭負めが、この企みを

多門　知つたるゆゑに、この家督は、春太郎へ申しつけたワ。

春太　その勳功によつて、和田靭負は今日より、又左衞門が持ち高を合せ、加增いたして五百石。

靱負　すりや拙者めに……エヽ、有り難く存じ奉りまする。
春太　我れは家督の喜びに、めでたく祝はん。杯もて。
野菊　ハア。
ト野菊、奥より長柄と土器を持ち出で、春太郎の前へ出て住ふ。
小島　この場で自殺の介錯に
春太　同氣もとむる世の譬へ、又左衛門こそ好き役目。
又左　然らば拙者に太刀取りを
多門　檢使は卽ち多門之助。
小島　今ぞこの世の
ト腹へ突き立てる。
野菊　小島之助さまは
春太　覺悟の上だワ。
小島　とく〳〵介錯。
又左　恐れ多くも

ト刀を振りあげ、春太郎と顔見合せ、氣を替へて小島之助の首を討落す。春太郎、扇をひろげる。一時に木の頭。又左衛門、首を見て、無念のこなし。宗太郎「ムウ」と拔きかけるを、濱町、多門之助入れかはつてとめる。件作擬勢する。靱負押へる。

春太　ムヽ、ハヽヽヽヽ。

トあざ笑ふ。双方よろしく、ひやうし

ト幕引つけると、ツナギなしにて引返す。

幕

三建目　返し

地藏堂雨宿りの場

役名――澤井股五郎。澤井又左衛門。醫者、奈良林十官。同娘、お園。百姓、豊作。荒巻件作。侍ひ、五平太。同、左司馬。佐々木團右衛門。侍ひ、喜藤太。仁木息女、彌生姫。澤井城五郎。和田靱負。

本舞臺、正面、本緣附き九尺の辻堂、ヽヽヽヽ、結緣地藏尊といふ額をかけ、左右藪疊、上手に高燈籠を灯し、すべて鎌倉切通しの體。爰に百姓三人、鋤鍬を持ち、道普請してゐる。側に、深編笠を手に持ち、黒

の薄羽織を着たる浪人者、立ちかゝりゐる。静かなる禪のツトメにて幕明く。

浪人　モシ〳〵、お前方、道普請をして、どなたぞお通りでもござるか。

百一　アイサ、今度仁木さま御家督につき、管領職のお通りゆゑでござる。

浪人　モシ、いま瀬田の方を報謝に歩きましたが、慥か今日お出でなされたとの事でございましたが。

百二　なにサ、ありやア内見とやらださうサ。

浪人　さうでございますか。

百三　モシ、お前方が出なさる所は、山崎町か、牛込かえ。

浪人　イヽエ、私しどもは只の浪人で、村々を合力に歩くのでござりますが、近年は豐年が續いて、よく勸進を出しまする。

百一　さうサ、別してこの市村は、打續いての當りで、我れ〳〵のやうな貧乏百姓も、福々でござる。

百二　時に、大分雲行きが悪くなつたぜ。

百三　折角直した道を、叩かねえやうにしたいものだ。

百一　アレ〳〵、どうかゴロ〳〵が來さうだぜ。

浪人　わしやア其ゴロ〳〵が大嫌ひサ。

トこの時、俄雨降つて來る。

三人　そりやこそな。

ト鍬をそこに置き、皆々逃げて下座へ入ると、禪のツトメになり、向うより十官、藪醫者の拵へにて、腰に雪駄を挾み、手拭をかむつて出る。跡よりお園、世話娘の形にて、風呂敷をかむり、眞白緒の草履を履き、俄雨にあひし心にて、飛び〳〵に出て來り

十官　ヤレ〳〵、烈しい夕立で、雨宿りする所もない。

その　モシ〳〵、向うに見える高燈籠の所が、切通しの地藏堂、あそこで雨を休めてゆかう。サア〳〵早く歩きなせえ。

十官　さうサ。サア〳〵、行かう〳〵。

ト兩人本舞臺へ來て、辻堂の緣へ上がり、よろしく體を拭ふ事あつて

その　お前もグツスリ濡れたさうだ。

十官　おれよりは、お前の帶がビシヨ濡れだ。

その　それでもこの風呂敷で、思ひの外濡れねえよ。

十官　イヤ、この雨には恐れたぞ。

その　今まで少しの雲行きもなかつたに、成る程、秋の空とは、よく云つたものだ。

十官　お園、てめえが無性に、來い〳〵と云ふから出て來て、こんな目に合はせやアがる。

その　お前もあんまりだ。年寄りの氣の強いのは、あんまりいゝものではねえよ。

十官　べら坊め、おれが氣強いのが今知れたか。それに、ヤレ來い〳〵と引摺り引ッ張ッて、こゝやアどこへ連れて行く氣だ。

その　どこといつて、兄さん武助さんの事で、和田靱負さまのお屋敷へ

十官　ムウ、彼奴が事なら打つちやつて置け。あの武助は、仁木さまの御家中、お國勤めの荒木政右衛門さまへ、奉公にやつたところが、お供先きで喧嘩を仕出かし、相手に疵を附けたから、御主人政右衛門さまの腹立ちにて、勘當を請けをつたとの事だか、その時武助にも、ちつとばかりで疵が附いたら、喧嘩兩成敗で暇も出まいに、因果と彼奴は不死身ゆゑ、先きにばかり疵が附いて、兄めはシヤア〳〵マヂ〳〵。

その　併し、その不死身とやらも、名作の切尖とやらでは、堪らぬといふ事だが、さうかえ。

十官　それ〳〵、分けて正宗なぞは、不死身も叶はぬといふ事は聞いてゐるが、武助めも喧嘩好きで、どうで滿足な死やうはしをるまい。いつその事、正宗にでも出會ひをつて、くたばつてしまひを

ればいゝ。
その　お前も心に惡を持つた人だ。なんぼお前の子だといつて、そんな憎まれ口は云はぬがいゝ。お前はさういふ氣でも、わつちやァ女の事だから、末始終便りにするは、兄弟と思ふから、夜道もいはず、親を連れて、靫負さまのお屋敷へ行くのも、政右衞門さまの舅御ゆゑ、たつた一人の親でござりますと、お慈悲願ひの心にて、あなたより勘當口を添へてもらはうと思ふからの事。それにお前、靫負さまの前で、そんな強情を云つちやァ事こはしだよ。
十官　面倒くせえ、そんな事を。アヽ、餓鬼は幾人あつても、惣領の武助は、あの通りの極道。二番目の兄めは、藁の上から養子にやり
その　モシ、その兄さんは、今どこにゐなさるのだ。
十官　その遣つた先きも知れてはゐれど、久離切つて遣つたからは、云つたとて無駄な事。今ぢやァ赤の他人同前。それだから、てめえ一人で、三人前孝行にしろよ。
その　そりやァお前が云はねえでも、親の事だもの、ナニ如才があるものか。
十官　それ程に云ふてめえが、この間から割ッつ口說いつ云ふ事を、なぜ諾かねえのだ。
その　それだつて、そりやァ無理といふものだ、櫻井林左衞門とやらへ、妾奉公に行けと云つたつて、

その林左衛門といふ侍ひは、どんな人だか知りもしねえものを。
十官　知らぬから云つて聞かせるのだ。林左衛門さまはい丶男よ。その上、てめえに首つたけ惚れてるから、授けやうて云ふ日が出れば、親も浮かみあがるワ。
その　お前も年寄つて、慾張りも大概にしなせえな、聞きたくもねえ。
十官　エヽ、わりやア親の云ふ事を諾かねえな。どうしてくれう。
その　どうといつて、この雨に通れるものだ。それよりは、爰にお前といつまでも斯うやつてゐられるものかな。好い事がある。お前の心安い、中澤村の豐作爺イの所へ行つて、傘を一本借りて來なえな。
十官　エヽ、親の云ふ事は諾かずに、親を使ふのか。仕方がない、借りて來やうが、今どうかてめえの嫌ひな、ごろ／＼が來さうだぜ。
その　そんなら猶の事、野道で雷にあふより、ちつとでも屋根のある、辻堂で除けて行く方がい丶わな。
十官　それでも、てめえ一人爰に置いては
その　なに氣遣ひな事があるものか。そんな女ぢやアねえよ。
十官　エヽ、女の癖に、その頬桁は

その　お前の子だものを。

十官　呆れたものだ。

　トこの時また本雨ザッと降つてくる。

こりやァ堪らぬ。

　ト薄雷、十官はお園のかむつて來た風呂敷をかむり、一散に下座へ入る。お園は耳をふさぎ、俯伏してゐる。バタ／＼になり、東の花道より股五郎、前幕の形にて、俵をかむり、走り出て、直ぐに辻堂へ駈けあがる。揚げ幕より左司馬、五平太、同じく前幕の形、尻からげ、頬かむりにて、傘一本を相合にして走り出て、舞臺へ來り、股五郎を見て

兩人　股五郎どのか。

股五　左司馬、五平太か。

左司　靱負の樣子を見屆けしところ

五平　跡の用事を片附けて、慥かに歸りは

兩人　この道筋。

　トこの時お園、癪の起りし思ひ入れにて

その　アイタヽヽヽ。

　　　トこの聲にて皆々驚き

三人　ヤ。

　　　ト思ひ入れあつて、舞臺前へ飛びのき、よく〳〵お園を窺ひ見て

股五　あれを見たか。

兩人　まんざらぢやァねえぜ。

股五　コレ。

　　　ト囁く。

左司　そんなら我れ〳〵は、諸方に隱れて頑張るのか。

五平　併し此方を卷するめの、跡は二人。

左司　こりやァ又持病が起つたな。

股五　なにサ、さういふ事ぢやァねえ。

五平　エヽ、氣が惡いぞ。

股五　これサ、無駄を云はずと

兩人　合點だ。

ト始終、雷の音にて、左右へ別れて入る。股五郎こなしあつて、緣に腰をかけると、百姓の殘し置いたる提げ莨入れ手に觸るゆゑ取上げ

股五　なんだ、こりやァ道通りの道者でも忘れたのか。丁度幸ひ

ト摺り火打ちを出して打つてゐる。お園、矢張り癪の起りし思ひ入れにて

その　アイタヽヽヽヽ。

トこれにて股五郎こなしあつて

股五　ハヽア、こりやァ雨宿りの女中か。雷で癪を起したのだな。

トこの時、雷嚴しくなる。お園悔りして、何心なく股五郎にしがみつく。股五郎驚き

コレ〳〵、女中、どうさしつた。

トお園心附き

その　ハイ〳〵、これはどなたか存じませぬが、御免なされまし。

股五　なにサ、咎めるのぢやァねえが、お前は今の雷で

その　悔り致して持病の疝へが、アイタヽヽヽヽ。

股五 それは、さぞ難儀であらう。ちよつと押して進ぜようか。

その ハイ、それは有り難うございます。憚りながら

股五 ドレ〳〵

ト雨乞ひ太鼓、繕つた合ひ方になり、股五郎、お園の後へ廻り

こゝらあたりか。

ト押してやる。

その アイ。

股五 これが本の、袖摺りあふも縁のはしと。どこの女中か知らねども

その よく〳〵深い御縁であつてか。

股五 エ。

その その御介抱で、どうやら少しは

股五 納まりましたか。

その アイ、ようございます。

股五 ヤレ〳〵、それは早速納まつて仕合せだ。

ト脇へ寄る。

その　何とお禮を申してよからうやら

トこの時、高燈籠の灯にて、股五郎の顔を初めて見て、ヂツと思ひ入れ。

股五　なんの禮に及ぶ事があつて

トこなし。お園、鷄の割り笄のそこに落ちてあるを取上げ

その　モシ、これはお前のかえ。

ト出す。股五郎見て

股五　アイ、これは忝うござる。

ト取らうとするを

その　お前のなれば、可愛らしい。

ト恥かしさうに抱きしめる。

股五　そりやア雄鷄を彫つたる片しの笄。

その　わたしやこの鷄と同じやうに

ト思ひ入れ。

股五　ヤ。

その　モシ、この地藏樣の額は、何と書いてあるえ。

ト股五郎透かし見て

股五　ムウ、結緣地藏尊。

その　それをやさしく讀めば

股五　結ぶえにし。

その　それが願ひぢや。モシ

ト寄り添ふ。

股五　エ。

トお園、恥かしき思ひ入れにて

その　アイタヽヽヽ。

ト空癪を起す。

股五　また癪か。

ト胸を押してやる。本雨降つてくる。

爰ではしぶきが

ト其まゝ扉を明け、内へ入り、顔見合せ思ひ入れあつて

ドリヤ、押してあげうか。

トお園こなしあつて、扉を締める。禪のツトメになり、向うより彌生姫、山路、前幕の姿にて走り出て來るを、捨、三、非人の形にて、窺ひ〳〵出て來り、皆々本舞臺へ來て

彌生　コレ、山路、志津摩はどこへ行きやつたぞいの。

山路　どこと申して知れませねど、私しがお供いたしますからは、きつとお逢はせ申します。

彌生　斯ういふうちも氣遣ひな。もしや館より追手の者が

山路　サア、それゆゑ心が急きまする。ちつとも早う

ト上手へ行かうとする。

捨　モシ、その志津摩とやらは、私しが逢はせてあげませう。

ト前へ出る。

山路　ヤ、其方は

三　この海道のお乞食サ。

山路　其方衆が、どうして忠律殿との、行くへを知つてゐるのぢや。

捨　サア、そこが商賣、どこがどこまでも

彌生　それほど知つてゐやるなら、早う連れて行つてたも。

捨　サア／＼、お連れ申しませう。

ト彌生の手を取る。

三　女中さんは此方へ來なせえ。

ト山路を下手へ連れて行つて、しなだれる。

彌生　こりや、どうしやるのぢや。

捨　云はずと知れた

三　按摩揉み療治だ。

ト双方、女形へしなだれる。兩人「あれえ／＼」とあせる。始終禪のツトメにて、向うより團右衛門、以前の形にて走り出て、この體を見て兩人を投げのけ、きつとなる。

彌生　ヤア、團右衛門か。

山路　よう來て下さんしたなア。

園右　今の夕立で、あなたのお跡を見失ひ、やう〳〵これへ參り合せて、此奴等が不運。もうお氣遣ひはござりませぬ。山路どのには姫君を、ちつとも早くお館へ

彌生　イヤ、自らは館へは

山路　ハテ、何事も私しが

彌生　でも志津摩に

山路　マア、ござりませ。

ト山路、彌生姫の手を引き、下座へ走り入る。捨、三、起上がり

捨　ヤイ、この目玉の、よい〳〵侍ひめ。

三　よくもうぬは、邪魔をひろいだな。

園右　何を乞食め、眞二つだぞ。

捨　べら坊め、西瓜ぢやァあるまいし

三　さう巧くゆくものか。

園右　その頬桁を。

ト葛西念佛になり、三人おかしみの立廻りあり、兩人して、ありあふ鋤鍬にて、園右衞門を散々に毆

り倒れ、

捨三や、來い

ト女形の跡を追ひ、下座へ入る。團右衛門起上がり、跡を追つて入ろ。直ぐにバタ〳〵になり、向うより又左衛門、伴作、尻からげ、傘をさし出て、直ぐに本舞臺へ來る。下座より城五郎、同じく尻からげ、頬かむりにて、傘をさし、喜藤太附き出て、本舞臺にて皆々行きあひ

伴作 ヤア、城五郎さまか。

喜藤 只今身共がお迎ひに参り、お連れ申した。

城五 兩人、いゝ所で逢つた。

又左 私しどもは、あなたにお目にかゝりたく存じたところ

城五 ムウ。して、身共への用事とは

又左 今日家督の事もまんまとしくじり、小島之助どのは詰め腹にて、この又左衛門も梵天國。

伴作 この伴作は、どういふ羽目か、しくじりはしねえが、どうも尻がこそばゆい。

又左 當の敵の春太郎が歸りを待ちうけ、ぶッ放さうとは思へども、多勢の警固に心許なく

伴作 そこであなたの家に傳はる、南蠻秘法の飛び道具、それを借り受け、春太郎を

喜藤　足場のいゝ所を見て、一打ちにせんと、それで迎ひに

城五　身共が爰へ來たのも、大方そんな事であらうと、思ひしゆゑ持つて來た、懐中道具の種ヶ島。そんならこれを

ト懐より出して見せる。又左衞門取つて

又左　云はず語らず心の合體、これが卽ち倖太郎の不運。うまい〳〵。

城五　して、蟠龍の印は身が所持し、雄龍の印は又左衞門、おてまへが所持してなれど、正宗の刀は

伴作　この伴作が預かつて

又左　質入れしたであらうがな。

伴作　サア、少々不都合の事がござつて、質入れは致したが、肝腎のコレ

ト折り紙を出す。

又左　そりや正宗の鑑定書。

城五　それをどうして

伴作　質屋を騙して正宗ばかり預け、折り紙は殘して置いたが、先の書附け見るやうに、身共が持つて落しては氣遣ひ、これは貴殿に預けて置きます。

又左　成る程、尤も。身が慥かに受取つた。
城五　併し、合點のゆかぬは其方、宗全どのに一味して、事成就の後、知行高祿受けたりとて、その老年で、誰れに讓る料簡だ。
又左　股五郎でなく、實の忰がござる。
城五　アノ、貴公に
又左　江州志賀郡に、胤を殘し置きましたが、今頃は、いづくに育ち居るやら、それを探して讓ります。今の忰の股五郎は、正直過ぎて役に立たず。
作作　イヤ、正直とは云へませぬ。今日の靫負へ惡口は、流石は貴殿の忰と、感心いたしをりた。最前餘程しやくりかけ、氣を持たせ置いたれば、慥かに先きへ廻つて、靫負が歸りを討つは必定。
又左　もしも彼奴、本心あの心なら、よき味方でござる。
城五　併し、迂濶に大事は明かされぬ。
作作　兎かう云ふうち、春太郎が歸りの時刻。
又左　この海道は道普請ゆゑ、慥かに裏を廻り道。
城五　その種ケ島にて覘ひを定め

又左　たつた一打ち。

城五　コレ。

ト押へる。

又左　ござれ。

ト四人思ひ入れあつて。下座へ入る。時の鐘、合ひ方になり、堂の内よりお園、股五郎の袖を扣へながら出て來り

その　モシ、必ず忘れさんすなえ。

股五　なんの忘れう、二世かけて、變らぬ證據は、渡し置いたるその笄。

その　嬉しうござんす、さりながら、どうぞお前のお名を聞かせて

股五　そりやア云うて聞かせまいものでもないが、この身の願ひの叶ふまでは、どうも迂濶に

その　そりやア水臭い。もしもわたしが心を疑がうてなら

ト股五郎の差添へを抜き、指をボンと切る。股五郎驚き

股五　ヤ、其方はひよんな

その　これ見て、疑ひ晴らして下さんせ。

ト出す　股五郎取つて

股五　ハテ、可愛の者やな、早まつたなア。

ト こなして、行列三重になり、下座より豊作、百姓の拵へにて、安下駄を穿き、手に傘と女の下駄を持ち、弓張り提灯を持ち出て來り

豊作　モシ〳〵、お園さん、傘も足駄も持つて來た。早くござりませ。

その　そりやアよく迎ひに來てくんなさつたが、わつちやアもう爰へ泊つて行かうと思ふから、お前は先きへ歸つておくれ。

豊作　とんだ事を云つたものだ。こんな所へ泊つて、蚊に喰ひ殺されるやうなものだ。

その　たとへ蚊に責められやうがまゝ、どうして爰を離れられるものかな。

豊作　それだといつて、親仁どんが案じてゐる。そして、アレ〳〵あの通り、仁木さまのお通りだ、と責められると惡い。早く來なせえな。

トせり立てる。

その　そんならわつちやア行きますぞえ。

ト不承々々に足駄を穿く。

股五　隨分ともに

ト この聲にて豐作心附き、股五郎を見て

豐作　ハテ、いゝ男だが、この辻堂に居るのは、ハヽア、狸だな。

股五　なんと。

その　もう斯うなつたら、たとへ何でも

ト股五郎の方へ行かうとするを押へ

豐作　これサ。眉毛を濡らして、しづかりしなせえ。

その　ぢやといふて

豐作　ハテマア、來なせえな。

ト無理に引つ立てゝ、矢張り行列三重になり、下座へ入る。股五郎殘り、跡を見送り

股五　思ひがけないあの女、おれが名を云はいでも、先きの名所は、いづくの誰れが娘やら、聞かんと思ひしに、迎ひの男に隔てられ、ハテ、本意ない事であつたなア……これにつけても親人を始め、小島之助さまの樣子が合點ゆかず、兎やせん角と思ふうち、師匠靱負どのが、日頃に打つて變つて今日の雜言、これ幸ひと此方より、無法過言を云ひつのり、惡と見せたも親人や、城五郎どのゝ

肌ゆるさせ、一味と見せて寶の詮議、聞き出さん爲なるに、粗忽より、胸中、事が顯はれ、辻闘に
手出しも……ハテナア。
ト思ひ入れ。この時、ドンと鐵砲の音する。行列三重やむ、向うバタ〳〵になり

多勢 狼籍もの〳〵。
ト赤合羽、竹の子笠の中間大勢、三階松の紋附きの高張提灯二挺、挟み箱、傘を持ち、逃げて出るを、又左衛門、種ケ島を持ち、城五郎、伴作、左司馬、五平太、抜刀にて追ひかけ出て來り、追ひ廻す。この時、槍をよき所へ置き、皆々左右へ逃げて入る。此うち股五郎、何事やらんと窺ひゐる。五八は供廻りを三方へ追ひ込み、舞臺へ歸り

皆々 城五郎さま

城五 方々。
トこの時、股五郎、前にツカ〳〵と出て

股五 親仁樣。
ト皆々見て驚き

又左 そちや股五郎、爰にはどうして

股五　晝の遺恨に靫負を待ちうけ
城五　ヤヽ、すりやァノ、師匠靫負を
又左　出かした悴、それでこそ天晴れ忠臣。
股五　ムウ。靫負を討つが忠義とは
又左　コリヤ、現在主親、その身の敵だワ。
股五　そりや又何ゆゑに
又左　和田靫負が讒言にて、若殿小島之助さまを、謀叛と云ひ立て、詰め腹を切らせたワ。
股五　エヽ。
伴作　まだその上に、又左衞門どのまで、靫負が爲に永の浪々。
股五　ムウ。さてはこの股五郎に、最前の雜言も、心あつてと思ひしに、すりや本心にてありけるか。主親といひ、この身の仇、恨み重なるあの靫負め。
トきつと云ふ。
城五　それぢやによつて、靫負めを討果たさんと、又左衞門が催促にて、爰へ來つて程よくも
又左　悴に面會、親が滿足。

股五　この上は、父の御手を下ろすに及ばず、悴が代つて討果たし

又左　小島之助さまといひ、この親が恨みを

股五　晴らさせませう。親人樣

又左　出かした悴。

作作　その加勢には、この作作を始めとして

左司　一味徒黨の我れ〳〵も

股五　助太刀下さるとあるからは、なに氣遣ふ事あらんや。して、盗み取つたる寶の在所は

又左　其方が心を疑ふ所存は無けれども、一味の者の疑心もあれば、一つの功を見ぬ内は

股五　それ程までに、拙者が心を疑うて

城五　迂闊に在所は

股五　ムウ。すりや、靫負を首尾よく討つたなら

城五　その時こそは、なに疑はん。

股五　すりや、お明かし下さるか。

城五　いかにも。

又左　今こそ悴の胸中見屆けたれば、我れはこの世に用なき身の上。これより養ひ君小島之助さまの菩提の爲

ト刀を拔き、髪を切り拂ひ

今より出家して、罪障消滅。

股五　寂滅爲樂と和田靱負を

トきつとなる。

城五　その心底にて我れ〱も安堵。さりながら、師匠の恩義など〻、心にゆるみある時は、寶の在所は知れぬぞよ。

又左　靱負が落着き聞くまでは

トあたりにある編笠を見附け

幸ひ爰に忍びの姿。

城五　身共はこれより屋敷に歸り

又左　我れは菩提所圓覺寺にて

股五　すりや、御兩所樣は

城五　この吉左右を

又左　回向をなして

又城　待つてゐるぞよ。

ト唄になり、種ケ島を隠し持ち、こなしあつて向うへ入る。城五郎は傘をひろげ、東の花道へ入る。

股五郎跡見送り

股五　親の胸中知り難く、一味同心と見せ、先づは大概

皆々　ヤ。

股五　味方の方々、最早靭負は

喜藤　爰へ來るは必定なれど、迂濶にかゝらば怪我の元。

ト股五郎、捨てゝある槍を取上げ見て

股五　天の與へはこの手槍。

作作　最前爰に鋤と鍬、落し穴を拵へて

股五　こりや妙計。いづれも、お頼み申す。

皆々　合點だ。

ト股五郎、以前の葛入れを探し取つて、伴作と兩人にて、石に腰をかけ、葛をんでゐる。左司馬、五平太、喜藤太は、鋤鍬にてよき所へ穴を掘り

左司　五平太どの、試みでござる。貴殿、靱負になつて、向うからござれ。

五平　承知いたした。ドレ〳〵

ト花道の際まで行き、こなしあつて來るを、左司馬、鋤にてくらはす。五平太、落し穴へ落ちる。

アイタヽヽヽヽ、こりやどうする。

左司　ハテ、稽古でござるワ。

五平　イヤ、この稽古は、もう否々、御免だ〳〵。

ト穴より出る。

伴作　それぢやア大概ゆきさうなものだが

ト思ひ入れあつて、向うを見て

ヤ、向うへ見える提灯は

左司　慥かに靱負。

股五　コレ……靜かに。

ト皆々思ひ入れあつて、所々に別れ、窺ひゐる。時の鐘、合ひ方になり、向うより中間、赤合羽にて菊の紋附いたる留守居提灯を持ち、跡より靫負、長合羽、足駄がけ、蛇の目の傘をさし、出てくる。跡より一文字笠、青漆の合羽を着たる侍ひ出て、花道にて

靫負　ありや何時であらうな。

侍ひ　もう四ツでもござりませうか。

靫負　思ひの外遅刻。サヽ、急げ〳〵。

ト何心なく本舞臺へ來る。伴作、いきなり提灯を切り落す。左司馬、五平太は侍ひに切つてかゝる。これにて侍ひ、中間は下座へ逃げて入る。靫負、合羽を脱ぎすてゝ、きつと身構へする。禪のツトメにて、これより四人一緒に靫負に切つてかゝり、面白きタテあつて、靫負は思はず落し穴へ落ちる、此うち股五郎窺ひゐたりしが、この體を見て、槍をしごき、靫負を突く。靫負手早く槍を切り折り、穴より這ひ上がるを、股五郎、靫負の肩へ足をかけ、キツと見得。

何者なれば徒黨を集め、騙し討ちとは卑怯な奴め。

股五　オヽ、卑怯た。額に殘つた犬の文字、その返報にうぬを又、犬つくばひに重なる恨み、今こそ思ひ知り居つたか。

靭負　ムウ、さてはおのれは股五郎よな。身が心底を悟りしと思ひの外、覺えもなき犬の文字とは

股五　今となつて何の痴言。面倒な、いづれも。

皆々　合點だ。

ト これより靭負、手負ひの立廻り、皆々を相手によろしく、股五郎疊みかけて切りこみ、靭負に止めを刺さうとして、靭負の懐中より手紙出るを、何心なく引出し、月影に透かし見ようとする。

皆々　如何でござるな。

股五　一刀流の達人でも、騙すに手なし、この通り。

皆々　出來ました。

股五　おてまへ達は、手を負うた様子。

皆々　イヤ、僅かの薄手。

股五　それは氣の毒。

皆々　併し、靭負は

股五　今が止めでござる。氣を附けさつしやい。

ト 皆々あたりを窺ひ、股五郎、止めを刺さうとして、手紙を取り





「書き残す一通のこと。」

皆々　エヽ。

股五　イヤ、これも何ぞの

ト懐へ入れる。チヨンと木の頭。雪兵を引起して胸先きを刺し通す。皆々は左右に屈む。双方よろしく、ひやうし

滿　來

二幕目

仁木館の場

圓覺寺の場

役名——仁木大内記。澤井股五郎。澤井城五郎。荒巻作作。川角源内。乳人、浅町。腰元、山路。佐竹左五郎。侍ひ、彌藏。同、丹下。同、主膳。同、左仲太。同、宮城。醫者、久良林上官。樽拾ひ、四方吉。股五郎云ひ號け、鳴見。政右衛門女房、お谷。松尾金助。一子、巳之助。若黨、軍助。荒木政右衛門。

本舞臺、三間の間、常足の二重、舞臺正面金襖、爰に大内記（前幕の春太郎）長の下ばかり、病

ひ鉢巻き、小さ刀を差し、濱町、乳の人の形。山路、腰元にて、若君の抱子をかゝへ、舞臺の上の方に伴作、上下の肌を脱ぎ、股立ちの形。下の方に同じく源内、股立ち。左五郎、彌藏、麻上下にて、皆々股立ち、凜々しき拵へにて扣へゐる。早舞ひにて幕明く。

大内 いかに方々、此たび和田靱負を討つて立退きし澤井股五郎、足利昵近の人々、圓覺寺に立てこもり、度々此方より使者を遣はせども、股五郎を渡さぬは、全く澤井城五郎、彼れに因みありといへど、義を以て力を添ゆる心にあらば、政右衛門が妹を達て懇望なせしかど、その戀の叶はぬ遺恨、それゆゑかゝるこの大變。使者に參りし團右衛門は

伴作 ハツ、先刻御前を下がりし團右衛門、お使者の役の手間どりまするは、不審の一つ。

源内 左樣でござる。誰れあらう足利の管領、仁木家へ對し、城五郎づれが我がまゝ云はゞ、當家の瑕瑾。

左五 この上は有無を云はさず、我れ〳〵圓覺寺へ押し寄せて

彌藏 圍む奴ばら討つて捨て、股五郎を取返し

伴作 殿の御心休め奉らん。いづれも、御用意〳〵。

皆々 心得ました。

ト皆々勢ひ込んで思ひ入れ。

大内　ヤレ待て。血氣に逸らば、理を以て非に落ちん。今にも佐々木が歸りなば、その返答の善惡によつて、兎も角も計らはん。

濱町　事を好まぬ深き御所存。私しことは、細川多門之助が乳母、即ち當家の親しき縁者。この程の御所勞をお伺ひに、名代に參りし濱町。

山路　只ならぬ御病氣に、かゝて加へてこの騷動、いづれも樣にも共々に、殿のお氣も休むるやう

伴作　いらざる女の世まひ言。臆病神の團右衛門、やはか術よく股五郎を

源内　取返す事、思ひもよらず

皆々　心許ない儀でござる。

ト早舞ひ、バタ〳〵になり、向うより團右衛門、麻上下にて、棒しばりにあひ、顏を墨にて塗られ、駈けて出て來る。

伴作　ヤア、團右衛門どの。

皆々　この體は。

團右　ハツ。某し君の仰せを蒙むり、圓覺寺へ立越え、股五郎を受取らんと申せども、田夫野人の侍ひ

ども、是非股五郎を受取らんとなれば、大内記に直々來れと、法外なる一言。某し心に堪りかね、ヤア奇ッ怪なる返答かな、足利の管領、仁木家の身内に於て、ぬきんでてこの役目、勤むる佐々木團右衛門、異議に及ばゝ手は見せぬ、片ッ端から撫で切りに、致さう、とは存じたなれど、先きは大勢、身共は一人、いかに金時、辨慶の力あればとて叶はゞこそ。鬼と呼ばれし團右衛門、まッこの如く棒縛り、面を墨に塗られたれば、誠にこれが、面目次第もござりませぬ。

伴作 殿、お聞きあられましたか。

源内 よもや此まゝでは。

皆々 我が君樣。

ト大内記向うを見て　無念の思ひ入れあつて

大内 足利どのゝ憚り、和議計らはんとせしを圖に乘りて、奇ッ怪なる振舞ひ、無法の野武士。この上は某しが、直に參つて股五郎、渡さぬ上は一々に

ト立上がる。濱町、山路、取りついて

濱野 アイヤ、恐れながらそれは御短慮。一途の怒りに國家の亂れ。

山路 まだいとけなき若君樣、殊には君も御所勞の

濱町　御身の上を思しめし、只管この場は

大内　ヤア、いはれざる諫言、其方達の存じた事ではない。たつてとあらば、手討ちに致すぞ。

濱町　でも大切なお身の上。

大内　繰り言申すな。

山路　ぢやと申して

大内　妨げ致すな。

ト濱町山路を突きのけ、一散に花道へ行く。早舞ひになり、向うより政右衛門、麻上下にて出て來り、大内認をキッととめ

政右　恐れながら、暫く〳〵。

大内　そちや政右衛門。委細の樣子は聞きつらんに、なんで予を支へるのぢや。

政右　樣子承知仕ればこそ、君をおとゞめ申しまする。

大内　役にも立たぬ諫言を、申す所存でとめたのか。

政右　イヽヤ。全く御諫言は仕らぬ。併し君には御不例ゆゑ、逆上あつて猶更に、臣等の詞、お聞き濟みなき御有樣、若輩ながらも政右衛門、存ずる旨も候へば、一先づお心靜められ、まづ〳〵

あれへ。

　　トこれにてサリ／＼本舞臺へ押し戻す。大内思ひ入れあつて

大内　いかに政右衞門、其方が妹鳴見は、股五郎の女房なれば、聟に小舅のよしみを思ひ、股五郎を庇ふぢやまで。

政右　こは思ひよらざるお疑ひ、尤も妹鳴見こと、股五郎に遣はせども、私緣によつて贔屓の沙汰が相成りませうか。舅聟の緣と申しなば、股五郎に討たれたる、靱負が娘お谷こそ、拙者が婦妻、さすれば卽ち舅の敵。さるによつて圓覺寺へ、お使者の役目さへぎつて、拙者めがお願ひ申さんその爲に、推參いたせし政右衞門。

大内　して其方が思ふ旨、所存ありと申したは

政右　ハツ、只今申せし拙者が妹を、卽ち澤井城五郎、深く心をかくる由、然らば鳴見を股五郎の代りなりとて、死罪の趣き、披露に及ばゝ、城五郎、妹に心ひかされて、利を取結ぶはこれ必定。高手でゆかずば妹を、股五郎と取替へるか、三つ一つの返答も、これにはよもや城五郎、女を受取り股五郎を、手渡し致すか、さもなくば、女房を殺させめ／＼と、生きては居られず切腹なすとも女を枷に三つの捌き、しかけに計るそれゆゑに、このお使者は某しが

作作　イヤ、政右衛門どのゝ所存のみこめぬ。向ふ日當ては聟のこと、玉に使ふは貴殿の妹、その使ひ手が舅のおてまへなりや、緣者のちなみ、心許ない。

源内　殊に其許はお國詰め、股五郎は鎌倉にて、一度も顏を合はさねば、何を證據に受取りめさる。

政右　たとへ顏は知らぬとも、天に日月あつて率土を照らし、國に法印あつて奸者を照さず。順を以て逆を討つに、何條難き事あらんや。さればとて股五郎づれに、家に替へ身に替へて挑み爭ふは、牛の刀にて鷄を割く諺。たゞ利を以て事を計らん其ために、妹を餌にこの使者、御賢慮如何、我が君樣。

大内　ムウ。

ト思案して

政右衛門が申すところ理に當れり。然らばこの一條は、汝に任す。予もこの程の所勞にて、勤めは甚だ難儀なれば、この度の儀終らば、足利どのへ隱居の願ひ、跡目は卽ち悴の力壽、頼み入る細川氏、政元どのへこの仔細。

濱町　その御內意もかねてより、殿は御承知それゆゑに、御樣子窺ふこの濱町。

大内　かゝる願ひもこの騷動、一刻も早く取鎭め、予が心痛を助けよ荒木。

政右　ハッ、仰せにや及ぶべき、これより直ぐに圓覺寺へ

作作　國よりこの頃來りしおてまへ、一人で行つては勝手が知れまい。

大内　その介添へは伴作、源内、其方兩人附添ひ參れ。

作源　畏つてござりまする。

團右　この團右衛門も此まゝでは、諸士の手前立ち難し。又ぞろ拙者も御一緒に

大内　言語に絶せし大だわけめ、諸人へ見せしめ繩のまゝ、圓覺寺まで案内せよ。

團右　すりや、縛られた此まゝで……ハッ。

大内　イヤナニ政右衛門、圓覺寺には足利昵近の諸武士、股五郎を庇ふよし。もし手に餘らば

ト前簾の種ケ島を出して

これぞ澤井が家の鐵砲、我が乘り物を目がけて討ちしが、うろたへてその場に捨て置きしと、近習の者が拾ひしこの品。

ト渡す。政右衛門これを取り、思ひ入れあつて

政右　すりや、飛び道具にて我が君樣を

ト大内記の顏を暫く見て

ムウ。いよ〳〵ゆるがせならぬ股五郎。

ト右の[illegible]を作り、ツカ〳〵と花道まで行き、きつと股立ちを取り

いづれも、お先きへ

大内　早く行け。

政右　御免。

ト早舞ひなり、政右衛門一散に向うへ入る。

大内　さへぎりてこの役目、乞ひうけし政右衛門。ハテナア。

ト思ひ入れ。濱町、山路、前へ出て思ひ入れ。

濱町　靫負は彼れが舅といひ

山路　荒木が心底、何とも以て

兩人　モシ、御前様。

大内　この事終らば兼ねての望み、政右衛門に

ト思ひ入れ。

兩人　御前様、又もや御持病。

大内　藥湯もて。

兩人　ハア。

ト辭儀する。大内記、刀を杖にて思ひ入れ。よろしく道具廻る。

本舞臺、三間の間、高足へ本緣側附き、白木の高欄、向う金襖、上の方同じく緣側附き、中足九尺、の茶の間、障子建てあり、眞中の屋體より高欄附きの橋をかけ、右の亭屋體の側に手水鉢、下草のあしらひ。舞臺前に土手板、これに秋草の盛り。上手四つ目垣、寒竹の植込み、いつもの所に切り戸口すべて圓覺寺圍ひの道具。綺麗に飾りつけ、爰に丹下、主膳、左仲太、官藏、皆々袴、股立ちの上へ簑を着て、竹笠を冠り、鍬を持ち、所化二人、酒肴を取散らし、皆々踊つてゐる。黄檗の鳴り物にて道具納まる。

ト直ぐに向うより十官、醫者の形にて出て來り、この體を見て

十官　これはいづれも、變つた形で、お所化達も打交り、酒や肴で大踊り、雨乞ひでもなさるのか。

丹下　コレ、十官老、我れ〳〵がこの姿は、城五郎どのが隱まひし澤井股五郎、仁木家より取返しに參つた、佐々木團右衛門といふ奴を、棒縛りにして歸せしゆゑ

主膳　必定大内記どの、人數を以て押寄せ來らんも計られず。

左仲　我れ〳〵は足利昵近の者、城五郎どのに頼まれ、股五郎の肩を持てど

官藏　足利どのゝ聞へを憚り、表向きの加勢はならず、それゆゑ簑笠にて顔を隱す、百姓のこの出立ち

十官　その儀は一々解りましたが、斯く騷動の中で、踊り狂ふは、こりや何事。

丹下　仁木家の腰拔け武士、今に來るかと思ひの外

主膳　待てど暮らせど餘り退屈。併しウカ〳〵話すものゝ、十官老には氣は許されぬ。

十官　とは又なぜ。

主膳　おてまへの子息、柘榴武助は、政右衛門が下部なれば

十官　アイヤ、その事ならばお心遣ひは御無用、忰武助は大内記どのゝ本國、備前の兒島に居れど、この鎌倉へは、ついぞ一度參つた事はなし、まだその上に、室の津の女郎にはまつて、現を拔かすと承る。親子といふは名のみ、又この十官は股五郎どのと前方より……サ、舊恩ある愚老、この度の大變、股五郎どのゝ肩を持たうと存じて、それゆゑ駈けつけました。

丹下　それならば、折角駈けつけてござつた十官どの

左仲　駈けつけ三杯と申すから、引續けて飲まつしやい〳〵。

十官　愚老は酒は大好物ぢやが、男ばかりの酒は、一向冴えないものぢや。
皆々　でも、爰は寺院の事なれば
十官　無いも尤も、併し女の形がござる。
　　　ト懐より紙雛を出して
これは城五郎さまがお頼みなされた惚れ薬、蠑螈の黒焼き、雌と雄とを取分けて、この雛の腹へ入れ、兩方分けて持つ時は、忽ち心一つになるといふ、長崎秘法のこの妙藥。
皆々　然らば紙のこの女雛を
十官　女と思つて
皆々　酒の相手に
　　　トこの時向うにて
城五　イヤそれよりは城五郎、生ものゝ女を持參いたさう。
　　　ト音樂になり、向うより城五郎、上下大小にて、振り袖姿の鳴見の手を取り、無理に引ッ張つて出る。鳴見、黑塗りの手箱を抱へ、引かれながら出て、花道にとまる。
皆々　城五郎どの、して、その樣子は

城五 仁木家の使ひの者へ應對いたし、丁度斯樣な花を一本、手折つて參つた。詳しい譯は、それへ參つて

鳴見 アヽモシ、どうぞわたしは

城五 ハテ、來いといふに。

ト無理に鳴見の手を引ッ張り來り、よろしく住ふ。

十官 これは〱城五郎さま、かゝる寺院へあでやかなる、花の手土産、お手柄〱。

丹下 日頃心をかけられし、鳴見をこの場へ引入れられし、その樣子は

城五 お聞きなされい。仁木の家來政右衛門、卽ち鳴見が兄といひ、この女も股五郎に、夫婦の契約なしたれば、股五郎を渡さねば、妹鳴見を死罪にせんと、政右衛門が計らひ。なんと、いづれも、この美しい代物を、ムザ〱殺すは惜しいもの。股五郎には內緣ある某しなれど、一通りではゆかぬゆゑ、酒屋の御用を某しが弟と僞はり、人質なりと政右衛門に渡し置き、この鳴見を連れ來り、せめて名殘りの杯を、さしたその上股五郎、異議なく渡す對談にて、うまく〱騙かり、連れ參つた。

鳴見 エヽ、そんならわたしを引入れんばかりに、アノ人質も

城五　みんな嘘だワ。

鳴見　して、股五郎どのは

城五　大事の客人、何しに容易に

鳴見　そんならちよつと、わたしが逢うて

ト奥へ行かうとする。城五郎とめる。この時、上手秋草のあたりへ、小蛇出て這ひ廻る。

アレ、くちなはが

トこれに驚き鳴見、顔を隠して蹲まる。城五郎、其まゝ鳴見を抱へゐる。

丹下　振舞ひ酒の折に幸ひ、生臭物のあのくちなは

主膳　酒の肴に

ト雨人この蛇を取りにかゝる。十官とめて

十官　これは又、滅法界な。蛇は時間虫と申して、俗にいふ日ばかりといふ大毒薬。彼の蛇を湯に煮立て服する時は、忽ち相好變り、癩病となる。又これを直すには、巳の年月日揃ひし血汐を、二十三夜の月魄に映して、注ぎかくれば即座に平癒。稀代な薬もあればあるもの……イヤ、薬といへば城五郎どの、彼のお頼みの一薬を

ト件の雛を出して見せる。

城五　されや、この品が……用ゐる時節は又追つて。いづれも、その品、圍ひの内の、目立たぬ所へ

ト左仲太、右の雛を取り

左仲　心得てござる。

官藏　コレ〳〵、これにおいては何とやら

主膳　粋を通して

丹下　イカサマ、奥で肴の拵へ。

十官　愚老はこれより病家を廻り……城五郎さま、お暇申しまする。

城五　何かの働き、禮は重ねて。

十官　左様なれば城五郎さま、跡でしつぽり

皆々　おしけりなされい。

城五　エヽ、煽てさつしやるな。

ト音樂になり、皆々奥へ、十官は向うへ入る。あと合ひ方になり

鳴見　モシ、城五郎さま、どうぞわたしを股五郎どのに

城五　逢ひたいか……逢ひたうても逢はされぬ。嫉妬らしいが城五郎、惚れたおぬしを、どうしてどうして。

鳴見　心得ぬあなたのお詞、股五郎どのに嫁入らぬ先、お弄りかは知らねども、兎やかう云うて下されし内、殿のお仲立ち、祝言いたせし股五郎どの……アヽ、申さば戀の意趣ある仲、それにあなたは、どうしてマア

城五　股五郎を隠まひしは、某しが兄林左衛門と、一家の仲の又左衛門、その悴ゆゑ股五郎、命にかけて隠まひしと、云ふは全く表向き、惚れた仲なる其方ゆゑ、琥珀の塵でこの所へ、來るは必定その餌に、かゝる工みもその以前、先きへ身共が口入れしたを、大内記がチャ〳〵を入れ、身が前で祝言させた口惜しさ、その遺恨をと思ふうち、あの股五郎、某しの宅へ、わざ〳〵又左衛門と共に尋ね來て、斯様々々と靱負ふを、殺せし一部仔什、死なうとするを留めて置いたは、仁木家にて是非股五郎を渡せとあらば、その時おぬしと取替へる身が心……可愛と思ふ股五郎を、殺さうと生かさうと、其方が心只一つ。よもや否とは云はれめえ。

鳴見　それ程までに私しを、思し召して下さりまするは、お嬉しう存じまする。その以前よりわたしとて、否にはあらぬ心なれど、云ひ遅れしは女の口、心に思ふばつかりで

城五　ヤア。

鳴見　お恥かしう存じまする。

城五　その心ならツイ愛で

ト寄り添ふ。

鳴見　アヽモシ、まだ手の切れぬ股五郎どの、假にも不義の名を取つては、あなたの武士も立ちますまい。

城五　ムウ……然らば術よく股五郎と

鳴見　別れし後は、日頃の思ひ。

城五　どうやら身共は呑みこめぬ。

鳴見　あのマア疑ひ深い、わたしが方から云ひ出すからは

城五　澤井に愛想を筑波山。

鳴見　葉山茂山しげけれど、思ひ入るには、さはらざりけり。

トきつと城五郎に目を附け、右の手箱を持ち、立ちあがる。

城五　して、その手箱は

臚尊石雜煙

鳴見　エ……こりや女子の嗜み、化粧の道具。

城五　ハテサテ堅い。

鳴見　結び目の

城五　解ける時節が

ト兩人上手の圍ひの內へ入り

鳴見　あらうわいなア。

ト唄になり、障子をさす。直ぐに太鼓入り、誂らへの合ひ方になり、向うより股五郎、袴大小、庭下駄を穿き、珠數をつまぐりながら出てくる。この時、空へ雁金舞ふ。股五郎これを見やり、花道へとまり思ひ入れ。

股五「なき渡る、雁の涙や落つるらん、物思ふ宿の萩の上露」……浮世の樣は夢に似て、夢の中なるこの身の上。お家の奸者を絕さんと、思へば親の惡事を知り、まだその上に昵近の、諸武士殘らず惡事に組みし、一方ならぬ家の騷動。心を碎く股五郎。惡の根ざしは又左衞門、その親とても行くへなう、尋ねる爲に內緣の、城五郎どのに立寄りて、思はずかゝる騷動も、皆我れからと思ふゆゑ、塵より輕きこの命、死ねば寶の詮議もならず、生きては浮世の義理立たず、心は二つ、身

は一つ、思へば我れも空にのみ、ないて渡るや雁金と、共に過ぎなん秋の暮れ、身にも哀れを知るぢやなア」

　　トまた合ひ方にて、悄々と舞臺へ來り

さるにても某しが、心を碎く折柄に、日頃に變つて和田靭負、我れに恥辱を與へしゆゑ、斯くまで辛苦の某しが、心を知らぬが一つの恨み、一途の怒りに殺害なし、跡にて得たるこの書置き。この股五郎が所存の臍、固むる爲と命を捨て、我れに討たれん覺悟の文體。これを思へばその砌り、切つて見せたる松の枝、ゆがめる枝を切る時は、根深き企みに幹を枯らし、只一枝の直ぐなる枝、切つてゆがめを撓め直せと、心ありげな詞の端、ゆがめる枝とは昵近の諸武士、大半は味方なれば、これを斷たばお家の斷絶、一大事になる事もやと、直ぐなる靭負を切つて捨て、惡に組みして惡事を見出せと、松に准へし謎の判斷、解き得ざりしは我が淺智、なれども靭負が所存の通り、命は捨てゝも又いつか、追つけ寶の詮議仕出し、義を立てゝ相果てなば、その時未來で申し譯。一度恨みし我が誤まり、お赦しなされて下さりませ。

　　ト思ひ入れあつて、上手の秋草を見て

過ぎゆき給ふ靭負どの、心ばかりの手向け草、爰に幸ひ花野の盛り、せめてはこれを

ト秋草を手折らうとして

草木心なしといへど、手折らば此まゝ枯れもやせん。

トあたりを見て、皆々の殘して置きし鍬を取り

幸ひのこの鍬にて、根をもろともに

ト秋草の根を鍬にて彫る。この時鍬の柄に、頭の無き蛇、クル〳〵とまとひ附き、首は飛んで手水鉢へ入りし心。

鍬に思はずくちなはの、アヽ、よしなき殺生。花を救へば又一つ。所詮罪障消えぬしるしか。せめて死骸は

ト右の鍬にて穴を掘り、これを埋める

佛へ此まゝ

ト行かうとする。この時手水鉢より上手の障子へ、本水を吹く。股五郎これを見て、鍬を突き思ひ入れ、水氣もやうの合ひ方になり

ハテ心得ぬこの場の樣子。かゝる例しはその昔、又左衞門の家に傳はる正宗の刀、枕邊にありし時、小蛇來つて臥床に這ふ。おのれと頭の落ちたりしも、正宗の奇特なれば、和田靱負しきりに

望ハ、又左衛門と應對して、その夜に盗み歸りしより、和田の家に傳はりて、即ち志津摩が家の寶。それゆゑ此たび武將家より、懇望ありしもこれ等の奇瑞、思ひ合するこの場の不思議。

トこの時バツタリと音して、小蛇の首、吹き水にて漏れし障子の內へ飛び込む。

何やら怪しき圍ひの內。

トつかつかと行き、屋體の障子を明ける。內に鳴見、風爐に向ひ、茶を立てゝゐる。兩人顏見合せ

其方は鳴見。

鳴見 ヤア、お前は

ト股五郎思ひ入れあつて行かうとする。鳴見、ツカツカ下りて股五郎の袖を控へ

モシ

トちつと留める。本調子の合ひ方になり

そりや胴慾でござります。殿樣のお仲立ちで、嬉しい祝言したまゝ、一度も枕かはさぬ女夫。生なか緣を結びしも、物思へとて神樣の、お憎しみでもあらうから。幸ひ爰に時ならぬ、女雛男雛の揃うてあれば、結ぶ願ひに天目の、不拙かな手前のこの手向け。

股五 その恨みは理りなれど、知つての通り此たびの、かゝる騷動それゆゑに、其まゝ別れし夫婦の仲

心得違ひに殺めし人へ、心ばかりの手向け花、この秋草が身共の身の上。

ト件の秋草を差出す。

鳴見　こりや曼珠沙華といふ秋草、佛縁近き草花を、身に准へてと仰しやるは、御出家なさるゝお心か。

股五　イヽヤこの名は俗に云ふ、死人花とていまはしき、名にもとづきて潔う、死んで花實を咲かせる心……さるにても其方は、如何してこの所へ。

鳴見　お前の身の上、縁あるわたし、死罪にすると兄さんの、そのお使ひを城五郎どの、人質出してわたしを伴ひ、その代りに股五郎を、渡すと云ひし拵へ事、その人質も似せ物と、跡にて聞きしわたしが驚き。さぞや兄も腹立てゝ

股五　すりや政右衛門どのを騙かつて、其方を爰へ引入れん、城五郎が計らひよな。それも即ち皆我れゆゑ。顏は知らねど小舅どの、誤まりあつては猶更に、この股五郎が科に科、重なる道理、武士道立たず。この上は潔く名乘つて出で、身が存念を一通り、なした上にて寶の詮議、政右衛門どのに相頼み、この身を捨つれば政右衛門どの、恥辱を雪ぐせめての云ひ譯。

ト行きにかゝる。鳴見とめて

鳴見　アヽモシ、覺悟のお前、未練にも、とめる心は無けれども、とても死ぬなら夫婦ぢやもの、わた

しも共に

股五　でも、女を連れて相果てゝは、世の人口も

鳴見　サア、それゆゑ所は變るとも、女雛男雛のこの二品、男雛の方をお前と思ひ、わたしが肌に附けて置けば、二人一緒に死ぬ心。お前もどうぞ

ト雛を取り

股五　成る程、心ばかりの人形を、肌に附くれば未來の結緣。身共もこれを、其方と思うて

兩人　互ひにつまと

ト兩方へ取分ける。薄ドロになり、兩人とも放心したる思ひ入れあつて、直ぐに心づき、一度に顏見合せる。なまめいた合ひ方になり

股五　アヽ、思へば薄き夫婦の緣。

鳴見　此まゝ死ねばお前もわたしも、賽の河原へ

股五　ヤア。

鳴見　ならう事ならこの世にて

股五　イカサマ、二世とはいふものゝ

鳴見　未來でひよつと逢はれずば、これが誠の
股五　この世の名殘り……さりながら、急な所で
鳴見　ハテ、遲かれ早かれ覺悟なら、お前も義理の立つ道理。ちつとは遲うなつたとて、大事ないぢやござんせぬか。
ト股五郎の手を取り、思ひ入れ。
股五　成る程、いはゞ今日限り……今日を限りの命とは。
鳴見　思ひあまりしよみ歌の
股五　ためしもあれば
鳴見　こちの人。
股五　女房鳴見。
鳴見　モシ
ト股五郎の手を取り、圍ひの内へ入り、こなし。眞中の二重へ城五郎出かゝり、この樣子を見て、三段へ片足踏み落す。これにて圍ひの障子を閉す。
城五　ムウ。

ト思ひ入れ。闘ひの前へ黒幕を振り落す。眞中の屋體は、時の太鼓にてぶん廻す。本舞臺、元の仁木の館に戻る。眞中に大内記、以前の形。伴作、源内、團右衛門、左五郎、彌藏居並び、序の舞にて道具納まる。

大内　して、政右衛門は

伴作　ハツ、我れ／＼荒木が介添へに参りしところ、城五郎と應對なし、妹鳴見を引渡し

源内　城五郎が弟を、人質に取りおいて、妹鳴見と股五郎、名残りの杯いたさす内、猶豫いたす政右衛門。

團右　跡にて聞けばその人質、城五郎が弟といふは僞はり。妹を騙かり取られしうつけ者。

大内　すりや、政右衛門も、矢張り彼れらに

團右　棒縛りにならぬばかりでござりまする。

ト早舞ひになり、政右衛門、振り袖形の四方吉を引ッ捕へ出て來り

政右　我が君、これに入らせられましたか。

ト大内記、ツカ／＼と下りて、扇にて政右衛門を打ち

大內　ヤイ、政右衞門の大たわけめ。股五郎を受取る役目、その使者には遣はせど、人質取つて歸れとは、この大內記は申しつけぬワ。團右衞門といひ其方まで、二度の恥辱は當家の恥。云はうやうない、うつけ者めが。

政右　ハツ、お怒りはさる事なれど、城五郎が弟を、人質に取りし上、妹までを遣はせば、よもや義理にも股五郎

作作　コレサ、政右衞門、それがおてまへ、ウツソリと申すものサ。その人質が城五郎の、弟なりといふ事を、慥かな證據を見た上で、人質に取つたのか。

源內　法外なる城五郎、なに義理立てを知るものか。ウカ〳〵のつたる貴殿が誤まり。

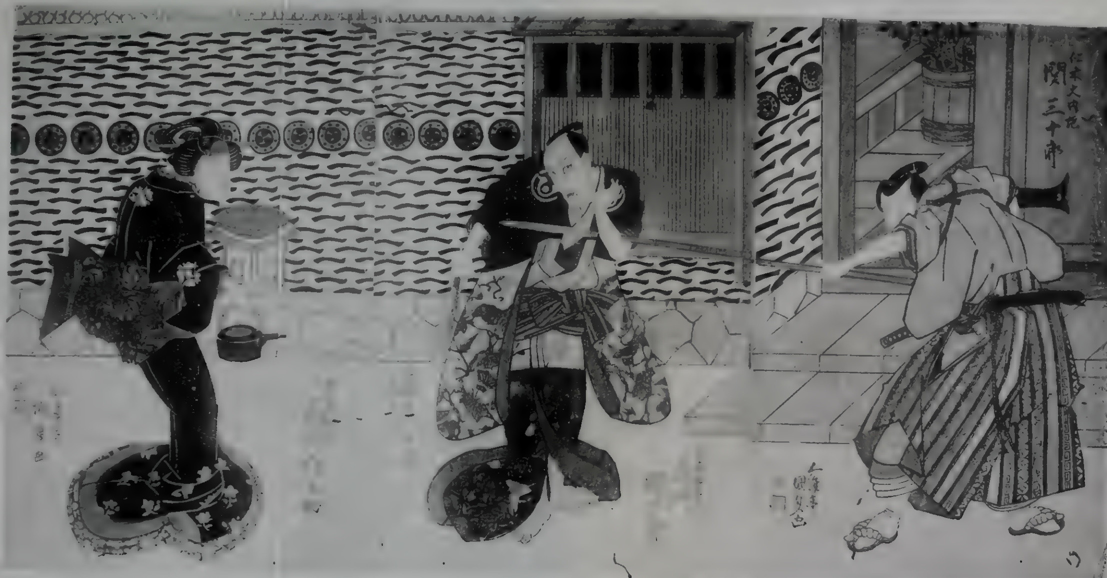
政右　すりや、この者は

皆々　とくと吟味してお見やれ。

政右　イカサマおのれを

ト立ちかゝる。四方吉楳へ出し

四方　アヽ、モシ〳〵、何もかも眞直に申します。あのお寺にゐたお侍ひ樣が、譯は知らねど金をくれまして賴むゆゑ、こんな形で參りましたが、實は私しは侍ひではござりませぬ。酒屋の御用でご



ざりまする。

政右　ヤヽ、何と申す。

四方　何も悪い心はござりませぬ。どうぞ命はお助けなされて下さりませ。

　　ト云ひながら、唐突に向うへ逃げて入る。

政右　うぬ、取逃がして

　　ト行かうとする。

作作　コレ〱、政右衛門どの、酒屋の御用を人質と、悧巧らしく連れてござつたその顔附き、近頃馬鹿げて見えまする。

源內　さては御辺は欺むかれ、妹を奪ひ取られしとは僞り、緣のある股五郎ゆゑ、わざと鳴見をやつたのだな。

政右　全く以て

源內　さなくば直ぐさま寺へ踏んごみ、妹を取返すか、股五郎を連れ歸るか。

作作　どうして〱、臆病神の政右衛門、日頃は武藝自慢の荒木。

源內　圓覺寺の門前では、尻尾を下げてブル〱もの。

左五　團右衛門どのがしくじつた、その跡へ出て、うま〳〵と

彌藏　お手柄顔に人質と、連れて來たのは酒屋の御用。

伴作　最前殿をとめた時、人も無げなる理窟たら〴〵。

團右　畢竟身共は血祭りにて、跡がおてまへ又しくじり、これにて二度だが、アヽ、面が惡い。

皆々　何を云はつしやる。

源內　政右衛門どのは仕合せと、顔も塗られず其まゝに

伴作　首尾よく役目をしくじつたは

皆々　ヨウ、お手柄々々〳〵。

ト口々に笑ふ。政右衛門思ひ入れあつて

政右　妹を騙り取られしは、この政右衛門が大不覺、いづれも方の手前といひ、面目次第もござりませぬ……この上はいかやうとも、御賢慮御成敗、偏へに願ひ奉りまする。

ト大內記、政右衛門の樣子に目を附け、こなしあつて

大內　大功は細瑾を顧ず、天晴れ……荒木が役目の仕落ち、言語道斷、不屆き至極、切腹申しつくるぞ。

政右　エヽ。すりや拙者に切腹を

ト悩りしたる思ひ入れ。

大内　大切なる役目、仕損ぜし政右衛門、諸人へ見せしめ、城左郎への面當て、圓覺寺の門前にて、儀式の通りに切腹いたせ。

伴作　イザ、政右衛門どの、お立ちなされい。切腹と聞いて腰が拔けたか。

源内　この上は網乘り物。我れ〲二人は先へ立越え、門前にて何かの用意。

大内　卽ち兩人檢使の役。團右衛門は同罪なれど、その姿にてもろともに

團右　また縛られた此まゝで

大内　とく〲用意いたせ。

皆々　畏つてござりまする。

政右　すりや、いよ〲拙者は

大内　切腹との成敗は、其方の胸に定めし當てが

政右　アイヤ、疾くより覺悟。

大内　然らば直ぐさま

皆々　政右衛門、お立ちやれ。

政右　ホヽ、ホイ。

ト蟄してゐる。ゴン／＼にて道具廻る。

本舞臺、元の圓覺寺の道具に戻る。上手の黒幕振り落す。圍ひに障子たてあり、合ひ方にて道具納まる。

ト直ぐに獨吟のメリヤスになり、上手の障子を明け、鳴見、股五郎、しどけなき形にて出て、掛け橋を渡り、眞中の屋體に來り、思ひ入れあつて

股五　親兄の許せし仲なれど、今となつては敵同士。

鳴見　敵同士でも夫に附く、女子の道は二世の縁。

股五　枕かはせど今一つ、床杯のその代り

鳴見　圍ひの内の薄茶にて

股五　薄きえにしも、あの世をかけて

鳴見　濃紫の袱紗より

股五　さばけぬ心を

鳴見　たぎらす風爐に

股五　然らば一服。

ト圍ひの内へ行かうとする。

鳴見　アヽモシ、不拙なわたしが手前、お見せ申すも恥かしい。

股五　そんなら身共は、これにて

鳴見　運ぶ手前の

股五　茶の御馳走。

鳴見　アレ

ト顏を隱し、よろしく思ひ入れあつて

何ぢやぞいなア。

トまた獨吟になり、鳴見、圍ひに入り、茶を立てる。股五郎、思ひ入れあつて

股五　誠に、思ふ事の叶はぬが浮世なりと、思ひ合うたる仲なれば、戀の望みは叶へども、直ぐに別るるこれが浮世。丁度茶の湯のその通り、茶器相應に調へば、宇治三の間の水を望む。藝にも雅に

も、慾はあるもの。
鳴見　末の末まで一對に、火箸のやうに並んでゐたなら、嬉しからうと思ふのは、戀の慾でも女子ばかり。殿御の心は茶杓の竹、ゆがみひぞりの憎い事。
殿五　イヤ〳〵、それは女子の身贔負、表面は優しき床飾り、心はいつかあられ釜、男は知らずウカウカと、茶臼の廻る年月を、待ちに待合ふ大きなたわけ。
鳴見　イヽエ女子は一筋に、直ぐな柄杓の心でも、外に水さす浮氣があれば、猶更つもる濃茶の心。たとへ後れて茶筌髮、後家になるとも貞女を立て
殿五　こりや憎らしい當座の花活け、心で受取り瓢のやうに、ぶらり〳〵といつまでも、騙されてゐるわいの。
鳴見　アレまた形もない事を、わたしが胸は茶碗で割つて、ほんにお前に見せたいわいなア。
トまた獨吟になり、此うち茶を立て、袱紗へのせ、股五郎の前に出す。唄一ぱいに切れる。股五郎、茶を一口のみ
殿五　杯がはり、この場で直ぐに、この世の名殘りともろともに
ト鳴見へ返す。鳴見、茶碗を取り

鳴見　そんならこれが

ト愁ひのこなしにて、股五郎の顔をヂツと見てゐる。この時、差し金の蝶飛び來り、鳴見が持ちし茶碗の上にて舞ひ、パツタリと落ちて死ぬ。鳴見、茶碗を取落す。

股五　ハテ心得ぬ蝶の有り樣、何やら樣子の

ト目を附ける。この時、五ツの鐘鳴る。

ありやモウ五ツ。片時も早く政右衛門どのを

ト立たうとして、毒の廻りし思ひ入れにて

ヤ、、心得ぬこの苦しみ。俄に身體發熱して……ヤ、、、、。

ト立上がり、タヂ／＼として、二重の下へ轉び落ち、撞と座す。鳴見、以前の手箱を前に置き、これに頰杖を突き

鳴見　苦しいか。さうであらう、さうであらう。さうなうてはならぬ筈。いま服したる薄茶こそ、兼ねて仕込みし、毒ぢやわいなう。

股五　ヤ、、なんと。

ト笙入りの合ひ方になり、鳴見思ひ入れあつて

鳴見　どうで命を覺悟のこなさん、名乘つて出ては武士の道、兄の命を助ける筋、あつてはこの身の邪魔なゆゑ、毒で殺す仔細といふは、お情厚き城五郎さま、この身を任すも假初めながら、夫に持つた股五郎どの、それゆゑたぎる白湯のうち、砒霜斑猫にも等しき毒、秘藏なさるゝ城五郎さまに、添ひたい心二つには、兄の妻たるお谷どの、その親靱負を殺せしこなた、いはゞわしにも舅の敵、うか〳〵はまる女の手前、首尾よう參つた服加減、口惜しうても無念でも、最早叶はぬ手足の痺れ、みんなその身の因果の報い、なんと身節に、こたへたか。

股五　チエヽ、口惜しい。語らふ女と心を許し、工みの罠にかゝりしか。とても覺悟の身ながらも、お家の大事思ふがゆゑ、惡となり善となり、千辛萬苦の存念も、明かさぬ上に末代まで、不實の名を取り此まゝに、毒で死ぬるか。エヽ、現在夫へ毒を盛る、鬼女に等しき女房鳴見、たとへ五體は痺れても、やはか女に計られやうか。おのれも共に

　　トよろ〳〵立上がり、上段へ踏みかけ、立ちかゝる。この時、奧より城五郎、ツカ〳〵と出て、股五郎が突き廻してポンと當てる。これにて股五郎、「ウン」と床下へ倒れる。

城五　出かした鳴見、心底見えた。

鳴見　すりや、疾くよりも、この樣子を

城五 見聞いたせし上からは、直ぐさま身共が宿の妻、未來永々二世かけて
鳴見 そんなら必ず
城五 變らぬ夫婦。
鳴見 エヽ、嬉しうござんす……と云ひたいが、滅多にさうは
城五 そりや又なぜ。
鳴見 わたしはお前に添いたいと思へばこそ、女子だてらに恐ろしい、夫を殺して心を見せるこの鳴見。男の癖に物事を、隱すお前の心から、變りやすいと思ふゆゑ
城五 ムウ。尤ものその疑ひ。晴らすは、コレ
ト懷中より雌龍の印を出して鳴見へ渡す。
鳴見 この品は
城五 其方が主人仁木家の、寶と呼ばるゝ雌龍の印。
鳴見 すりやアノ、これが
城五 仁木の家を潰さんと、思ふ根ざしは其方ゆゑ。仔細は其方も知つての通り、身が見る前で股五郎に、杯させしその意趣にて、家の寶を奪ひ取る。其方が心を見る上は、迂濶に明かさぬ身が大事

も、皆打明けて其方に

鳴見　して又片しの雄龍の印、今一品の正宗は

城五　その二品は身は知らぬ。

鳴見　それを知らぬと仰しやるが、矢ッ張り心にかけごがある。とても夫を殺めしこの身、思ふお方の

あなたには、添はれぬ身の上、いつその事に

ト城五郎が刀へ手をかけ、自害せんとする。

城五　コリヤ、早まるな。

鳴見　でも物事をお隠しあれば

城五　ムウ。そんならこれも云つて聞かせる。某しこの品を盗まんと、忍び入るその先きに、又ぞろ一人の曲者あり、やらじと奪ひ合ふその時に、取り得しはこの一品、雄龍の印はその夜の曲者、奪ひ取つて行くへ知れず。それより外に正宗の、在所は曾て身は存ぜぬ。

鳴見　それに違ひはござんせぬか、

城五　なに僞はりを云ふものぞ。疑ひ晴らせ、女房鳴見。

鳴見　心の底まで聞く上は

城五　直ぐにこれから身が屋敷へ……併し兄の政右衛門、途中で見咎められても如何、身共はこれより屋敷へ歸り、迎ひの乘り物。その時必ず

鳴見　そんならわたしは、今に跡から

城五　迎ひの駕籠を

鳴見　待つてゐるぞえ。

ト唄になり、城五郎悠々と向うへ入る。鳴見、手早く件の手箱より種ケ島を出し、揚げ幕へ向ひ、ドンと打つ。城五郎、揚げ幕の内にて「ワア」と云ふ。この筒音に驚き、倒れし股五郎起上がる。誂へ異形なる相好に變り、立上がつて思ひ入れ。鳴見、鐵砲を捨て、ツカ〳〵と下りて股五郎の顔を見る。股五郎其まゝ鳴見に切りつける。鳴見、覺悟の心にて一かせ切られ

鳴見　嬉しやお前の相好が

股五　ナニ、某しが

トまた立廻つて鳴見、右の手箱の蓋をさしつける。これに股五郎の顔映りし思ひ入れ。

ヤヽ、我れながら見紛ふ姿、その上五體の惱亂も、一時に平癒なしたるは

鳴見　醫者十官が問はず語り、幸ひ圍ひの湯の中へ、飛びこむ小蛇の頭より、命に障らぬ毒藥を、お前

に服させ相好變へ、愛を落さんわたしが計らひ。

股五　すりや毒藥にて我が相好、變へしは其方が貞節よな。瓦となつて全からんより、玉となつて碎けよとは、武門の教へ……さはさりながら斯くまでに、心を碎く其方が心底、勸めに任せ、この場を落ちて

鳴見　まだその上に城五郎、悪事一々明かせし上、色に事寄せ雌龍の印。今一種は分明ならず。

股五　然らばその品、其方が、殿へ差上げ暫くも、我が身の命日延べの願ひ。我れは其うち一種を、草を分つて詮議なさん……併し深手のその上に

鳴見　たとへ死んでも、わたしの一心、この品は殿樣へ

　トこの時丹下窺ひ寄つて

丹下　その品渡せ。

　トかゝる。鳴見立廻つて、よろしく引敷き

鳴見　今が誠にこの世の別れ。

股五　不便や女房

鳴見　必ずあの世で

股五　半座を分けて

ト丹下、股五郎にかゝる。この立廻りのうち鳴見、片袖を引切り、書置きを書き

鳴見　この書置きと雌龍の印、直ぐに御前へ

トロに咬へて合掌する。股五郎、丹下を投げのけ、思ひ入れあつて刀を振りあげる。この見得にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、圓覺寺門前の道具、上下練り塀、此うち高張りの提灯を立て、眞中に白き絹を張り、白布を敷き、四方樒、爰に伴作、源内、上下に床几にかゝり、上と下とに竹矢來、この外に仕出し大勢見物してゐる。下の方に金助、巳之助を背負ひ、以前の四方吉を引ッ捕へゐる。時の太鼓にて道具納まる。

金助　すりや、主人政右衛門は、この場にて

伴作　敵に妹を騙り取られし大だわけ、諸人へ見せしめ大道中、この門前にて切腹だワ。

源内　即ち我れ〳〵検使の役目。

金助　エヽ、是非もない、智者にも一失、過ち仕落ちはある習ひ、それに無慈悲な切腹の、場所もあら

うに大道にて

伴作　日頃の高慢いまこの時、近頃以て氣の毒千萬。

金助　これといふのも城五郎め……うぬも騙りの同類め。先づ差當る當座の敵。

ト四方吉を捕へる。

四方　アヽモシ、御免なされませ。

ト云ひながら、振り袖を脱ぎ、柿染めの形になり、一散に向うへ逃げて入る。

金助　うぬ、どこまでも

ト手に殘りし振り袖を持ち、已之助を背負ひしまゝ、向うへかゝる。時の太鼓になり、網乘り物、これに團右衞門、矢張り棒縛りの形。軍助、中間にて出て來る。これにて金助、是非なく舞臺へ戾り、

軍助を見て

お身は中間の軍助ではないか。

軍助　金助か。大變だ〳〵。

ト此うち乘り物より政右衞門、水上下の形にて出る。源内、三方に奉書を敷き、腹切り刀を載せ、政右衞門の前へ直す。政右衞門、白布の上へ住ひ、思ひ入れあつて

政右　いづれも、お役目御苦勞千萬。

團右　政右衞門どの、おてまへ切腹めさるゝなら、身共が分も一緒にお賴み申す。その代り、云ひ置く事もござるなら、拙者が直に御內寶へ

政右　この期に及び、妻子親族へ用はござらぬ。イザ、御兩所樣

伴源　急いで切腹。

政右　ハッ。

　　　トこの時、バタ〳〵になり、向うよりお谷、屋敷者の形にて出て來り

たに　ヤア、そんならあなたは御切腹か。

　　　ト政右衞門に取りつく。

政右　最後のこの場に、未練な女め、扣へて居らう。

　　　ト叱る。お谷思ひ入れあつて

たに　未練も卑怯も、覺悟の上なら嘆きはせぬ。思ひがけないこの樣子。父さんは人手にかゝり、弟志津摩は勘當の身。その上あなたはこの切腹。一人殘つて私しは、どうなるものぞ政右衞門どの、叱るばかりが侍ひの道ではあるまい。コレ、申し、わたしも共に

政右　ヤア、たわけ者め。女と共に相果てゝ、政右衛門の武士が立たうと思ふか。夫に別れ、物憂く思はゞ、所を變へて存分に、自殺するとも勝手に致せ。

たに　そんならわたしは、この場では

政右　知れた事を、くど〳〵申すな。

金助　奥樣

たに　金助、こりやマア、どうしたらよからうぞいなア。

ト泣き落す。此うち伴作、お谷に心ある思ひ入れあつて

伴作　イヤナニ御内室、嘆かつしやるは道理でござるが、刀で死ぬるは武士の本望、遲かれ早かれ、いづれ夫には別れにやならぬもの。貞女兩夫に見えずと、申すはズッと昔の事、切腹いたせば、やもめのおてまへ、女やもめに花とやら、直ぐに世話の致し手はいくらもござる。ツイ鼻の先きにも一人ござるで。あまり其やうに、キナ〳〵思はつしやらぬがよい。

たに　ハイ、御深切のお詞、有り難うござりまする。只今夫に別れまする、私しが心、御推量下さりませ……そのお優しいお詞に甘へまして、あなた方へわたしがお願ひ。

伴作　サヽ、何がさて、この場の事。何なりと願はつしやい。この伴作が、聞届けて進ぜませう。

たに　ハイ、どうぞこの場で名殘りの杯、夫婦この世の暇乞ひ、この儀をお許し下さりませうなれば、有り難うござりまする、

源内　イヤ、そりやならぬ。隙どつてお殿樣へ、申し譯なき今日の仕儀。名殘りも別れも、顏さへ見ればそれで濟む……サ、政右衞門、キリ〳〵切腹。

伴作　アヽ、イヤ〳〵、源内どの、さのみお急きなさるな。云はゞ今まで朋輩の政右衞門どの、御内室の願ひを、叶へてやるも武士の情……イヤナニ、お谷どの、其許の願ひ、至極尤も、身共が中食の小筒……コリヤ〳〵、政右衞門どのゝ御家來、その挾み箱の中を

軍助　ハツ。

ト挾み箱の中より小筒と德利を出して

伴作　いかにも〳〵。サア〳〵、然らば暫しこの所で小筒の中は一德利、外に用意もござりまする。

たに　すりや、願ひをお叶へ下さりまするか。

伴作　いかにも。

たに　エヽ、有り難うござりまする、

源内　コレサ、伴作どの、斯様な中で、隙どつては、申し譯が立ちますまい。女さへ見りやアビロ〱と、たしなまつしやい。
伴作　ハテ、何事も身共が胸にござる。
源内　もし私に杯を許して、後日殿よりお咎めあらば
伴作　申し譯には貴殿のお腹
源内　ヤア
伴作　拙者が腹は貸し申さぬ。
源内　それではどうやら
伴作　ハテ、じたばたせずと、マヽ、お扣へなされい。
金助　檢使のお情、この場にて
政右　夫婦この世の別れの杯。
たに　あなたが飲んで
政右　然らばいづれも、御免下されい。
ト杯を取上げる。お谷、酌をする。合ひ方になり、政右衛門一つ干して、お谷へ献す。お谷、杯を受

けて

たに　思ひ出せば七年以前、親の許せし妹脊の仲、國へ參つて嫁入りの、初々しさにこの胸が、落ちつく爲と無理酒の、その嬉しさに引かへて、今日は別れの、この酒を

政右　味に二つはなけれども、身共も初めて祝言の、面伏せなるゆゑにこそ、胸の勢ひ一口と

たに　それから顏を見合せて

政右　互ひに初めは氣がおかれ、挨拶さへもしどろもどろ。

たに　そりやあなたばかりぢやござりませぬ。嬉しいのと、怖いのとで、物さへ云へず跡ずさり

政右　中間、小者、側仕へ、花嫁御の顏を見ようと障子越し

たに　否がるわたしを意地惡う、顏を上げいの、斯うせいのと

政右　そりや誰れが

たに　お前さんが

ト此うち又酒を飲み

政右　左樣な事も云つたかな。

たに　エヽ、知らぬ振りして憎らしい事。それから床の色直し、初めて一言

政右　何と申した。
たに　お前知つてぢやないかいなア。
政右　して〳〵跡は
たに　つい空解けの帯ひもゝ
政右　解けてしつぽり
伴作　嬉しかつたか。
たに　アイ、この人ならばと心の錠。
ト政右衛門へ献す。一口飲み
政右　その祝言は女房が白無垢。
たに　今日は夫が白小袖。
政右　三々九度に引かへて
たに　最後の酒を
ト此せりふの内、杯のやりとり二三度あつて、酒無きゆゑ
伴作　ソリヤ、お銚子のお代りよ。

軍助　アイ〳〵。

ト徳利いまゝ出し

イヤモウ、奥樣も旦那樣も、御酒が始まると跡引き上戶、これには下郞も困り切る。酒の跡引きばかりでなく、平常は堅い大旦那、奥方樣の側仕へを、ちよつと抓んでお子樣が

政右　コリヤ〳〵〳〵、ツカ〳〵と問はず語り。身共が酒の跡引きは、今始まつた事ではない……サアつけ〳〵。

軍助　でも、これは冷でござります。

政右　ムウ。祝儀不祝儀取交ぜて、冷酒もよからうへ

ト引受けて飮む。

金助　モシ、憚りながら、其やうに召上がつては

政右　ハテ、大事ない。これがこの世の飮み納めだ。

たに　そんならもそつと

政右　ついでくりやれ。

たに　アイ〳〵。

ト酌をして
助けてあげうかえ。

作作　エヽヽ畜生め。
ト源内浮かれ出し

源内　我れらもチョッピリお合ひを致さう。

政右　イヤ、これは憚かり。

作作　して、何ぞ肴が

政右　イヤ、御馳走は、御無用々々々々。斯う酒が長じて来ては、先づ當分切腹は、預かりに致さう。

作作　左やう〳〵、腹を切つては、酒が旨くないものでござる。然し、この酒は、身共が
ト此うち團右衛門、伸び上がり〳〵思ひ入れあつて

團右　アヽ、旨さうに飲み居るわい。この團右衛門は、最前から咽喉がグビ〳〵

たに　サア、旦那樣、これからが、酒ぢや〳〵。

政右　イヤ、もう〳〵飲めぬ、免せ〳〵。

團右　飲めぬ酒なら、無理に飲まずとも、身共に少し飲ませてくれぬか。

四立め大詰





たに　そんなら此まゝ、お前がおつもり。

ト杯縛りの手へ徳利を持たせる。

團右　ハア、有り難い／＼、獨りでおれが

トいろ／＼飲まうとして

こりや徳利を持つたばかりで、飲む事がならぬ／＼。

たに　サア、これから跡は、どうするのぢや／＼。

政右　どうといつたら、マア寝るのサ。

余助　エヽ、すりや切腹のこの場所へ

作作　傾城なれば、お片附けといふところ

源内　ちとあちらへも大道中。

軍助　幸ひ爰に駕籠蒲團。

トそこへ置く。

政右　身共は大分

たに　よつてかゝつて

皆々　この場の執持ち

團右　酒の上に、また寝るのか。エ、

ト二人の側へ立ちかゝる。

伴作　邪魔な男だ。

ト團右衞門を門の中へ入れ、扉をさす。

たに　どなたも御免。

ト政右衞門、お谷、駕籠蒲團を上へかけて寝る。皆々思ひ入れ。向うより大内記、袴、羽織にて、近習四人附添ひ、出て來り

大内　政右衞門が胸中心得ずと、忍び來りし大内記。して、この體は

伴作　大腰抜けの政右衞門、現在敵に妹を騙かり取られ、その上に侍ひらしく切腹なぞと、口は立派に叩けども

源内　女房が名残りの別れの酒、酔つて他愛の夫婦とも、命は惜しいものと見えます。

ト大内記思ひ入れあつて、

大内　さほどまでにもあるまじと思ひしに、言語に絶せし荒木が振舞ひ。

伴源　もうこの上は、我れ〳〵が

ト かゝるを、大内記とめて

大内　イヤ、刀を以て成敗するは、誠の人に致す事、畜類に等しき彼れらに、兩人の刀は穢れ。世上の見せしめ、衣服を脫がせ、大小取上げ阿房拂ひ。ソレ、計らへ。

伴源　畏つてござりまする。

ト 兩人寄つて政右衞門の衣裳を脫がせる。金助見かねて

金助　存じよらざる主人の行跡、酒に性根を奪はれし、心柄とは申しながら、見るもいぶせきこの姿。せめてこれなと

ト 以前の四方吉が振り袖を、政右衞門に着せる。

源內　ハテ、よい態だな。政右衞門とも云はるゝ者が、女に等しき大腰拔け。それゆゑ家來が着せたる衣服。振り袖姿が、ハテよく似合うた。ハヽヽヽヽ。

伴作　諸人へ見せしめ、この場にて、百杖打つて……併し途中に用意もなければ

大內　その打つ杖はこの扇、骨の數は十間に、十度打つて百杖の、數を合はするこの場の成敗。

ト 伴作に渡す。伴作、扇を取り

作作　この作作が鐵拳、百杖どころか一度でも、惣身碎ける覺えの手練。大腰拔けの政右衛門、夫婦もろとも骨身にしかと……御意だ〳〵。

ト政右衛門とお谷を扇にてしたゝかに打つ。金助思ひ入れあつて

金助　現在主人を目の前で、打たるゝこの場で家來の身が……手出しもならぬ御前といひ、いかに殿の御意ぢやとて、餘りといへば

作作　なんだ〳〵、妨げなせば連れた餓鬼、從類までもお祟りだぞ。……性根の附かぬ政右衛門、いつその事に

ト要にて政右衛門の額を打つ。これにて疵附く。

巳之　アレ、父樣をあのやうに

ト金助、巳之助の目を袖にて隱し、思ひ入れ。

作作　ハテ、いゝ態だ。ハヽヽヽヽ。

大內　成敗濟めば某しは、最早館へ

源內　君の御歸館、お乘り物。

ト下座にて

皆々　ハアヽ。

ト陸尺、乗り物を擔ぎ、袴羽織の侍ひ附添ひ、中間二人、紋附きの箱提灯を持ち出る　大内記乗り物へ乗り、思ひ入れあつて

大内　誠や、人毎に一つの癖はあるものと、酒に飲まれて心を亂すうつけ者、荒木の小天狗々々と、云はれしその身がとや鳥の、尾羽打枯らせしその姿。ハテ、見すぼらしい……乗り物やれ。

皆々　ハア。

ト行列三重になり、伴作、源内附添ひ、乗り物舁き上げ、この人數殘らず向うへ入る　金助こなしあつて

金助　殿の威光をかさに着て、旦那の額へ疵を附けたあの伴作、もう料簡が……坊様、ござれ。

ト巳之助を背負ひ、勢ひこんで花道まで行く。お谷起上がり

たに　コレ金助、血相かへて、こりやといづこへ

金助　あまり無法なあの伴作、跡追ひかけて主人の欝憤

たに　サ、家來の身として尤もぢやが、伴作は殿の御家人、手出しのならぬ譯ありやこそ、現在夫も手を束ね、ヂッとしてござるぬしの心、それに其方は駈け出して、手足まとひの幼な子連れ、同勢

多きその中へ、恥を晒しに行く心か。

金助　エヽ。

たに　したゝか飲んだわしらより、一するも飲まぬ其方が、こりや、きつう醉つてゐるさうな。

トこれにて金助舞臺へ戻り、思ひ入れあつて

金助　さるにても心得がたき、御主人方の御有樣、これには樣子の

政右　ハテ、健氣にも下樣の、斯くまで心を痛める其方。コリヤ、舅を討ちし股五郎、取返して御主人へ、渡すものなら女房も、志津摩も共に復讐の、望み遂げざる本意なさに、妹に命捨てさせて、現在敵の股五郎、わざと當地を落しやり、役目を仕損じ身の暇、志津摩に敵を討たせん爲、千々に心を碎くはやい。

たに　連れ添ふ女房の緣により、實の妹御鳴見どの、命を捨てゝ寶の詮議、思へは不便なあの子の身の上。

政右　その繰り言は女の愚痴、妹が大功、城五郎が、最期は以前のあの筒音、今ぞ願ひの叶ふ時節。

金助　斯くまで深き御所存とは、知らぬ下郎の淺ましさ、御免なされて下さりませ。

トこの時後へ大内記、槍引つさげ、ツカ〳〵と出て

大内　主を欺むく憎くき荒木、身が槍先きにて、覺悟せよ。

トこれより誂らへの鳴り物になり、いろ／＼立廻つて、ドヾ政右衛門、槍の鹽首をしつかと捕へ、きつとなる。大内記思ひ入れあつて

大内　巖石をも突き貫く、備前光次の槍先きを、掌に受けとめし手練。ムウ

トこの時本釣り鐘コンと鳴る。大内記ガックリと、段々に弱る思ひ入れ。

政右　眞刀眞影丸橋の、槍の御傳授、三個の大事、とくと御承知

ト槍の穂先きを突き放し

あられましたか。

ト大内記幾度も槍をしごき、思ひ入れあつて

大内　會得いたした。

トこの時近習大勢出て、花茣蓙を敷き、褥を設け、大内記住ひ、思ひ入れ。政右衛門、大内記の顏をヂッと見て

政右　眼中どよみて髮逆立ち、呼吸を外れし息づかひ、死相を現はす御身ながらも、手先き亂れぬ丈夫の御手練。恐れながら政右衛門、感じ入りましてござりまする。

大內　流石は荒木、我が形相、世になきものと觀破せしも、武藝の嗜み。何者とも知れず予の乘り物へ打ちし鐵砲、急所は除くれど、筋骨損じてこの苦痛。

ト肌を脱ぐ。

三人　これは。

大內　かゝる痛手も今日まで、堪へに堪へ存命たりしも、一つの望みあるがゆゑ。我れ久しくも家出なし館にあらざるゆゑにこそ、仁木の家來政右衞門、槍術二個の奧儀を極め、不思議の術ある武藝の噂、聞きしのみにて終に一度、立合はざれば某しも、さまでの事と無念の一つ。疾くより槍術傳授の儀、汝に所望いたせども、承引せざるは某しが、藝道未熟のゆゑならん、さはいへいつか試みて、無理に所望と存じの折柄、計らざるこの痛手。望みも果さず此まゝに、落命なすは黃泉の障り。まつた汝はこの程より、暇を願ふは察するところ、その身に深き願ひあらんと、思へどわざと許さゞりしも、全く槍の祕術口傳。然るに今日のこの役目、わざと仕損じ、恥を思はず、暇取らんの計らひと、それゆゑ切腹申しつけ、心を試す槍の成敗。それと名乘らず明かさずして、傳授なしたる稀代の手練、斯く望みは遂げたれど、賴み少なき我が命。未來の土產二つには、悴力壽が成長なさば、右の槍術政右衞門、其方後見いたしなば、ゆるがぬ礎、安堵の思ひ。さるに

ても喜ばしや、荒木は當家の寶なり、望みに任せ身の暇、暫時とらするその間、願ひ成就のその上は、また立歸り仁木の家、補佐してくれよ、政右衛門。

政右　ハア、恐れ多きお詞、武藝の術は以心傳心、たとへ百年の功を積むとも、その器にあらざれば、極め難きが傳授の奥儀、政右衛門が祕術にあらず、授かり給ふこそ君の御器量、武藝の一心……さるにても愚臣が願ひ、お聞届け下されて、長の暇を賜はらんとや。暫時も主人を欺むきし、拙者が罪科お赦しあつて、願ひをお叶へ下さる條、重々厚き御仁政、願望だに成就の上は、この政右衛門が粉骨碎身、若君を補佐し奉らん。恐れながら御心を、勞し給ふな、我が君様。

大内　ムウ、頼もしきその一言。心ばかりの返禮なさん。

ト懐より墨附を出し、渡す政右衛門取つて開き

政右　こりや敵討ち免許の墨附……コリヤ、喜べ女房、下部金助。

谷金　斯くまで厚き御恵み。

政右　有り難く頂戴仕りまする。

大内　弟志津摩は正宗の刀を失ひし、その誤まりとて勘當せしが、首尾よく刀を取返し、兄弟揃うて本望とげよ。

政右　この墨附は女房へ、渡し置くのもこれよりして、別れ〳〵に當所を立退き、國鎌倉と隔たれば、弟ながらも和田志津摩、顏を見知らぬ政右衞門。其方は志津摩と心を合せ、一旦見遁がす股五郎めぐり合ひなば兄弟して

たに　そんならお前と、別れ〳〵に

金助　奧樣には下郎めが、附添ひ居れば憚かりながら、お氣遣ひなく、これより互ひに

大内　暇を取りし政右衞門、門出を祝ふ杯せん。ハテ、何をがな。

トこの時空へ月出る。大内記これを見やる。本調子の合ひ方。

折よく出でし滿月は、時にとつての杯かけ、武藝の術には闇の夜の、鳥も刺すなる手練の奧儀、眼を照らす月の本……月の本とは武藏野の、文字は誇らず武を隱す、心を以て今日より、月本武藏と名を改め、本望とげて末代に、その名を照らせ、心得たか。

政右　ハヽツ、有り難き御示し。聊か愚臣が武藝の高慢、心慢ずる御戒め、心魂にえりつけて、武藏の二字は君の賜物。これより諸國遍歷なし、行くへ知れざる又左衞門、これも正しく荷擔人の、舅の敵その上に、彼れが紲さば御主人の、敵の道も……道は分れど女房お谷、今に本望とげさするは某しが胸中にある。月本武藏が、討たす〳〵。

大内　併し女の甲斐なき小腕、不意に敵に出會ひし時は

　トこの時源内窺ひ出て

源内　うぬ、政右衛門。

　トかゝる。政右衛門、源内を投げて、お谷に渡す。お谷、烈しく立廻つて、源内を押へ

たに　これでは敵が、討たれませうか。

大内　流石荒木が女房お谷。

源内　なにを

　トこの時、門の内より所化一人出て、以前の鳴見が持ちし箱を持ち、大内記の前へ直す。伴作これを窺ひゐる。

所化　内記さまへ、方丈よりの贈り物、御披見下さりませう。

大内　ハテ、心ありげなこの箱

　ト伴作窺ひ寄つて

伴作　その箱を

　トかゝるを、政右衛門これを引廻す。この時、屋根の上へ股五郎、以前の鐵砲を持ち窺ひ出て、伴作

を鐵砲にて打つ。これにて伴作苦しみ、見事にかへる。これと共に舞臺の箱碎けて、鳴見の切り首、印を咬へ、片袖へ血汐にて書置きしたる袖にて包み、現はれる。

大内　ヤヽ、女が首に咬へしは

政右　正しく雌龍のこの御判。

金助　血汐の片袖、慥かに書置。

たに　不便や妹のこの有り樣。

政右　この書き物の樣子では、大概それと

ト政右衞門、片袖を取り、大内記に渡す。大内記、よく〳〵見て

大内　命を捨てゝ片しの印、一種なりとも取返せしは、鳴見が大功、夫を庇ふの貞心貞女。雄龍の印は分明ならねど、一種の寶手に入る上は、一先づ我れは隱居の願ひ。

政右　我れ〳〵夫婦はめでたく門出。

大内　差し古びたれど不動國行、餞別のしるし。

ト差料を政右衞門に渡す。

政右　ハツ、有り難く頂戴仕る。不動の文字は動かず動ぜず。

大內　義理と忠義の仇討に、我れはこの世を暇のしるし。

〽いかにせん、都の春の惜しけれど、馴れし東の花や散るらん。

ト謠ふ。

政右　それは宗盛、熊野御前。

大內　惜しき暇を

たに　命に更へし

政右　妹が亡骸。

大內　鳴見が最期はあの世にて

金助　未來の結緣。

たに　この世の仇。

政右　一世の敵、二世の緣。

大內　三世の別れ。

政右　直ぐさまお暇。

ト三重になり、屋根の上の股五郎、愁ひの思ひ入れにて、持つたる鐵砲を思はず落す。舞臺の四人、

屋根を見上げる。股五郎ちよつと顏を隱す。大内記、下の方の高張りへ手裏劔を打つ。これにて灯消える。これを木の頭。

政右　ハツ。

大内　ハテ、荒い風なア。

ト双方よろしく、キザミにて、ひやうし

幕

五建目

箱根蘆の湯の場

駒ケ嶽生贄の場

役名——澤井股五郎。神主、駒ケ嶽牛之進。庄屋、煙右衛門。雲助、小地獄の番助。同、さいかちの猿藏。鎌倉屋爲助。佐々木巖柳實ハ澤井又左衛門。富岡屋惣六。松坂屋女房、お熊。藝者、筆次。判人、青鷺の太七。和田志津摩。松尾金助。女雲助、信夫。月本武藏實ハ荒木政右衛門。

本舞臺、正面、東西へ引分け、一間づゝの藁葺きの障子屋體、眞中に欄干附き反り橋の廊下を見せ、この後、岩組みの山續き、下の方よき所に栗丸太の門口、爰に松坂屋と書いたる看板かけ、すべて箱

根山中蘆の湯のかゝりよろしく、幕の内より長床几二三脚ならべ、これに爲助、質屋の形、湯上がいの思ひ入れにて、手拭を絞りながら腰をかけ、この側に筆次、江戸藝者の形、下の床几に畑右衛門、庄屋、神主の牛之進、指貫の形、木綿襷をかけ、その側に白鞘を掛けたる誂への繪馬と、心といふ字に願主武藏と記したるを並べ、舞臺先に番助、雲助の形にて、あやまつてゐる。お熊、湯屋の主の姿アにて、これに立ちかゝり、腹立てゝゐる。お芳、下女にて、詫び言してゐる。在郷唄、山颪しにて幕明く。

番助　コレノヽ、伯母御、なんぼわしだといつて、さう無暗に叱りつける事はない。荷持ちこそしてをれ、海道ぢやァ顏の賣れたこの小地獄、お前の爲にやァ子も同然。甥をとらへて其やうに、口ぎたなく云ふ事はごんせぬわな。

くま　エヽ、聞きたくもない、伯母の甥のと、ほんにァタ外聞の惡い、皆さんの手前。この蘆の湯でも松坂屋のお熊が身内に、情ないそんな態で、門端へうせたら、きゝませぬぞ。

番助　きかないといつて、五本の指だ、お前、切つちやァ捨てられまいが。

くま　アレ、あの口だ。うぬは又、おれが不便を加へればこそ、時折り不時の用無心。それにマァ、お芳を騙して小遣ひ錢、おれの居ぬ間に、なぜくすねた。

番助　なにサ、くすねはしねえが、ちつとばかり、甘酒屋の借りを拂はうと思つて、何も他人の內ぢやアなし、伯母御の留守に、ナアお芳

よし　アレ滅相な。わたしが何を

番助　それでもおらァ盜みはしねえ。おぬしに斷はつて借りたのよ。

くま　エヽ、べりノ\と噓を吐かせ。キリノ\うせぬと、叩き出すぞよ。

ト棕梠箒を持つて立ちかゝるを、煙右衞門見かねてとめ

煙右　アヽコレ伯母御、尤もだ。善いも惡いも最前から、聞いてはゐるが今日はコレ、七月の十六日、地獄の釜の蓋も明くと、世間は云ふがこの土地では、權現樣のお祭りで、一年一度の祝ひ日だ。腹も立たうが堪忍して、怪我でもあつては惡い、料簡さつしやいノ\。

牛之　それサ、おふくろ、煙右衞門どのゝ挨拶だ。殊更聞けば祟りらしい、駒ヶ嶽の元權現、人身御供の當人には、必ず白羽の矢の立つ不思議、今日一日は愼しんで、神妙にするがようござる。

爲助　なんだノ\、氣味の惡い。そんなら今日の祭には、人身御供がいりまするか。

煙右　江戶の客には珍らしからう。よい時にござつたお前方、話しの種になされませ。

筆次　どうやらマア、氣味の惡い話しでござんすなア。

煙右　なにサ、それにも年頃があつて、お前方には氣遣ひない。兎角嫌なは十五六の、娘を持つた親なぞは、イヤ、氣の揉めたものでござる。

番助　ほんに、娘で氣を揉むといへば、おいらが帳場の邪魔をする、どこのぐれだか女の雲助。

煙右　エヽ、信夫が事か。おぬしはあれを知らないか。ツイソレ、鼻の先の宮城野にゐる、孫八が娘よ。

くま　さうかは知らぬが、顔に似合はぬ、イケ根性の太い女。わしが所へ、あれが親の孫八が、湯入り客を連れて來て、今日で三まはり、粒三文、諸式の拂ひ請け合つて、面出しもせぬ彼奴ら親子、イケ太い女でござる。

煙右　イヤ、太いにも樣々の、人の噂は外でもない、この近郷を御支配なさる、仁木の殿樣内記さまは御隱居で、今の殿樣春太郎さまからお觸れには、澤井股五郎とやらいふ侍ひが、人を殺して駈落ちした。それにも何か御詮議のある上に、その殿樣の妹御、彌生とやらいふお姫樣を、二合半のぶんぬきが、連れて駈落ち、それゆゑにコレ

　　ト懷から繪姿を二枚出して

一枚は澤井股五郎、一枚は今のお姫樣、探し當てたら御褒美だ。それも山入り庄屋の役、つもる分け口、異議は云はさぬぞや。

ト人相書を見せる。此うち合ひ方になり、下の障子屋體を明け、股五郎、誂らへの形、大小にて、窺ひ居る。お熊思ひ入れあつて

くま　儲け事なら何でもござれ、マア耳寄りなお話しだが、人を殺して立退くほどな股五郎とやら、どうしてマア、見附けたところが手に合ふまい。お姫とやらは女の事、幸ひわしが惣領娘、今では江戸の深川で、仲町とやらの子供屋商賣、女子供のよい手筋に、人相書も手に一つ、富の札でも貰つた氣で、わしが預かつて置きませう。

牛之　こいつは理窟だ。ドレ、そんなら剩り札には福がある、股五郎とやらの人相書、神職のおれが預かつて、神は見通し、探すとしよう。

煙右　いづれ褒美は山分けだ。必ず庄屋へ分け口を、忘れぬやうに頼みます。

ト煙右衛門よろしく、お熊と牛之進に人相書を分けて渡す。

爲助　カウ〳〵、富ケ岡のお方、內證はこの婆さんの娘御か。

筆次　アイ、その縁でわたしも爰へ、湯治ながらの旅拵ぎ。わたしが所の旦那さんも、大山から富士の戻りがけ、押つけ爰へ寄りなさんすと、江戸から狀が來たわいなア。

爲助　成る程、どれも拔け目のない、商賣にやァ精を出す手合ひだ。おれもコレ、尾上町ぢやァ、本所

切つて人に知られた鎌倉屋、質商賣ぢやァ隱れのない爲助さんだが、湯治は附けたり、掘り出し物でもあらうかと、七湯も大方廻つたが、運の無いのか、さて巧いこれぞといふ代物を

牛之 オツトさういふ注文に、切つてはめた、コレお客

ト立つて來て、爲助に囁く。頷づきながら

爲助 そいつは巧い。

ト下の床几にある白鞘に目を附け

然し、さういふ代物なら、折り紙らしい物でも添へて

牛之 それは知らぬが、なんでも正銘。その外にまだ、この繪馬は、武者修行ともいひさうな、小氣味の惡い侍ひか、願ひの叶ふそれまでは、白刃は拔かぬといふ願望。こいつは金にはなるまいかの。

番助 モシ、旦那、わしも雲助だが、この又神主さんのやうに、慾張る人もないものだ。

爲助 それでも伯母御の留守へ來て、小錢をくすねはさつしやるまい。

番助 アヽ、萬歳樂々々々、蛙は口だ。有り樣はわしも羨ましい。儲け口ならどうぞモシ、江戸までお供を致しやせう。

爲助 さうありさうなものよ。相談ながら飲みやせう。わしが奢りだ、座敷へ行つて。今のお方も、お

庄屋さんも、この子に彈かせて聞きやせう。

牛之　そいつは有り難い。

番助　酒と聞いたら動かれない。お庭から廻つて、わしもどうぞ、お合ひの助けでも致しやせう。

くま　コレ／＼お芳、銚子の數を附けて置けよ。

よし　アイ／＼。そんなら皆さん

爲助　きつい細かなお婆アだ。その代り、今日も大方しけであらう。

牛之　ハテマア、構はずと、ござりませ。

トよろしき騷ぎになり、爲助先にこの人數、殘らず上の障子屋體へ入る。番助、下座へ入る。あと合ひ方になり、お熊殘つて、あたりを見廻し、下へ來て、股五郎と顏見合せ

くら　お痛はしや澤井股五郎さま、思ひ出せば今は昔、わたしも元は荒井金兵衞と申した侍ひの女房、その頃あなたがお生れなされ、お乳の細さに乳母奉公。夫に別れてその後は、二人の娘を御恩になり、瀨川と申してあなたとは、乳姉妹の姉娘　お腰元の奉公いたすうち、惡い體裁の何やかやお情ゆゑに只今では、お濱と申して深川に、暮らしまするもお家の御恩。妹娘のお袖めも、同じ家中の靫負さまへ、御奉公の御緣で、政右衞門さまへ御緣組みのお里附き、お谷さまへ御奉公

致しましたも、お前樣の皆御恩。どうした譯やら散り〴〵に、あなたの親御又左衞門さまを

ト云はうとするを、股五郎思ひ入れにて留める。この時、向う揚げ幕にて人音するゆゑ、股五郎思ひ入れあつて、障子をジヤンとしめる。お熊、これに心附き、向うを見ながら、思ひ入れあつて上の障子屋體へ入る。始終合ひ方、山颪しにて、花道より金助、一本差し、旅奴の形にて、葛籠を背負ひ、馬士の形の猿藏が襟髮を取つて、引摺りながら出て來り

金助　イヤ、下郎め、徒歩中間でも武士の家來、お歴々から預かつた、身が往來のこの荷物、なぜ無體に手をかけた。慮外をすると、免さぬぞ。

ト突き放す。

猿藏　これサ、なんでそんなに目に角立つて力むのだ。餘の海道とは違ひやす。五十三驛、怪しい荷物なら只は通さない。待たつしやい。

トまた寄るを突きのけ

金助　又しても此奴、慮外な奴、怪しいとは、なんでこの荷物。慮外を免さぬ奴なれども、エヽコレ、急ぎの道中ゆゑ、見逭がしくれる。とつとゝうせう。

ト云ひ捨てゝ本舞臺へ來る。猿藏附いて來て

猿藏　これサ〳〵、貴樣が見遁がしても、おれは見遁がさぬ心。待たつしやい。爰をどこだと思ふのだ。お關所前だ。女でも拐かして來たか。その葛籠、改めないぢやァ通さない。

ト引戻すを、金助よろしく立廻りあつて

金助　しつこく云ふな、主人の御用。急ぎの道ゆゑ料簡する。妨げすると、ぶッ放すぞ。

猿藏　なんだ、切るか。面白い。その竹光で、サァ切りやァがれ。

ト膝を叩いて突きつける。

金助　エヽ、うぬ、その腮骨、たつた今

ト立ちかゝる。この以前より番助出かゝりゐて、この中へ入り

番助　モシ、待ちなさい〳〵。腹も立たうが旅の事だ。さいかち、何の出入りだやい。

猿藏　なにサ、三枚橋から附けて來た。怪しい荷だから、それでちよつと

金助　武家の荷物へ慮外なす、下郎が糺すが誤まりか。

番助　サア、ようごんす。いゝはいゝが、お前、お觸れは聞かないか。

金助　ヤア。

番助　ヤアだがスウだか聞きなさい。よく酒屋で云ふ事だ。通ひ……ぢやァない、彌生とやら、お大名

の娘を、奴どのが連れて駈落ちしたとのお觸れ。

猿藏　それで怪しいその葛籠。

ト兩方よりかゝるを、金助立廻りよろしく、双方へ取つて投げ、起上がつて又かゝるところを、其まま突き廻し、懐より包み金を出して打ちつける。番助取つて

番助　ヤア、こりやア金を

金助　些少ながら、當座の酒手。

兩人　そんなら、いよ〳〵

ト顔見合せ

金助　遅れた供先、一足もドリヤ、お旦那に追ッつくべい。

トまた山颪し、合ひ方になり、金助、葛籠を背負ひながら、こなしあつて下座へ入る。

猿藏　小地獄、見たか。どうでも怪しい金の蔓。

番助　爰へうせたら懐の鼠、何も騒ぐ事はない。コレ

ト囁き

おらア伯母御に、この事を耳打ちして行かう。

猿藏　そんなら、おいらも一緒に……うまい元手にありついたワ。

ト山颪しにて猿藏、番助、こなしあつて、金を持ち、上の屋體へ入る。矢張り山颪しにて、向うより太七、手甲脚絆、一本差し、旅の形にて大肌脱ぎ、菅笠を持ち、走り出て來り、ウロ〳〵見廻し

太七　跡で聞いたら爰だと云つたが、エヽ、いま〳〵しい、ちつとばかり助けようと思つて、とんだ番狂はせをやらかした。

ト云ひながら本舞臺へ來て

たしか松坂屋……オヽ、爰だ〳〵。モシ、お頼み申しやす〳〵。

よし　アイ〳〵。

ト合ひ方にて、奥よりお芳と筆次出て

筆次　オヽ、太七さん、早かつた。さぞ蒸暑いので、草臥れたでござんせう。

太七　オイ、筆さんか。お前が居りやァ違ひはない。親方はどこにゐやす。

筆次　エ、親方さんは、まだ見えなさらないよ。

太七　ハア、親方はまだか。そんならおれが早かつたわえ……さうだ。コレ、女の荷物は來てゐるか。

筆次　イヽエ、其やうなものは、ナウ、お芳どん

よし　ハイ〳〵、江戸のお客様、お待ち申しては居りますが、まだお便りはござりませぬ。

太七　ヤア、親方も荷物もまだか。イヤ、そいつは大變だ。

ト悧りした思ひ入れにて、菅笠を投げ捨て、引ッ返して一散に花道へ入る。

筆次　エヽ、何ぢやマア、狂人のやうな

よし　ほんにをかしい……さうぢやが、モシ、あの樣子では、もう大方お見えなさるに間もあるまい。お噂のある大事のお客。

筆次　捨てゝ置いたらお熊さんの

よし　そりや又お目玉

筆次　サアお出で。

ト矢張り合ひ方にて、筆次先にお芳、こなしあつて奥へ入る。また山颪しでんつゝになり、花道より旅人二人、この後より信夫、草たばれ、そぼろなる娘の雲助の拵へにて、柳行李、雨掛けへ風呂敷包み二つ三つ、網に入れたる紙合羽などを持ち、旅人に引摺られて出てくる。跡より太七出て來り

太七　待て〳〵。なんだ、この女はおれが雇つた小揚げだが、こりやアうぬらは、どうするのだ。

旅人　駄賃を取つて、やる所までやらねえから

太七　そして、どこまでやるのだ。
旅人　麓の湯の松坂屋まで行くのだ。
太七　なんだ、松坂屋へ行く。そりやァ爰の内が松坂屋よ、
旅一　ほんに爰だァ。そんなら何も云ふ事は無かつた。姐え、堪忍しねえ。
旅二　頭、料簡して下さい。
兩人　とんだ目にあふものだ。
　　ト下座へ入る。
太七　御大層な手合ひだ。……姐え、どこも怪我はしねえか。
信夫　アイ〳〵、有り難うござんす。
　　トこの時、奥より番助、猿藏出て、信夫を見て
兩人　太い女だ。サア、うせろ。
　　ト引ッ立てる。太七とめて、
太七　なんだ、また亂暴者が出た……コレ〳〵、この姐えは、おいらの頼んだ小揚げ、それに何をしようとするのだ。

番助　コレ旅人、こんたは海道の譯を知つてゐるか。
太七　サア、譯といつて
猿藏　エヽ、知らざア其方へ退いてゐやれ。
ト太七を突きやり
サア、太い女め。どうするや見やアがれ。
ト信夫を引ッ立てる
信夫　アヽコレ、あやまつた〳〵。もうコレ、お前方の邪魔はせぬ程に
番助　邪魔をしないもイケ太い。どこの誰れが世話で小揚げをするのだ、
猿藏　女のうぬらに棒先を曲げられちやア
番助　おいら達の腮が干上がるわえ。
信夫　サア、尤もぢや〳〵。今から荷物拵ぎはせぬ程に、今日のところは堪忍して
番助　エヽ、ならないワ。太い女めだ。重ねての見せしめ
猿藏　オヽ、合點だ。
番助　生けちやア置かない。カウ〳〵〳〵

ト兩人して信夫を踏んだり蹴たりする。太七、手を出しかねるこなし。山颪しになり、向うより惣六、旅形、好みの拵へにて出て來り、この樣子を見て、思ひ入れあつて、ツカ〳〵と本舞臺へ來り、兩人を突きのけ、信夫を圍ふ。兩人恟り、顏見合はせ

番助　エヽコレ、何をさつしやるのだ。こなたはどこの馬の骨だ。

猿藏　なんでこの女の肩を持たつしやるのだ。

惣六　ハテ仰山な、肩の裾のと、譯は知らぬが女一人、あまり見る目が笑止さに

番助　譯を知らずば退いてゐやれ。問屋場へそびいて行くこの女。

猿藏　庇ひだてしては、こなさんの爲になるまい。渡さつしやい。

惣六　イヤ、渡すまい。高の知れた女の業に、荷物の步き持ち、よく〳〵の事と思ふゆゑ

太七　さうサ〳〵、伊勢參りにさへ持たせる荷サ。なんの、そんなにむづかしく捻られて見りやア、かかり合ひ。

信夫　イエ〳〵、どうしてお前方の難儀にやアかけぬ。わたしが惡い。

猿藏　ソレ見ろ、さう慾張つたこの女、わしらが腮の食敵だ。

番助　それとも爰へこなさん達、雲助仲間の振舞ひ金

猿藏　出すといつても大金だ。
番助　そんな尻腰はあるまいがな。
太七　コレ〳〵親方、大金だとよ。大概なら、もう打つちやつて置きなさい。
惣六　ハテサテ、人を助ける金、どの位の事だ。訊いて見やれ。
猿藏　必ず膽を潰すまい。おいらが仲間入りは、ナア小地獄
番助　オヽ、廉くとも三貫出しやれ。
太七　ナニ、三貫出せ
惣六　イカサマ、これは大金だ。
　　ト笑ひながら、印籠より二分金を出して太七に渡す。太七、思ひ入れあつて
太七　なんだ、御大層に。おらア又、四五十兩も出るのだと思つた。ソレ、二分金だよ。
貫なれば、
　エヽ、カウと、四百ばかりは釣がくる。
　　ト渡す。番助、不思議さうに取つて、悄りして
番助　さいかち。本の金だ。
猿藏　それぢやァ、いざもこざも無い。

太七　其方に無けりやア、此方に有るワ。

　　ト太七、唐突に息杖にて兩人を叩き倒す。兩人、やう〳〵起上がり

番助　コレ、ヤイ、うぬアなんでおいらを

太七　それが先刻の返報だ。

番助　エヽ、いま〳〵しい。いつぞはうぬも、こんな目に

猿藏　叩かれつけた敵役。

番助　これぢやア築地へ

猿藏　歸られまい。

太七　ハクショ。

　　ト太七くさめをする。これにて番助、猿藏は下手へ逃げて入る。上の障子の内にて

くま　エヽ、うぢ〳〵と、放さつしやい。

志津　イヤ〳〵、無體な

くま　何を〳〵……叩き出すのだ。うしやアがれ。

　　ト障子を明け、お熊、風呂敷包みを抱へながら、一本差しなりの志津摩を引ッ立て、これに牛之進、

最前の短刀を持ち、爲助附いて出てくる。お熊、信夫を見て

宮城野の信夫、この客人は、おぬしの親の孫八が、頼んだ浪人どの。それから後は沙汰もなく、聞けば孫八は上方へとやら。おぬしが所へ人をやれば、けんもほゝろな鈍な挨拶。もつコレ今日で三廻りから上、湯代からかけて食ひ扶持雜用、三兩餘りの差引に、この雜物を取上げるが、なんとそれでも、おれが無理か。

志津　これはしたり御老母、無理とはさら／＼申さねども、包みの中には大事の一卷、手離しならぬ品品ゆゑ

くま　それが附け目だ、なんの又、がらくた道具は望みでない。假初めながら三四兩の抵當に。それが否なら今金を出すか。

信夫　サア、その金はわたしが請合ひ、どうなりとして辨まへまする。

くま　辨まへますも凄まじい。まだその上に牛之進さま、その短刀とやらを、この浪人が

牛之　いかにも、先刻正宗の正銘、目利きの上にて御浪人、いよ／＼求めさつしやるか。

志津　成る程、最前申した通り、人手へ渡さぬその正宗、是非とも拙者、所望いたす。

牛之　然らば金子三十兩

志津　イヤサ、その儀は
爲助　ソレ見たかな。それよりいつそおれが方へ、二十五兩で賣るのが近道。
くま　コレ、しのぶ、辨まへるといつたその金は
信夫　サア、それはナ
牛之　御浪人、短刀の代金は
志津　サア
くま　但し雜物取上げようか。
信夫　サア
牛之　短刀は求められぬか。
志津　サア
四人　サア〳〵〳〵
くま　エヽ、小自烈たい。
牛之　どうとも早く、返事をしやれ。
志信　ハイ。

ト當惑の思ひ入れ。お熊、セヽラ笑ひ

くま へヽヽ、何の態だ。金といつちやァ、雪駄の金も持たない癖に、大枚の金の三十兩、どうして短刀が買はれるものか。それよりは、コレ信夫、われが請合ひの湯代、飯代、雜用かけて五兩足らずを水にやァしない。いつそわれを、三島か小田原の宿場へでも賣つて

ト云ひ〳〵惣六を見て

オヽ、聟どのもいつの間に。此方の騒動で挨拶もせなんだ。併し幸ひだ。コレ、信夫、わりやァいつそ江戸へ行け。

信夫 エヽ。

くま エヽも凄まじい。應と云つても、否と云つても、雜用の抵當におれが賣る。コレ、聟どの、小面の憎いこの女だ。こなた、相談する氣は無いか。

惣六 ハイ。成る程、最前から見れば、氣の毒らしい若いお人の御難儀。それに又、お望みと見える正宗の短刀、お手に入れるも、おぬしが心。勸めはせぬが譬への通り、身を捨てゝこそ浮かむ瀬のなんと奉公する氣は無いか。

ト これにて信夫、思案の思ひ入れあつて

信夫　ほんに左樣でござります。わたしがやうな、何にも知らぬ、山家育ちのお轉婆でも

惣六　抱へてやらうが、旅商ひ。太七や、どうしたものであらう。

太七　さればサネエ。氣の毒らしい樣子を見りやァ、根ざらひまでにも及ぶまい。……ようごんす。わしが呑みこみやせう。その氣になつておやりなせえ。

惣六　判人のおぬしが呑みこめば、案じは無いが、コレ、おぬしが御亭主臭いかゝりは無いか。

信夫　そりやキッと權現樣かけて、嫌らしい男はござんせぬ。

惣六　よし〳〵。そんなら三十兩、外に五兩は何かの諸拂ひ。證文は後で、太七が呑みこみ、いゝさがあつたら、その時の事よ。

ト胴卷の金を信夫に渡す。

信夫　エヽ、そんならわたしやァ、あなたの所へ

惣六　抱へて戾る江戶土產、思ひがけない掘出し物よ。

信夫　思ひもよらぬ願ひの叶ふ、御恩のお金。

牛之　金が出來たら約束の、右から左、ソレ正宗。

ト金を信夫取つて牛之進に渡し、正宗を取つて、お熊が前へ殘りの五兩を出し

信夫　モシ、婆さん、足らぬか知らねど、あなたの雜用。

くま　オヽ、よし〳〵、斯うさへすれば、いつでもお客

ト金を懷へ入れる。

信夫　これでさつぱりあなたにも、さぞ御安堵でござりませう。

ト正宗を渡す。志津摩取つて

志津　嬉しや日頃の願ひの品……とはいへ其方は習はぬ苦界。

信夫　ナニお前さん、こんな山家に暮らさうより、江戸へ行くのは、わたしの勝手。

爲助　此方は不勝手、馬鹿々々しい。つまらぬ話しは、おれ一人だ。

牛之　オツト刀を落すまい。三十兩の勢ひだ。奥で一口飲み直さう。

爲助　何も身祝ひ。サア、行きやせう。

ト矢張り合ひ方にて、牛之進と爲助、奥へ入る。お熊思ひ入れあつて

くま　ほんに噂に聞いたより、聟どのは大きな金持ちだ。わしもこなたに賣りたい品、こりや金にはなるまいかの。

ト以前の給姿を出す。惣六見て

惣六　ナニ、彌生姬の人相書。

志津　ヤ。

ト立ちかゝるを、惣六、顏にてとめ

惣六　イカサマ、どこのおいらんか、美しさうな玉だわえ。

くま　そいつが知れりやァ褒美の金。聟どの、半口乘らつしやい。

惣六　それも耳寄り。こりやァわしが預かつて置きませう。

ト繪姿を取つて懷へ入れる。

太七　サア、モシ親方、江戸にやァ急な用もあり、日がたけますワ。行きやせう。

惣六　そんなら母さん、また江戸から、狀で便りを致しませう。

くま　もう歸るのか。コレ、あのお人、お濱へも達者だと、言傳をして下さい。

太七　心得ました。コレ、姐え、三十兩だ、おぬしも來やれ。

信夫　アイ〳〵、そんならお熊さん……あなたも隨分お達者で

ト志津摩へ辭儀をする。

くま　氣遣ひさつしやるな。拂ひは濟む。もうこれからはお客樣だ。

志津　すりやモウこなたは、これから直ぐに

太七　エヽコレ、水際はどこまでもこれだ。

惣六　母さん、お前もお達者で

くま　お濱へ言傳、忘れまい。サア、お客様、ござりませ。

惣六　小田原からは通し駕籠、不請でも今日は歩いてくりやれ。

信夫　なんの、駕籠にも及ぶ事。身を代なした金の草鞋。

　トほろりとなる。惣六思ひ入れあつて、空を眺め

惣六　アヽ、曇つたわえ……川前で降らにやアよいが

ト唄になり、惣六先に信夫、惣六の菅笠を持ち、太七、兩掛けの荷を擔ぎ、東の歩みへ入る。お熊先に、志津摩は短刀を持ち、奥へ入る。直ぐにバタ／＼になり、下座より金助、以前の葛籠に、白羽の矢の立ちたるを、番助、奪ひ合ひ出て來て、立廻りよろしく、二人一緒に葛籠を押へ

金助　うぬらはこりやア、何をひろぐ。

番助　何にもしない、白羽の矢の立つた葛籠、この内には、神事に備ふる人身御供。

金助　そんなら白羽の立ちしゆゑ

番助　所の法だ。葛籠を渡せ。
金助　聯爾ひろぐと撫切りだぞ。
番助　奴め、渡せ。
　　ト山颪し、賑やかなる鳴り物にて、二人奪ひ合ひの立廻り。奥より牛之進、最前の志津摩が包みと着類の包みを抱へて出るを、お熊追ひ駈け出て
くま　牛之進さん、そりやソレわしが信夫から、預かつてゐるお客人の、包みを持つてどこへ行く。
牛之　ちつと此方に入用だ。わしに貸さつしやい。
くま　太い事を云ひなさる。置いて行かつしやい。
番助　お前は神主さん。白羽の立つたこの葛籠、中の娘は人身御供、手を貸さつしやい。
牛之　合點だ。
くま　イヤ葛籠よりその包みを
　　トこれよりゴツチヤの立廻りになり、奪ひ合ふ内、番助は葛籠をかたげて向うへ走り入る。牛之進は立廻りのうちに包みを落す。よき程に下の屋體より股五郎、頭巾のまゝ出て、向うへ行かうとして、落ちてある件の二包みを取上げ、思ひ入れあつて抱へ、向うへ入る。牛之進金助と立廻つて當て、向う

へ追つて入る。お熊も追つて入る。金助起上がつて行かうとする。この時上の障子屋體を明け、志津摩、湯上がりの思ひ入れにて、手燭を携へ出て、これを見て

志津　これへ參るは金助なるか。

トこれにて金助とまつて振りかへり

金助　ヤ、あなたは志津摩さま。

トつか／＼と立戻り

彌生姫さまの御供いたし、あなたのお行くへ、所々方々と尋ね廻りし其うちに、思はず爰にて御災難。

志津　お家を出でゝ程經し志津摩、大殿樣にも親人にも、御機嫌にお渡りなさるゝか。

金助　さては樣子を御存じなきか。靱負さまには先月はじめ、股五郎が爲にあへない御最期。

志津　ヤ、、なんと。

金助　その上無念は大殿にも、御最期あれどもお家の寶、詮議の間は敵討、叶はぬ嚴命。お家の跡目、お墨附は姉御樣、お谷さまの御所持遊ばされ、あなたのお行くへ尋ねる手筈。お顏は御存じなからうが、姉聟政右衛門さまにもその砌り、別れ／＼に御旅行にて、お心遣ひの二しほ三しほ。

志津　口惜しや澤井股五郎、何意趣あつて親人を。して、彼れが親、又左衛門は

金助　イヤ、これとてもそれよりして、行くへも知れず、どの道親子は同腹中。何は兎もあれ拙者めは姫君様へあなたの吉左右。

志津　片時も早く。

金助　心得ました……まかしよとな。

ト金助よろしく尻からげ、時の鐘にて一散に向うへ入る。志津摩これを見送り

志津　思ひがけなき身の悲しみ。兎にも角にも股五郎

ト向うをキツと見る。この時、下の屋體へ爲助出て窺ふ。志津摩これに心附き、手燭をフツと吹き消す。爲助思ひ入れあつて障子をしめる。この途端に上より黑幕落ちて、道具かはる。

本舞臺、上の方、誂らへの石地藏、丸木にて削りし卒塔婆を引出し、正面よき所に張り物の岩組みよろしく、矢張り山颪し、時の鐘にて道具とまる。

ト向うより番助、以前の葛籠を脊負つて出る。下座より煙右衛門先に百姓大勢、各自に松明を灯し、誂らへの白木の棺を荷ひ出る。

番助　オヽ、こりやァお庄屋樣、どなたも御苦勞だね。毎年變らぬお祭に、權現樣の人身御供。マアマア、棺はこれへ

煙右　オヽサ〳〵、いつもの通り直すがいゝ。

番助　人身御供も、わしが爰へ、チヤンと淩つて來ましたよ。

煙右　そいつは御苦勞。サア、やらかせ〳〵。

百姓　合點だ〳〵。

トわや〳〵寄つて棺を岩組みの彼方へ直す。矢張り時の鐘にて、向うより股五郎、以前の包みを抱へ出て來て、樣子を窺ひ、思ひ入れあつて本舞臺へ來て、片手なぐりに拔き、刀を振り廻す。皆々これに驚き

ヤア、拔いたぞ〳〵。

ト立騷ぐ。煙右衞門逃げ廻りながら、月影にて、ツク〴〵見て

煙右　ヤア、そいつはお尋ね者の股五郎だぞ。ソレ、逃がすな。

番助　股五郎なら褒美の金。

皆々　お代官所へ、そびけ〳〵。

ト鋤鍬にて打つてかゝる。股五郎烈しく切り立てるゆゑ、番助先に煙右衛門百姓殘らず下座へ逃げこ入る。股五郎思ひ入れあつて引ッ返し、花道へ行かうとする。向うに人聲するゆゑ、下座の方へかゝる。また人聲するゆゑ、小隠れして入る。尤もこの間に小袖を着替へ、棺の中へ入りし模様。この時向うより牛之進逃げて出るを、金助追ひかけて出て

金助　逃げても逃がさぬ、姫君を、いづくへ隠した。在所を吐かせ。

ト引ッ捕へる。

牛之　べら坊め、それを知るものか。

ト振り切つて立廻りの内、下座より煙右衛門と以前の百姓出て來て

煙右　ヤレ〳〵、棺もまんぞくで、あるツ〳〵。

皆々　サア〳〵、舁ぎあげろ〳〵。

ト立ちかゝり、上げようとしても重きゆゑ

百姓　ヤア〳〵、小地獄めが、御供を中へ入れたわえ。

煙右　それなら猶だ。サア、やれ〳〵。

トわや〳〵云ひながら棺を舁ぎあげ、煙右衛門附いて下座に入る。此うち始終右の兩人立廻りあつて、

牛之進、後の卒塔婆を抜き、打つてかゝる。金助これをあしらひ、立廻りながら東の花道を廻り、此うち黒幕切つて落す。

本舞臺、眞中に、駒ヶ嶽權現本社と書きし額をかけたる宮、上の方松の大樹、洞の前に注連を張り、下の方に今の棺を直し、東西とも杉の立ち樹、吊り枝ともよろしく、物凄き道具。誂らへの鳴り物、時の鐘にて道具とまる。

ト花道の兩人、よき程に本舞臺へ追ひかけ來り、双方を負ひ、立廻りのうち金助、牛之進の懐より以前の人相書を引出し、よく／＼見て

金助　ヤヽ、こりやコレ澤井股五郎が人相書。

牛之　南無三それを

トかゝるを、金助やらじと口に咬へ、兩人烈しく立廻り、この時牛之進、また懐より最前の金を落す。牛之進直ぐに取つて口に咬へ、兩人相討ちとなり、金助は下の方へ、牛之進は上の方へ、タヂ／＼となつて思ひ入れ。この時「エイ」と杉の洞より掛け聲して、牛之進ポンとかへる。板返しにて牛之進の首、金財布を咬へしまゝ、よき所へ出ろ。誂らへのよろしき鳴り物にて、上の杉の洞より月本武藏（前

幕の政右衛門　装附け、大小、誂らへの武者修業の形にて出て、あたりを見廻し、ヂツと思ひ入れ。これにて金助心附き、牛之進と心得、立ちかゝるを、棺の内より手を出して金助へ切りつける。武藏・身をかはして思ひ入れ。金助・タヂ／＼となるを、返す太刀にて首打ち落す。パッタリ音して、棺の中より股五郎・異形の面體にて、野袴、大小、志津摩の小袖に着替へ、血刀を拭ひながら出る。物凄き夜神樂の鳴り物になり、だんまりの思ひ入れにて、互ひに首を探り合ひ、行きあたつて立廻りよろしく、兩方一度に首へ手をかけ、きつと見得。

武藏　黑白も分かぬ闇の夜に、棺の中より出でたる其方、人を惑はす狐狸妖怪、又は山賊野武士なるか。

股五　さ云ふ御身が怪しげなり。正しく人を害せし樣子。

武藏　これぞ卽ち身が願望、一國に一ヶ所の、首塚を立てる武者修行。

股五　ハヽヽヽヽ、人の命を輕々しく、強弱の差別なく、騙して切るが何の爲、それが武藝の修行にならうか。殊に御邊が切つたる首、黑白も見えねど咬へし品は、慥かに金子、それに目をかけるおてまへこそ、正しく盜人。

武藏　ハテ面白いその詞。すりや御邊にもちとばかり、我れに逆らひ見る心か。

股五　イヽヤ未熟なその手の内、相手に致す身共ぢやござらぬ。

武藏　して又御邊が挾む二刀は、何の爲に差しめさる。

股五　我慢の鋒先よけんが爲。

武藏　その鋒先は某が

ト拔きかける。股五郎身をかはしてこれをとめ

股五　是非にとあらば某が

ト拔き合せ、よろしく立廻つて、きつと留め、武藏思ひ入れあつて

武藏　ハテ心得ぬこの太刀筋、流儀は正しく

股五　ハテ小ざかしきその刃向ひ、一刀流の手並は……斷う

トまた立廻つて

武藏　その奥儀をば學ぶ者こそ

トよろしきキツカケにて、チヨンと月出る。此うち股五郎、懷より傳書の卷き物を落す。武藏手早くこれを拾ふ。股五郎これに心づかず、ソツと頭巾をかぶる。

さてこそ聞きし靱負が傳書。

股五　ヤア。

ト武藏、股五郎の小袖の紋を見て

武藏　小袖は慥かに和田の定紋、流儀の手練、符號を合すは、さては其方こそ、靱負が忰の志津摩ならずや。

股五　イヽヤ身共は

ト股五郎思ひ入れあつて

武藏　願ひある身の隱すは尤も。身共は其方が姉に連れ添ふ、政右衞門ぢやわい。

股五　そんならこなたは

ト云はうとして

イヽヤ存ぜぬ、一所不住の武者修行、五ケ年以來、邊土にさまよふ某なれば、浮世の事さへろくろくに

武藏　でも太刀筋といひ紋どころ、慥かな證據、その上に、この卷き物は、どうして其方が

股五　サ、それは

武藏　顏を見知らぬ某ゆゑ、疑念は理り、さりながら、何の爲に僞り云はうや。

股五　流石は姉聟、我れの手の內察せしからは、包むに由なき事ながら、某も志津摩と明かさぬその仔

細は、この面體ゆゑ

ト頭巾を取る。武藏見て

武藏 ヤヽ、見るもいぶせき癩者の形相。

股五 それゆゑ身共は志津摩と名乘らず、父の仇たる股五郎、つけ覗はんも斯くの通り、世にも稀れなる業病なれば、武士の交はりなり難し。溫泉醫療に手をつくせど、その甲斐も無きこの姿、所詮武運に盡きたる某、のたれ死を致さんより、死恥かゝぬその爲に、深山に分け入つて、相果てまする拙者が所存。それゆゑ包み隱せし某。幸ひなるかな姉聟どの、爰で逢ひしは我が存意、御推察下されて、志津摩はこの世に亡き者と、姉にも此よし告げてたべ。拙者はこれにて

ト腹を切らうとする。武藏とめて

武藏 愚なるその詞、大功は細瑾を顧ず、かゝる願ひのある身を以て、病に犯され自殺なすを、武士の本意と思うて居るか。

股五 でも、病の上に長の浪々、病死なしなば猶更に

武藏 ハテ、病には藥あり、其まゝ打捨て置いてこそ、短命にも及ばんが、金銀に替へ醫療をつくし、父の仇を報はんと、思ふ心に對しても、いかで天の惠みなからんや。この政右衞門が身に替へて

も、本復させて討たせにやならぬ。これより直ちに、身共と一緒に

股五　その御厚志は忝けれど、敵討にこの病にては

武藏　それゆゑ病本復まで、敵の命は預けもの。

ト金助が咬へし人相書を取り

こりやコレ正しく、股五郎が人相書。當分助けて置く事も、一つは妹への追善。

ト右の人相書を破る。

股五　その追善は某が、身を裂かるゝより

武藏　ヤア。

股五　つらき姿を

武藏　其まゝ隱して

ト頭巾を着せる。

股五　どうも拙者は

ト行かうとする。

武藏　ハテサテ一緒に

ト行かうとするを引廻す。この時、チョンと月隱れる。股五郎は逃げようとする。武藏これをとめて、タヂ／＼と宮の前へ來る。この時パッタリと音して戸帳落ちる。兩人兩方へ分れ、窺ふ。中より又左衞門、白髮、白仕立て、異形のなりにて、大鉞をかいこみ、天狗の面を片手に持ち、足駄がけにて出る。よき程にチョンと月出る。これを木の頭。兩人、又左衞門を見やる　又左衞門、面をかぶる。この見得よろしく、ひやうし　幕

第二番目　序幕　深川富岡屋の場

役名――富岡屋惣六實ハ吳服屋重兵衞。同女房、お濱。藝者、お園。同、お信實ハ信夫。同、お民。同、お大。同、お福。髮結ひ、お仙。廻し男、九助。判人、靑鷺の太七。判人女房、おりか。仁木息女、彌生姬。櫻井林左衞門。醫者、奈良林十官。柘榴武助。小地獄番助。宿無し團七、

本舞臺、三間の間、高梁の前通り二階のかゝり、軒に誂らへの切子燈籠を吊し、二階の柱へ短册竹を差出し、段梯子。正面神棚、押入れ、暖簾口。下の方臺所、いつもの門口。上の方障子屋體。爰にお濱・女房の拵へにて、帳場に扣へ、反物を見てゐる。おりか、判人の女房。長七、大丸屋の手代に

て、風呂敷より越後縮を取出し、お民、浴衣、平ぐけ、藝者の形にて、文を見てゐる。二階にはお大お福、浴衣、平ぐけ、部屋着の形にて、七夕の短册を書いてゐる。門口に狀使ひの若い者、立ちかゝりゐる。すべて深川富岡屋、仲町七夕節句の體。佃騷ぎにて幕明く。

だい　コレ、源助どん、西河岸の文を、早く屆けておくれよ。

ふく　わたしが傳馬町の馬さんの文も、返事を聞いておくれよ。

若者　アイ〳〵、聞いて參ります。

ト若い者向うへ入る。矢張り佃

長七　モシ〳〵、お浴衣なら、この縞がよろしうございます。

はま　何だか氣障な縞だの。

長七　左樣でもございませぬ……イヤ、お誂らへのお浴衣を仕立てゝ參りました。

ト文庫に包みし縞の浴衣を出す。

りか　大丸さん、わたしが所へも寄つておくれよ。

たみ　おかみさん、粂本のお客から

ト四つ手に包みし裲襠を見せる。

はま　アヽ、この中話しのあつたのか……コレ、附け金はよいかの。

たみ　アイ、どうぞそれをね。

はま　サア、遣ひな。

ト懸け硯の引出しより一分出してやる。

たみ　アイ〳〵……モシ、大丸さん、この金を粂本のお吉どんに

長七　ハイ、渡せばようござりまするか……左樣ならお暇いたしませう。

ト佃になり、長七、風呂敷を擔ぎ、向うへ入る。奥より太七、出て來り

太七　オヤ、おりかさんか。

りか　太七どんか。今承つたが、子ぢよくのお信さんが、今日初出だとの。

太七　左樣サ、此方の親方が、箱根から連れて來なすつたが、洗ひ方はわしがしやした。あの子はさつと當りだね。

りか　わたしもさう思ふよ。

はま　ほんに、お園は江戸行きか。

たみ　イヽエ、まだ迎ひに船が來ぬとて、寢てゞござります。

はま　さうか、よく寢るの。お前、上がつたら、起して寄越しな。
たみ　アイ〳〵。
りか　さう云つても、あの子は、よく出なさるの。
はま　さうサ。併しあの子は、お醫者の十官さんの娘だから、賴むとの事ゆゑ、よんどころなく抱へたのサ。
りか　左樣かえ……モシ、切つてゐるね。
ト小指を出して見せる。
はま　よく隱してゐるよ。
りか　モシ、今も申したが、お屋敷出の奉公人の事は、ありやア旦那が御覽じたかえ。
太七　あの奉公人は、何か親方が、是非抱へると直々に逢つたは、見所があるけだよ。併し、おりかさん、お前、ちよつと極めて來なさらぬか。
はま　どうかいゝやうにお前、お賴みだよ。
りか　アイ〳〵。ドリヤ、行つて參じませう。
ト佃になり、おりか向うへかゝる。揚げ幕より林左衞門、居續け客の體、浴衣帷子、大小。與五郎、

浴衣の形、船宿にて、船頭一人、火繩箱を提げ、出て來り、花道にて行きあひ

與五　アヽ、おりかさん、お遠々しいね。

りか　與五郎さんか。どこへお出でだ。

與五　富岡の惣六どんに用があつて

りか　慥か洗湯だよ。

與五　さうか……內のへよろしくよ。

りか　お忝け。ちつとお出でなよ。

船頭　サア、旦那、お出でなされませ。

ト佃になり、おりか向うへ入る。三人、門口へ來り

與五　サア、旦那、お入りなされませ。

ト兩人、內へ入る。

はま　オヤ、與五郎さんか、お遠々しいね。あなた、此方へお通りなされませ。

林左　許しやれ……おてまへが富岡屋の內儀か。

はま　左樣でござります……モシ、與五郎さん、あなた樣は

與五　アイ、主さんは、あの藝者衆の、お園さんのお客樣だが、急にあの子の身拔きをしようと仰しやるゆゑ、それでお連れ申したのサ。

はま　それはマア、お世話樣でござります……あなた樣、有り難うござりますが、惣六ことも、洗湯へ參りまして、只今歸りまするでござりませう。一服召上がりませ。

林左　イヤ、構やるな〳〵。この間中より與五郎を賴み、云ひ込ませたが、あの者の身の代、五十兩ならでは相談いたし憎いとの事。その儀も承知いたして居るが、それについては、この內へも參る醫者、奈良林十官、萬事はあの者が承知いたして居るて。

與五　聞きなさる通りサ。何かあの身の代を、爰の抱へのお園さんの身の代と、早く云へば交易にすると云ふやうな筋合ひ。マア、何にしろ、あの子を呼んでくんなさい。

はま　畏まりました……コレ、お園や、ちよつと來や。寢てなら誰れぞ起してくんな。

大福　アイ……コレ、起きなさい。お部屋でお呼びだよ〳〵。

ト搖り起す。うたゝ寢せしお園、浴衣、平ぐけ、寢惚けたる思ひ入れにて

その　なんだな、やかましい、よく寢たものを。

はま　これな、晝寢も大概にしな。お客さんがお出でだよ。爰へちよつと來な。

その　アイ〳〵、只今それへ、參上仕る……由良之助どの、お目覺まされませう。

ト無駄を云ふ。

大福　身仕舞ひでもしてお出で。

ト鏡臺のまはりを見て

その　オヤ、白粉がねえよ……コレ、嘉兵衞どん、下村を一つ持つて來なヨウ。

ト階子を下りて來り、林左衞門を見て

オヤ〳〵、お前さん、お出でかえ。

林左　お園さん、昨晩は更けましたね。

與五　親方にお引合せ申さうと、直にお連れ申したのサ。

はま　あなたへお禮を申してナ

その　モシ、おかみさんえ、身拔けをされるはよけれども、ぬしの國へ行く事は、餘ッぽど中くらゐだ

ね。父さんから、あれ程お斷はりを云ふのに、どうでもわつちが相談かえ。オヤ〳〵、あやまるの。

林左　コレサ、てめえはその氣でも、親仁の方は承知ぢやが、それでも身共の國許へは

その　わたしやァ江戸がいゝねえ。あんま針の療治と、洒落るも醫者の娘だけサ。
與五　惡く洒落るワ。それでもぬしのお國へ行けば、親の爲だよ。
その　爲に沈みしこの藝者、チンチンリン、ヤツトンノ〳〵。
林左　イヤ、呆れたものだ。併し主の歸りまで
はま　お待ちなされて何かの掛合ひ……太七どん、お茶を入れな。
太七　心得ました……コレ、お前、この相談が出來ると、父さんも浮み上がるの。
その　ナニ浮むえ。エヽ、とんだ亡者だ。
ト唄ふ。
與五　とんだ勇みだ。
その　困りものだ。
太七　斯うお出でなされませ。
ト流行り唄になり、太七先にお園、林左衞門、與五郎に船頭附いて奥へ入る。矢張りこの唄のうち、二階よりおさん、小ぢよく、前垂れの形にて下りて來るを見つけ
はま　コレ、おさん、どこへ行くのだ。

さん　髪結ひさんを呼びにお福さんが

はま　お福さんは用事ぢやねえか。

ふく　イヽエ、お節句だから用事を拂ひやす。

はま　エヽ、氣を附けて拂ひなよ。おさん、道草を食ふまいよ。

ト佃になり、向うへかゝる。揚げ幕より、お信（前幕の信夫）田舍染めの單衣、前垂れ、草履下駄、小ぢよくの形、「白石噺」紋太夫の拔き本、その外、義太夫本を持ち、出てくる。跡より十官、さんすいなる醫者、日傘をさし、武助、紺の看板、醫者の供にて藥箱を持ち、九助、廻し男にて、長棹の三味線箱を抱へ、出て來り、おさん摺れ違つて向うへ入る。九助、お信を見て

九助　コレ〳〵、お前、どこへ行くのだ。まだ髪も結はねえのか。

のぶ　アイ、まだお仙さんが來なさんせぬゆゑ

九助　お醫者さんは、わたしらが内へかえ。

十官　左やう〳〵、あの屋敷の奉公人の事で

九助　そりやァ今おりかさんが迎ひに行きやした。

十官　アヽ、それで落ちついた。

武助　モシ〳〵、只今の薬を渡しに、三春屋とやらへ参りまして

十官　コリヤヤイ、爰から使ひに参つて、薬箱は誰れが持つ。

武助　お前が持たつしやりましては

十官　たわけ面め。誠に、人を使ふは苦を使ふぢや。ハヽヽヽ。

ト佃にて、皆々舞臺へ來り、内へ入る。

はま　オヤ、十官さん、御苦勞だね。

十官　さて、暑い事でござるの。

九助　お福さん、出ますよ。

ト梯子の口より二階へ云ふ。

ふく　アイヨ。

ト鼠啼きをして顔にかゝる。

はま　珍らしいの、道理で今年は雷が無いの。

九助　お早くよ。

ト佃になり、三味線箱を置き、向うへ入る。

はま　お信は本を借りに行つたと聞いたが、誰れが使ひに……その本を見せな。

のぶ　アイ。

　　　ト本を二三冊渡す。お濱見て

はま　コレ、お福や、てめえ、義太夫本や洒落本はいゝが、こんな妙な本を借りに小ぢよくを使ひは、今度から御免だよ。コレ、てめえも、重ねて此やうな本の使ひはよしなよ。

のぶ　アイ。

　　　ト氣の毒なる體。お福、ツカ〱と下りて

ふく　コレ、よく云ひつけ口をするの。

　　　ト煙管を振りあげる。皆々とめて

だい　コレ、お前、なんだな、おかみさんが見てお出でなさるはな。さうして、疵でも附けたら、どうせうと思ひなさる。

たみ　ハイ、おかみさん、御免なされませ。

だい　マア、二階へお出でよ。

　　　トお福を引ッ張り、二階へ連れてゆく。

十官　コリヤ〳〵、武助、何をうつかり致して居る。藥箱を置いたら、直ぐに參れといふに、たわけ面めが

武助　もう參つてもようござりまするか。

十官　知れた事ぢやワ。エヽ、おのれは、ごくに立たずぢやな。

武助　サア、それだから、行かうと云へば早いと云はつしやる。待つてゐれば小言を云ふ。誠に年寄りといふものは、どこの年寄りでも、ごくに立たずな。

十官　まだ吐かすか。走つて行つて、駈けて歸れ。

武助　駈けて行つたら、走つて歸らう。エヽ、竹の子醫者の癖に

十官　どうしたと。

武助　左樣まうさう可く。ハヽヽヽ。

ト佃になり、藥箱を置き、武助向うへ引ッ返して歸る。揚げ幕よりお仙、女髮結ひの拵らへ、包みを抱へ、おさん附いて出てくる。跡より九助駈けて出て來り、門口に來て

九助　お福さん、ちつとお待ち……お民さん、出ますよ、お初會でござります。

ト此うちお仙、内へ入る。おさん、奥へ入る。お民、裲襠の形に着替へる。お福、ムツとして

ふく　エヽ、好かねえよ。御器量よしは格別、イヨ板頭さまヽ
せん　おかみさん、今日はおめでたうござります。
はま　お仙さん、今日は節句でもあり、お信が出さうと思ひやす。お前頼むよ。
せん　アイ、畏まりました……お信さん、おめでたうござります。
　　　トお信恥かしきこなし。爰にて二階の簾下りる。
　左樣なら、二階のお方を、撫でつけてから致しませう。
はま　さうしておくれ。して、てまへ、風呂へ入つたか。
のぶ　イエ〳〵、使ひに參つたから、まだ風呂へは
はま　そんなら、ちよつと入つて來な、
のぶ　ハイ、左樣なら入つて參じませう。
せん　後で結つてあげるぞえ……ドリヤ、二階を仕舞うて參りませう。
　　　ト佃になり、お仙二階へ、お信奥へ入る。此うち二階よりお民、褝襠の形に着替へ、下りて來る。九
　　　助、思ひ入れあつて
九助　ほんに、次手にお信さんの札を廻して來よう。

はま　それ〳〵、神棚に上げて置いたよ。
　ト名前を書きし札を大分渡す。
たみ　おかみさん、行つて參りませう。
　ト佃になり、お民九助、向うへかゝる。引違へて揚げ幕より、四つ手駕籠を擔がせおりか附いて出てくる。跡より番助、前幕の小揚げにて、頰かぶりをして見え隠れに附いてくる。駕籠を門口へ下ろし
りか　モシ〳〵、親方へ、彼の奉公人を連れて參つたよ。
はま　それは御苦勞。
十官　おりかどん、早うござつた。
りか　サア、爰へお出で。
　ト垂れを上げる。内より彌生姫、三建目の振り袖の形にて、鷹揚に出て、ズツと内へ入り上の方へ座る。番助見屆けて路地へ入る。家内の者、彌生姫を見て恟りする。太七も奥より出かゝる。
はま　オヤ〳〵、奉公人といふのは、この子かえ。
太七　こいつは時代な代物だな。
十官　なんと、五十兩がものはござらうがな。

はま　それでも、あんまり雲上な奉公人だの。この子は大方、屋敷出であらうの……コレ、お前は今まで、どこの屋敷に勤めてゐたのだ。
彌生　すりや、自らが出生を尋ぬるのかや。
はま　ナニ、自らだえ。お前は梅ケ枝でんぶに勤めてゐたのか。コレ見なさい、この奉公人は、怪しからぬ權高だの。
りか　サア、わたしもさう思ふが、こんな奉公人は、又と尋ねても、二人とはありやすまい。
十官　なんと、かみさん、愚老が口入れは、格別な玉でござらう。……これまでお前に云ひ聞かせた藝者奉公、二人の衆を賴んで必ず
彌生　アノ、藝者とやらの奉公は、館にあつて覺えねど、この末賴むは二人の者、必ずよきに賴むぞよ。
はま　コレ、聞きなさい、大風な、此マア氣前で、深川藝者が
十官　ハテ、勤まるの。かみさん、お前も以前は屋敷出、爰の亭主と死ね死なうと、云ひ交した仲ぢアないか。
太七　それ〳〵、爰の旦那はその時は、まだ店者の吳服屋重兵衞、お濱さんは奥勤め、瀨川といつた椎茸髱、それより今ぢやア夫婦仲。ねえ、お前さん

はま　お前よく知つてゐたの。云ひなさる通り、母さんは澤井のお家へ、お乳をあげた事ゆゑに、股五郎さまとは乳兄弟。妹のお袖は、これも和田家に少さいから、勤めてゐやつた事ゆゑに、荒木の家へ附け渡り、妹が爲には主筋でも、姉のわたしは澤井へ大恩、それぢやによつて股五郎さま、親方のお方は、大事に思うてゐやんすわいなア。

彌生　ヤヽ、そんなら二人は、和田澤井、兩家の恩を受けたる者。名乗り合うたら自らも

ト思ひ入れあつて

今のこの身は恥かしい、尋ねる殿御はあの志津摩

ト云はうとする。

はま　エ。

彌生　サア、云ふに云はれぬこの身のいたづら。この上よしなに頼むぞや。

トほろりとする。皆々顏見合せ、思ひ入れ。佃になり、奥より

その　イヽエ、わつちやァ否だよ〳〵。

ト出て來り

モシ、おかみさんえ、あの奥の侍ひが、わたしが身拔けを五十兩で極めたと云ひなさるが、わた

十官　しやア否だよ。變替へておくれえ。モシ、おかみさん、お頼みだよ

イヤ〳〵、それぢやア濟まねえ。かね〴〵あのお侍ひ様が、このお園を、五十兩なら引かすとの事。即ちその五十兩を、當分金の出來るまで、わしが寄越した奉公人で、交易に致したいが、お内儀、それで娘の身抜きをしては下さるまいか。

ト　お濱思ひ入れあつて

はま　そりやア解つた話しだが、この子の方が不承知では

その　モシ〳〵、お父さん、そんなもつれた事は、わたしやア否だよ。モシ、おかみさん、右から左の金ながら、お定まりの奉公人の取替へこは、なんぼ親でも、わつちやア否だよ〳〵、よしておくれ。

十官　ヤイ〳〵、うぬ、親の爲になる事を、今更否とは

その　親の爲でも、わつちやア否だよ。

十官　まだ我が儘を吐かすか。コレヤイ、この親はな、男の子は二人あつたが、一人は幼ないその時に武家へ養子、殘つた野郎は役に立たず、女のうぬはその我が儘。うぬ、否と吐かすと、そのおとがひを

ト立ちかゝる。お濱とめて

はま　これはしたり、なんぼお前の娘でも、わたしが抱へた奉公人、さう自由にはなるまいによ。

十官　成る程、こりやァ愚老が誤まり。

りか　わたしも口入れの藝者衆、譯をとつくり云ひ聞かせ、得心づくに、ねえお二人さん。

ト思ひ入れ。

はま　この子の得心ゆくまでは、今來た屋敷の奉公人

十官　何分よろしう、娘へ御意見

はま　任せてお置きな。

彌生　して、自らは

はま　サア、斯う來ねえな。

ト唄になり、お濱、彌生姬の手を引き、十官、おりか附いて奥へ入る。お園殘る。合ひ方

さう云つても邪慳な父さん、わたしを貰つたその上に、今のあの子に足をつけ……幾つになつても、慾張り者たの。

ト思ひ入れ。佃になり、向うより武助、藥種袋を二つ三つ持ち、スタ／＼と出て來り

武助　慥か爰らであつた。富岡屋とやらいうた内ぢや。

　卜内を窺ひ見て

モシ、ちつとお頼み申しませう。お前にお醫者の奈良林さまが來てゐられまするなら、ちよつと逢ひたうござります。

その　アイ、來てゐなさんすよ。今呼んで上げよう。ちつとお待ちな。

武助　ハイ〳〵、お頼み申します。お世話でござりまする。

　卜内へ入り、お園を見て

ヤ、てまへは妹のお園ぢやアないか。

　卜合ひ方

その　オヤ、兄さん武助さんかえ。どうしてマア、この江戸へ

武助　てまへも無事で、マア〳〵、めでたい〳〵。

その　オヤ〳〵、兄弟二人斯う逢つたところは、何の事はねえ、七段目の平右衛門に、わつちやアお輕の氣取りサ。押しが強いの。

武助　イヤモウ、われがさういふばさらな生れ。知る通り、おれもお旦那の政右衛門さまに、身持ち惰

弱な武助めと、勘當されてお内へは叶はず、兎やかうする内今度の騒動、爰ぞお詫びの好い蔓と、旦那のお跡、お谷さまのお行くへを、尋ねて廻る關東筋。實の親十官どの丶所に、少しの間の足だまり。其方の事を尋ねたら、屋敷奉公させたと聞いたが、そんなら今では

その　なにサ、この仲町に藝者奉公、多くの人に附合ふも、尋ねるお方に客先で、逢はれる事もあらうかと、それが樂しみ。兄さん、形は地味でも氣前は、これでもしみつたれはしねえよ。

武助　サア、その話しもちよつと聞いたが、して、てまへが尋ねるといふ男は、いづくの誰れで、その家名は

その　それが解る位なら、なに苦勞は無けれども、一度逢うたは金澤で、つい雨舍りのいたづらに、惚れた男は立派な侍ひ、目尻に黑子はありながら、目許清しくキッとした、お方をついと思ひそめ末々女房にならうと思つてゐれど、今にわたしは逢はないのサ。

ト切つたる指を見せる。

武助　それ〳〵、さうしたてまへは浮氣者、惚れた男の名所も聞かず、賴みは目尻の黑子一つ、思へば空な尋ねもの。

その　イエ〳〵、外に此やうな

ト頭に挿したる割り笄を取つて

こりやそのお方のお刀に、差してあつた雄鶏の模樣、この笄を證據ぞと、大事に持つてゐやんすが、してマアお前は、旦那の奥樣、お少さいにも逢はずかえ。

武助　サ、何をどうでも少しでも、かゝつてゐるは親の內、殊に澤井に緣のある、實の親ゆゑ氣が置かれ、御主人方のお在所を、尋ねる事もひし隱し、心の惡い親仁どの、誠に困り果てるわえ。

ト此の時奥にて

林左　これはしたり、身共ばかり置いて、何れへ參つた〳〵。

トこの聲を聞いて

その　エヽ、又うるさい林左さん、あの客人が、わたしの身拔きを

武助　そりやア仕合せ。

その　なにサ、これがあるから、どうして外へ

ト小指を見せて思ひ入れ。

林左　お園は居らぬか〳〵。

ト奥より出て來り、二人を見て

爰に居たか。てまへマア、身共がこれほど深切に、身儘にして引取らうと云うて居るに、何がマア氣に入らいで、其やうに惡しくするぞ。これサ〳〵、返事をしやれ〳〵。

トいろ〳〵焦らしき思ひ入れ　武助この内、下の方に、まじめになつてゐる。

その　サア、その返事はね、どうも申し憎いが、さう御しやるなら申しやせうが、これでもわたしやア亭主がありやす。その男があるゆゑに、お前さんの妾になるのは、どうも亭主へ情がねえね。

林左　よく嘘を申すな。てまへに亭主の無い事は、親仁が身共へ

その　イヽエ、亭主がござりやす。きつとした亭主がござりやす。サア、その證據はね

トいろ〳〵してフウと心づき

ありやす〳〵。その證據は、コレ〳〵、この指だね。

ト見せる。

林左　ナニ指だ。

ト見て

アヽ、てまへ、指を切つてゐるか。

その　左樣サ、心中の爲、わたしが亭主へ、切つて渡してわつちやア疵もの、これが何より慥かな證據

サ。

林左　イヽヤ、亭主持ちでも藝者は賣り物。もう斯う云ひ出す上からは、亭主に逢つて身が貰ふが、して、その亭主は何者だ。

その　サア、その亭主は

　トいろ〳〵あつて、武助を見つけ、こなしあつて

アレ〳〵、あそこにゐるのがわたしの亭主。コレ、お前、亭主だによ。ナ、モシ、女房の手を拔かうといふ、このお方をお前……亭主だよ。

武助　ナニ、わしが亭主だ。アノ、兄のおれが

その　ハテ、兄ぢやアねえわな。亭主だよ〳〵。

　トいろ〳〵して呑みこませる　武助、やう〳〵解りし思ひ入れ。

武助　成る程、亭主だ〳〵。モシ、お侍ひ樣、この女は、わたしが女房でござります。ハイ、わたしが亭主でござりますから、間違つた事は、御無用になされて下さりませ。亭主でござりまするぞ。亭主でござりまするぞ。

林左　然らば亭主にも致さうが、わいら二人が夫婦ぢやといふ、證據が見たいワ。

武助　ハテ、むづかしい事を仰しやりまする。そのお疑ひなら何なりと、證據をお目にかけませう。
林左　面白い。その證據は外でもない、身が見る前でわいら二人、心中いたして見せい。
武助　して、その心中は、どう致しませう。
林左　先づ身共が望まうは、ちよつとした心中は、亭主の方から指を切つて見せやれ。
武助　切りますく。切りかねるものか。指でも首でも心中に、切つて見せますく。

ト爼板に出刃を持つて來り

切りかねるものか。この妹が爲ならば、イヤ、女房に違ひない、慥かな證據の心中は、指を一本切るのが證據。十人並に揃うたる、親指小指

ト出刃にて爼板へ指をあて、パツタリ切つて顏をしかめる。指は切れぬ思ひ入れ。兩人見て

その　ヤ、お前の指は
林左　イヤア、切れぬなく。こりや庖丁がなまくらか。
武助　そこを、ま一度斬う切つて

トばつたり切つて顏をしかめる。兩人よく見て

林左　まだ切れぬワ。よもや庖丁、木竹ではあるまい。それにどうして

武助　コレ妹、そんならおれが生れ性、切つても切れぬは
その　お前は持ち前、噂は聞けど、見たは初めて。
林左　そんならわれは
武助　西行々々。
林左　ナニ、西行とは
武助　ふじみぢやわいの。
林左　イヤ、呆れたものだ。
ト思ひ入れ。奥より十官、何心なく出て來り
十官　モシ〳〵、林左さま〳〵、あなたにお目にかけうと存じ
ト武助を見て
ヤイ〳〵、おのれ、なぜ爰に居をつた。アヽ、そんなら娘が爰にゐる事も
その　知らずに來なさつたのサ。
十官　エヽ、いらざる事をツベコベ〳〵……コレ、武助、なぜ、うぬは爰へ來たよ。
武助　それでもお前が云ひつけさしつた、藥種屋へ……サ、取つて來ましたよ。

ト薬種袋を二つ差つける。十官取つて

十官 コレ〳〵、違つた〳〵。山歸來は山歸來でも、これぢやァない。十音皮といつてやつたに、取替へて來い〳〵。

武助 何だか向うから寄越したから、持つて來ました。

十官 エヽ、まだ口を叩くか。早く取替へてうせぬか〳〵。

ト爰をよく心にて、薬を持たせ武助を引ツ立て、門口へ突出す。

武助 エヽ、そんなにさつしやる事はねえわな。ナウ妹

トこれにて林左衞門思ひ入れ。

その さうサ、ぬしにはわつちが用があるわな。コレ、行きなさんな〳〵。

十官 イヤ〳〵、早くうせろ〳〵。

ト門口へ出てせり立てる。

武助 エヽ、せわしない人だ。行きますわな。いかに親だといつて、親でもなくば

十官 どうしたと。

武助 煮轉ばしにするワ。

ト佃になり、口小言を云ひながら向うへ入る。お園跡見送り

その　エヽ、折角逢つて話しもあるに、何にも云はずに、エヽ、自烈てえよ。

十官　彼奴を置いて堪るものか。……モシ、林左さま、いくら強情を申しても、親の愚老が承知でござれば

林左　何分よろしく仲立ちを頼む。併し今のは、兄でござるか。それぢやァ滅多に

十官　ハテ、お任せなさい〳〵……コレ〳〵、娘、マアおれが云ふ事

ト騙さうとする。この時二階よりお仙、顔を出し

せん　モシ、今のうち撫でつけて上げようよ。

その　お仙さん、もうよしか。

せん　ちよつとお出でよ。

その　ドレ、間がよくば

ト二階へ行きにかゝる。十官とめて

十官　これサ、話しがあるよ。

その　エヽ、髪を結ひやすよ。

ト佃になり、振り切つて二階へ上がる。兩人思ひ入れあつて

十官　イヤ、娘ながらも强情な女だ。

林左　コレ〳〵、今の男め、身共は他人と存じたが、ありやア貴公の

十官　お恥かしいが、忰でござります。林左さま、して、澤井親子の衆は、あなたの推擧で

林左　股五郎が行くへは、身共存ぜぬが、親又左衞門こと、足利家へ推擧いたし、變名いたして佐々木巖柳。して、股五郎の噂がござるか。實は貴公の忰と申すは、ありや政右衞門が家來でござるが、大事ござらぬか。イヤ、危ないもの、こなたの忰だ。

十官　イヤ〳〵、お氣遣ひなされまするな。忰ながらも愚鈍者、決して役には立たぬ奴、殊に股五郎の行くへは知らねど、愚老が子供三人の、其うち一人は愚老が女房、妊娠の砌り平産なして、男なら身が忰とあるゆゑ、藁の上から澤井家へ、養子にやつた股五郎、その股五郎に科を塗りつけ、隱れ忍ぶ卑怯な又左衞門、文通は致し遣はしたが、今以て返事はござらぬ。どうして〳〵、面向けはなりますまい。

林左　サヽ、その儀でござる。又左衞門より其許へ、身共方まで手紙を以て、貴公へ云ひ譯、卽ちこれに

ト懷より手紙を出し、十官に渡す。十官、開き見て、思ひ入れあつて

十官 成る程、この文言では、靱負を悴に殺させて、殿大内記を鐵砲にて打とめ、いま巖柳と變名して足利家へありつき、その上にて股五郎が在所を尋ね、出世させんといふ文言。それまでの割符として、奪ひ取つたる雄龍の印、渡し置くとのこの手紙……斯う致せば、まんざらでもござらぬ。

林左 サヽ、それゆゑ身共へ内々にて、送り越したる雄龍の印、大内記が家相續の、その節無くて叶はぬ品。

ト懷中より袱紗包みの印を出し

併し血汐の穢れあれば、不淨を禁ずるその一品、心を附けて、合點か。

ト件の印を十官へ渡す。

十官 然らば身共は、神奈川宿に知るべござれば、これへ轉宅いたすでござらう。殊にこの家の夫婦は和田と澤井にゆかりの者。併し女房は、政右衛門には遺恨ある、荒井金兵衛が娘でござれば、騙して此方の幕の内。

林左 工風の程が、見たい／＼。

ト兩人思ひ入れ。佃になり、向うより中間眼助案内して、土手平、若黨なり、密書を懷中して、スタ

スタと出て來り、門口へ來りて

眼助　お旦那林左衞門さま、眼助でござります。巖柳さまより過急のお使ひ。

林左　ナニ巖柳どのより……して、その使ひは、

土手　即ち私し。主人巖柳申し越せしは、足利家へありつき、首尾よく調ひ、これと申すも櫻井氏のお執りなし、即ち御狀に詳しき事はと、申し附けましてござります。

ト懷中より狀を出し、林左衞門へ渡す。直ぐさま開き見る。この時、路地の內より番助、門口へ來り窺ふ。

林左　「密使を以て申し遣はし候ふ、かねて其許の執りなしを以て、我れらこと足利家へお見出しにあづかりの段、冥加至極の仕合せ、即ち家名も澤井氏にて、仕官仕らんと心がけ候へども、先達て靭負を害させ、その上に大內記を、飛び道具にて打とめ候ふ上は、身の禍ひと存じ、佐々木巖柳と變名いたし、お目見得仕り度く候ふ、それに就いて先達て、送り遣はし候ふ雄龍の印、股五郎が在所を尋ね、內々お渡し置き下さるべく候ふ、この段奈良林氏へも、くれ〴〵お傳へ下さるべく候ふ、以上、月日、櫻井氏へ、巖柳」……聞きめされたか、斯樣な狀が參つてござる。

十官　然らばその狀を添へて、雄龍の印、股五郎が在所を尋ね、愚老が手渡し致すでござらう。

ト二品を懷中せんとする。番助この時、ズッと入り、二品を引つたくり

番助　この品は預かりませうワ。

十官　イヤア、てめえは箱根の

番助　モシ〳〵、お前は恐ろしい太い人だ。いつぞや箱根で拐はかした、屋敷の娘の世話をして、賣つてやらうといふゆゑに、渡してやつたあの娘、身の代とも五十兩に賣つて置き、一分もくれぬ横道者。持出したとてこの譯は、わつちも首にかゝはる一件、五十兩の金のうち、しつかり取らねば其うちは、こりやア遣らない〳〵。

ト大聲を立てゝ云ふ。このせりふ半分も行きし時分、向うより武助歸り來り、何事ならんと門口にて立ち聞く。

十官　サア〳〵、尤もだ〳〵。娘は取つたが、金はまだ受取らぬワ。

番助　イヤ、そんな事ぢやア待たれぬ。聞けば、わしが渡した娘の金で、貴樣の娘の身拔けをするげな。それでは待たれぬ。いま寄越さつしやい。さもなければ、こりやア此方へ、質に取る〳〵。

十官　これサ〳〵、その代物は、貴樣の手にあつても、何の役にも立たぬものだワ。

番助　して、こりやア何の役に立つものだ。

十官　サア、そりやアそれ、大事な事だ、必ず他言さつしやるな。その品は、仁木大内記の家に傳はる雄龍の印といふ物。又その書き物は、澤井又左衞門といふ人の所から、大事の手紙。其方にあつても錢にもならぬ。その品を取上げて置くよりは、金の來るまで、待つてくりやれ〳〵。

トこの事を武助門口にて聞き、さてはと思ひ入れ。

番助　イヤ〳〵、役に立つても立たいでも、雄龍の印とやらも、この手紙も預かるから、金の來るまでさう思つて居さつしやい。

ト引ッたくつて行くを、皆々捨ぜりふにて留める。番助、得心せず、無體に淩つて門口へ出る。武助、件の二品を奪ひ取る。番助うろたへ、雄龍の印を取つて向うへ駈け出す。武助、手紙を持つて追つかけゆく。眼助、土手平、門口へ駈け出し、武助に縋るを、振り切り〳〵、番助が跡を追うて、武助手紙を持ち、一散に入る。兩人起上がり

眼助　その二人は、泥坊だ〳〵。

ト跡を追つて一散に向うへ入る。林左衞門もうろたへ、向うへ追つて入る。十官ウロ〳〵して

十官　サア〳〵、彼奴を遣つては、大變だ〳〵。

ト佃になり、向うより團七、印しの附いたる絆纏を着て、五分月代、錢貫ひの手拭をかぶり、出て來

り、花道より向うを窺ひ

ト門口より覗き見て、ズッと入り

團七　あの內が富岡屋だな。宿六が居ればいゝが。モシ、今日はおめでたうござりやす。ハイ、苦しがりでござりやす。モシ、おかみさん、ちつとばかりお賴み申しやす。今日は一人參りやした。

トこの聲に驚いて、十官奧へ入る。引違へて奧よりお濱出て來り

はま　手がふさがつてゐるよ……アヽ、この人は又來たか。今日は出來ねえよ。

團七　モシ〱、さう仰しやらずと　お賴み申しやす。一杯飲ましておくんなせえ。

はま　エヽ、出ねえといふに、ひつこい、通んな〱。

トこれを聞き團七、ズッと通り、蚊やり火鉢を引寄せ、莨を吸ひつける。お濱見て

この人はなんだ。人の內へ斷はりなしに、なぜ入つたのだ。

團七　それでもお前、通れ〱と云はしつたから通つたのサ。それが惡いかえ。モシ、この位の見世を張つて、一文や二文の錢が無くば、藝者屋の商賣をしねえがいゝ。この土地では、御亭主も、かみさんも、通りがいゝと聞いたが、おへねえ見損ないだ。苦しがりのおいらに劣つた手合ひだ。

エヽ、あたじけねえ、なんのこつた。

ト通りを云ふ。お濱これを聞いて

はま　エヽ、こんたは何か、錢を遣らねえから、惡態交りに通りを云ふのか。こんな衆に通りを食ふやうな女ぢやアないよ。なんだ、薄穢ない。通れと云つたら、サア、通らつしやいな〳〵。

團七　何もむづかしい事はねえ。通れと云ふから通つたのだ。苦しがりが錢貰ひに來て、くれざアいゝわえといつて、ハイ左樣ならと通るやうな野郎ぢやアねえ。おかみさん……モシ、かみさん、苦しがりを、當分居候ふに置いてくんねえ。ちつとお見世でごろつきやせう。

ト横になる。お濱さし寄つて

はま　なんだ、イケふざけた。居候ふも氣が強い。出てゆかねえか。

團七　斯う寢轉んぢやア、雷の鳴るまで寢て行くわえ。エヽ、素的な蚊だ。

はま　エヽ、出て行かねえか。

團七　いやだ。

ト云ふをお濱、團七の袢纏の袖を引ツ張る。團七捨ぜりふにて動かぬこと。この時奥より與五郎出かかり、これを見て中へ入り、捨ぜりふにて團七を門口へ取つて突きやる。この爭ひの内に袢纏の袖ち

ト此様子。團七起上がつて

痛いぞ／＼。投げやアがつたな。骨が痛いぞ、なぜ投げやアがつた。

ト與五郎を見て

アヽ、こなさん爰の亭主か。イヤサ、仲人に入つたのか。おれも山名さまの屋敷ぢやア、人の知つた宿無し團七だ。この土地へ來て締められたといつちやア立たねえワ。サア、締めるなら、締めろ／＼。

トバタ／＼する。

與五 やかましいわえ。おらア爰の内の亭主ぢやアねえが、女ばかりの商賣と見かけて、うぬア強請りにうせたのか。爰の内にやア構はぬ。相手はおれだワ。辰巳屋の與五郎さまだワ。

團七 コレ、見イ、むづかしい事はねえ。おれが爰の内の居候ふといふは外でもねえ、コレ、これたからよ……おれが頭から渡つた屋敷の紋附きの、絆纏が破れたからの事よ。それで歸らぬと云ふのだ。サア、元の通りにしてくんなせえ。

ト破れた所を見て嫌がらせを云ふ。

與五 アヽ、そんなら絆纏が破れたからのゴタツキか。それも大方其方で破つて、それを仕事にごたつ

くのか。行かれずば、おれが引摺つて行かうか。

ト立ちかゝる。團七、門口へ逃げて出る。この時二階よりお仙出て、これを留め

せん　マア〳〵、ようござんすわいな。

與五　それでも癖になるわな。胸の惡い野郎だ。

はま　打つちやつて置きな。絆纏でも、破つて歸しちやア跡が惡い。爰へ呼びな。遣るものがある。

せん　アイ〳〵。モシ、あの人、ちよつと來な。

團七　わしかえ。

ト内へ入る。お濱、大丸が持つて來りし、四ツ手に包みし浴衣を出し

はま　コレ、あの人、貴樣達の物を破つたといつちやア、此方が濟まねえ。袖のちぎれた看板の代り、この浴衣を着て行かッし。

ト投げてやる。團七取つて

團七　アヽ、そんなら看板が破れた代りに、これを着て行けといふのか。コレ、こんなしみッたれな絆纏でも、屋敷の紋附き。これを着ては歸れねえワ。

與五　ハテ、そんな事を云はずとも、サヽ、早く着て行けよ。

團七　否だ／＼。
與五　否だ。否ならいゝワ。捨てゝは置かねえ。おれが連れて行かうワ／＼。
　　ト立ちかゝる。團七、手早く浴衣を取つて
團七　ハテ、いゝわな／＼。そんなに世話をしてくれるもの、この浴衣を貰つて行かうか。モシ、かみさん、着て行つてもいゝかえ。
はま　ハテ、悪い物を遣るものぢやァねえ。着て行きねえ。
團七　さう云ひなさる事なら、折角のお志しだ、着て行きやせう。コレ、親方、大きにお世話でござりやす。
與五　それでおれも、口をきいた規模がある。早く着ろ／＼。
團七　おかみさん、着て参りやすよ……併し、帯が無えわえ。
はま　この平ぐけでも締めて行きやな。
　　ト寝間着の帯を投げてやる。團七取つて
團七　いふ目が出るワ。イヤ又、此方の旦那も通り者だ。おかみさんも解つたお方だ。
　　ト俄追従を云ふ。佃になり、向より九助出て来り、ズット入つて

九助　モシ〳〵、おかみさん、今日お信さんを出しなさる事を聞いて、粂本でお屋敷のお客が、呼びたいと仰しやりますが、どう致しませう。

はま　そんなら早く支度をしてやるがいゝ……サア、お信や、早く支度をしなよ。

ト二階へ向つて云ひ、佃になり、お濱奧へ入る。

九助　モシ〳〵、親方、いま山本で見世の衆が、お前を尋ねてゐましたが、ちよつとお出でなされまし。

與五　アヽ、その筈だ。疾うに行くところを、今の一件で手間とつた。九助どん、惣六さんが目を覺ましたら、よく云つてくんな。

九助　アイ、もうお歸りなされますか。

せん　左樣なら、わたしも明日參りませう。

九助　これからあの子をお前引受けて、結つてやつてくんなせえ。

ト此うち園七、浴衣を着て

園七　親方、大きにおやかましうござりやした。

與五　おれが内へも、ちつと來さつし。

團七　アヽ、これに懲りずと參りやせう。
與五　誠に、とんだ事で浴衣に平ぐけ
團七　こんなごたつきは毎日あればいゝ。
三人　エヽ、押しの強い。
　　ト唄になり、與五郎とお仙は捨ぜりふにて向うへ入る。暮れ六ツの鐘。團七も捨ぜりふにて門口へ出る。
九助　サア〳〵、お信さん、お早く〳〵。モシ、旦那、お信さんが初出でござります。
　　ト奥へ向つて云ふ。合ひ方。奥より惣六、目の覺めしこなしにて出て來る。二階よりお信、藝者の形に着替へ、下りて來る。
惣六　アヽ、何か、お信に口がかゝつたのか。
九助　桒本から、屋敷のお客でござります。
のぶ　ハイ、旦那樣、行つて參りませう。
惣六　見さッし。小ぢよくでゐた時とは、斯う又變るものか。悄りするほど違ふの。
九助　左樣サ……サア、參りやせう。

ト下駄を直し、お信九助行かうとする。この時、門口の團七、お信を見て思ひ入れ。お信も見附けて

のぶ　ヤ、お前は

團七　わりやアお信ぢやアねえか。

ト云ふに、お信赤面して　ツカ〳〵と向うへ行きにかゝる。

待て〳〵〳〵」われにやア用があつてナ、居所を探してゐたに、今日といふ今日爰で逢つたも、成田山の御利生だも知れねえ。やる事はならないぞ。コレ、あの人、内へ連れて入らつしやい。

九助　アイ〳〵、ちつとの内なら

團七　エヽ、入れ

トお信を内へ突きこみ、思ひ入れあつて

ハイ、御免なされまし。また参りました。

ト惣六見て

惣六　アヽ、あの人は、なんだ。

團七　ハイ、いま参じました苦しがりでござりまする。

トこなしあつて

モシ、旦那、こりやアお初にお目にかゝりやしたが、モシ、この女は、どうしてお前さんの所へ參りやした。イヤサ、誰れが爰へ寄越しやした。この女には、ちつと出入りがござりやす。

トきつと云ふ。お信、下の方に氣の毒さうに俯向いてゐる。兩人思ひ入れあつて

惣六　この男は、味な事を云ふが、なんで貴樣はこの女に

團七　ハイ、この女は、わしが女房でござりやす。わしが旅稼ぎに出た留守の内、親子ながら行くへなう、歸つて見たら店を明けて、諸道具は勿論、なけなしの物をみんな賣つてしまひやした。道行を云ふと長いお話しだが、わしが此ざまになつたのも、この女から起つた話しサ……コレ、嘘はあるめえ。苦しがりの中で、われに入りあげたは、甘口な事ぢやアねえワ。いくら探しても知れぬが道理、爰の内に居たか。てめえ、味な所に居るな。これサ、物を云へ。誰れが手筋で、泥水を飲みに來た……モシ、旦那、この女は、親判で抱へなすつたか。但しは誘拐しを引込んで、藝者に使ひなさるのか。とつけもねえ、とんだ手合ひだ。こいつア一番、仕事が出來たわえ。

ト思ひ入れ。

惣六　コレ、こなさんは、どこの人か知らねえが、斯ういふ商賣をするからは、けちな女の奉公人でも

請け人、又は口入れ判人、洗ひに洗つて抱へるのよ。

園七　その判人が此方の相手だ。そいつァ大方、猿島惣太といふであらう。丈の知れぬ人買ひだワ。誘拐しだワ。

九助　モシ〳〵、あんな事を云ひます。

ト腹立てるを

惣六　ハテ、打つちやつて置け。明いた口ならきくがいゝ。亭主のおれが、箱根で抱へた奉公人。コレてまへ、奥に判人の太七が居るから、ちよつと呼んで來てくれろ。

九助　アイ〳〵。併し親方へ。この始末ぢやァ、この子を連れて行くには間もあらうし、ちよつと茶屋へ斷はりを云つて參りませう。

ト立たうとする。園七聞いて

園七　ナニ、茶屋へ斷はりを云ふ。コレ、人の女房を茶屋小屋へ出して、賣り物にやつても大事ねえか。コレ、爰の内は誘拐しの仲間か。

九助　なんだ誘拐しだ。コレ、誘拐しとは誰れの事だ。

園七　うぬらが事だ。

九助　どうしたと。

ト立ちかゝる。團七、持つたる煙管にて頭を打つ。九助に疵附きしゆゑ

ヤ、うぬは頭をぶち割りやアがつたな。うぬ

ト立ちかゝる。奥より太七出て來て、これを押へる。九助、手拭にて頭を結へる。

太七　モシ〳〵、始末は奥で聞いて參りやしたが、モシ、こなさんマア、お信さんの御亭主かえ。

團七　左樣サ、團七といふ者でござりやす。こなさんが口入れ人か。

太七　さうサ、青鷺の太七といふ判人でござりやすが、こりやアお初にお目にかゝりやした。この子の事は箱根で、親方が頼まれさしつて、親判は小田原の寺町、洗ひに洗つて抱へた奉公人、それをこなたが

團七　それ見たか。さう物が解らねえワ。コレ、この女はナ、おれが女房だワ。亭主の留守に賣りに出したを、買はうがどうせうが、こなた衆は勿論、爰の內は係り合ひだ。事の濟むまで玉はおれが預かるが、家主は、どこだ〳〵。

太七　これサ〳〵、さう物を表立てゝは、わしが爰の內へ

團七　立たうが立つまいが、それをおれが知るものか。誰れだと思ふ、團七だよ。このしらちの附くま

では、貧乏ゆるぎもするものか。ヤイ、嗅ア、われも亭主を突出すからは、此奴等と馴合ひだな。家主へ屆けて、預かりを取つた上、五分でも爰を動くものかえ。

ト思ひ入れ。

惣六　コレ〳〵、團七どんとやら、さう聞いては、こなさんのが皆尤もだが、わしも抱へた奉公人、預かりを出したといつて濟むものかえ。

團七　そんなら其うちこの女は、わしが方へ連れて行くよ。

太七　これサ、それぢやアわしが、内へ對して

團七　出來ざア、なぜこんな始末をするのだ。

太七　それでも元方が

團七　洗ひに出たのはこなたであらう。それでも貴樣は判人か。エヽ、おへねえぼくねんじんだ。……サア、女はおれが連れて行く。コレ、嗅ア。サア、あゆべ。

ト お信の手を取つて引ッ立てる、その手を振り切り

のぶ　わたしは行く事は否だよ。

ト きつと云ふ。

園七　ナニ否だ。べら棒め、亭主の内へ連れて行くわえ。

のぶ　イヽエ、なんぼ以前は亭主でも、わたしやァ行く事は否だよ。

園七　そりやアなぜ〳〵。

のぶ　なぜといふ話しがあるものかな。お前の身状が悪いわな。それだから主の爲、親の爲に、賣られて爰へ奉公人。只一通りの藝者なら、成る程、去り状を取らねえ亭主のお前の留守に、斯ういふ奉公に出て、知らせないのは此方も悪いが。コレ、わたしは外へ行く事は出來ねえ。否だよ。

園七　そりやア又なぜ

のぶ　ハテ、親指が抱へたからサ。

トこれにて皆々顔見合せ思ひ入れ

云ひなさる通り、お前の手の切れぬうち、この奉公に、親が寄越さうが來たのは悪いが、わたしやァ賣女にやァ來ないよ。しら几帳面な藝者奉公。それをお内の親指が、女房にしようと云ひなされば、わたしも苦勞をしようより、身の片附きと思ふから、ハイ、それはお有り難うござります成る程女房になりませうと、約束いたして抱かつたよ。そんならわたしは解つてゐるよ。さういふお内を、どうして滅多に行かれるものか。亭主のあるのを合點で、抱へた旦那のお胸には、御

料簡がありやせう。なんぼわたしが、しみつたれな女であらうが、親方の慰み物にはなりやすめえ。旦那さん、モシ旦那へ、モシ

ト此うち惣六默つてゐる。

オヤ〳〵、あなたはきついお逆上サ。もう斯うなつちやア、空耳を走らしちやア、ゐられやせんよ。

トこれより美人局の仕組みになる。

團七　ナニ、内の亭主が、人の女房を抱いたのか。イヤサ、亭主のあるこのお信、抱いたといつちやア間男だワ。内の抱への代物に手を附けるのは、餅屋が餅で食同然、とんだ手合ひだ。濟まねえぞ〳〵。

のぶ　これサ團七さん、お前、濟まうが濟むまいが、わたしやア爰のかみさんだよ。アイ、富岡屋のおかみさんだよ。

團七　よし〳〵。われがさう土性骨が据れば、これから家主へ斷はつて置くワ。爰の家主はどこだ〳〵。

太七　サ、その家主は

トうぢ〳〵する。

のぶ　爰の家主さんは、十二軒の孫七さんといふのだ。角を曲つて三軒目。併し、結構人で、行かねえよ。

團七　結構人でも家主をするからは、その位な達入れは出來よう。ドレ、ちよつと屆けて來よう。

ト行かうとするを、太七とめて

太七　これサノ〱、マアノ〱待たつしやいな。相談もあるものだわな。

團七　その相談とは。どうするのだ。

太七　ハテマア、待たつしやいよ。

ト惣六に向ひ

モシ、親方、お前まじめに、あの奉公人を抱いたのかえ。

惣六　馬鹿ア云へ。抱への子供を抱くやうな氣前でもねえワ。何を云つても、癩病に棒打ちだ。損なして得を見ろだ。譯を附けてしまやれ。

太七　承知しやした。

團七　サア、解らねえのか。解らずばいゝワ。お信や、とてもこいつは代官所へ。女房のわれも、おしぶちを食ふぞよ。さう思つてゐろ。

のぶ　斯うなつちやア、どうするものかな。女の行くのは好かねえが、一度は名聞よ。暗い所も見て置きたいね。

團七　その氣前なら、仲人も糸瓜もいらねえ。お砂利の上へ座つて見ようワ。

太七　コレ〳〵御亭主、貴樣も強情を云はずとも、どうで碎けば知れてゐる納まり。話しあひにするのがよからう。

團七　して、この始末は、どう碎ける。

太七　コレ、碎けば斯うサ。

ト囁く。團七思ひ入れあつて

團七　アヽ、さういふ碎けなら、物は相談。コレ

トお信に囁く。思ひ入れあつて

のぶ　イヽエ、否だよ。わたしやア否だ。不承知だ。矢ッ張り置いて、親方のかみさんにしておくれな。それならわたしも規模がある。金と轉んでジミ〳〵と、泣きやむやうなお信ぢやアござんせんよ。モシ、親方さん。このお長屋へ初奉公、御存じながら小ぢよくだと、あなたは思つてゐなさるか。初手に出たのが堂前で、三日月お仙といつたもわたし。マア宿場から踏みはじめ、千住板

橋根津音羽、四谷品川廻り來て、辨天お旅松井町、常磐町にもやう〳〵と、一勘定も出ぬ内に、あそこ爰から小うるさく、手が出るゆゑに旅挊ぎ、京大阪も食ひつめて、又もお江戸へ住替への、白齒でどこでも食ひつかせ、亭主は誰れだ、おれが女房と、ごろつきの團七が、鬼の女房に氣紛れの、ごろつきお信といふのはわたし。襟足首筋細つたが、つゝきにけりが船遊び、法螺の貝なら當り前サ。コレ、九助どん、お茶を一つくんな。

ト九助、茶を汲んで出す。

太七 モシ〳〵、親方、斯ういふ惡婆とは、さつぱりわしも

惣六 ろく〳〵元方を洗ひもせず、イヤ、とんだ目にあはせるな。

ト押入れへかゝり、證文箱より年季證文を出して來り

サ、この證文を遣るからは、今日から構ひの無い證據、これを渡して、濟ましてしまやれ。

ト太七へ渡す。

太七 コレ〳〵御亭主、今云ふ通りこの子の證文、こなたに遣れば、この上ともイサクサ無しだ。

ト團七取つて

團七 そんなら證文をくれるのか。コレ、嬶ア、われも向後この内の

のぶ　抱へでなけりやァ、半時でも居るのは、旦那に氣があるやうでお前に濟まねえ。サア、行きやせう。

ト立ちかゝる。

園七　こりやァ親方、大きに御不肖。連れて行きやす。

惣六　勝手にしやれ。併し初めて今日着せた、しかけは返して連れて行きやれ。

のぶ　御損をかけても氣の毒だ。お返し申して

トしかけ帽子を脱ぎ、長襦袢一つになる。

したが、わたしも女だよ。こんな形では

トありあふ園十郎縞の浴衣を着て

元の古巣へ……川だちは川だ。

ト浴衣を着て、平ぐけを締める。

惣六　話しも出來ねえこの始末

九太　これぢやァ親方

惣六　ハテ、その勘定の埋め草の、心當りは、先刻目見得の

九太　エヽ、あの雲上な屋敷者

惣六　呼んで來や。

九太　心得ました。

ト合ひ方になり、九助はお信のしきせを持ち、兩人奥へ入る。三人殘つて

團七　今から歸れば三ツの蒲團、久し振りだな。

のぶ　お氣の毒なは此方の親方、思ひもよらぬ不仕合せ。

團七　泊つてゆきやれな。親方、一晩貸さうか。嗅ア、行かうワ。

惣六　措いてもらはう。今までへこんだその代り、とゞの碎けは目見得に來た、お屋敷者の奉公人、お姫とつけたを、お信にして、札を廻して早々に、今からお信が人代り

ト奥の方へ向ひ

コレ、先刻來た屋敷出の奉公人。ちよつと來さつし。

ト合ひ方になり、彌生姫出て來り

彌生　自らを主の招き。藝者とやらに出すのかや。

ト上座に住ふ。

惣六　今からお信が人代りに、雲上向きな、てめえを勤めに

彌生　すりやその者の、代りに妾を

のぶ　エ、そんなら和田家、荒木の御兩家、主人と敬まふ御方を、陪臣づれが娘のお信、その人代りに

は、どうもそれと

彌生　いかに時世といひながら、勤めする身は家の恥。いつそ殺して

ト側にある鏡臺の剃刀を取つて自殺の體。惣六、刃物をもぎとり

惣六　金で抱へた奉公人、今死なれちやァ損の上。損の無いうち、今から藝者の

のぶ　わたしが代らう親方さん、あの子に勤めをさす事は

園七　それでも今更、亭主が聞いては

惣六　ならずば矢ッ張りこの娘、おとなげなくも

ト彌生姫が手を取り、奥へ行かうとする。お信とめる。二階よりお園下りかゝり窺ふ。奥よりお濱窺

ひゐる。

のぶ　見すく＼それを

惣六　これが腹癒せ。

のぶ　見捨てゝ妾を

園七　行かれぬ合點。

のぶ　それぢやによつて

惣六　サア

兩人　サア／＼／＼

惣六　これがへこんだ代りと思やれ。

園七　イヤ、こいつは天上

ト思ひ入れ。お信、お園、兩方より惣六へ思ひ入れあつて

その　この子の代りに藝子のわたし

のぶ　機嫌を直して、今日からわつちを

兩人　どんな苦界も

ト兩方より惣六へ、思ひ入れあつて寄りそふ。

惣六　主のあるのはお斷はり。まだも妾は、てめえの方だヲ。

トお園を引寄せる。

團七　それ見ろ嗅ア

のぶ　手めはあがつた。

トこの時お濱、ツカ〳〵と寄つて惣六へ立ちかゝり

はま　サア、去つてくんな。

惣六　女房が俄に去られる心は

はま　抱への子供にあだつく男、愛想が盡きた。去つておくれ。

惣六　イヽヤ抱への奉公人、手足は附けぬ。

はま　でも新造の屋敷出を、妾にせうとたつた今、お前はこの子に惚れたのか。

惣六　イヽヤ色戀取りおいて、恩といふ字に惚れたる娘。

はま　エ。

團七　綸姿に相違なく

惣六　サ、それだによつて、この子に惚れた。

はま　この子に惚れたら、わたしに去り狀。

惣六　いかにも遣らう……その去り狀は

ト立ちあがり、戸棚の中より一腰と、お園の證文を出し
暇のしるし。

ト お濱へ渡す。思ひ入れあつて

はま　こりや父さんの形見の一腰。

惣六　去られて行くのが勝手であらう。

その　そんなら跡へ据ゑるのか。一合取つても、わたしも武士の

惣六　不死身の武助が妹のお園、下がつてくりやれ。

ト證文を投げてやる。お園取つて

その　エヽ、證文まいて、わたしも今から

彌生　して、自らは

のぶ　お前は、どの道

ト彌生姫の手を曳く。惣六、その手をもぎ取り

惣六　イヽヤてめえは

トお信を團七の方へ突きやる。

團七　お首尾のよいうち

トお信が手を曳かうとする。太七、九助出かゝりゐて

九太　よくマアうぬは

ト立ちかゝるを、お信、太七をさゝへる。團七、九助を引附ける。この立廻りのうち、お濱、門口へ出る。

團七　御亭主、何かと

のぶ　今までいかい

ト二人づゝ立廻り、ちよつとあつて納まる。外よりお濱、件の柄杓を投げこむ。お園取つて

その　同行三人。

はま　その持ち主を

九太　うぬを

トかゝるを、團七は九助、お信は太七を、よろしく押へる。お濱外より門の戸をさす。お園、以前の證文を破る。惣六、件の柄杓を持ち、彌生姫を圍ふ。双方とたん、一時に木の頭。惣六、柄杓に目をつけ

惣六　これでよめた

ト各自よろしく、これをキザミにて、ひやうし

幕

第二番目 序幕返し　三圍堤石段の場

役名──惣六女房、お濱。政右衛門妻、お谷。澤井股五郎。柘榴武助。池添孫八。櫻井林左衛門。雲助、小地獄の番助。一子、巳之助。奴、眼八。若黨、土手平。

本舞臺、三間の間、向う練り塀、本所おつま小路、大川筋の景色。爰に番助、雄龍の印を持ち、武助、密書を持ち、引附けてゐる。その武助に林左衛門取附き、眼八、土手平、むしやぶりつき、五人ゴツチヤの見得。屋體囃子にて引返して幕明く

番助　この野郎め、放さないか／＼。

武助　イヽヤ、われが持つてゐる物を、おれに渡せ／＼。

林左　コレ／＼、そいつは渡すな／＼。渡さば此方へ、寄越せ／＼。

土手　その手紙を寄越せ〳〵。

番助　手紙は知らない。この野郎が持つてゐる。

武助　われが品を、おれに渡せ。

眼八　いつそ此奴ら、叩き倒して

武助　エヽ、退きやアがれ。

ト踏み飛ばし〳〵、番助が品を取らうとする。林左衞門、脇より手をかけるゆゑ、土手平、眼八、兩方より拔討ちに切りつける。武助、腕先、頭なぞにて受ける仕組み。兩人一度にしたゝかに切り伏せる。この間に番助、件の品を持つて向うへ駈け行く。

林左　コリヤ〳〵兩人、其奴をばらして、手紙を渡すな。

兩人　心得ました。

林左　うぬ、逃がしはせぬぞ。

ト番助を追ひかけて向うへ入る。兩人、武助にとゞめを刺さんとする。その顏へ唾をかける。兩人飛びのき

土手　イヤア、鰻のやうに、切つたと思へば


瀬川菊之丞
豊国画
市川門之助
豊国画

眼八　おいらが面へ此やうに
兩人　唾をしかけたな。
武助　べら坊め、切つて白けりや錢は取らぬ。
兩人　とんだ西瓜だ。
武助　いくら切つても、どうして〳〵
兩人　そんなら、うぬは
武助　これで二度だが、西行だワ。
兩人　西行とは。
武助　ふじみだワ。
兩人　イヤア。
土手　巖柳さまの密事の狀、渡さにやうぬを
眼八　ぶち殺すぞ。
武助　べら坊め、布子ぢやァあるめえし
兩人　その狀渡せ。

武助　ならないワ。
土手　ぶち殺せ。
眼八　うぬを
　ト件の狀を引つたくり、眼八駈け出す。武助引戻す。三人狀を枷に立廻りよろしく、トヾ武助、咬へし狀を思はず腹中へ呑みこむ事あつて、三人顏見合せ
武助　ヤヽ、今の狀を
兩人　野郎め、どうした。
武助　爭ふはずみに
兩人　どうした〳〵。
武助　ツイ思はずも
兩人　ヤア。
武助　呑みこんでしまうた。
兩人　イヤア。
武助　敵の手がゝり手に入りしを、思はず腹へ……こりやどうせう。仕樣はないか。取りやうは……エ

エ、いま〳〵しい。

ト咽喉をかきむしつて思ひ入れ。

兩人 うぬ、ぶち殺して、あの狀を

ト切つて行く。その手を取つて白刃をもぎ取り、一人を踏まへ、キツとなつて

武助 いくら切つても切れぬが不死身、その手でゆくのぢや

ト見事に切る。ポンと返る。下よりおこつくを

ないわいやい。

ト踏みつける見得。禪のツトメになり、知らせあつて一ぱいに黑幕をふりおろし、この人數を消す。

雨車の音、時の鐘。

本舞臺、三間の間、三圍稻荷鳥居前、土手、石段、左右樹木、土手に出茶屋の葭簀片寄せあり、平舞臺上の方に蒲鉾小屋、その前にさす股の自在かけ、誂らへの道具。雨の音、雷薄く、蟲の聲、時の鐘にて黑幕を切つて落す。

ト右の鳴り物にて向うより孫八、順禮の形にて、巳之助の手を引き、糸立を着て出て來り

孫八　ヤレ〳〵、雷が遠くござらしつて、ようござるの。俄の夕立で、大きに隙取りました。お谷さまは、どうなされたやら

ト小屋の側へ來り

巳之　ハイ〳〵、孫八でござりまする。只今戻りましてござりまする。

母さま、今戻りましたわいなう。

ト小屋の內にて

たに　オヽ、孫八か、歸つて來たか。隙取りましたの。

ト合ひ方、蟲の聲。茲垂れを上げる。內にお谷、女非人の拵へにて、小さき土火鉢にて蚊遣りをくすべ、これを團扇にてあふぎゐる見得。こなしあつて

夕立にあうた所爲か、いつもよりか歸りも遲うて、大きに案じました。コレ、巳之助、爰へ來や。

さぞ草臥れたであらうの。

ト巳之助を引寄せ、思ひ入れあつて、濡れたる體を探り見て

これはしたり、其方は、いかう濡れてゐやの。

孫八　左樣でござります。只今の一降りに、あのお子も私しも、大きに濡れました。

たに　さうかいの。併し、濡れたもの着てゐるは毒でござる。ドレ〳〵、その竹自在へ掛けて、干してやりませう。

ト立上がる。

孫八　イエ〳〵、私しが致します。巳之助さまや、濡れた衣服は、お脱ぎなされませ〳〵。

ト巳之助が單衣を脱がせ、迷子札の附きし帶を取る。

たに　コレ、この着替へ、着せ替へて下され。

ト着替への單衣を渡す。

孫八　ハイ〳〵……サア〳〵、これを召しませ。

ト單衣を着せ替へ、附け紐にて結び、濡れたる單衣、迷子札の附きし巾着、帶までも竹自在へ掛け、蚊遣り火にて干す心。

サ、これでようござります。イヤモウ、私しも、早う戻らうと存じましたが、あの雷にこのお子がおそはれさつしやらうと、雨やみ致したばかりに、殊の外遲なはりましたが、して、お前樣、持病はどうでござります。

たに　イヤモウ、案じてたもんな。今日はこの間中より、大きに快い方でござつたが、この雷には、

孫八　この子の事を案じてゐましたわいの。
左樣でござりませう。どう致しても、同腹同性のこのお子も、あなたの方を苦勞になされまして
そこが親身の忝さ。

たに　アヽ、コレ〳〵、そりや云はぬ事ぢや。あの巳之助は
ト思ひ入れあつて、
政右衛門どのゝ胤ながら、腹を貸したは、わしが使うた腰元の、お袖が腹に生れたあの子、わしが産んだは女の子、産まれ落ちると直ぐに失ひ、壽命がないそれゆゑに、お袖が産みやつた男の子、わしが産所へ直ぐに入れ子に

孫八　アヽ、左樣かいの。それぢやというて、藁の上から育てたこのお子、實の御男子同然な
ト思ひ入れあり
イヤ、お谷さま、私しは珍らしい人に逢ひましたわいの。

たに　そりや誰れに逢やつたのぢや。

孫八　なんでござります、毎度お屋敷へお出入り致した、呉服屋の重兵衛が、今では深川と申す所に、惣六とやら名を變へまして、藝者屋商賣、内も取込みと見えましたゆゑ、そこ〳〵に別れました

が、大方あの方から、尋ねて見えるでございませう。

たに　これはしたり、此やうな淺ましい様子を見せるも氣の毒。併しあの者ことは、父さん靭負さまの御恩を受けた町人、又その重兵衞が女房は、わしが召仕ひの袖が姉との事。二人が娘の二親が、股五郎の乳母といひ、以前と違ひ今の身は、敵同士なるその女子、大方今に添うてゐやるであらうわいの。

孫八　左様でござりまする。重兵衞の申しまするにも、私しは御恩のお方、此方へお引取り申しても、それにいとひはござりませねど、女房ことは、股五郎に縁あるゆゑ、これへ憚かり、何事も明日參りませうとの志し。又私しが娘のお信め、身許の知れぬ男に馴染み、箱根を立退き、江戸へ參つて居るとの噂。アヽ、どこにどうして居をるやら。彼奴が事も、有やうは苦になりますて。

たに　そりやわたし達とても、夫に別れ、西も東も便りなき、江戸三界までさまよふも、主人のお家に傳はりし正宗の短刀、尋ね出して親の敵、あの股五郎を討ちたい願ひ。

ト無念の思ひ入れ。咳き入つて惱む。

孫八　これはしたり、また痰咳が起りましたか。いつもの練藥はござりませぬか。

たに　アヽ、イヤ〳〵、藥はもう皆になつた程に、もう〳〵捨てゝ置いてたも。

孫八　アヽ、左様なら、歸りがけに買うて參りまするもの……ようござります。ちよつと行て買うて參りまする。アヽ、雨もやみさうになつたわえ。

ト身拵へする。巳之助縋つて

巳之　わしも行かうわいの。

孫八　アヽ、この暗いのに、ござりまするか。ござらば負うて行きまするぞ。

たに　これはしたり、藥は明日の事にしやいの。巳之助も今夜は行きやんな。

孫八　イエ〳〵、なんの手間も隙もかゝりませぬ。爰から僅か中の郷と申す所、直ぐに買つて參りまする。サア、ぼん樣、よう摑まつてござりませ。

ト巳之助を背負ひ、竹の八丁笠をかむり、巳之助の頭を同じ笠の内へ入れ、手遊びの赤い提灯をともし、裸足にて行きかける。お谷こなしあつて

たに　そんならどうでも行てたもるかや。有やうは藥が無うて、今日も一日困りました。大儀ながら、早う戻つてたもや。

孫八　ハイ〳〵、直ぐに歸ります。道のよい方を行きませうわえ。

ト捨ぜりふ云ひながら、花道の方まで行き、泥濘にすべり、灯消える。お谷思ひ入れあつて

たに　ア、ソレ、怪我しやらぬかや。

孫八　イエ／\、ツイ水溜りですべりました……南無三、灯を消した。

たに　ともしてやらうかや。

孫八　イエ／\、これなりに參りませう。

ト思ひ入れして

たに　ヤア

夜道を照らすこの灯、消ゆるといふは、どうやら氣がゝり。

孫八　アイヤ、つい行つて參りませう。

ト唄、時の鐘になり、とぼ／\と向うへ入る。お谷跡見送り、思ひ入れつ合ひ方。捨て鐘。

たに　コレ、必ず怪我せぬやうに戻つてたもや、ヤ、。

ト思ひ入れあり

主家來なればこそ、この暗いのに夜道もいとはず、とぼ／\と、コレ、忝い／\、家來とは思はぬ。コレ、わしや手を合せて拜んでゐますぞや。アヽ、いかに時世なればとて、誰れあらう、御大家方へ劍術の、御指南いたす侍ひの、あるが中にも仁木の御家中、和田靫負の娘や孫、夫は名

におふ武藝の達人、荒木の小天狗とも云はるゝ人の妻や子の、これが姿か、浅ましや。かゝる苦患も誰れゆゑぞ、父の仇たる股五郎、やわか本意を遂げいで置かうか。

　トきつとなり、咳入り、思ひ入れあつて

アヽ、人が聞かねばこそ、この身の大事をうか〳〵と……どうやら雨も小やみの樣子、蚊遣りなりとも焚きつけて、あの子の濡れ物、ドリヤ、あぶつて置かうか。

　ト本釣り鐘、蟲の音、蛙の聲、弘福寺のツトメかすめて靜かに打つ。誂らへ凄き合ひ方。お谷、自在の下を焚きつける。向うよりお濱、前幕の女房、頭へ手拭を巻き、黑の長合羽、足駄、蛇の目の傘、件の一腰を合羽の下へ隱し、右の拵へにて出て來り、思ひ入れあつて

はま　云ひ交したる男さへ、親に恩義の御方の、仇になるのを知る上は、聞き捨て置かれぬ侍ひの、娘の役と大膽な、夜道いとはぬ庵崎の、堤づたひに隅田繩手、あの弘福寺の勤めの太皷、聞える方へ

　ト向うを見て、焚火に目をつけ

堤の非人の蚊遣り火か。あれへ便つて

　ト矢張り鳴り物、本釣り鐘にて、焚火を目當によき所まで來り、足駄の鼻緒を踏み切り、タヂ〳〵と

して爪づく。お谷見附けて

たに　オヽあぶな。アヽ、鼻緒が切れましたかえ。

はま　アイ、爪づくはずみに。足駄の鼻緒が

たに　そりや御難儀でござりませう。爰に藁は澤山あり、ドレ、わたしが鼻緒をすげて上げませう。

はま　それはお忝うござりますが、不躾な、足駄の鼻緒を……して、お前さんは、この御近所の

たに　イエ／＼、私しは旅の者、所定めぬ物もらひ。ハイ、乞食でござりまする。

はま　エ、アノ、お前が

たに　非人の身なれば女子でも、道行く人の履物を、直しまするは即ち役目。殊に幸ひお女中様、女非人の私しが、あなたのお召しのお履物、お直し申し上げませう。

はま　すりや、鼻緒を

トよく／＼目を附け

世話ながら、直しておくれ。

ト片足踏み出す。この時、消えたる焚火、パッと燃え立つ。兩人顔見合せ、思ひ入れ。お谷、藁を取つて鼻緒を直す。お濱、焚火のあかりにて、自在にかけし帯の迷子札に書きし文字に目を附け

たに　「荒木氏惟已之助」……すりや、最前の、いよ〳〵順禮

はま　ヱ。

たに　賤しう見えぬ女の順禮、道行く者の履物を、直す心の辛抱は、なみ〳〵ならぬ胸の内、願ひある身に違はぬ女中。木札に書いたは荒木氏。こりやこなさんは問はずとも、浮世を忍ぶ親子の修行者、身には願ひの

ト　あたり見廻し、小聲になつて

敵討でござんせうがな。

ト　裏問ひをかける。お谷、思ひ入れあつて

はま　ハテマア、變つたあなたのお尋ね。お目立ちまするか存じませねど、私しどもは長旅の、諸國を廻る田舍順禮、敵討とは存じもよらず、左樣な者ではござりませぬ。

たに　そりや大望を抱へた身の上、聞かれて直ぐにハイ左樣、敵討ぢやと何のマア、云はるゝものでもないは承知。

はま　して又あなたは何でマア、敵討かとお尋ねなさんす。

たに　目に附いたは自在の竹に、かゝつた子供の守りと共に、添へた木札にあり〳〵と、住居を書かぬ

は旅人の證據、家名ばかりは荒木氏、巳之助と、書いてあるので氣の附く木札。荒木の苗字は日の本に、人も知つたる政右衛門、そのお人なら敵討、それに縁あるお方ぢやと、存じついたる先潜り。サ、それに相違はござんすまい。

ト云はれ、お谷こなしあつて

たに　それはあなたの心得違ひ、荒木の苗字は一つでも、お尋ね遊ばす政右衛門……サ、左樣な別して高名の、お方の果ではござりませぬ。私しどもは名も無き順禮。

はま　すりや世に知れた荒木の小天狗、その政右衛門の身寄りでは

たに　ハイ、左樣な身寄りぢやござんせぬ。

はま　アノ、身寄りでは

たに　アイサ……お履物が出來ましたぞえ。

ト足許へ直す。

はま　こりやアお慮外……して、身寄りでなうて

ト目を附けて、思ひ入れ。

縁なき人なら遠慮もなう、切れた鼻緒が縁のはし、浮世話しちや、聞きなさんせ。

ト合ひ方。

たに　そりや何事のお話しを

はま　舅を討たれし仇討の

たに　エ……どうでも敵討のお話しを

はま　アイ、お前に聞かす仇討の、家名も荒木政右衛門、舅を討たれウカ〳〵と、その敵をもえ討たぬ、大腰抜けぢやと世間の評判。その腰抜けにも妻子があつて、敵を尋ねて歩かうが、亭主でさへもその通り、況んや女の及ばぬ事、叶はぬ事ぢやといふお話し。廣い世界に其やうな、立派な武士の臆病者、これまで高祿もらうてゐて、役に立たぬ祿盗人。なんとさうでござりませうがな。

ト悪口交りに問ひかけろ。お谷思ひ入れ。

たに　さう仰しやれば一口に、左様なものゝやうなれど、世の譬へにも云ふ通り、一寸の蟲に五分の魂ひ、その魂ひも誰れあらう、荒木と云はるゝ程の武士、その政右衛門の妻子なら、やはか敵を

はま　討つ心なら、定めし手練も

たに　及ばずながら心がけ。

はま　その心がけあるからは、そこへ敵が

ト合羽の下より手早く白刃を拔いて

もしや尋ねて

ト切りつけるを、キッと留めて

たに　刃物を隱して持つたるお前

はま　イヽヤ、こりやコレ犬おどし、夜の道ゆゑ

たに　嚇しの爲にか。

はま　隱せし白刃は

ト切つて行く。お谷、身をかはすはずみに、お濱また切り附ける。刀にて自在の竹を見事に切る。お谷、切つたる自在の竹を取つて、件の竹に仕込みし刀をスラリと拔いて、立廻りよろしく、お濱の目先へ差出す。お濱、キッとなつて

さてこそ竹に仕込みし劍、推量せしに違はぬ身許。

たに　お目立ちまする上からは、何をか包まん敵持ち。

はま　所持の劍は

ト寄るを、ちよつと思ひ入れあつて

たに　葵下坂二つ胴、おさ〳〵劣らぬ

はま　アノ、それが

　　トさし寄るを、しやんと留め

たに　お目にかけるもおはもじな、親重代の非人の魂ひ、生くらもの。

はま　ても嗜みの

　　トまた寄るを、お谷、劍を引いて

たに　イエ、それから御覽なされて下さりませ。

　　ト劍を隱す。お濱、思ひ入れあつて

はま　推量せしに違ひなう、澤井を覗ふ荒木の婦妻。

たに　討たれし靭負が娘にて、志津摩が姉の谷が身の果、覗ふ敵は股五郎。

はま　先刻に聞かれた荒木の御内儀、この身は澤井に恩義の二親、それゆゑ夫に無理暇とり、仇する者に逢つた上、仇討御免のお墨附、貰ひに來たのぢや、荒木の御内儀、所持してなれば、わたしに下んせ。サ、わたしにおくれ。

たに　すりや、墨附を渡せとな。夫の手より預かりしこの墨附、やわかお前に……肌身離さぬ大事の一

品、それゆゑわたしが

ト懐中より桐油包みの立文を出す。

はま　大事の品ゆゑ貰はにやならぬ

たに　さほど澤井を思ふ其方、正しくわしが使うたる、袖が姉にてその以前、奥に勤めし、瀬川といひし

はま　妹の縁に、引かされぬ。母の恩義は乳兄弟、股五郎さま、助ける爲に

たに　すりや、どうあつても本意の妨げ

はま　致さにやならぬは差あたる、御免の墨附

ト手をかける。お谷、その手を拂ひ、爭ふはずみに墨附は舞臺眞中へ落す。お濱、ありあふ傘にて打つてゆく。お谷、件の仕込みにてあしらひ、ちよつと立廻りあつて、兩人タヂ／＼となり、お谷、跡ずさりにトン／＼と小屋の内へ入る。この途端に菰垂れ落ちる。お濱は傘を開きかけて、持つたるまま、これも跡ずさりにタヂ／＼となる拍子、傘開き、その影へ撞と座す。尤も立廻りのうち、兩人とも傘竹の仕込み兩人とも持つたる物にて、我が手に胸先へ突きあてゝ氣絶する立廻り。この時本釣り鐘、ゴンと鳴る。これにて兩方一度に氣の附きし思ひ入れにて、すつくと立ち、お濱の合羽脱げて下

は裾をからげ、しごき凛々しき形、かれて支度せし體。件の菰垂れ引切り、お谷、上着脱げて、下は四天やうなる敵討に心がけし拵へにて、兩方とも仕込みと一腰を携へ出で、件の墨附へかゝり、奪ひ合ふ立廻りよろしく、正面の石段へ踏みかけ、キッと見得。この時、本雨サッと降り來る。これより鳴り物になり、墨附を枷に兩人石段へ上がり、タテの間、鳴り物は大川筋を通行の屋形船の鳴り物、祇園囃子、長唄入り三味線にて、誂らへの鳴り物よろしく、大タテあつて、兩人堤へ上がり、互ひに手を負ひ、よろぼひ〳〵、兩方より出茶屋の片附さし葭簀を枷に使ひ、バラ〳〵と取除ける。その影の、重ねし茶屋床几の上に股五郎、浪人の形、古傘、深編笠を枕許へ置き、雨やみの野宿者にて寢てゐたりしが、この物音を聞き、目を覺ましたる體にて、裾をからげ、傘を持ち、石段より下りてくる。兩人は白刃を持ち、よろぼひ上がり、兩方より思はず股五郎へ切りつける。股五郎驚き、兩手にて兩方の白刃をもぎとり、この白刃にて兩方を切る。兩人これにてタヂ〳〵となつて、堤より下へ落ちる。股五郎、切りつけられし時、落ちある墨附を取つて口に咬へ、白刃は下に投げ捨てる。白刃は程よく兩人の側へ落ちる。これにて又本雨サッと降り來る。股五郎、持つたる古傘をさして墨附を持ち、下を見て思ひ入れ。この途端に一つ鉦の念佛、忍び三重になり、蟲の音、蛙の聲。股五郎、石段に腰をかけ、傘を擔ぎ、見得。下の兩人、白刃を探り取つて苦痛の體。三人よろしくあつて

股五　この茶見世に俄雨、雨宿りせしうたゝ寐の、夢驚ろかす白刃と白刃、目覺めて見れば女同士、戀

の遺恨か女敵か、爭ふ品は、こりやコレ立文。何か仔細は

トこの時、知らせあつて月な引出す、股五郎、何心なく墨附を月にかざして讀みかゝる。下の兩人、苦痛の思ひ入れあつて

はま　エヽ、口惜しいこの深手、死んでも墨附、取り得て歸る。

たに　イヽヤ渡さぬ御免の御書、取りに來たのは敵に賴まれ、わしを今宵の返り討、こりや股五郎が賴みぢやな。

ト股五郎、これを聞き、驚きし體にて、猶々墨附を月にかざし讀む事。

はま　なんの女をお賴みあらうぞ。あなたは知らぬ事ながら、乳兄弟のよしみを思ひ、親の恩義に夫を捨てゝ

たに　墨附わたしや。

はま　イヽヤ其方が

ト兩方より白刃を持つて、よろめき立ち、撞となる。股五郎讀みしまうて

股五　ヤヽ、こりやコレ仇討御免の御書。

たに　さういふ聲は、股五郎。

はまヤヽ、あなたが、どうして

ト よろ〳〵と立上がる。股五郎、下を窺ひ見て

股五　一人は慥かにお谷どの……今一人は聞き馴れぬ

はま　あなたが乳母の、娘の瀨川。

股五　すりや、不義ゆゑに暇の出たる

たに　深手ながらも、恨みは澤井

ト 立ちかゝる。

はま　その助太刀は

ト 切つてゆく。兩人の白刃、兩方の肩先へ切りこみ、ウンと苦しみ、立身にてがつくりとなる。股五郎、墨附を見て、窺ひ見て

股五　知らぬ事とて荒木の內方、殊に乳緣の女が實義。されども寶の出でざる內は、死ぬに死なれぬ……

……エヽ。

ト 身を悔みし思ひ入れ。兩人の手負ひ、また双方へ切りつける、刀あまつて石坂へ切りつけ、石火パツと立つ。股五郎キツと見て

谷濱　野邊の門火は劍の石火、やがて討たるゝヤ。

トよろ／＼と立上がる。よき時分、菰を着たる非人一人、土手の上に窺ひ出て

非人　人殺し／＼。

トかゝるを、股五郎拔討ちに切る。「ワツ」というて石段より見事に落ちて立身にて苦しむ。この物音に兩人、目を開き、恨めしげに股五郎を見上げる。股五郎思ひ入れあつて

股五　臨終稱念……ハテ、是非もなき事どもぢやなア。

ト愁ひの思ひ入れ。非人見事にかへる。女形兩人、持つたる白刃を放して撞となる。双方とたんに柝の頭。

ト兩人は落入る。股五郎笠をかむる。途端一度の仕組み、それをキザミ、よろしくあつて、ひやうし幕引附けると、打込み、呼び、しやぎり、納まると直ぐに知らせ。

幕

二番目　中幕

園七隠れ家の場

役名――志賀の團七。佐々木巖柳實ハ澤井又左衞門。櫻井林左衞門。小地獄の番助。松坂屋のお熊。池添孫八。政右衞門一子、巳之助。子分、長右衞門。同、龜吉。鎌倉屋手代、爲助。和田志津摩。團七女房、お信。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、正面鼠壁、のれん口、勝手道具の書割り。上の方、反故貼り障子の屋體。下の方、竈、鍋釜、手桶、その外勝手道具よろしく、よき所に二枚屏風を立てゝ、この前へ机と見せて俎板の上へ樒の一本花、水向けの茶碗、火入れへ線香を立て、枕飯をすゑ、死人のある體いつもの所に門口。下の方、路地口、これに佐々木巖柳と記したる表札を打ち、幕の内より長右衞門、でんぼうの形にて、丼を叩き、枕念佛。米屋と酒屋の若い者、かけを催促してゐる。龜吉、袢纏、腹がけの形にて、立ちかゝりゐる。すべて本所回向院うしろ、上野長屋、まはりの體、開帳の鳴り物。椀久の唄にて幕明く。

兩人　サア、待つ事はなりませぬ〳〵。

長右　今日は出たのがない。通らつしやい〳〵。

酒屋　コレ〳〵、物貰ひではござらぬ。わしは酒の勘定を催促に來ました。

米屋　わしは米の錢を取るのでござる。

兩人　早く埒を、附けて下さい〳〵。……いつその事、面倒だ……鍋でも釜でも外してゆかう。

ト立ちかゝる。この時龜吉、兩人を突き廻し、左右へ見事に投げる。

アイタヽヽヽ。人に物を借りた上に

米屋　よくも爰へ投げ出したな。

ト龜吉を見て

見れば抱への龜吉、なんでおいらを投げたのだ。

龜吉　此奴等は、あんまり目先の見えない奴等だ。今日爰の内には、不時な取込みがあつて、上を下へと大騷ぎ。借りたに違ひない掛けなら、隨分おれでも拂つてやる。斯う云ふからは達師の芽生え江戸市村の礎を、しつかり据ゑた上からは、山椒は小粒でも馬鹿にやァなるめえ。誰れだと思ふアヽ、つがもねえ。

長右　さればゝ、この手合ひは氣のきかねえ。こなた衆には、内のごてつきが見えねえのか。

米屋　ナニ、内のごてつきとは何事ぢや。
　　　ト屏風の方を見て
　　　イヤア、見れば一本花に枕飯
酒屋　こいつは大變な樣子だが、誰れか死にましたか。
龜吉　内の團七親方が、たつた今頓死した。
酒屋　イヤア。鬼のやうなる團七どの、頓死するとは、ハテ、人といふものは知れぬもの
米屋　それはお力落しでござらう。
長右　イヤモウ、俄の事ゆゑ、まだどこへも知らせませぬ。
酒屋　わしも馴染みの佛だ、只も歸られまい。爰に掛けの錢が六七百ござる。これで花でも買つて上げて下さい。
　　　ト錢を六七百文出す。
米屋　わしも集めた錢が一貫ばかり、これを香奠にしませう。
　　　トこれも錢を一貫ばかり出す。
長右　イヤア、掛取りのお前方が、香奠までくれるのか。

兩人　左樣でござります。

龜吉　おいらもこれから、何かの手傳ひをして進ぜう。

長右　しめた。こいつは一杯飲めるわえ。

　　　トこの時、屏風の中にて、ゴソ〳〵物音する。

兩人　ヤア、屏風の中で、何やら音が

長右　コレ〳〵、まだ早い〳〵……こいつは佛へ猫が附いたわえ。

兩人　エヽ、氣味の悪い。

　　　ト思ひ入れ。この時、影芝居のドロ〳〵になり、屏風の中より團七、暑さを堪へかねたる體にて、白地の浴衣をスッポリかぶり、ズイと立つ。掛取り兩人、これを見て

　　　ソリヤ、佛へ魔がさした〳〵。

　　　ト龜吉うろたへて門口へ逃げて出る。この時、路地の口より爲助、質屋の手代にて出て來り、兩人を見て

爲助　この衆は、何を其やうに騒ぐのだ。

兩人　幽靈が出ました〳〵。

ト向うへ逃げて入る。龜吉は下手へ入る。

爲助　イヤア、氣味の惡い。

ト門口の外にて思び入れ。この物音にて奥よりお信、出て來り

のぶ　何を其やうにまぜッ返すのだ。

長右　なにサ、掛取りめらがうるさいから、嚇してやりました。

園七　屛風の中で聞いてゐたが、世の中にはいろ〳〵な、唐變木もあるものだ。

長右　この頃はめんくが惡いから、親分が晝寢の枕許へ、一本花と枕飯を置いて、借金の斷はりを云つたら、掛取りが香奠を置いてゆくやつサ。

のぶ　併し、いゝ時に今のドロ〳〵、ありやァ何の太鼓だ。

園七　慥かこの表で、影芝居の稽古をするさうサ。

三人　こいつは大笑ひだ。

ト門口の爲助、この聲を聞いて

爲助　園七どの。今日は內にゐるか。

三人　そりや又、掛取りが來た〳〵。

長右　親方、早く死になさい〳〵。

團七　合點だ……ア、、死んだ。

ト どろ〳〵になり、死ぬ振りをする。爲助見て

爲助　イヤ、人は格別、この爲助は、その手は食はねえよ。

團七　ヤア、こなたは鎌倉屋の番頭か。

爲助　團七どの、コレ、彼の代物は、今日の明日のと、のんべんくらり。あの方は、どう附けて下さるのだ。

ト 團七、お信へ心遣ひの思ひ入れあつて

團七　ア、コレ、何も云ふまい。承知だよ〳〵……時に番頭、ちつと掛合ひたい事がある。奥へ來さつし。

爲助　イヤモウ、商賣づくの掛合ひなら、どこまでも參ります。

長右　裏の方から好い風が來る。凉みながら話してゆくがいゝ。

團七　併し大枚五十兩、踏み玉かへつてのぶヱ。

團七　とんだ話しだ。

ト唄になり、團七、爲助、長右衞門、奥へ入る。あと合ひ方になり、お信殘り、こなしあつて

のぶ　思ひがけない志津摩さま、貧しい中へわたしを使つて。殊に御病氣、さぞお氣詰まり。どりや、お腰でも撫つてあげませうか。

ト上手の障子屋體を明ける。内に志津摩、病人の拵へ、お信を見て

志津　お信か。最前より聞いて居れば、何やら取込みの樣子。斯樣に申せば如何ながら、しがない暮しの中て、病人の某を引入れ、長々の介抱、さぞ心配であらうがな。

のぶ　あなたとした事が。必ず其やうなお心遣ひなされまするな。先刻からの取込みは、先方へ貸しつけました金の利息、又は元金を返しに參りましたお方、盆でも正月でも、さのみ不自由な事はござりませぬ。

志津　すりや、最前よりの取込みは、所々より金子を返濟に參りしとか。ハテ、見かけによらぬ、富貴な事ぢやな。

のぶ　これと申すもお主樣を、大切に致しますゆゑ、天道樣からお當がひ。此やうな有り難い事はござりませぬ。

志津　其方が親孫八が在所なる箱根にある内、父の御最期、それといふも、股五郎が皆なす業。殊に正宗の刀手に入つたるも、其方の深切、さりながら、今一種の折り紙なうてはと、その品の行くへ。殊に殿より賜はりし、青柳の一巻まで失ひしこの身の誤まり。今にも姉聟政右衞門どのにお目にかゝらば、何卒この身の申し譯

のぶ　お氣遣ひなされまするな。私しが親孫八は、あなた樣の御家來なれば、わたしが爲にも大事の御主人、紛失の寶を尋ね出し、やがてめでたう本地へ御歸參。

志津　その手土産には、敵の首を

ト思ひ入れあつて、病身の樣子。お信見て

のぶ　アヽモシ、御心配はお身の障りに

ト思ひ入れにて介抱する。この時向うより已之助、前幕の順禮にて走り出て來り、直ぐに内へ駈け込み

已之　申し、おば樣、怖いものに逢ひました。どうぞ助けて下さりませ。

ト お信に取すがる。

のぶ　見れば可愛らしい順禮。何か樣子の

志津　怖いものにあうたなら、少しの間、どこぞへ隱して

のぶ　幸ひあの小座敷へ

ト巳之助を障子の內へ隱す。この時向うにて

林左　家來ども、餓鬼めは慥か向うの內へ

志津　ヤヽ、あの聲は

のぶ　モシ。

ト囁く。

志津　そんなら其方は

のぶ　ドレ、お藥を上げませうか。

ト三味線入りの大拍子になり、お信奥へ入る。志津摩殘つて思ひ入れ。右の鳴り物にて、向うより林左衞門、袴羽織。巖柳、深編笠、浪人の拵へにて、前幕の孫八を引ッ立て、跡より中間一人、前幕の番助に繩をかけ、引据ゑさせ、お熊附添ひ、出て來り

林左　最前より、あれなる婆アが、身共へ願ひと申すが、その繩附きの曲者は、この間深川にて、某が所持の品を盜みし奴。早速捕へ吟味いたせば、その品は質物に入れしとのこと。

巖柳　これへ來かゝる道に於て、小兒を連れしこの順禮、身共へ慮外いたせし奴、立身出世の門出の不吉、宅へ連れゆき存分に

孫八　サヽ、お腹立ちもありませうが、何を申すも小兒の事、御免なされて下さりませ。

番助　モシ〳〵、あの代物は、値安に質に置きました。どうぞ御免なされませ〳〵。

くま　ハイ〳〵、あの者が申す通り、その代物は質屋にござりますれば、私しが請け戻し、差上げませう。どうぞ御免なされて下さりませ。

巖柳　林左衞門どの、老人が斯樣に申すからは、僞りもござるまい。この繩附きは婆めに、預けて遣はされい。

林左　巖柳どのゝ挨拶と申し、紛失の品さへ戻らば、此方に申し分はござらぬ。然らば其方に、この者は預け遣はすぞ。

くま　有り難う存じます。

孫八　モシ〳〵、私しもお次手に

巖柳　相成らぬワ。うせおらう。

ト皆々舞臺へ來り、番助お熊に中間附いて、下の方路地の內へ入ろ。林左衞門と巖柳は、孫八を引ッ

立て、門口へ來り

林左　この家の主は在宿か。主に逢はう〳〵。

志津　主は只今他行いたしてござる。して、おてまへ方は

巖柳　拙者は隣家の者でござるが、浪人と侮り、慮外いたせし小悴めが、慥かこの家に駈けこみし樣子
尋ね出して身共へ渡しやれ。

志津　すりやアノ、小兒を

ト思ひ入れ。この時巖柳、志津摩を見て

巖柳　ヤア、其方は和田志津摩

志津　ヤ、、おてまへは敵股五郎の實父、又左衛門どの

巖柳　今は變名して佐々木巖柳。

志津　すりや其許が

トこの時孫八、志津摩を見て

孫八　ヤア、あなたは志津摩さま、どういふ事でこの所に……して御浪人は、敵澤井の

ト思ひ入れ。

志津　其方は家來孫八、尋ねたき事さま〴〵あれど

　　トあたりへ思ひ入れ。

さては只今參りし小兒、問はずと慥か

　　ト巳之助と察せしこなし。

孫八　私しとても、申しあげたき事ござれど、何事もこの所では

巖柳　さてこそ推量の通り、靭負にゆかりの物貰ひか。志津摩も爰にあるからは、慮外咎めを幸ひに、奴等を爰でぶち放し……イヤサ、扶持離されは互ひの事、身共もその後屋敷をお暇、今では變名佐々木巖柳、足利家へ召出され、月本武藏と試合ひの勝負。武藏といふは政右衛門。物の見事に叩き伏せ、御賞美あつて今にも立身。胤は變れど股五郎、身が手にかけて育てし若者、不屆き者でも手練は劣らぬ。それを敵と和田家のいづれも、隨分ともに如才なう、おくれを取らぬやうに致しやれ。ハヽヽヽヽヽ。

志津　すりや政右衛門どのには、その節おくれを

孫八　ハテサテ、それには旦那の胸中、ハテナア

　　ト思ひ入れ。

林左　これサ、其方の事は跡へ廻して、今駈けこんだ餓鬼を渡せ。
志津　して、あなた樣は
林左　身は櫻井林左衞門と申す足利家の侍ひ。巖柳どのを推擧の武士。
巖柳　よし又慮外の小兒が、和田にゆかりの餓鬼にもせよ、今の其ざま物貰ひ、乞食に無禮を致させ置かうか。サ、志津摩、その來た餓鬼を、出しやれ〳〵。
志津　何か樣子は存ぜねど、いか樣なる儀を
巖柳　道草くうてその餓鬼が、身がこの面へ根こぎのこの草、打つけたゆゑ、おもてを穢した。
ト引下げ來りし根こぎの草を差出す。
志津　すりや、あの小兒が巖柳どのへ
林左　サ、それだによつて、餓鬼を渡しやれ。
志津　サ、その儀は
巖林　サア〳〵〳〵
林左　渡さにや踏んごみ
ト奥へ行かうとする。よき時分よりお信出かゝりゐて、林左衞門を突き廻し

のぶ　お侍ひさん、どこへお出でだえ。
林左　身共が餓鬼を、そびき出さうと存じて
のぶ　此方の內に子は無えよ。そりやアお前、門違ひをさしつたの。
林左　どうしたと。
のぶ　此方の內に子は無えわな。
トこの時孫八、お信かよく／＼見て
孫八　ヤ、わりやア娘ぢやアないか。
のぶ　アヽモシ、爰では必ず、ナ……順禮さん、默つておいでよ。
巖柳　コリヤ、隣家の內儀。軒並びでも獨身者、何かと無沙汰。それは格別、只今これへ入つた餓鬼を渡して下さい。
のぶ　こりやアお隣りの旦那かえ。ようお出でなされやした。そんならあなたも掛合ひかえ。
巖柳　いかにも。身共へ無禮の小悴ゆゑ、連れて行くのだ。內儀、逃げこんだ餓鬼を渡しやれ。
のぶ　お渡し申しやせう。此方の內に子は無えが、餘所から來れば是非がない。隨分連れてお出でなさい。したが、その代り、このお侍ひさんは、爰の內へ置いておいで。お返し申す事は少つと致

し憎いよ。

巖柳　そりや又なぜ。

のぶ　ハテ、知れた事をお聞きだの。子供が慮外したといつて、連れて行かうと云ひなさるが、このお侍ひさんもわたし等に向つて、慮外したよ。慮外咎めをしたならば、お前の方にも慮外とやらがありませう。なんぼ借家の貧乏店でも、わつちが内へ案内無しに、その上、草履で疊の上へ。お侍ひなら、さういふものかえ。この挨拶の次第では、駈けこんだ子供も渡してやりやせうが、その代りには、この人は、入れかへ物に預けてくんなよ。

ト云はれ、林左衛門慄へ出し、俄に草履を脱いで懐へ入れ、思ひ入れ。奥より長右衛門、手拭にて鉢巻きして、長鳶を持つて出かゝつてゐる。

林左　イヤア。

トまじめになる。

長右　姐御　出入りは何だ。その二本差しを、ぶッ挫け〳〵。

林左　巖柳どの〳〵、貴公の宅へ、サ、お越しなされ〳〵。

トぶる〳〵する。

巖柳　ハテ、ようござる〳〵。參りかゝつた上からは、長屋の内でも有やうは、隣の同士でも大事ござらぬ。行き屆かねば中々歸らぬ。氣遣はずとも、落ちついてござれ〳〵。

トこの時、奥にて

團七　番頭め、待ちやァがれ〳〵。

爲助　おらァ否だ〳〵。

ト捨ぜりふにて團七、片肌ぬぎ、守り袋出かゝりし體にて、爲助先に出て來り

團七　この番頭め、氣の短かい、どこへ行くのだ。

爲助　月の切れたあの代物、こなたの方で金が出來ざァ、この短刀は、脇へ賣つてしまふのサ。

長右　イヤ〳〵、その代物を外へやつちやァ、親方の面が立たねえ〳〵。

トわめく。此うち巖柳、團七の掛守りに目を附けて思ひ入れ。

爲助　それだといつて、安錢の代物ではなし、正宗だわな〳〵。

トこれを聞き、皆々思ひ入れ。

林左　コリヤ〳〵、爲助、その短刀は巖柳どのが、求めるほどに、必ず外へは……サ、巖柳どの、早速に正宗を

巖柳　よろしうござる〳〵。此方も少々心づきましたる儀もござる。イヤナニ、團七とやら、用事がある、近う參れ。
長右　そりやごたつきが始まつた。その侍ひを、しめろ〳〵。
　　ト立ちかゝる。
のぶ　これサ、ぬし達は構ひなさんな。最初の始末は、わたしが知つてゐるよ。
巖柳　イヤ〳〵、聊示は致さぬ。團七、近う。
團七　アノ私しに……へイ。
　　ト合ひ方になり、合點のゆかぬ思ひ入れにて、巖柳の側へ來り
　何だか薄氣味の惡い……モシ〳〵、お侍ひ樣、私しに用とは何でござりまする。
巖柳　外でもないが、其方、その守り袋は、どういふ縁で所持いたす。
團七　アヽモシ、こりやァ盜み物ではござりませぬ。仔細あつて私しは、子供の時分から持つて居ります。
巖柳　して、その仔細は
團七　私しは小さい時ゆゑ、詳しい事は存じませぬが、この守り袋は親の形見、中にはあり〳〵家の系

圖、しかも江州佐々木とやらの末ぢやさうな。

巖柳 ヤヽ、なんと……して〳〵、どうぢや〳〵。

團七 お聞きなされませ。私しが阿母は、若い時近江の國志賀郡、お屋敷奉公のその時に、內の旦那の手が附いて、腹がぼてれん。本妻の嫉妬で、わたしを腹に持つたまゝ、宿へ下がり、臨月になつて生れたはこの團七。近江の國、志賀の里で生れたゆゑ、そこで異名を志賀團七と申しますのサ。

巖柳 さて〳〵、他家に類なき石山錦、その守りを所持するからは、疑ひもなき實の悴

ト云はうとして

ハテ、思ひがけない。

ト團七の顏を見て思ひ入れ。

鳶助 サア〳〵、團七どの、金が出來ずば、幸ひ爰にござる巖柳さまの方へ、正宗の短刀は賣つてしまふよ。

團七 アヽコレ

ト心遣ひのこなし。お信、正宗と聞き、恂りして

のぶ ヤヽ、正宗の短刀とは、どうやら氣がゝり

志津　コレ〳〵、お信、大切な品ゆゑ、病氣の内は、こなたに預け置いたが、もしや外に品あつてか。心がゝりな正宗沙汰。

のぶ　サア、大切な品ゆゑに、人の知らぬ所へ隱しましたが、お待ち遊ばせ。

ト神棚の札箱を取つて來り、中をよく見て

ヤヽ、この内に短刀が……いつの間にやら團七さん、そんならお前が

團七　女房が外より預かつた、その短刀を斷はりなしに質に置いたも有やうは、あの仲町の踏み玉が、今ぢやアこの身にあたりが來て、よんどころなく、てめえに隱して

のぶ　そんならお前は正宗を、探し出して質入れの

志津　その短刀は箱根にて、お信が勤めの

孫八　アヽ、それで解つた娘が勤め。併し正宗、外手へやつては

爲助　所詮其方に金はあるまい。巖柳さまへ賣つてあげますよ。

のぶ　どうしてマア、外へやつてはお主の御難儀。

爲助　そんなら金が受取らうか。

團七　サ、それは

爲助　但し、外へ賣つてしまはうか。

團七　それでは此方の

爲助　そんなら金を、キリ／＼見ようワ。

のぶ　エヽ情ねえ、この場の手詰め。わたしが苦界の、元の起りも

團七　堪忍しろ。力づくにも腕づくにも、及ばぬものは今の當惑……イヤ、こいつは大變だわえ。

ト思ひ入れ　巖柳、目を附けゐて

巖柳　團七夫婦の者、その金を貸してやらう。

ト懐中より包み金五十兩投げてやる。團七見て

團七　ヤヽ、こりやコレ小判で五十兩

のぶ　そんなら、あなたがその金を

巖柳　手詰めとなつた悴團七……イヤ、切端と見たゆゑ夫婦の者へ、心置きなく用立て申さう。

志津　イヽヤ、たとへこの身に係はるとも、現在敵の身寄りから、恩義を受けては武士道が

巖柳　その意地づくは尤もながら、いはゞ主人の一大事、その短刀を外へやつては、其方達夫婦が云ひ譯あるまい。

團七　すりや、この金を

巖柳　お身達が計らひにて、敵討は暫時の猶豫。悴股五郞が、命を延べてもらひたい……と云ふやうな

そんな未練な親ぢやァねえワ。馬鹿な事を。

孫八　イヤア、最前より詞の端々、味に搦みしこの場の樣子。

のぶ　何は兎もあれ、この金で

志津　イヤ、どうあつてもその金子は

團七　イカサマ、お武家樣の心では、其やうに仰しやるは、御尤もでござります。

のぶ　左樣ではござりませうが、さし當つて金が無ければ、短刀は人手へ渡りますぞえ。

志津　サ、その儀は

團七　ようござります。そのお心なら、この團七も女房のお信も、勘當なされて下さりませ。

志津　そりや何ゆゑに

團七　ハテ、勘當なされば主從の、緣はこれぎり。尤も女房は主筋なれば、私しが退けば他人、その他人が借りた金なら、お前樣の身に係らぬ金ぢやァござりませぬか。

志津　聞き屆けた。科なき者を勘當も、武士の表……これも義理あるお信に團七、勘當いたす。孫八、左

様思やれ。

孫八　御尤もの御勘當、私しも承知仕りました。

園七　サア、てめえの主から亭主も勘當、志津摩に縁はない。

のぶ　そんならこの金受取つて、あの正宗の短刀を……巌柳さまとやら、お有り難うござりやす……サ
質屋さん、金受取つて

ト爲助に渡す。

爲助　アイ、金は慥かに受取りました。サア、正宗のその短刀。

トお信受取り

のぶ　わたしが手から志津摩さま

ト志津摩へ渡す。

志津　再び戻るこの一品、これで身共も安堵いたした。

林左　其方の一件が納まつたら、巌柳先生、此方の一件は如何召さるゝ。

巌柳　一人は女、一人は病人、相手にとつて不足の巌柳。

志津　今にこの身も全快なさば

のぶ　敵の親たる巖柳さま、こなたを背にして、敵の在所を
巖柳　天晴れなるその心底、必ず詞を忘れぬやう……櫻井氏、最早身共は歸宅いたさう。
林左　然らば拙者も御同道。
爲助　金受取れば用なき私し
長右　おいらアこれから瀧の下、長屋でもひやかさうか
團七　とは云ふものゝ巖柳さま、お借り申したこの金の
のぶ　譯もどうやら今となり
孫八　云ふに云はれぬ
志津　この場の一埒。
巖柳　それも忰の團七が
團信　エ。
巖柳　ハテ、健氣な若者ぢやなア。

ト唄、時の鐘になり、巖柳、林左衞門、路地の口へ入る。爲助、長右衞門、向うへ入る。あと合ひ方になり、四人殘り、こなしあつて

志津　最早黄昏。
のぶ　先刻の順禮を
　　ト障子屋體の内より巳之助を連れて出る。孫八見て
孫八　ヤア、巳之助さまか。よう無事でござりましたの。
巳之　べいよ。よう來てくれたな。
團信　して、このお子樣は
孫八　政右衛門さまの御子息、志津摩さまとは實の伯父甥。
團七　エヽ、さうかえ。とんだ羽目だね。
のぶ　それにつけても、聞えぬ團七さん、なんでマア短刀を
團七　成る程、おれの身持ちが惡いゆゑ、志津摩さま始め現在の、女房にまで盜み騙りと、思はれるのも尤もだが、これには深い樣子のある事。
のぶ　サア、お前の事ゆゑ、よもやと思へども
孫八　申さば大枚五十兩。
志津　して又、その金の筋道は

園七　サア、何事もあなたのお耳に、入れまいと存じましたが、何を申すも身貧な私し、榮燿榮華に遣つたかと、思し召しもござりませうが、さら〳〵さうした譯ではござりませぬ。樣子を云へば正宗の、代りに行きしあの女房、地金を出してぶッつかり、一番踏み玉と思ひの外、先は義理ある呉服屋重兵衞。和田家の御主人大内記さまのお姬樣、世につれてあの家に賣られ、肌身を穢す勤め奉公、嚊アが爲には大切なお主筋、それに連れ添ふ私しゆゑ、金を突かねば姬君に、勤めをさせるが御不便ゆゑ、どうぞ仕樣はあるまいかと、思ひ附いたるあの短刀、お信に相談したところが、所詮四の五の面倒と、質屋へやつて身の代金、それゆゑ暫く正宗を、お借り申したその仔細小ッぱづかしいが旦那樣、御免なされて下さりませ。

のぶ　そんならさうと云ふがいゝ。わつちやア聞いて恟りしたわな。

志津　とは云ふものゝこの短刀、手に入つたるもお信が身の代、皆この家に恩ある志津摩。

のぶ　サ、さう仰しやつては、誠にわつちも嬉しいよ。

トこなし。時の鐘、合ひ方になり、路地口より番助、お熊出て來り

番助　ヤレ〳〵、とんだ日にあつた。

くま　それでもこなたが、巧く云ひ拔けたゆゑ、早速濟んだが、いよ〳〵雄龍の印とやらは

番助　質にやつたといふは僞はり。わしが爰に持つてゐるのサ。

ト印を出して見せる。

くま　そんなら、こなたが

番助　おれが手からお上へ差上げれば、大枚の御褒美。

くま　すりや、雄龍の印を

番助　コレ。

ト囁く。

くま　そんなら、わしは

番助　ちつとも早く

くま　合點ぢや。

ト時の鐘になり、お熊向うへ入る。番助、門口へ來て

番助　御免なされませ。お隣りの巖柳さまが、團七さんに話したい事があるから、ちよつと來て下さい

と傳言でござります。

のぶ　そいつは今の金を返せぢやアないか。

團七　なにサ、そんな事でもあるまい。ちよつと行つて來よう。

孫八　そんなら早う歸らつしやれ。

團七　嗅ア、行燈でも附けさつし。

ト時の鐘、合ひ方になり、團七、番助、路地の内へ入る。お信、行燈をともす。この時、白紙に書いたる戒名落ちてある。志津摩、何心なく取上げ見て

志津　「妙顯劍理信女、俗名たに」と記しある、この戒名は

孫七　アヽモシ、それは

ト思ひ入れ。

志津　これにつけても姉者人、お谷さまは御機嫌よいか。どうぢや／＼。

ト孫八、ウヂ／＼しながら

孫八　ハイ、お谷さまは、御機嫌よいやうでもなし、また惡いでもなし、何だか私しは、悲しうござります／＼。

ト涙ぐむ。

のぶ　父さんとした事が、なんで其やうに涙ぐんで……モシ、この戒名、こりや、どこのお人の

志津　コレ〳〵、孫八、して〳〵姉者人は、如何なされた。早う申せ〳〵。

孫八　サア、お話し申すも涙の種、長い旅路のお疲れやら、御持病のお癪が起り、この下郎めは藥を求めに、參つた跡にてお谷さまは、人手にかゝつて、敢へない御最期でござりました。

のぶ　エヽ。

志津　ヤア。して、その相手は、何者が〳〵

孫八　私しも戻りかゝつて、悄り仰天。其うち殺した奴は、影も形も見えず。涙ながらにお死骸を見れば、御所持なされたお墨附もござりませぬ。あたりを見れば、今一人の女の死骸、よく〳〵改めれば、以前屋敷に勤めました女。二人の死骸は物凄い、所は三圍稲荷の土手、鳥居に殘す書附けは、「澤井股五郎通りかゝり候ふゆゑ、よんどころなくお谷どのを、討つて立退き候ふ」と書き記し、名乘つて行きしは、どうも合點が參りませぬ。

のぶ　すりやお谷さまを殺害いたしたは、股五郎が仕業であつたか。して、亡骸は

孫八　そのお死骸は泣く〳〵も、回向院へお頼み申し、お墓詣りの歸り道、思ひがけない今の難儀。それが縁にて志津摩さま、お目にかゝるも、面目次第もござりませぬ。

志津　さては敵股五郎は、この邊に徘徊いたすと覺えたり。姉の敵、父の仇、おのれ此まゝ置くべきか。

のぶ　モシ、若旦那樣、その御立腹は御尤もなれど、あなたは御勘當のお身ではござりませぬか。たとへ股五郎を討取つても、勘當御免のない内は、敵討にはなりますまい。理不盡者のお咎めうけ、身の災ひを引出す道理、急く所ではござりますまい。心を鎭めて、兎角時節をお待ちなされませ。

孫八　この下郎がお供しながら、思ひがけない不慮の御最期。面目次第もござりませぬ。

のぶ　お目にかゝらぬお方ながら、父さんのお主樣、思ひがけない新盆に、せめてお墓へ手向けの水

ト小提灯を持ち、立ちかゝる。

志津　わしも共にと思へども、心に任せぬこの病

孫八　その御代參は巳之助さま、また私しはお墓の石の、相談ながら

ト三人門口へ出かける。志津摩、巳之助の姿を見て

志津　移れば變る世の成行き、不便や甥があの出立ち。

のぶ　いつしかそれに染み易き

孫八　順禮姿の若旦那

志津　これが荒木の

ト立たうとして、捲となる。

のぶ　アモシ……氏より育ちでござんすな。

ト唄、時の鐘になり、お信、小提灯を持ち、孫八、巳之助の手を引いて向うへ入る。志津摩殘り、件の戒名と短刀を持ち、こなしあつて

志津　折り紙は無けれども、再び手に入るこの短刀。それにつけても姉者人、思ひよらざる不慮の御最期。今宵は夜通し通夜の御回向。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト件の二品を持ち、障子屋體の中へ入り、蚊帳を吊りながら、思ひ入れあつて障子を閉す。時の鐘、合ひ方になり、路地の口より巖柳、以前の形。團七、大小を抱へ、林左衛門、挾み箱を持ち出て來り、三人門口にて

巖柳　コリヤ、悴、委細は只今申した通り、敵の末は根を斷つて葉を枯らす

林左　こなたの胸中見せたる上は、身が渡したる大小にて

團七　思へば今まで親知らず。この守りがあつたばかりに、親子の名乘り。今から素性が解つた上は、首尾よくやれば直ぐに侍ひ。

巖柳　かねて志津摩が隣家にあるこそ幸ひと、存じついたる床下傳ひ、潜つて通路の道が出來、この家

の寢間へ忍ぶは自由。いま教へたるあの筋を、窺ひ寄つて志津摩めを
園七　モシ

ト囁き合ふ。時の鐘、合ひ方にて、そろ〳〵と内へ入り、上の方の障子屋體へ來り、覗き見て、思ひ入れあつて門口へ來り

蚊帳の內にて寢入り端。
巖柳　すつぱりやれば、この折り紙、直ぐにわれへ

ト懷中より折り紙を出して見せろ。

林左　して、正宗は
園七　志津摩が持つて枕許で。二品揃へてこの身の出世。
林左　明朝未明に巖柳どの、お目見得いたす身の廻り、身共は歸つて迎ひの用意を

ト挾み箱を渡す。巖柳かゝへて

巖柳　同腹中といひながら、悴が胸中、見屆けし上にて渡すこの折り紙。其うち身共は、この家にゐるしかり
園七　親の性根を受け繼ぎし、身の强惡を見屆ける、其うちお前は、あの押入れ。

巖柳　然らば忍んで

林左　身共は屋敷へ。おつゝけ迎ひを

ト門口へ出る。

巖柳　相待ち申す。

ト時の鐘、合ひ方になり、林左衞門向うへ、巖柳は挾み箱を抱へて押入れの内へ入る。團七、大小を取つて

團七　サア運が向いて來たわえ。彼奴さへやらかせば、直ぐに侍ひ、親仁の前から今の折り紙、それを揃へて

ト思ひ入れして

何にしろ、渡して置いた正宗を、此方へたぐる

ト思ひ入れ。時の鐘。團七、窺ひ〳〵、上の屋體を明ける。内に蚊帳を吊つてある體。手を伸し、件の正宗をソツと持ち出す。この鳴り物にて向うよりお信、巳之助の手を引き、巳之助は花火を大分買つて持歸る樣子。花道にて

巳之　おば樣、眠たい。

のぶ　さうでありやせう。併し、花火を餘ッほど見たの。
　　ト門口へ來り
　いま歸つたよ。
　　ト内へ入る。團七悯りして、短刀を隱し
團七　エヽ、悯りしたぜ。
のぶ　なぜマァわつちが歸つたに、悯りする事があるものか……イヤモウ、悯りはあの回向院の裏門だ。
　あの道のやうにぬかる所は唐にもあるまい。ドレ、足を洗つて置かう。
　　ト下の方の盥に水を汲んで來り、行燈の側に置き、足を洗ふこと。
團七　イヤモウ、あの道は、悯りするほど悪いから、それでおれも、彼所を通つたと思つて、それで悯りしたのよ……して、父さんはどうした。
のぶ　道での、石塔を誂らへるといつて、石屋へ寄つたのサ。わつちばかり先へ來たが、この子が道々眠たいといつたが、あの志津摩さまを起して、あなたの蚊帳へ
　　ト行かうとするを押へ
團七　アヽコレ、よく寢てござるに。目が覺めては惡い。その子はそこらへ寢かすがいゝ。

のぶ　それだといつて、素的な蚊だから

團七　蚊の食はねえやうに、斷うするがいゝ。

ト踏みつぎを出し、その側へ巳之助を寢かせ、大風呂敷をかむせ、顏へ蚊の寄らぬやうにして

サア〳〵、これでいゝぢやアねえか。

のぶ　ほんにお前は、しみつたれな事は餘つほど名人だ。

トせりふの内、大小を見つけ

オヤ、この大小は、志津摩さまのか。

團七　イヽヤ、そりやアおれがのだ。

のぶ　ナニ、おれがのだ。コレナ、お前、大小をどこから持つて來た。

團七　裏借屋の御浪人、巖柳どのゝお世話にて、おらア今から武士になるわえ。

のぶ　ナニ武士になる……ホヽヽヽ、今年は鰹が澤山だから、お前のやうなぶしも出來やうが、何を當てにお前はマア、侍ひになるのだ。

團七　てめえは知るまいが、あの巖柳といふ人は、この守り袋を證據にして、名乘つたところが、實の親だ。

ト件の守り袋を見せる。

のぶ　エヽ、そんならアノ近江の志賀で、別れた親御は

團七　あの浪人の佐々木巖柳、その子のおれゆゑ今から侍ひ。嬶アも武士の奥様だ。なんと俄な出世であらうが。

のぶ　それぢやアお前、わたしが主の志津摩さまとは、どうやら互ひに

團七　敵同士だワ。

のぶ　エ。

ト思ひ入れ。

團七　そこが話しだ。心あつて巖柳どのが、請けてくれたあの短刀、正宗あつても肝腎の、折り紙を離さぬワ。とても事に折り紙をと、貰ひかけたら、親仁の云ふには……コレ

ト お信に囁く。お信、恟りして

のぶ　そんならアノ志津摩さまを

ト云はうとする。

團七　これサ、聞えるワ〳〵。

ト上の居體へ心遣ひあつて、そこにある硯箱を取つて來り、懐にありし半紙を出し、委細を書いて

コレ、讀んで見や。

ト渡す。お信讀むうち、いろ〳〵と思ひ入れあつて、右の書き物を懐中して、恨めしげに團七に向ひ

のぶ　コレ、團七どの

團七　これサ、大きな聲をするな。

のぶ　いかにお前、實の親子が出世をする、その足代だといつて、いはゞ女房の親の主人、さうして見りやア、お前の爲にも主人だよ。そのマア人を

團七　これサ〳〵。聞えるワ〳〵。

ト心づかひ。

のぶ　今更お前は他人向き、實の親だから向うへ附いて、こりやア女房を、突き出すのだの〳〵。さうはしねえもんだよ。今まで互ひに苦勞したのは、甘口な事だと思ふかな。

團七　シイ〳〵〳〵、靜かに云へ〳〵。コレ

トまた半紙を出して、サラ〳〵書き

サ、これだ。これだによつて、拜むよ。得心してくれろ〳〵。

ト渡す。お信取つて讀み、思ひ入れ。

てめえの云ふ事も聞えてゐるが、なんぼ義理立てをしたればとて、一足飛びの出世は出來ぬワ。まだしもえてをクッスリとやればナ……コレ、この大小も斯う差して、直ぐに侍ひ、志賀團七、其許樣はお信の前。こんな出世があるものか。

ト いろ〳〵仕形話しして呑みこませる。此うち押入れを明けかけ、巖柳、衣裳を着替へ、窺ひながら立聞く。お信、また書き物を懷中して

のぶ　サ、それだといつて、お前は親御へ並ぶから、世間へ濟まうが、コレ、笑はれるのはわつち一人女の癖に慾に目がくれ、強惡もある習ひだが、現在の主を亭主に見替へた上、いとほしなげに年若な、あの若旦那志津摩さま、見す〳〵知つて見ぬ顏が

ト殺すといふ仕形話しをして意見せりふのうち、前なる盥へ、巖柳の立聞く姿うつるを、行燈の灯に見附け、盥の中へ目をつける。團七、これを知らず

團七　これサ、目が覺めちやアな

ト囁く。

のぶ　そんなら裏の借家から、床下傳ひに此方の内へ、いつの間にやら

團七　コレ

ト寄るをお信、盥を引くりかへす。正面の押入れ、内より戸をさす。合ひ方變る。

のぶ　オヤ〳〵、とんだ所へ水をこぼした。

ト雜巾を取つて拭いてまはる。

團七　これサ、お信、何を云ふにも、名を取らうより得を取れと、二人あくせく稼いだとて、どうマア手輕く出世がならう。そこを思へば善ちやアいけねえ、矢ッ張り惡とこけるが手短かゝナ、こゝの道理を勘辨したら

トいろ〳〵勸める思ひ入れ。お信、戸棚の巖柳を見たるゆゑ、少し氣を變へ

のぶ　さう聞いちやアまんざらに、その身の出世を嫌ふも白痴、話しの纏まる事ならば、人の噂も七十五日、慾ところぶが當世かの。

團七　それだによつて、その氣になつて

のぶ　イヽエ、なつても手傳ふ事は御免だよ。知つたといつちやア親仁の手前。どの道わつちが知らないで、濟む事ならばその含み、後で聞いたら仕方なし、初手から知つちやア留めにやアならぬ。お前もその氣で計らひな。

卜心變りの體。團七喜び

團七　成る程、そこらだ。そんなら知つて知らぬ顏。志津摩を殺す

巳之　ナニ、志津摩さまを

卜巳之助聞きつけて起きるを、お信思ひ入れあつて引ッ捕へ、手拭にて口を結へ、あたりの繩にて縛りあげ、大風呂敷をかむせる。團七見て

團七　てめえは、その餓鬼をどうする。

のぶ　年頃な者ならこの通り。どの道知つて知らぬ顏。身分相應質屋の使ひ、入替へ物のこの小裁・橋の上から置き流しサ。

卜門口へ件の巳之助を抱いて出る。

團七　イカサマ、てめえは、惡黨の嚊ァの氣前だ。承知したので亭主も仕合せ。

のぶ　わつちが留守に、手早くやりな。

卜額で敎へる。

團七　其うちおぬしは長屋を歩いて……コレ、親仁が工風での

卜上の方の疊を上げ、床板を足にて蹴返し、お信に見せ、また疊をかむせて、下の方の揚げ板を明け

指をさして思ひ入れあり

床下傳ひに、抜け目はあるまい。

ト お信、思ひ入れあつて

のぶ いつの間にやら、よくマア仕掛けた

團七 古家だけに、何かの魂膽。

のぶ 必ずわつちに

團七 見せねえやうに

のぶ 見ると無常が

ト 巳之助を包みし風呂敷を抱へ

早くしなよ。

ト 唄、時の鐘になり、お信、包みを抱き、門口へ出て、戸をさし、あたりを見廻し、件の包みを路地際へ置き、有り合ふ用水桶をかむせ、件の書き物を出し、ちよつと見て振りかへり、團七を恨めしげに見て思ひ入れ。ツイと路地へ入る。團七殘つて

團七 さて、これからは居候ふ、殺すはいゝが、跡の死骸は、揚げ板の下へコツソリ

ト思ひ入れして、短刀を腰に差し、下の方の揚げ板を明ける。番助、下よりヌツと出る。團七恟りして飛びのき、窺ふ。

番助　モシ、團七さん、わしだ〱。

ト團七、窺ひ見て

團七　わりやア親仁の

番助　お指圖うけて助けに來ました。この床下には路地への通路。もし討ち洩らしても、逃がさぬ魂膽。

團七　おれはわつぱを殺らしてくる。てめえは殘つて

番助　逃げて出たなら物云はず

團七　必ずぬかるな。

番助　心得ました。

ト出刃を持つて窺ふ。團七、大小を差し、身拵へする。時の鐘、凄き合ひ方。爰にて刀を抜き、寝刃を合せる。この時向うより孫八、戻り來り、捨ぜりふにて門口へ來り、窺ふ。内の兩人、小聲になつて

團七　おれは寢てゐるあの蚊帳の、吊り手を切つてグル／＼卷き。上からグッスリ

　トこの時、上の屋體を明け、お信、顏を出す。

番助　あの志津摩めを

團七　コレ。

　ト思ひ入れ。お信、障子を閉す。門口の孫八、これを聞いて

孫八　ヤヽ、志津摩さまを

　ト戸を明け、内へ入る。團七恟りして

團七　ヤ、父さんか。

　ト孫八思ひ入れあつて

孫八　怪しい素振りは……ヤヽ、刀帶して

　ト竈に刺したる雪洞を、竹のまゝ拔き取つて團七の姿を見る。團七、雪洞を叩き落す。程なく下の切り穴へ落ちる。孫八の手に竹ばかり殘り、團七は屋體へかゝる。孫八留めるを振り切つて、屋體へ駈けこむ。孫八續いて行くを、番助出刃にて切つて行く。孫八、持つたる竹にてあしらふとて、竹の尖、槍の如くに切れ、この立廻りのとまりに、屋體のうち物音して、障子へ血煙り立つ。孫八驚き

ヤヽ、障子にかゝりし

ト駈けゆき、外より障子越しに件の竹の切尖を突ッ込む。内にて又ぞろ障子へ血煙り立つ。

正しく手ごたへ。

ト駈けよらんとする時、障子の内より手負ひし志津摩、すつぼりと蚊帳をかむり、よろぼひ出る。跡よりよろめきながら團七追ひかけ出て、刀を振りあげる。孫八、後より組みつく。このはずみに蚊帳のまゝ志津摩、のれん口へよろ〳〵とこけこむ。孫八、團七へかゝるを、番助さゝへる。この時正面の押入れをサッと明け、巖柳、衣裳を着替へ、ツカ〳〵と出て、孫八を當てる。タヂ〳〵として孫八、件の揚げ板の下へ落ちる。巖柳すかさず持つたる刀に手を掛け、孫八が落ちたる床下へ立ちかゝるを、團七持つたる刀を巖柳の目先へシヤンと差出す。巖柳悔りして

巖柳　そちや悴、現在親が目先へ白刃を。すりや、手向ひか。

團七　イヽヤこなたへ何ゆゑ手向ひ。御覽なされい、白刃に滴るこの血は、蚊帳越しに仕留めたる、志津摩が血汐のから紅ゐ。敵の根を斷ち葉を枯らす。安堵さつしやい、親仁どの。

巖柳　悴、出かした。今日只今親子の名乘り。直ぐさま身共に代りし其方、返り討とは滿足々々。その胸中を見る上は、今こそ渡す正宗の、卽ち折り紙、一つになして

ト懐中より折り紙を出して渡す。團七取つて

團七　短刀、折り紙、揃ひし上は、親に劣らぬこの身の出世。

巖柳　身共は目見得の幸先祝ふ、この床下へ落ちたる孫八、仕留めて歸らん、引出だせ。

團七　イヽヤ、女房が舅一人、助けたとて何恐れん。聟の團七、命乞ひ、あの者一人は助けて下さい。

巖柳　然らば見遁がす。ア、命冥加な

ト思ひ入れ。この時向うより四つ目の箱提灯二張り先きに、乘り物、侍ひ、鎗持ち、挾み箱、供廻り一散に走り出で、門口に立ちならび

皆々　お迎ひ。

巖柳　これより直ぐさまお上へお目見得。

番助　下郎も駕籠に引添ひて

巖柳　悴は正宗、折り紙添へて

團七　明日未明。親仁さま

巖柳　悴團七。

ト駕籠に乗り

必ず持參仕れ。

番助　お立ち。

ト時の鐘、合ひ方、巖柳、駕籠の戸をさし、番助引添ひ、供廻りしとやかに向うへ入る。のれん口より お信、髪も亂れ、顏色青ざめ、前垂れを引裂き、腹帶に締めたる體。そろ／＼と出て來り、團七の後を通り、あたりへ取附き、門口へ出て、柱に取附き、向うを見送りゐる。團七これを知らず、あたりの行燈を取つて

團七　奥へこけこむあの志津摩、とゞめを刺して

ト思ひ入れあり、門口の戸明けてあるゆゑ、何心なく門口をさゝんとして、手荒くしやくる。このはずみにお信、よろ／＼として、内へこけこむ。その拍子に團七の持つたる行燈ゆれて灯消える。團七悔りして

誰れだ／＼。

ト窺ふ。お信、こなしあつて

のぶ　わたしだよ。

團七　嬶アか。コレ、もうちつとだ／＼。てまへ、もう歸つたか。コレ、吊り手を切つて蚊帳の下、志

津摩はクツスリ、然しとゞめはまた刺さぬが、灯の消えたで勿怪の幸ひ、この暗がりでとゞめの刀。併してまへは、あの小僧

のぶ　内藤河岸から直ぐに水葬。

園七　そいつは奇妙だ。

のぶ　して、正宗の折り紙は

園七　氣遣ひするな。親仁の前から首尾よく取つたワ。これで正宗折り紙附き、斯う揃つたお持參して、明日は目見得だ。ソレ、短刀、折り紙、揃つたワ。

ト お信、二品を探り、受取り

のぶ　すりやアノこれが正宗の折り紙、お前の出世の

ト押戴き〲、あたりな探り、最前の藥苞手にさはるゆゑ、二品をこの中へ突込み〲、門口へ探り出る。

園七　嘘でない證據は今の二品、てめえに見せるワ。併し明日の朝は、早々それを持つて、屋敷からに迎ひが來るワ、大小も差して、袴も着るワ、駕籠にも乘るワ。ソリヤ脇寄れ、片附けと、大風に歩くワ。てめえも今夜は嗅アよ。明日からは奥樣だ。どうだ、きついか〲。

トせりふの内、お信、用水桶を取のけ、巳之助を出し、件の藁苞を背負はせ、小聲になつて

のぶ　跡から孫八が參ります。サヽ、爰を眞直に逃げて下さりませ〱。

ト捨て鐘になり、花道の方へ連れゆき、突きやり〱、逃げろと云ふ。巳之助、シク〱泣きながら向うへ入る。お信、暗がりながら見送り〱、思ひ入れ。内の團七、これを知らず

團七　てめえが奥樣になると、おらァ殿樣だワ。どうだ、殿樣、かみ樣、山椒醤油の鯣の附け燒で一杯やらう。酒屋はまだ寢はせまい。ナア、嚊アや……コレ、どこへ行つた。お信〱。

のぶ　エヽ、爰に居るわな。

トよろ〱とこけかゝる。

團七　コレサ、てめえ、何を暗がりで。アヽ、息使ひが惡いが、どうぞしたか〱。

のぶ　イヽエ、どうもしねえが、何だか寒氣がするゆゑ

團七　アヽ、さうか。おれも持病の疝癪が……コレ、今の折り紙を寄越さッし。

のぶ　サ、これだよ。

ト今書いて寄越したる半紙の書き物の裏へ、血潮を以て何やら書いてあるを渡す。團七、暗がりゆゑ、これを知らず、探り見て

團七　ヤ、、こりやア紙が違つたやうだが、ほんにこれか。

のぶ　エ、、疑ひ深い。亭主に女房が、何をマア噓を云ふものだ。

ト背中を叩く。團七、疵口痛む思ひ入れにて

團七　アイタヽヽヽ。

ト お信、思ひ入れあつて

のぶ　お前、どうした。

團七　サ、今云つた癪積が

ト思ひ入れ。合ひ方變る。

のぶ　起る度毎介抱は、女房の役とよる夜中

團七　藥を買ふにも邪慳にも、追ひ使つたる夫婦仲。

のぶ　もう〳〵今度は歸るまい、去り狀取らうと思つても

團七　一度や二度の事でなく、夫婦喧嘩もそれなりに

のぶ　仲人なしの仲直り、どういふ廻りの緣づくか、お前の世話で

團七　嚊アが湯灌で

のぶ　エ。

團七　いつか往生。

のぶ　エヽ、よしねえ、氣障な。

トぴつたり寄り添ふ。團七もお信を引き寄せんと、兩人思ひ入れ。兩方の手先へ血のしたふ思ひ入れにて

團七　てめえの身内に、どうか何やら

ト思ひ入れ。

のぶ　エ、こりやア冷汗サ。

團七　ヤ。

のぶ　心遣ひにかく汗の、お前も同じ身内はヒツタリ

團七　おれもズツプリぶつ通し、かいたる汗を

のぶ　ぬらくら藪蚊が

ト思ひ入れ。この時路地より孫八、志津摩を誘ひ、件の雪洞に灯をつけ、顔も肩も蛛蜘の巣がゝりし體にて、床下より拔けたる思ひ入れにて、窺ひゐたりしが、この時、お信の聲を聞いて

孫八　娘、喜べ、首尾よう抜けて

志津　身共も堅固に

ト灯を差出す。兩人見附けて

團七　ヤ、、蚊帳の内なる志津摩と見えたは

のぶ　現在女房が、亭主の刀で

ト前垂れで結へし結び目を解くと、血タラ／＼と流れる。

團七　ヤ、、すりや覺悟して

のぶ　お前の惡事の勸めの裏がき

ト半紙の書き物を打ちつける。裏に血潮にて「身がはり」と書きある。團七見て

團七　血で認めし身替りの、文字は差づめ

志津　志津摩に代つて

孫八　健氣な娘

團七　この惡黨は天罰か、舅の手にて竹槍の

ト素肌を脱ぐ。竹槍の疵に、脇腹を三尺帶にて結び、血に染みし體。

孫八　そんなら竹の切尖で

のぶ　さてはお前も

團七　女房、われも

のぶ　命は同じ

團七　今宵の往生。

志津　して正宗と

孫八　折り紙は

のぶ　巳之助さまに、持たせて爰を

孫八　ヤ、そんならお跡を

志津　少つとも早う

ト兩人向うへ思ひ入れ。

のぶ　アモシ、めでたう本望。……夫婦もめでたう

團七　二人あの世へ引ッ越し女房、手負ひ同士の水杯を

ト手桶引寄せ、五郎八茶碗にて本水をすくひ、一口飲んで

われもめでたく

ト差出す。お信、よろこび寄つて、團七の手を捕へ、茶碗に手をかけ、團七の顔をキツと見詰め、涙にむせびしが、氣を變へ

のぶ　これが命の納めの杯。

ト茶碗をもぎ取る。孫八は法洞か落す。灯消える。團七手を合す。双方途端に析の頭。お信が茶碗の水、タラ／＼とこぼれるに習つてキザミ。門口の兩人泣き伏す。時の鐘の送りにて、ひやうし

幕

第二番目　大切

羽根澤の場

飯住敵討の場

役名——月本武藏實ハ荒木政右衛門。和田志津摩。池添孫八。柘榴武助。小地獄の番助。羽根澤屋幸吉。櫻井林左衛門。佐々木巖柳實ハ澤井又左衛門。醫者、奈良林十官。武助妹、お園。お濱妹、お袖。政右衛門一子、巳之助。澤井股五郎。

本舞臺、三間の間、常足の二重、正面腰障子、羽根澤屋と記したる暖簾、同じく掛け行燈、軒口に江の島大山講中の札、上の間、格子づくり、この所に井戸あり、これより掛け樋を仕掛け、下の方「櫻井林左衞門泊り」と書いたる高札、この下に頃よき竹矢來、幕の内よりお隅、おつや、留め女の拵へにて、旅人を呼びかけてゐる。すべて神奈川宿、羽根澤屋の體。流行り唄、驛鈴、浪の音にて幕明く。

ト双方より思ひ／＼の大山參りの仕出し、掛け念佛、捨ぜりふにて東西へ入る。向うより若い衆四人大山參りの形にて出て來る。留め女見て

すみ　お泊りなされませ。風呂も湧いて居りまする。お泊りなされませ／＼。

旅一　なんと、羽根澤屋は評判がよい。泊らうではないか。

旅二　旅籠はいくらだ、早く極めて下さい。

旅三　これサ／＼、しみつたれな。そりやア何を云ふのだ。

つや　左樣サ、お前さん方は江戸のお方、旅籠はどうでもようござります。

旅一　さうだ／＼、晩には素的な子供も藝者も、澤山あけて下さい。

すみ　ハイ／＼、畏まりました。

つや　どなたもお茶をお上がりなされませ。

すみ　モシ、旦那さんえ。お泊りでござります。

ト盆に茶を汲んでくる。

ト幸吉、羽根澤屋の悴の形にて出て

幸吉　これはどなたも、お早うございました。

四人　今夜はお世話でござります。

幸吉　おつや、お泊りのお客樣を御案内申せ。

つや　どなたも此方へ入らつしやりませ。

ト右の鳴り物にておつやに四人の旅人附いて奥へ入る。お隅、幸吉殘り、太刀と風呂敷包みを見て

幸吉　コレ〳〵、お隅、この納めの太刀は、麁末にしないやうに、座敷の床の間へやつて置くがよい。

すみ　ハイ〳〵、畏まりました。

ト件の荷物を預かる。

幸吉　この道者の多い中へ、明日は櫻井林左衞門さま、佐々木巖柳さまを御同道にて、お泊りとの事。

すみ　それについて問屋場から、お前樣を呼びに來ましたぞえ。

幸吉　そいつは大方、宿割りの事であらう。そんならちよつと行つて來よう。

すみ　左樣なら御苦勞ながら

幸吉　見世を氣を附けてくりやれ。

ト流行り唄、驛鈴の音にて、お隅奥へ入る。幸吉花道へかゝる。向ようり十官、按摩醫者の形にて、笛を吹き出て來り、幸吉と行きあひ

十官　これは羽根澤屋の若旦那、どこへござります。

幸吉　問屋場から呼びに來たから、ちよつと行くのサ。

十官　今晩は屋敷方の、お泊りではござりませぬか。

幸吉　見通しのお客が、按摩を待つてゐた。早く行かつしやい。

ト云ひ捨てゝ向うへ入る。

十官　ハイ〳〵、それは有り難う……イヤ、有り難いといふは櫻井林左衞門さま、愚老が娘のお園を女房にくれいとの事。娘の心次第で、おれも侍ひの舅御樣……イヤ、侍ひといへば、この羽根澤に逗留してござる、あの志津摩は癩病やみ、昨日も療治してやつたが、物ごし格好、誰れかに似てゐるが、どうも思ひ出されぬ。ハテ、誰れであつたか。

トいろ〳〵考へてゐる。此うち奥よりお隅出て來り

すみ　モシ〱、按摩さん、お客が待つてござる。早く來なさい〱。

十官　ハテ、誰れであつたか。

　　トまた考へる。お隅、背中を叩き

すみ　これサ、按摩さん

十官　ドレ、娘を相談しようか。

　　ト流行り唄、驛鈴の音になり、お隅、十官を連れて奥へ入る。右の鳴り物にて向うより番助、旅中間の形にて出て來り、直ぐに舞臺へ來り

番助　いつぞや深川で物した代物、金にしようと思ひの外、江戸は詮議が嚴しいゆゑ、どこぞへ請けようと思つたところ、巖柳さまに雇はれたを幸ひに、爰までは來たが、海道筋は嚴しい詮議。こいつは迂濶に持つてはゐられぬわえ。

　　ト前幕の雄龍の印を出して思ひ入れ。右の鳴り物にて向うより幸吉、足早に出て來り

幸吉　女どもはゐるか〱。

すみ　ハイ〱、旦那さん、お歸りでござりまするか。

　　トお隅、おつや出てくる。

すみ　モシ、旦那さん、問屋の用は何でござります。
つや　何ぞ案じる事ではござりませぬかえ。
幸吉　イヤモウ、大變な話しがあるのサ。
番助　コレ〳〵、息子どの、大變な話しとは何でござる。
幸吉　サア、お聞きなされませ。大内記さまよりお上へ差上げる、雄龍の印とやらが紛失。それゆゑ江戸は勿論、道中筋は嚴しい御詮議。今に爰へ旅人を吟味の爲、お役人樣がお出でなさるとの事でござります。
番助　イヤア、そんなら雄龍の印の詮議に、役人が來るといふのか。
幸吉　いま爰へ見えまする。なんでも、その御判を持つてゐる者を、召捕るとの事でござります。
番助　イヤア、それは大變〳〵。
幸吉　てまへ達も、奥の旅人衆へ、この通り觸れて來やれ。
二人　ハイ〳〵、畏まりました。

ト此せりふの内、番助、件の印を、人知らぬやうに上の方にある掛け樋の中へソツと隱す。皆々これを知らず

幸吉　お前さんも、お草臥れでござりませう。風呂へでもお入りなされませ。

番助　イヤ／＼、おれは井戸端の掛け樋に用がある。

すみ　ハテ、風呂が熱くば、わたしが埋めてあげませう。

番助　イヽヤ、おれはあの掛け樋へ

二人　ハテマア、お出でなされ／＼。

　　ト二人、番助を連れて奥へ入る。幸吉殘り

幸吉　風呂といへは、次手に水を汲んでやらう。

ト流行り唄、驛鈴の音になり、幸吉、何心なく掛け樋の内へ水を汲み込む。右の鳴り物にて、向うより武助、手甲、脚絆、小揚げの拵へにて、前幕の順禮姿の巳之助、藁苞背負ひしを連れ出てくる。駕籠舁き二人、息杖を持ち、ワヤ／＼云ひながら附いてくる。あとよりお袖、木綿やつし前帯、市女笠、風呂敷包みを持ち、市子の形にて皆々舞臺へ來り

駕甲　ヤイ／＼、新參の。その餓鬼を、寄起しやァがれ／＼。

武助　これはしたり、貴樣達は、この子を連れて行つて、どうせうと思ふのぢや。

駕乙　知れた事だワ。その餓鬼は、ぐれと見たゆゑ

駕甲　脇道へ引摺り込んで裸にする。退きやァがれ〳〵。

そで　お前さん方も大人氣ない。高の知れたこの子の着物。酒手位ゐはわたしらが、よいやうに致しま

す。どうぞ御料簡なされて下さりませ。

ト幸吉見て

幸吉　先刻から見てゐれば、おぬし達は、また病ひが起つたな、この衆の挨拶、料簡しやれ〳〵。

駕甲　イヽヤ、おいらが仕事、その餓鬼を寄越しやァがれ。

駕乙　たつて邪魔をすりやァ、叩ッ挫くぞ。

武助　ナニ、叩ッ挫く。どうして、わいらが

兩人　斯うするわえ。

幸袖　ハテマア、料簡さつしやい。

兩人　退かつしやい〳〵。

ト兩人打つてかゝる。武助、この息杖を引ッたくり、兩人を打ちすゑる。幸吉、お袖、捨ぜりふにて

さゝへる。これにて駕籠舁き兩人「うぬを」トかゝるを、幸吉隔て

幸吉　ハテマア、おれに預けさつしやい。

ト兩人を留め〳〵、下座へ入る。三人殘り

巳之　怖いわいなう。

ト武助にとりすがる。

武助　何も怖い事はござりませぬ。私しは政右衛門さまに御奉公いたし居りました、武助と申す者でござります。

そで　ナニ武助どのか。久々にて逢ひますな。

武助　ヤア〳〵、こなたは以前の朋輩、お袖どのか。

そで　して、このお子様は

武助　政右衛門さまの御子息、巳之助さま。

そで　ナニ巳之助どの……イヤサ、巳之助さま、お懷かしうござりますな。

武助　して、お母様には、どこでおはぐれなされました。

巳之　母様は人に切られて、死んでぢやわいの。

武助　エ、すりや、お谷さまはナ

ト思ひ入れ。此うち以前の駕籠舁き兩人窺ひ出て

兩人　さてこそ、うぬらは

　　　トかゝるを、武助お袖、兩人を支へて

そで　光陰早き七年以前、産み落したるこの幼な子。

武助　年も七つの巳之助さま

そで　實の母には生き別れ

　　　ト立廻り。

武助　後の母には死に別れ

　　　ト立廻り。

そで　有爲轉變の世の中とて

武助　いま孤兒の若旦那。

そで　母はあれども、それぞとは

武助　云ふに云はれぬ浮世の義理。

そで　親は無けれど子は育つゝ

武助　ようマア成人

兩人 なされたなア。

ト立廻つて武助、兩人を引敷き、キツと思ひ入れ。お袖は巳之助を引附け、額を見てヂツとこなし。

唄、時の鐘にて、道具まはる。

本舞臺、三間の間、高足の二重、緣側つき、白洲階子をかけ、軒口に伊豫簾、一ばいに下ろし、誂らへの手水鉢、掛け樋より水の流るゝ仕掛け。上の方二階座敷、下は黑塀にて見切り、前落ちの上手、しがらみ附きの浪板、海邊の心。下の方、いつもの所に枝折戸、四つ目垣、秋草のあしらひ、奥座敷の體。右の鳴り物にて道具納まる。

ト唄になり、よき時分知らせについて、伊豫簾卷上げる。内にお園、硯箱を引寄せ、書置きしてゐる見得。吹き流しの合ひ方になり、こなしあつて

その 思ふ事、一つ叶へば又一つと、それは世にある人の事、わたしが願ひは心に任せず、惚れた男に逢ひたいゆゑ、あそこや爰へ住替へして、神奈川三界流れの身。親の勸めに是非もなく、好かぬ男と添はうより、先立つ不孝も約束事、形見に殘すこの書置、ゟしの末は筆の命毛。

ト唄になり、舞臺へ下りて來り、書き殘しを書く。この唄をかりゝ向うより股五郎、好みの衣裳、着

流し、大小、深編笠、下駄がけ、釣り竿と誂らへの魚籃を持ち、出て來り、門口にてお園の樣子を窺ひ、ためらひゐる。此うち唄一ぱいに納まる。お園、件の書置を卷き納め、硯箱の中へ入れ、身繕ひして

これまで心を盡せども、思ふ男に逢はれもせず、この上は、幸ひこれなる海續きへ。南無阿彌陀佛。

ト上手の海際へ飛びこまうとする。この時窺ひ居たりし股五郎、この體を見てお園を捕へ

股五　コレ女中、はやまるまいぞ。

その　モシ、放して殺して下さんせ。

股五　イヤ、身共が目にかゝつては、留めねばならぬ。何ゆゑこなたは

その　死なねばならぬ親への云ひ譯、生きてゐたとて、便り少ないこの身の上、それぢやによつて

股五　女心の一筋に、思ひ詰めしは尤もながら、品によつては死ぬにも及ぶまい。して、その仔細は

その　サア、今この砌り未練らしく、お話し申すも恥かしながら、いつぞや金澤の切通しで、俄の雨に雨宿り、外にも一人の旅のお方、浮世話しが結ぶの縁に、つい解けやすき下紐は、しかも立派な

お侍ひさん、お名も所も聞かぬうち、迎ひの人に是非なくも、別るゝ時に貰うたる、鶏彫つたる割り笄、これをわたしが

ト頭に挿したる割り笄の片しを出す。股五郎見て

股五　ヤヽ、そんならいつぞや

ト跡云ひさして思ひ入れ。

その　エ。

股五　ハテ、それは本意ない事であつたなア。

その　その男に逢はれぬゆゑ、それでわたしは

股五　女中、その男に逢はせてやらうワ。

その　エ、何と云はしやんすえ。

股五　その男にさへ逢つたなら、死ぬるにも及ぶまいが。

その　フウ。その男は、どこに居りますえ。

股五　其方が戀しと思ふ男は

その　して、その男は

股五　サア、その男といふは、即ち身共ぢや。

ト編笠を取る。股五郎の顏變りしを見てお園、ギヨツと思ひ入れあつて

その　エヽ、氣味の惡い。

股五　その時の女中、なつかしかつたな。

ト思ひ入れ。

その　何を云はしやんす。わたしが男は、ひんなりとしたよい器量。

股五　すりや、身共とは違うて居るか。

その　アノマア違はいでは。物にたとはゞ業平さん

股五　そんな男のある中に、心がらとてこの病ひ。

その　それで女が、なんの惚れやう。

股五　すりや、どうあつても

ト寄らうとするを

その　其方へお出で。穢ないよ。

ト突きとばす。これにて股五郎、ヨロ〳〵してガツクリとまる。お園見て、氣味の惡き思ひ入れ、袖

にて顔を隠す。双方この途端、一時に、チヤン、と唄になり、お閨奥へ入る、股五郎殘り、あと合ひ方になり、こなしあつて

股五　鎌倉道の雨宿り、肌ふれたりし某を、この面體の變りしゆゑ、それと存ぜぬ今の女……これを思へば我が名を包み、その上思はぬお谷どの、手にかけたとも存ぜぬ月本、矢張り誠の志津摩と思うて……ハテ、胸中が何とやら

ト思ひ入れ。誂らへの唄、本釣り鐘。向うより武藏、羽織、大小の形、思案の體にて出て來り、花道にて

武藏　ありやモウ七つ。今日も寳の行くへを尋ね、歸る道もせ氣にかゝる、志津摩が業病、癒やす名醫は中々に、毒氣に中りし者なれば、病ひを治せんは巳の年月、揃ふ男子の生血を、二十三夜の月影に、うつしてこれを注ぐ時には、忽ち本復。年も揃ふは忰の巳之助。よき幸ひと思へども、今は親子も引別れ、いづれに居るか、ハテ、心に任せぬ事どもぢやなア。

ト思ひ入れあつて舞臺へ來り

ア丶、志津摩には戻つてか。

股五　月本氏、今日も又、寳の詮議に

武藏　身は厚木とやらんに、手がゝりありしと聞いたるゆゑ、立越えたれど、これも相違。斯様に兩人尋ねても、しるしの無きは武運の盡き。もう〳〵この上は天道任せ。寶の行くへも、舅の敵にもイヤモウ、ほつと致した。いはゞ其方の姉お谷が、緣に搦まれ、これが誠に義理の仇討。

股五　イカサマ左樣。姉の緣あるばかりにて、貴公の御苦勞。退けば他人の月本氏、敵討つべき志津摩が業病。近頃以て氣の毒に存じまする。

ト合ひ方。後より武助、巳之助を連れ、窺ひ出て

武助　ヘイ〳〵〳〵、お願ひでござります。旦那樣、お許しなきにお目見得は、ヘイ〳〵〳〵、御免なされて下さりませ。

武藏　ヤ。そちや勘當いたした武助でないか。許しも得ずに、なぜうせた。

股五　すりやお噂のあの者が、不死身の武助か。

武助　ヘイ〳〵、私しでござります。あなた樣が志津摩さま。御病氣の樣子承つて、お見舞をと思つたばかり、お行くへとても……ヘイ〳〵、私しがこれへ參りましたも、このお子樣をお二人に、お逢はせ申さんばつかりに。

ト巳之助を前へ出す。

巳之　父樣かいなう。

ト武藏へ縋る。武藏、思ひ入れ。

武藏　ヤヽ、そちや忰の巳之助。今も噂を申したに、ようマア無事で……心得ぬは以前女房に、忰を渡し遣はせしに、今一人にて參りしは

武助　サ、その母御のお谷さま、何か樣子は存ぜねど、承れば武藏の國、隅田の堤でおいとしや、人手にかゝつて

ト思ひ入れ。股五郎「さては」とこなし。

武藏　ヤヽ、すりや女房は、忰を捨てゝ

武助　サ、このお子樣が跡先の、辨まへもなきお話しでは、分明ならねど女同士、刃にかゝつて横死の御樣子。割り符の合ひしは江戸よりの、道者の噂は三圍とやらん、稻荷の鳥居先に、書き殘しある相手の名宛。よんどころなう二人の女、討つて立退く者なり、澤井股五郎と書き殘し。さすれば相手は股五郎、返り討にしをつたか。無念にござります。殘念でござりまする……守りの中に御戒名。

ト巳之助の守りの中より戒名を出し、差出す。武藏取つて

武藏「妙顯劍理信女、俗名たに」とあるからは、志津摩が爲には實の姉、討つたる奴は股五郎。さぞや愁傷、察し申す。

ト股五郎へ目を附けて思ひ入れ。

股五 すりや、戒名は姉者人。某お側にあるなれば、よも、やみ〳〵とは

ト思ひ入れあつて

敵持つ身は是非なき橫死。南無阿彌陀佛々々々々々々。

武藏 弟の身では、さぞや無念に

ト思ひ入れ。武助摺りよつて

武助 旦那樣、武助が勘當を只今、どうぞお赦しなされて下さりませ……ハテ、勘當さへゆりますれば奥樣を討つたる股五郎、探し出してズタ〳〵に、致さにや胸が晴れませぬ。是非とも勘當、赦して下さりませ。

股五 こりや尤も。其方主人の婦妻の事、敵を討ちたい心もあらうが、討たれし姉には弟もあり、連れ添ふお方は月本氏、よもや下郎の手は借りまい。深切ながら、控へてゐやうぞ。

武助 すりや、お赦しはござりませぬか。エヽ、これといふも、この身の不埒ゆゑ

ト思ひ入れあつて

武藏　イヤ〳〵、旦那樣、申し譯がござります。なんぼ足らはぬ私しでも、此ほど江戶に居る內に雄龍の印のその在所、殊にお家の大事まで、詳しく書いたその密書、宛名は櫻井林左衞門、手紙のしるしは佐々木巖柳、彼奴は敵股五郎が養父、此奴なんでも手がゝりと、追ひかけ追ひつめ、使ひの奴等を踏みちらし、まんまとその狀、私しが

武助　手に入つたるか。それぞ手がゝり。サヽ、急いでこれへ。

武藏　サヽ、そこでござります。手には入つたが、向うの奴等も渡さじと、爭ふはずみに、口に咬へしその狀を

武助　ヤヽ、如何いたした。

ト武助苦しき思ひ入れあつて

武藏　ツイその狀を吞みました。

武助　ヤヽ、その狀を

武藏　この腹內に納めては、跡へも先へも參りませぬ。旦那樣、こりやマアなんと致しませう。

武助　たわけ面め。大方左樣な事と存じた。證據あつても腹內へ。とりどころなきうつけ者、今より改

め、重ね〴〵の勘當ぢやぞ。そこ立つて、うせをらう。

ト蹴とばす。

武助　ナニ、また私しを……重ね〴〵の武助が勘當。これと申すも

ト思ひ入れあり。懐より手前書きにせし股五郎の人相書を出し

イヤ〳〵、云ひ譯の種があつた〳〵。これは卽ち股五郎が面體、覺えた通りに私しが、認めまし

た、志津摩さま、せめてはこれが、あなたへ云ひ譯。

ト出す。股五郎これにて思ひ入れ。また氣を變へて

股五　すりや、これが股五郎の人相書とな、ドレ、見せい。

ト取上げ見て、思ひ入れ。

月本どの、これが卽ち敵の面體。

ト差出す。武藏、空うそぶいて

武藏　顔を知らざる敵の繪姿、今更見るに及ばぬこと。谷がこの世になきなれば、今より志津摩が縁も

切れ、舅の敵も、女房のあるうちばかり、退けば他人の縁なき和田家、向後敵を討つべき、苦勞

も無うてこの身の安堵。志津摩も左やう心得て

股九　然らば姉者の討たれし上は、志津摩が敵の助太刀も

武藏　決して致さぬ。殊に寳の行くへまで、重荷を下ろして、樂々いたした。

股五　でも其許の、實子の巳之助

武藏　倅が縁はござれども、命を的の敵討、女房が死んでは義理は無い。

股五　すりや、おてまへは……ハテ、思ひ切りのよい

ト思ひ入れ。武助、腹立てし體にて

武助　イヤ〳〵、そりや御卑怯だ旦那樣、奥樣が死なしつても、そりや他人ではござりませぬ。ハテ、巳之助さまはお前の御實子、縁はござるぞ。モシ、旦那、さう仰しやらずとも

ト差寄り云ふ。武藏取上げぬゆゑ、思ひ入れあつて

アヽ聞えた。こりやお前、股五郎めが怖いゆゑ、其やうな事云はつしやるか。さうした根性ならモウ〳〵、この子は渡しては置かれぬ。わしが育てゝ親御の敵、討たして見やう。武助が助太刀して見せませう……サ、ぼん樣、わしが世話する、ござりませ。

ト巳之助を連れてくる。武藏見て

武藏　そりや忝い。月本武藏はやもめ暮らし、小兒の世話は毛頭出來ぬ、併し勘當いたせし下郎、身

共が實子を、他人のわれに

股五　イヤ、巳之助は姉者の形見、志津摩が養育いたさにやならぬ。身が引受けて、武助へ改め、世話頼む。

武助　お頼みなさらば私しが、好んでお世話いたしませう。殊に敵の股五郎、少しは面を存じたゆゑ、にじり書なりとその繪姿、今からあなたのお供して

股五　出かした武助。身共は面體存じあれど、一人たりとも力に欲しきこの時節、供は其方、巳之助連れて

武藏　苦勞の拔けた政右衞門、今は浪人月本武藏、未練な武士と笑はれても、これも當世、好きな碁將碁打つて樂しむ、これが一興。

股五　常から相手はこの志津摩、敵を討つの聲あれば、碁打ちの勝負面白い。四つ目殺しに敵の澤井

武藏　變名なして巖柳が、家名は佐々木を、四つ目殺しに

股五　碁盤の表は

武藏　武士の戰場。

股五　敵の勝利を

武助　お二人樣が

股五　月本どの

武藏　志津摩、試み致さうか。

ト唄になり、股五郎心を殘し、武助は巳之助を抱へ、奥へ入る。武藏殘つて、件の繪姿を出し

武藏　この繪姿は股五郎。さるにても志津摩が業病、面體これと……ハテ、いぶかしい。

ト思ひ入れ、向うバタ／＼にて、孫八走り出て來り、門口より窺ひ

孫八　ヤ、あなたはお旦那

武藏　そちや孫八か。

ト孫八思ひ入れあつて、側に差寄り、小聲になり

孫八　旦那樣、當所に逗留なさるゝ由、承つて足も空。モシ、お谷さまの御事は

武藏　先刻聞きしが、不便の横死。

孫八　エ。すりや、その由を

武藏　武助が知らせ。忰もこの家に

孫八　ヤヽ、巳之助さまがござるとな。エヽ、忝い。左樣と存ぜずあのお子の、お跡を尋ねて、志津摩

さま同道にて

武藏　ナニ、そちや志津摩の供せしとな。

孫八　へイ〳〵、江戸表よりお供いたし、殊に正宗、折り紙までも

武藏　ヤヽ、してその品は

孫八　それも和子樣、逢うたる上にて

武藏　心得ざるは某が、面體存ぜぬあの志津摩と

孫八　すりや旦那樣のお側にも

武藏　和田志津摩と名乘る侍ひ。

孫八　それぞ曲者。この孫八が

ト立ちかゝるを

武藏　コリヤ。

ト抑へて

密かに〳〵。

ト唄、時の鐘にて、葭簀パラ〳〵と下りる。跡合ひ方。下手の生垣を分けて、十官窺ひ出て

十宮　月本武藏は政右衛門、敵を討たぬと吐かしても、どうか一物ある樣子。その上手練の聞えもあれば、助け置いては悴が仇、首尾よく彼奴を……さうだ。

ト殺さうといふ思ひ入れ。後へ巳之助を連れ、武助出かゝりゐる。

武助　親仁樣、こりやどこへござります。

十宮　わりやァ武助か。悄りさせたな。

武助　ハイ、私しも悄りしましたぢや。モシ、お前はこの家に逗留の、月本さまを人知れず

ト云はうとするを押へ

十宮　コリヤ、靜かに云へ〱。ヤイ、武助、今までわれにも隱したが、行くへの知れぬ股五郎は、愚老が悴。われが爲には弟だ。藁の上から澤井へ養子。親の惡事を悴へ塗りつけ、身の有つきのあの巖柳、とは知らずして志津摩を始め月本が、覘ふと見たゆゑあの武藏を、人知れず寢首搔かんおれが存念。われも側から、手傳へ〱。

武助　イエ〱〱、さうはなりませぬ、わしが爲には主人の事。殊にコレ、このお子は、政右衛門さまの御實子、わしが今日から預かつて、敵を討たせて見せまする。

十宮　ヤ、その餓鬼がァノ政右衛門が

ト巳之助戸を引開け

ハテ、よいものがうせたわえ。政右衛門が餓鬼に聞いては、其まゝには差置かれぬ。この餓鬼から刺し殺し、荒木の根葉を絶やしてやらう。

ト合口を抜いてかゝるを、武助うろたへ、巳之助をもぎとり

武助　アヽ滅相な。大事の〳〵若旦那、お前はマア氣が違うてか。

十官　べら坊め、餓鬼を殺して櫻井さまから、褒美にあづかる。渡しやアがれ。

武助　エヽ、どうしてマア

十官　渡しやアがれ。

ト立ちかゝる。巳之助逃げる。十官追ひ廻し歩く。

武助　コレぼん様、お前は爰のあの二階へ。早くござれ〳〵。

ト巳之助二階へ駈けて上がる。十官追ひかけ、下より腰守り、巾着を捕へ、引きちぎるを、巳之助二階へ上がる。十官守りを捨てる。武助見て

モシ〳〵、ソレ、守りが切れた。やりますぞ。

ト二階へ投げてやる。十官、氣をいらち

十官　うぬ、親のする事、邪魔ひろいで

ト白刃を持つて追ひかけ行かうとする。武助、この抜き身を取つてせり合ふはずみ、前なる海へ思はず打込む。

武助　ヤヽ、あの刃物を海へ落して

十官　エヽ、腹の立つ。なぜこの海へ抛り込んだ。間抜け野郎め。

ト武助にむしやぶり附き、無暗にくらはす。武助、振りきるはずみに、十官、ヨロ〳〵ー　件の海へ落ちろ。武助うろたへ

武助　これはしたり、親仁様、危なうござります。この手に取りついて上がらつしやりませ。

ト半身海へ浸り、引揚げる。この時十官、件の合口を脇腹へ突き立て、うめいて上がる。武助見て

ヤヽ、こりやァ、大きな怪我だ〳〵。

十官　うぬ、武助め、親を殺すな〳〵。

武助　アヽ、どうして〳〵、こりやァ怪我でござります。

十官　イヽヤ、殺す〳〵。親殺しだ〳〵。

トよろめき〳〵聲立てるゆゑ、武助、十官を捕へてその口を押へ、思ひ入れあつて

武助　モシ、親仁様、なんでお前を殺しませう。誠にこれは大きな怪我、それといふのも日頃から、心の悪いお前ゆゑ、その業が子に報ひ來て、斯うした難儀が

ト思ひ入れ。

十官　親殺しだ〳〵。

ト聲立てる。キッと留めて

武助　どうで深手、叶ひませぬ。堪忍さつしやい。子に切られるも約束事。

十官　親殺しだ〳〵。

トわめくを捕へて、脇腹の白刃を抉る。十官苦しみ、落入る。此うち宿場騒ぎの鳴り物になり、よき時分お園出かゝりゐて、窺ふ。武助、落入る十官を涙ながらに抱へて、死骸を海へこかしこみ、件の合口を取つて腹へ突き立てしが、不死身ゆゑ思ひ入れして、あたりへ捨て

武助　刃物で死なれぬ不死身の悲しさ。海へ入つて

トあたりの小石を拾ひ、袖へ入れて海へ飛び込むを、お園駈け寄つて抱きとめ

その　コレ兄さん、滅相な。お前はマア

武助　妹か。放せ〳〵。

その　イヽエ、放さぬ〳〵。今の樣子も見てゐました、尤もながら、お前が死んでは

武助　それぢやというて實の親、怪我とはいへど親殺し、逆磔刑にあはぬうち

その　さうであらうが御主人の、敵討つべきこの時節、月本さまなり志津摩さま、せめて湯水のお世話なと、お前がせずば誰れあつて

トこれにて武助、思ひ入れあつて

武助　常の氣質に事かはり、おれにまさつた悧巧な云ひ事。兄も心は附いたれど、聞けば敵の股五郎、藁の上から澤井へ養子。さすれば敵は武助が弟。

その　わたしが爲には現在の、兄であらうが敵同士、討たねばお主へお前は不忠。弟と知つて討たしやんせ。兄と知つても、わたしも助太刀、女ながらも忠義の道。

武助　妹、出かした、よう云うた。おれは男の事ゆゑに、命を捨てゝもお主へ盡す。われは女の身を以て、一度見染めた男にも、今に逢はぬがこの兄は、不便な事と思ふから

その　そのお方にも逢はれうかと、男の入り込む惡所場か、又は宿場へ住替へに、來るのも性は尋ねる男

武助　どうぞ首尾よくめぐりあひ、お主の難儀の雄龍の印、正宗までも尋ね出す、力となつて、女なが

らも
その　して又、お前は
武助　助かる氣でも天の網、今にも知れゝば刑罰に
その　あふと知りつゝ恐ろしい、親を殺せし天罰は、わたしがこの身に引受けて、爰でこの身を
ト白刃を取つて死なうとする。武助とめて
武助　たわけた妹。われは殺さぬ。
ト白刃をもぎ取り、投げる。前なる浪間へ落ちる。
南無三、白刃はこの海原へ
その　落ちたは父さん、常から祕藏の
武助　醫者の嗜なむ、あれでも魂ひ。
その　親の形見も
ト海の表を見て思ひ入れ。簾の内にて
武藏　然らば身共は黑石へ
股五　差づめ白石。

武園　すりや、お二人の

股五　黒白分くる

武園　エ。

ト唄になり、武助お園、下手へ來て思ひ入れ。伊豫簾上がる。武藏、股五郎、碁盤を直し、石を並べ、碁を打ちゐる體。合ひ方變つて、碁打ちにかゝる。

股五　拙者とておてまへ立別れ、黒白分くる碁立ての勝負も、勝たば敵の助太刀を、お賴み申さん心より

武藏　それゆゑかゝる盤面の、勝負に准へて月本へ

ト此せりふを云ひながら、兩方石を置く。

股五　身共が勝ちし其ときには

武藏　助太刀いたして遣はさう。負ける時には仇討御免サ。

股五　すりや、おてまへの勝とござらば

武助　そんなら旦那が碁に勝たば

その　敵の助太刀なされぬお心。

武藏　イヽヤ勝たうが負けやうが、所詮身共が助太刀は

武助　ならぬとあれば私しも、海へ飛びこみ直ぐさま死ぬ氣。妹、留めるな。

その　アヽモシ、早まらずとも

　　ト武助入水せんとする。お園とめて思ひ入れ。此うち始終兩人、盤面へ目を附けて思ひ入れ。

武藏　何やらあたりへザワ〳〵と、助言に等しき者どもが

武助　卽ち御家來、不忠の武助め。

その　志津摩さまへ、あなたの助太刀、お願ひ申す兄妹二人。

武藏　イヽヤ、不所存うつけの武助、命を捨てねば、心底見えぬワ。

武助　それ見せたくも不死身ゆゑ、腹切らうにも刃物は立たず

その　ひよんな不具に生れた兄さん、思へばこれも

武園　因緣だなア。

　　ト思ひ入れ。この時、上の二階の障子を明けて、内にお袖、巳之助を引寄せ、件の藁苞を側へ置き、投げこみし守りの内の書き物を見てゐる體。

武藏　不具といへど、根が臆病。たとへば五歲七歲なりとも、侍ひの魂ひあらばそりや死ぬる。ナニ未

練から起る事……イヤ危ない事に、すんでにこれなる

ト石をさしながら云ふ。

股五　成る程、我れらが白石も

ト石を置く。

そで　守りの中の年月日時、疑ひもなき、巳の年揃うた……さてはあなたは主人のお胤、賤しきわたしが腹に宿りし

ト思ひ入れあり

障化清淨、内外清淨、六根清淨。

ト市子のせりふに紛らし、巳之助の持ちし藁苞の中より、正宗の短刀と折り紙とを取出し、何心なき思ひ入れ。武藏、この聲を聞いて

武藏　ハテ、覺えある女の聲、女房が手まはり。オヽ、あの巳之助を産み落せし

ト二階の方を見上げる。お袖、横手の障子をシャンと閉す。

そで　水向けしてか寄りくるは、梓の弓の弓取りに、七年ぶりで今日今宵、丸いおごけに角の蓋、釣合ひ惡き親と子の

ト水向け茶碗と梓の弓を出し、水向けして思ひ入れ。

武助 親子の惡事を認めし、密書を證據と思へども、呑んだこの腹、切れぬも不死身。

その その云ひ譯は妹のわたしが、お前に代つて、せめて自殺を

武藏 實の忰の巳之助は、難病治するその役に、立つる生血持ちながら、小兒の心は何として。よもや命は落すまい。それと申すも身が胤ながら、腹は相違の

ト二階へ聞かす思ひ入れ。

股五 ヤア、巳之助は、貴殿の實子で

武助 お谷さま御夫婦の、仲に出來たるあのお子を

その して何者の、お腹に宿りし

武藏 あの小忰は女房谷、懐姙のその砌り、身が手廻りに仕へし腰元、袖といへるに戯むれの、姙娠なして女房も袖も、産月同じく、女房が安産、女子にして、水子の内に空しくなる。袖といへるが産みたる男子、藁の上より引取つて、女房が産屋に入れ置きて、死せし水子の代りとして、育て上げたるあの巳之助、身が胤ながらも外戚腹、どうして腹はヱヽ、切るまい。

ト二階へ當てゝ、高聲に云ひ聞かす思ひ入れ。お袖これを聞いて

そで　水子の内に別れても、扇の影の立烏帽子、おろの鏡に面影の、うつり變りし世の中の、これが荒木の御惣領。

　　トせりふの内、巳之助に兩肌ぬがせ、件の短刀を正宗と知らず、折り紙巻いて、愁ひの顔を隱し、巳之助に持たせ

今に向うの海面へ、二十三夜の月魄が……お月様いくつ、十三七つ、あの子を産んで、この子を産んで……母は賤しい下素女。

　　ト騙しながらも愁ひのこなし。矢張り兩人、碁を打ちゐる。

武助　どうで刃物で死なれぬ武助、身投げの外は首かゝり、跡での恥がおりや口惜しい。それで死んでも、密書はどうも

　　ト腹へ思ひ入れ。

その　その名代に死ぬわたし、自害と思へど刃物さへ、頭に差したは金澤で、逢うたお方の男鷄の横櫛今は形見の割り笄、この主さんに

　　トゆかしき思ひ入れ。

武藏　オット爰らでこの石を……アヽ、まゝよ、切つてしまやれ、切れ〳〵。

その　切れとはわたしら兄弟に、切れとあるなら、あなたのお刀

　　　ト股五郎の刀へ手をかける。股五郎とめて

股五　イヽや碁立ての盤面にて、切つて押へて、はねかけて

　　　ト石を置く。

武藏　命をかけ碁の碁盤の面、どうやら身共が勝利の樣子。

股五　拙者が勝ならお助太刀。

武藏　それは迷惑。

　　　ト石を打つ。

そで　コレ〳〵、向うへ、二十三夜の月魄の……上がらぬ内に只一目。

　　　ト腹切らぬうち武藏へ逢はさうといふ心にて、横手の障子をソツと明ける。巳之助、武藏を見て

巳之　ヤ、、父樣

　　　トこの時武藏、側なる燭臺の灯を扇にて消し

武藏　烈しき秋の夜嵐に

股五　盤の面も、あたりも眞の

その　闇から闇はあやなくも

武助　二十三夜の眞夜中に

そで　盡きぬ名殘は親と子の

武藏　我れも難病、助くる年度の

股五　イヽヤ病ひは全快なくとも、寶出でざる其うちは、志津摩は御勘氣の身でござれば、有つて益なき巳年の生血。

武藏　覺悟いたさば、月出ぬうちに

そで　腹を貸したるばつかりに、いとほしなげに悲しい介錯。

ト目を閉ぢ、短刀を持ちそへ、巳之助の腹へ突き立てる。巳之助「ワツ」と苦しむ。本釣り鐘、知らせあつて、二十三夜の月魄上がる。この月あかりに、皆々見て

股五　ヤヽ、二階に苦しむ小兒の聲は

そで　荒木の御實子、巳之助さま。

武助　さういふ聲は梓の女中。

その　思ひがけない二階の介抱、

そで　口寄せ女がすゝめし切腹、その生血は志津摩さま、病ひの根を斷つ

ト市子の柄杓に受けたる血汐、上より手水鉢の内へ流れる。ドロ〳〵になり、早めの合ひ方、吹き水盛んに、中より件の雄龍の印、血汐の穢れに浮み上がる。この時、巳之助絆切れて俯伏しに倒るゝ。股五郎、雄龍の印を見附け、ツカ〳〵と走り寄つて、キツと見上げる。皆々思ひ入れ。

武藏　以前の腰元そでが胎內、出生の巳之助は、すりや腹切つて

股五　血汐を直ぐさま石面に、落つると等しく俄の動搖。

その　水氣のぼつて怪しき品の

武助　水にせかれて立登るは、慥かに失せたる寶のうち

武藏　巳年の時日揃ひし生血、二十三夜の月魄に

股五　ヤヽ、なんと。

ト件の品を取らんとする拍子に、上より流るゝ血汐、股五郎の身にふりかゝる。薄ドロになり、股五郎放心してあたりへ倒るゝ

武助　そんならこれが、尋ぬる雄龍の印。

ト立ちかゝる。以前の駕籠舁き兩人、窺ひ寄つて

兩人　うぬにやつては

ト かゝるを、左右へ見事に投げのけ

武助　正しく尊き

ト 手早く取つて武藏に渡す。

武藏　疑ひもなきお家の重寶

そで　雄龍の印でござりまするか。

その　手に入りましたか、旦那樣

武藏　して巳之助が、腹切る刃物は

そで　この藁苞に包みし短刀、殊に添へたる書き物も

武藏　それぞ正しく孫八が、詞に違はぬ

そで　卽ちこれが

ト 上より折り紙卷いて短刀を投げる。取らんとする武助の腕へその白刃立つ。折り紙はよき所へ落ちる。

武助　ヤヽ、武助が腕に立つたる短刀。

武藏　不死身をあばくは稀代の名作、正宗ならでは覺束ない。

武助　その試みは、武助の腹を

　　ト腹へ突き立て、「ワツ」と苦しみ、撞となる。

そのャ丶、兄さん、お前は、みんごと腹が

　　ト駈け寄り、件の折り紙を取つて

これぞ正しく添へたる折り紙。

　　ト武藏に渡す。

武助　不死身の切れたは慥かに正宗。

　　トお袖、巳之助の死骸を抱いて上より下りてくる。

そで　すりや、相違なき

武藏　仁木の重寶。

駕舁　それを

　　ト武助へかゝるを、取つて投げる、此はずみに股五郎、スックと立つ。薄ドロ〳〵、面體常に變らぬ樣子。皆々見て

その　ヤヽ、志津摩さまの、顔色忽ち

そで　快氣なされて、その面ざしの

武助　ヤヽ、こりや御全快。

股五　ナニ、この面體が

　　ト手水鉢にかゝり、よく〳〵見て

　今ぞ快氣の志津摩が面體。

　　ト園見て

その　お前は尋ねた戀しいお方。よう顔見せて。モシ、おなつかしうござります。

　　ト縋つて思ひ入れ。

武助　すりや、妹が焦るゝお方は、志津摩さまにてあつたるか。

武藏　難病快癒の志津摩が面體、敵澤井に生寫し。

股五　ヤヽ、なんと。

武藏　武助が渡せしこれなる繪姿、瓜を二つに股五郎。

　　ト繪姿を出す。

股五　すりや、繪姿に拙者の面體

武助　委細は武助が腹内に、納まる密事のこの書面、巖柳方より惡事の內通。これが云ひ譯。

ト誂らへの合ひ方。せりふのうち、臟腑の中より血に染みし密書を引出し、よろぼひ／＼差出す。お園、件の狀を水にて洗ひ、行燈へ卷き、武藏は繪姿を持ち、行燈の灯にて狀を見て

武藏　さてこそ大殿討ちしは巖柳、靭負を討ちしは股五郎、今こそ月本助太刀せん。志津摩は敵の股五郎、見事討つかよ。

股五　討たいで置かうか。おのれ敵の股五郎、これまで覘ひし志津摩が恨み、今ぞ本意を

ト拔くより早く腹へ突き立て、撻となる。

武助　ヤヽ、何ゆゑ腹を

その　志津摩さま、

ト寄るを突き退け、キッとなる。草笛入りの合ひ方。

武藏　こりや、さうなうては叶はぬ切腹。

股五　すりや實名を、敏くも推察で

武藏　舅の敵、妻の仇、疾くより名乘らせ討つべきも、かねて實義の股五郎、師匠靭負を討つたるは、

深き所存もあるべきと、志津摩と名乘らせ側離さず、介抱なすも月本が、實の敵にあふまでは、
誓ひし身共が刀の手前。

股五　誠に靭負を害せしも、我が親ながらよこしま非道、失せたる寶も彼れらが仕業、悪事に組みせし心を見せんは、義理ある師匠を殺害なし、心をゆるさす一つの計略、程なく鳴見が與へし鴆毒、相好變るを幸ひと、志津摩と名乘り徘徊なし、いつぞや隅田の暗まぎれ、女同士なる返り討、その節手に入る御免の御書、最期ありしはお谷どの、まつた靭負の懐中に、我れへ頼みの自筆の書き物・身共を討つてお家の成行き、くれぐ\頼むと殘されし、遺言狀と御免の墨附、お渡し申す政右衛門どの、今こそ敵の股五郎、討つて本意を遂げめされ。

ト書き物二品を差出す。武藏取つて

武藏　こりやコレ女房へ渡せし墨附、いま一通は舅の手跡、師匠を討てと澤井へ頼み。

武助　すりや股五郎とあるからは、藁の上より別れし弟。

ト思ひ入れ。

その　わたしが爲には、お前は兄さん

股五　妹と知らず雄鷄の笄、思へば犬の文字も前表。

そで　そんならお前の焦れし殿御は
その　犬鶏になるとの知らせ、
武助　親を殺せし天罰も
そで　この世からなる兄弟夫婦。
その　三途の川を

ト股五郎の差添を抜いて、乳の下へ突き立てる。

そで　ヤヽ、お前も共に
股五　畜生道。

ト皆々顔見合せ、「ワッ」と泣き落す。この時、幸吉と孫八窺ひゐて、ツカ〳〵と走り出て

幸吉　管領職のお目見得相濟み、明日京都へ出立の宿觸れ。
孫八　落ちつく先は山名の領地、九州相良、それには櫻井林左衛門、同道なして連れ立つ巖柳。されど
　も聞えし酒匂川の滿水、上へ廻つて飯住越え。この道筋を御油斷なく
武藏　その巖柳はお主の敵、證據は血汐に染みたる文言、澤井に逢ひたる荒木の小天狗、巖柳討つは月
　本武藏。股五郎を討つは志津摩。

股五　いま一時の苦痛を忍び、志津摩が刃にかゝるが天命。

武助　斯く勇ましき敵討、お供をせぬが口惜しい。

孫八　してお旦那の

そで　あなたの嗜なむ

トこの時、番助窺ひゐる。

武藏　殿より拜領不動國行、不動の文字は動かず動ぜず、助太刀なして、やはか本望

トきつとなる。

番助　月本、うぬを

ト有りあふ納め太刀二本を取つて打つてかゝる。武藏立廻つて、太刀をもぎ取り、きつとなつて

武藏　大願成就の納め太刀……打納まるとは、めでたき瑞相。

トかゝるを、太刀を咬へ、拔討ちに切る。番助、胴切りになる。股五郎見て

番助　ヤア。

股五　見事。

ト思はず立上がつて撞となる。武助、血に染みし正宗を引拔き、よろめいて差出す。途端に木の頭。

お袖取つて、直ぐに正宗にて髷を切り拂ふ。お園、武助落入る。孫八、幸吉、駕籠舁きを取つて押へる。武藏、血刀を拭ふ。双方一度の仕組み。これをキザミにて、見やつてよろしく、ひやうし　幕

引附けると捨て鐘、浪の音、馬士唄になり、向うより雲助、大磯宿と書いたる弓張りを持ち、馬士二人、手綱を曳き、駄荷を附けたる問屋馬に、巖柳、野袴、羽織。林左衞門、同じ拵へにて乘つて出る。旅なりの中間二人、鎗をかつぎ、跡より三階惣出の人數、中間、雲助、いろ〳〵の荷を擔ぎ、旅侍ひ、絆纏、股引にて大勢前後を圍み、出て來り、舞臺の前へたむろして

巖柳　林左衞門どの、最早夜明けに間もあるまい。飯仕越えを致せし上、本海道へ出づるまで、心を附けて、合點か。

林左　お氣遣ひなさるな。かねて酒匂川は滿水、夜明けぬ内に城下たる、小田原宿を左へ取り、矢倉澤より間道を

巖柳　もしや月本、追ひ來らんも計られず。送りのいづれも、心を附けて

侍皆　心得ました……人足ども、急げ〳〵。

人足　ハアヽ。

ト皆々幕の引附けへ入ると、明六つの鐘、鶏の聲、浪の音になり、引返し。幕明く。

本舞臺、向う黒幕、前通り浪手摺り、飯住觀音前、河原の景色。爰に件の同勢、下の方に馬を扣へ、上の方に武藏、望みの形。志津摩、白出立ち、敵討の形。孫八、絆纏、股引にて、右の二人立ちかゝりゐる。

皆々 狼籍者、片寄れ〳〵。

武藏 珍らしや澤井氏、今は變名佐々木巖柳。いつぞや御前の試合ひの勝負、今この所で仕らん。殊には大殿大内記、御最期ありしも汝が業。

志津 親の敵、姉の仇、その外汝が計略にて、落入る者の敵の數々。

孫八 お主の敵、尋常に

三人 イザ立上がつて、勝負なせ。

ト取巻く。

巖柳 さてこそ月本、和田志津摩、おのれら爰に待ちうけて、誠の敵股五郎、忰が手練に聞きおちして我れに刃向ふ卑怯な奴らめ。

武藏　イヽヤ倅の股五郎、契約なして別れし上は、この場へ來るに相違なし、其方こそはお家の仇、殿を討つたる不敵者、主人の敵、覺悟なせ。

林左　その由知つたる上からは、生けて歸さぬおのれら主從、この櫻井が助太刀する。いづれも、ソリヤ。

皆々　やらぬワ、

武藏　小癪な廣言。この月本が手練の程

林左　面倒な。切り捨てろ。

ト禪のツトメになり、馬士大勢、息杖にて打つてかゝる。侍ひ皆々、拔いてかゝる。武藏、二本の木太刀にて打ちらし、志津摩切り立てる。此うち馬上の二人は馬の儘にて下座へ入る。孫八、志津摩、大勢を相手に、武藏も續いて大勢を追うて入る。爰にて六つの時の太鼓、烏の聲、寺鐘になり、東の方へ紅繪の日の出を引上げる。よき程に、知らせあつて、黑幕を切つて落す。浪手摺ばかり殘り、向う打拔き、小田原北條の城、その外、宿内の景色、奧深く見える。宿太皷、竹法螺の音。武藏、兩刀にて林左衞門と立廻りながら出て、爰にて見事に打倒す。旅侍ひ六人、一度に拔いてかゝる。武藏、木太刀にて一々打殺す。孫八手桶を提げ出て、息つぎの水を呑ます所へ、又ぞろ大勢、バラ〳〵とか

かり、武藏、孫八、追つて入る。引違へて股五郎、手負ひの心にて、志津摩と立廻りながら出て來り、きつとなつて

股五　珍らしや和田志津摩、師匠靱負が頼みによつて、心にもなき惡事に組みなし、師匠を討つたる人非人、イザ立寄つて我れを討て。

志津　イヽヤ、義理あるその人を

ト思ひ入れ。

股五　情は情、仇は仇、我れを討たぬか。

志津　サア、それは

兩人　サア〳〵

股五　本望とげよ、和田志津摩。

志津　是非に及ばぬ。イザ

股五　イザ。

兩人　イザ〳〵〳〵。

ト白囃子になり、兩人立上がり、志津摩、わざと切られたる心にて手を負ふ。この時、武藏走り來つ

て、キツと見て

武藏 そちや股五郎

股五 今ぞ刃を一太刀なりと、合せし上にて

武藏 勝負は時の運に任さん。イザ、立上がつて

股五 いふにや及ぶ。

ト鳴り物になり、兩人少し立廻りよろしくあつて、武藏、股五郎を一太刀切る。股五郎、撻となる。

この時後より巖柳走りよつて

巖柳 兩人、覺悟。

ト切りつけ、志津摩を一刀切る。股五郎見て

股五 ヤヽ、父の詞で

ト思ひ入れあり、撻となつて腹帶を解き、血汐に染みてガツクリとなる。武藏見て

武藏 こりや股五郎には

股五 この首取つて、父の一命

武藏 イヽヤ、主人を討つたる大罪。

股五　天命遁がれぬ親人の

巖柳　おのれ、月木

ト切りかけるを、武藏、刀を打落し

武藏　志津摩、本望。

志津　お家の敵、父の仇

ト巖柳を切る。

巖柳　エヽ、口惜しい。

ト孫八走り寄つて

孫八　天晴れお手柄。

股五　イザ首討てよ。

ト刀を引廻す。

武藏　敵は亡びて、めでたい〳〵。

旅侍　動くな。

ト旅侍ひ、大勢出て鎗にて取卷く。

武藏　まづ今日(こんにち)はこれぎり。

めでたく　打出し

大正十四年十一月三日印刷
大正十四年十一月六日發行

『大南北全集第十二卷』

非賣品

校訂 坪内逍遙

編纂者 渥美清太郎

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者 上村新輔

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所 博文館印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂

